

---

令和元(平成31)年度

東京家政大学 女性未来研究所

# 活動報告書

Tokyo Kasei University

Institute for the Advancement of Women

Annual Activity Report

---

第2期 平成29年度～令和元(平成31)年度

研究プロジェクト総集編

Research project summary

---

---

---

令和元(平成31)年度

東京家政大学 女性未来研究所

# 活動報告書

Tokyo Kasei University

Institute for the Advancement of Women

Annual Activity Report

---

第2期 平成29年度～令和元(平成31)年度

研究プロジェクト総集編

Research project summary

---

---

# CONTENTS

令和元(平成31)年度

東京家政大学 女性未来研究所

## 活動報告書

### Chapter 1

## 女性未来研究所

- 1-1 令和元(平成31)年度 女性未来研究所 研究員 ..... 6
- 1-2 令和元(平成31)年度 女性未来研究所 活動記録 ..... 6

### Chapter 2

## 研究プロジェクト報告

- 2-1 日常動作が女性の健康や身体機能に及ぼす影響  
日常の所作や動作の有効性を明らかにする ..... 10  
[梅谷千代子/奈良岡佑南(順天堂大学女性研究所)/田地陽一(栄養学科)]
- 2-2 女子大学生に対するメタ学習能力を伸ばすキャリア教育(第3報)  
—グループワークの実践と効果— ..... 12  
[平野順子/並木有希(女性未来研究所副所長) / 岩田三代(ジャーナリスト) / 笹川あゆみ(非常勤講師)]
- 2-3 子育て支援の感染症情報の提供サービスの有効性に関する検討 ..... 15  
[野原理子/菅原民枝(国立感染症研究所) / 栗田順子(茨城県立医療大学)]
- 2-4 脆弱な人々を支える生活支援に関する研究  
～誰一人取り残さない社会を構築するために～ ..... 30  
[田中恵美子/野崎直美(臨床相談センター)]
- 2-5 「安心して住み続けられる」団地再生への挑戦  
～地域変革をめざすCBPR(参加型アクションリサーチ)～ ..... 32  
[松岡洋子/齋藤正子(看護学科) / 和田涼子(栄養学科)]
- 2-6 生涯を通じた女性の健康づくり—未就学児の母親に焦点をあてて— ..... 49  
[大久保麻矢/杉田理恵子(看護学科)]
- 2-7 男女共同参画で取り組む地域防災・減災～女性防災リーダーの育成プロジェクト～ ..... 52  
[齋藤正子/谷岸悦子(看護学科) / 齋藤麻子(看護学科)]
- 2-8 中学生・高校生の自立とキャリア形成  
家庭科教育からのアプローチ(SDGsと家庭科教育) ..... 56  
[鮫島奈津子/崇田友江(附属女子中学高等学校)]
- 2-9 「家庭内の男女共同参画のあり方」プロジェクト ..... 61  
[守屋眞二/野々村宜政(発注・検収課)/仲谷ちはる(中高事務室)]
- 2-10 健康寿命の延伸を目指したライフスタイルの提案～地域高齢者を対象とした  
定期的なフレイル(虚弱)測定会およびふれあい食事会の実施～ ..... 71  
[内野美穂/木元幸一(リハビリテーション学科) / 清水順市(リハビリテーション学科) / 澤田めぐみ(栄養学科)  
西村純一(心理学専門家) / 田淵千晶(ヒューマンライフ支援センター) / 大畑瞳(アドミッションセンター)]

2-11 人生100年時代 女性の歴史を概観する基礎資料としての年表づくり	74
[樋口恵子／佐藤千里(NPO法人高齢社会をよくする女性の会)]	

2-12 渡辺学園アーカイブス 卒業生の声	77
[太田八重美／木元幸一(リハビリテーション学科)／岩井絹江(学園運営室)]	

## Chapter 3

### 共同研究

3-1 自尊感情とレジリエンスの向上に着目した育児期女性に対する 支援体制構築に向けての基礎研究	80
[並木有希／平野順子／平野真理／特別区長会調査研究機構(板橋区・北区・千代田区・文京区・豊島区)]	

## Chapter 4

### 共催事業

4-1 女性未来研究所・板橋区・北区 女性の活躍推進に向けた三者共催事業 「子育てママの未来計画」	86
[並木有希]	
4-2 女性未来研究所・豊島区共催 「子育てママの未来計画」	96
[並木有希]	
4-3 板橋区 いたばしI(あい)カレッジ(3回連続講座) 「ママでもなく、妻でもない“私”を考える」	107
[並木有希]	
4-4 女性未来研究所・生涯学習センター共催講演会 「超少子高齢社会と女性の生き方・働き方」	110
[樋口恵子]	
4-5 英語コミュニケーション学科・女性未来研究所・グローバル教育センター共催講演会 「異なる文化の狭間で想うこと～地球人として生きる道～」	119
[並木有希]	
4-6 入間市・女性未来研究所共催 「人生100年時代 ～すべての人に居場所と出番～」	123
[樋口恵子]	
4-7 北区 女性職員向け研修会(3～10年目職員対象) 「はじめてのキャリアデザイン～私らしい働き方・生き方を実現するために～」	128
[並木有希]	

# CONTENTS

令和元(平成31)年度

東京家政大学 女性未来研究所

## 活動報告書

### Chapter 5

#### シンポジウム／セミナー等

- 5-1 第6回女性未来研究所シンポジウム・戸山未来・あうねっと  
設立2周年記念シンポジウム  
「恐るべし!住民の底力でみんなの居場所づくり  
あなたが主役!わたしも主役!戸山ハイツで取り組む通所型住民主体サービス事業」… 136  
[松岡洋子]
- 5-2 第7回女性未来研究所シンポジウム  
「男女共同参画で取り組む地域防災・減災  
～女性防災リーダーの育成プロジェクト～」 …… 137  
[齋藤正子]
- 5-3 樋口恵子先生退任記念講演会  
「女性100年、過去から学び未来へ 正岡律(1870～1941)の生き方に学ぶ」 …… 138  
[樋口恵子]
- 5-4 緑窓会協働 (青森県支部懇親会・大分県支部懇親会) …… 146  
[並木有希]

### Chapter 6

#### 共通教育科目「自立の探求(a)

#### ジェンダー論に学ぶ」授業報告

- 6-1 「ジェンダー論に学ぶ」授業報告 …… 150  
[平野順子]
- おわりに [並木有希] …… 152

## Chapter 1

# 女性未来研究所

1-1 令和元年(平成31)年度 女性未来研究所研究員

1-2 令和元年(平成31)年度 女性未来研究所 活動記録

1

# 令和元年(平成31)年度 女性未来研究所研究員

## 所長

樋口 恵子 東京家政大学名誉教授

## 副所長

並木 有希 英語コミュニケーション学科准教授

## 兼任研究員

梅谷 千代子 児童学科准教授

平野 順子 保育科准教授

野原 理子 栄養学科准教授

平野 真理 心理カウンセリング学科講師

田中 恵美子 教育福祉学科准教授

松岡 洋子 教育福祉学科准教授

## 令和元(平成31)年度 女性未来研究所 活動記録

4月10日(木)	第1回運営委員会	
5月9日(木)	第1回定例研究会	
5月17日(金)	第2回運営委員会	
6月6日(木)	いたばしI(あい)カレッジ「ママでもなく、妻でもない“私”を考える」①	並木 有希
6月9日(日)	緑窓会青森県支部 懇親会	樋口 恵子・並木 有希
6月13日(木)	いたばしI(あい)カレッジ「ママでもなく、妻でもない“私”を考える」②	並木 有希
6月13日(木)	第2回定例研究会	
6月20日(木)	いたばしI(あい)カレッジ「ママでもなく、妻でもない“私”を考える」③	並木 有希
6月23日(日)	第6回女性未来研究所シンポジウム・戸山未来・あうねっと 設立2周年記念シンポジウム 「恐るべし!住民の底力でみんなの居場所づくり あなたが主役!わたしも主役!戸山ハイッで取り組む通所型住民主体サービス事業」	松岡 洋子
7月6日(日)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【レジリエンス編】①	
7月13日(日)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【レジリエンス編】②	
7月20日(日)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【家政学入門編】①	
7月27日(日)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【家政学入門編】②	
8月3日(日)	第7回女性未来研究所シンポジウム 「男女共同参画で取り組む地域防災・減災」～女性防災リーダーの育成プロジェクト～	齋藤 正子
9月6日(金)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【レジリエンス編】①	
9月12日(木)	第5回定例研究会	
9月20日(金)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【レジリエンス編】②	
9月28日(日)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【家政学入門編】①	
10月3日(木)	生涯学習センター共催 講演会「今、女の生き方・働き方」	樋口 恵子
10月9日(木)	第3回運営委員会	
10月12日(日)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【家政学入門編】② ※台風のため延期	
11月14日(木)	樋口恵子先生退任記念講演 「女性100年、過去から未来へ」	樋口 恵子

大久保 麻矢 看護学科准教授  
 齋藤 正子 看護学科講師  
 崇田 友江 附属中学校 教諭  
 鮫島 奈津子 附属高等学校教諭  
 守屋 眞二 アドミッションセンター次長  
 内野 美恵 ヒューマンライフ支援センター  
 専門員(准教授)

非常勤研究員

岩田 三代 ジャーナリスト・  
元日本経済新聞論説委員  
 太田 八重美 博物館嘱託  
 オブザーバー  
 木元 幸一 元学長・理事・  
リハビリテーション学科教授  
 岩井 絹江 理事

11月21日(木)	英語コミュニケーション学科・グローバルセンター共催 矢野デイビット氏講演会 「異なる文化の狭間で想うこと～地球人として生きる道～」 司会：並木 有希
12月 7日(木)	入間市・女性未来研究所共催 「人生 100 年時代 ～すべての人に居場所と出番～」 樋口 恵子・並木 有希
1月20日(木)	緑窓会大分県支部 懇親会 樋口 恵子
1月20日(木)	第 4 回運営委員会
1月27日(木)	第 5 回運営委員会
2月 7日(木)	豊島区共催「子育てママの未来計画」【レジリエンス編】①
2月 8日(木)	板橋区・北区共催 「子育てママの未来計画」【家政学入門編】② ※台風のため延期となった分
2月13日(木)	第 9 回定例研究会 学内公開研究発表「超高齢社会における介護のあり方」 守屋眞二
2月13日(木)	第 10 回定例研究会 学内公開研究発表「中学生・高校生の自立とキャリア形成」 鮫島奈津子・宗田 友江
2月14日(木)	リサーチウィークス ポスターセッション参加
2月14日(木)	豊島区共催「子育てママの未来計画」【レジリエンス編】②
2月21日(木)	豊島区共催「子育てママの未来計画」【家政学入門編】①
2月21日(木)	「子育てママの未来計画」【ライフデザイン編】②
2月26日(木)	北区 女性職員向け研修会 (3～10年目職員対象) 「はじめてのキャリアデザイン ～私らしい働き方・生き方を実現するために～」 並木 有希
2月28日(木)	豊島区共催「子育てママの未来計画」【家政学入門編】② ※新型コロナ対策のため中止
3月 6日(木)	「子育てママの未来計画」【ライフデザイン編】②
3月23日(木)	第 6 回運営委員会
3月31日(木)	『令和元(平成 31)年度 女性未来研究所活動報告書』 発行





## Chapter 2

# 研究プロジェクト報告

- 2-1 日常動作が女性の健康や身体機能に及ぼす影響 日常の所作や動作の有効性を明らかにする  
[梅谷千代子/奈良岡佑南(順天堂大学女性研究所)/田地陽一(栄養学科)]
- 2-2 女子大学生に対するメタ学習能力を伸ばすキャリア教育(第3報)  
—グループワークの実践と効果—  
[平野順子/並木有希(女性未来研究所副所長)/岩田三代(ジャーナリスト)/笹川あゆみ(非常勤講師)]
- 2-3 子育て支援の感染症情報の提供サービスの有効性に関する検討  
[野原理子/菅原民枝(国立感染症研究所)/栗田順子(茨城県立医療大学)]
- 2-4 脆弱な人々を支える生活支援に関する研究  
～誰一人取り残さない社会を構築するために～  
[田中恵美子/野崎直美(臨床相談センター)]
- 2-5 「安心して住み続けられる」団地再生への挑戦  
～地域変革をめざすCBPR(参加型アクションリサーチ)～  
[松岡洋子/齋藤正子(看護学科)/和田涼子(栄養学科)]
- 2-6 生涯を通じた女性の健康づくり—未就学児の母親に焦点をあてて—  
[大久保麻矢/杉田理恵子(看護学科)]
- 2-7 男女共同参画で取り組む地域防災・減災～女性防災リーダーの育成プロジェクト～  
[齋藤正子/谷岸悦子(看護学科)/齋藤麻子(看護学科)]
- 2-8 中学生・高校生の自立とキャリア形成  
家庭科教育からのアプローチ(SDGsと家庭科教育)  
[鮫島奈津子/崇田友江(附属女子中学高等学校)]
- 2-9 「家庭内の男女共同参画のあり方」プロジェクト  
[守屋眞二/野々村宜政(発注・検収課)/仲谷ちはる(中高事務室)]
- 2-10 健康寿命の延伸を目指したライフスタイルの提案  
～地域高齢者を対象とした定期的なフレイル(虚弱)測定会および  
ふれあい食事会の実施～  
[内野美恵/木元幸一(リハビリテーション学科)/清水順市(リハビリテーション学科)/  
澤田めぐみ(栄養学科)/西村純一(心理学専門家)/  
田淵千晶(ヒューマンライフ支援センター)/大畑瞳(アドミッションセンター)]
- 2-11 人生100年時代 女性の歴史を概観する基礎資料としての年表づくり  
[樋口恵子/佐藤千里(NPO法人高齢社会をよくする女性の会)]
- 2-12 渡辺学園アーカイブス 卒業生の声  
[太田八重美/木元幸一(リハビリテーション学科)/岩井絹江(学園運営室)]



# 日常動作が女性の健康や身体機能に及ぼす影響

## 日常の所作や動作の有効性を明らかにする

梅谷 千代子／奈良岡 佑南／田地 陽一

### 目的

生涯に渡り自らの意思のままに行動し、豊かな人生を送るためには筋力の維持・運動能力と機能性の保持は重要である。日常生活の所作や動作の中で運動やスポーツと同等の効果を生む動きの種類とその有効性を明らかにし、日常的な動作実践と心身の健康保持の提唱としたい。

プロジェクト2年目では、日常動作と身近にあるものを利用しての運動で、運動器の加齢変化による機能低下を予防する方法を検証し提唱した。

高齢者を対象としたグループは機能の衰え、からだの痛みなどから、積極的に運動を生活に取り入れたいという意思があり、一日に何を何分という具体的記録はとれていないが気に入った運動は高い頻度で実施し、自分で変化が分かっているとのことであった。

身体の機能低下を深刻化しないために、早期に低下の事実を見つけ適切なトレーニングや生活の見直しをすることが必要である。それ以前に身体機能の低下は加齢により必ず起こりうることであるので、若年層から正しい知識を持ち、運動を習慣化することが重要である。2年目のまとめとして、体力低下を感じていない者、日常生活に不自由を感じていない者に、楽しみながら自分にあった運動の種類と方法を獲得させること、身体活動実践のモチベーションを維持させることが必要と挙げられた。

以上から、本年は対象者に記憶に残りやすい運動課題を掲げると共に、課題の指示による違いを数字として実感できる体験をしてもらった。

### 1 〈企画1〉歩き・からだを測る

対象者：T大学1年生女子100名

実施時期：2019年4月23日～25日

- 1) 通常歩き20歩 移動距離とかかった時間（小数点以下1位まで）
- 2) 歩幅を意識した20歩の移動距離とかかった時間
- 3) 通常歩きで20mに要した時間と歩数
- 4) 速さを意識した歩きで20mに要した時間と歩数
- 5) 大股2歩での移動距離
- 6) 開眼での片足立ち60秒
- 7) 姿勢は直立姿勢のまま
  - i 背中で両肘がつく
  - ii 肘はつかないが掌はつく
  - iii 指はつく
  - iv 全然届かない
- 8) 左右の握力測定

#### 結果とまとめ

歩幅を意識あるいは速さを意識すると、移動距離が伸び、かかる時間は減った。

歩幅を意識するより速さを意識した方が、一步の距離は伸び、かかる時間も少なかった。つまり、速さを意識した歩行の方が運動量としては大きいと言える。

大股2歩に関しては身長が高い者が必ずしも数値が高いという結果ではなかった。柔軟性、筋力、バランス能力などトータルの結果と思われる。メジャーでの測定は難しいと思われるので、屋内や庭のどこかに目印を決め、時々確認するよう勧めた。

大学1年生では開眼状態では支持脚が左右どちらも60秒立っていられた。

また大学1年生では背中で肘がついた学生が2名（水泳を専門種目として継続体験者）、その他も両掌は問題なく付いた。

大学1年生では猫背を気にしている学生もいるが、肩

関節の柔軟性に問題はないようである。深呼吸が問題なくでき、全身持久性は減少していないと思われる。

握力に関しては個人差が大きい。両手とも 20kg 以下、あるいは利き手でない方が 20kg 以下が 10 数名いた。握力計の使用法の確認、握力が弱いことの弊害について説明する必要がある。

## 2 〈企画2〉幼児を持つ母親たちとの体操の会

対象者：T 大学附属こども園保護者

開催時期：2019 年 6 月～7 月 4 回 1 回 60 分

\*第 1 回次に参加の 6 名の方には、歩き、距離と時間、肩の柔軟性、握力を測定

### 結果とまとめ

第 1 回に参加の 6 名の測定結果は歩きに関しては、距離と時間とも学生とほぼ同様であった。日常的に運動されているようであった。

肩の柔軟度に関しては、1 名が掌が完全につかない状態であった。

握力に関しては、学生より高い数値であった。左右とも 30kg 以上が半数、25kg 以上が半数であった。日常的に落としてはいけないものを持っているからと言っていた。

参加者の傾向として、筋力や機能を高めることより日常的な疲労や凝りを運動により解消したいと受け取れた。

## 3 〈企画3〉梅谷プロジェクト・大久保プロジェクト 乳幼児のお子様を持つお母様のためのこころと からだの健康教室

日時：令和 1 年 11 月 10 日（日）

場所：東京家政大学板橋校舎中体育室

### ◆おはなし 担当 大久保麻矢

- ・健康教室開催の趣旨
- ・女性ホルモンについて
- ・今後起こる、女性の心身の変化

### ◆実技 担当 梅谷千代子

ちょこっとトレーニング

- ・女性の運動の方法
- ・自分のからだを利用
- ・家にある実用品を利用
- ・継続することが一番

## 結果とまとめ

こども園の保護者同様に、機能維持、筋力増強よりも運動により、凝りをほぐす、リラクゼーション、からだの不調を整える、運動後の爽快感を求めていると感じた。

我々のグループは、今を楽しみながら将来のフレイルやロコモティブシンドロームに対し、筋力低下の予防と改善法を日常動作及び所作の中から効果的な実践の種類と方法の検証を続けている。

3 年に渡る様々な企画を通して、年齢層により要望する運動の質と量は大きな差があることがわかった。

自らのからだを改善しようと思うには、まず不自由を感じる、もどかしさを感じるなど負の要因が必要であるようだ。不自由さや痛みを感じないようにすることがこのプロジェクトの目的であるが、現段階では年代により、希望や状況により指導内容に変化をつけることが必要であることが示唆された。

高齢者に対しては、継続しやすい簡単な課題を提案し、少しの変化を自らも実感できるようにすることが重要である。また指導の機会がある場合は、変化に対して確認すること、継続を褒めること、次の段階に進むことなどを忘れてはならない。

成人に対しては、日々の心身の疲れをとりつつ、それらに負けない心身の増強法を伝えることが必要である。増強法といっても日常生活の中で、時間や場所、用具など特別な準備がなくても自分でできる「これも運動」という認識を高め、継続している自分を肯定し、新しい自分の発見もあるのではと期待する。

そして自分では気づいていないが、体力や身体機能が落ち始める大学生年齢層に対しては、運動やスポーツを楽しむ社会性を維持しながら、自らの心身の体力を維持するように伝え続けることが必要である。

「運動する＝スポーツをする」と思ってしまう人は意外に多い。自分のからだを守るにはちょっとした日常動作の変換、日常所作の繰り返し大きな成果に繋がることをこれからも声を大にして伝えていきたい。

## 謝辞

予期せぬ大けがで研究をストップせざるを得ない状況にもなりましたが、女性未来研究所のご支援のおかげで、明確な指標が把握できつつあります。心より感謝申し上げます。今後も様々な年齢層に向かい、何をどうすればからだを良い状態に保てるのか発信し続けたいと思います。

# 女子大学生に対するメタ学習能力を 伸ばすキャリア教育(第3報)

## —グループワークの実践と効果—

平野 順子／並木 有希／岩田 三代／笹川 あゆみ

### 1 本研究の位置づけ

本研究は、平成29年度から3年の期間で行う研究テーマ『女性未来研究所の請け負う「ジェンダー論」のカリキュラム開発』に関する研究の一部として行われたものである。3年間で行うこの研究の目的は、①「ジェンダー論」の運営を通して、女性未来研究所で行われている研究とその成果を学生に紹介・還元する。②ジェンダー的視点を交えた基礎的なキャリア教育のためのカリキュラム開発を行う。③キャリア形成支援講座、キャリア支援課が実施するキャリアセミナーとの連携を含め、女性未来研究所が担当するにふさわしい女子学生のキャリア教育の可能性を探る。④「ジェンダー論」のためのカリキュラム開発を行う。の4点を掲げている。これらの目的を果たすため、1年目は、本学の学生の現状を知ることから始め、発表を行った。2年目である昨年度は、1年目の研究結果を受けて実践した内容について報告し、今後の課題について検討を行った。本年は、この2年間の研究で明らかになった課題について研究し、発表を行った。本研究は、第41回日本キャリア教育学会研究大会(2019/11/9～10、長崎大学)にてポスター発表を行った。

### 2 問題と目的

プロジェクト1年目には、本学のキャリア教育の課題と、キャリア教育に関する効果的なアプローチの検討を行った。2年目には、1年目の結果を受けて授業改善を行い、実践した報告を学会発表した。ここでは、学生たちによる授業内コメントと授業評価の自由記述分析を行い、キャリア形成に必要な知識についての言語化と自己省察の機会が、学生の深い授業理解を促進したことが明らかとなった。さらに、グループワーク(以下、GW)の満足度が高いことも明らかになったが、大規模の授業での双方向アクティブラーニング型の授業の方法開発という課題が残った。

そこで、3年目である本年は、100人程度のいわゆる大規模授業におけるGWを導入施行し、その例と効果について研究した。具体的には、①各GW終了後の学生たちの学びの効果、②クラスサイズによる授業内GWの効果の相違、について検討する。

### 3 改善対象授業「ジェンダー論に学ぶ」の概要

#### (1) 開講時限と対象者：

木曜2限・3限に、同じ内容の授業を2コマ開講している、主に1年生を対象とした全学共通教育科目である。2018年の総履修者数は、2限は150名、3限は59名であり、合わせて209名の受講生があった。

#### (2) 授業の目的：

社会的弱者、ジェンダー差の視点から、社会のさまざまな場面における課題を考える。講義と資料によって現状・理論について把握し、各分野で活動している方からの講義を聞き、人権について考える。さらに、それぞれの問題について自分に引き寄せて考え、積極的に社会に貢献していけるような視点を持つことを目標とする。つまり、自分自身のキャリアに関係として社会問題を考え、それにとどまらず自分が社会にどのように貢献できるかを考えさせた授業構成である。

#### (3) 授業の内容：

①学生がテーマについて各自の考察を深めるワーク形式の授業、②事前に関連する課題を行い講師(ゲスト講演8回含む)から話を聞く授業、③授業外の機会(学園祭他)で自分の興味に沿った講演に参加し提出するレポート課題、④前半/後半のそれぞれのまとめとしてのGW2回、⑤これまでの取り組みをまとめる振り返り、という内容で行っている。

図表1 全15回の授業内容

① オリエンテーション&ワーク①こうなりたい自分	
② 家族の現状と私たちにできること	
③ 女性とスポーツ*	
④ 男性から見たワークライフバランス*	
⑤ 育児の現状と親を支えるための地域活動*	
⑥ 前半まとめ グループワーク	
⑦ 学園祭シンポジウムまたは読書レポート	
⑧ ワーク② SDGs について*	
⑨ 教育から見る世界*	
⑩ 食物から見る世界*	
⑪ ユニバーサルデザインから見る世界*	
⑫ 多様な性ってなんだろう?*	
⑬ 後半まとめ グループワーク	
⑭ 振り返り	
⑮ まとめ	「*」: ゲスト講師による講義

ほぼ全ての回で、テーマに関連した授業前課題を課しており、ほとんどの学生はその課題を行ったうえで、授業に参加をしている。また、毎回の授業で、授業内課題や内容まとめリアクションペーパーを提出させている。それ以外には、ゲスト講師による講義で、講演内容に関して複数のキーワードを設置し、それについて理解したことを記載させる、という形で、知識の定着を図るための取り組みを行っている。一通りの講義が終わった後、自分の学習と進路に関する気づきをまとめ、提出させている。

## 4 グループワーク (GW) の行い方

### (1) GWを円滑に進めるための工夫

GWは、特定の学生ばかり話したり、話が積極的にできなかったり、最後までまとまらなかったり、やり方によっては失敗も多いアクティブラーニングである。そこで、①学科・学年が偏在するグループを指定し多様性を担保する、②事前課題としてa) “女性の人生を考える視点”として授業で得たこと、b) “自分の人生を考える”視点として得たこと、の2点を準備し、それをまとめさせたうえで授業を行う、といった工夫をした。

### (2) 設定した話題

まとめの会のGWの話題は、以下の通りである。①これまでの講義の中で印象に残ったこと、②“自分の人生を考える視点”として得たこと、③なぜ日本にジェンダー問題が存在するのか、なぜ女性・男性が生きにくい

社会になっているのか、④“大学生ができる！ジェンダー平等、女性も男性も暮らしやすい社会を達成するための行動”の提案、の4点であった。

### (3) ワークの行い方

GWを行う授業では、以下のようなスケジュールで行った。

①アイスブレイク7分、②事前課題の共有12分、③ワークシートについての話し合い15分、④別チームの話し合いを聞く8分（リーダー以外は他グループと情報交換）、⑤自グループに戻り、考えを深化させる話し合い12分、⑥終了後にコメントシートの提出

## 5 結果と考察

### (1) グループワーク (GW) 終了後の学生の学び (表2)

表2を参照しながら、GW終了後の学生の学びについて結果を示す。学生の授業コメントを分析した結果、以下の4点にまとめられた。①学科・学年横断のグループが、学生の視野を広め、自己アイデンティティ考察を深めるのに効果的である、②チームを固定することで、話しやすさや共感が生まれフリーライダーを減らせる、③教授内容の他のメタ学習能力、スタディスキルやコミュニケーション力についても得られることが多いと実感できる、④学生側には大教室でのGWに不便感や抵抗感はない

図表2 GW終了後の学生の学び(一部)

- ・自分で思っていたより自分の考える思考ゾーン? みたいなのが狭いとおもったから、もっとたくさんの人の意見を聞きたいと思った。
- ・大教室だからグループワークがしづらいというものはなかった。
- ・それぞれ学科や勉強内容、将来の目標も異なるが、女性として、またこれから社会を担う存在として、自分たちは今何ができるのかについて共有しあい、思いを新たにできた時間だった。
- ・同じゲストスピーカーのお話を聞いても、興味を持ったところや感じたところは違って、改めてこういうとらえ方もあるのかと考えられて、今までの内容を深められたので、良いグループワークでした。メンバーの意見を取り入れて、それをさらに自分の考えと融合させることで、より発展した考えが生まれ、また新たな発見をすることができた点が、前回と比べてさらに良くなったと思う。

- ・グループの皆さんがボランティアなどの社会活動に興味を持って参加しているということを知って、正直驚きました。ボランティアは自分のためにも社会のためにもなるということがよく言われているので、やるべきことだとは思っていたけど、一部の偉い学生がやっているものだと思っていたので、身近な人で社会への関心や問題意識をもってボランティアに参加している人がいると知って、とても刺激を受けました。それと同時に、自分が世間への関心が少ないことや、社会とのつながりがあまりないことを痛感しました。
- ・異なる学科の人たちが集まることによって、自分の専門性での技術や能力、知識がより鮮明になり、はっきりと今後の自分について考えることができた。
- ・話を聞く講義よりも、自分の意見を発表することができて、積極的に学ぶことができた。

## (2) 受講者数によるグループワーク効果の相違

授業後コメントシートでは、①自分の意見を他の人に伝えられたか、②他の人の意見を聞いたか、③GWに貢献できたか、を5点満点で尋ね、クラス毎の平均点を算出した。その結果(図表3)、①150人授業の方が59人授業よりもいずれの項目も自己評価が高い、②両クラスともに、第6回より第13回で自己評価が高かった。回数を重ねることで、GWによるコミュニケーションスキルの上昇があったと言える。

図表3 コメントシートによる自己評価

	意見を他者に伝えられた		他者の意見を聞いた		GWに貢献できた	
	150人	59人	150人	59人	150人	59人
第6回	4.56	4.47	4.8	4.74	4.44	4.34
第13回	4.64	4.48	4.88	4.76	4.52	4.41

図表4 授業アンケートによる自己評価

	授業中に集中していた	理解できた	予習した	復習した	教員へ質問した	授業のわかりやすさ	授業に興味をわく工夫	課題に取り組んだ	自分の考えや意見を述べる	学生の参加グループワークなど	到達目標を達成できた
2017年	3.77	3.62	3.14	2.48	2.28	3.67	3.68	3.37	3.13	2.70	3.50
2018年	3.77	3.64	3.31	3.21	2.41	3.74	3.81	3.71	3.09	3.02	3.58

また、両クラスで同じ期末試験を行った結果、150人授業の平均点76.8点(SD=9.5)、59人授業の平均点78.7点(SD=9.6)であり、T検定の結果、有意ではなかった(t値=0.195)。前年度の期末試験平均点との有意差も見られなかった。

しかし、授業アンケートの結果を前年度と比較してみると(図表4)、どの項目についても前年と同等かそれ以上の結果となっている。とくに、予習や復習、教員への質問、課題への取り組みといった、学生が主体的に行う学習姿勢に関する評価が上がっている。

グループワークの実施は、試験成績を下げることなく、メタ学習能力を上げる効果があったと言える。

## 6 本研究のまとめ

大規模授業において、講義に加えて、学生側に十分に準備させたGWを行うことは、学生自身が実感できる形で学習を深化させ、知識の獲得に加えてコミュニケーション・学習スキル・学習態度といったメタ学習能力についても、大きな効果を発揮する。普通教室のみならず、大教室におけるGWは、十分に効果的だと言える。

## 7 3年間のプロジェクトのまとめ

3年間継続して、「ジェンダー論に学ぶ」の履修者の提出物や授業アンケートを分析し、得た結果を活かす形で翌年の授業を改善し、また分析を行う、ということを繰り返してきた。ここまでで、アクティブラーニングを活かし、また教員だけではなく様々な経験を持つ社会人の方にもご参加いただき授業を作っていくという形式が、ひとつ完成した。有意義な研究が行われたと思っている。今後も、授業改善を積極的に行いながら、本学の学生たちに何を還元できるのか、彼女たちの学びに何が必要なのかを問い続けたい。

# 子育て支援の感染症情報の提供サービスの有効性に関する検討

野原 理子／菅原 民枝／栗田 順子

## 目的

子育ての当事者である保護者が、育児中に最も問題だと感じる内容は、父母共に子どもの急病中の対応で、主に感染症である。子どもの急病時は自分の子どもの看病をしたいと考える保護者は多く、勤務先の業務の調整や家族看病の手配の準備のために、感染症の流行情報をリアルタイムで受け取りたいニーズは高いことが推察される。本研究では、子育てをしている家庭に感染症の流行情報をリアルタイムに提供し、育児中の保護者に対する情報提供の有効性について検討し評価を行った。

## 方法

対象は子育て援助活動支援事業ファミリー・サポート・センターの登録者とした。ファミリー・サポート・センターは全国で展開されている子育て支援の1つである。本研究では登録者に郵送で情報提供の希望を募り、希望者にメールアドレスを登録してもらった。東京都内の自治体 A の登録者のうち情報提供を希望した 203 名に配信した。配信は 2017 年 12 月 26 日から 2018 年 2 月 27 日まで毎週火曜日 10 時に計 10 回行った。

配信内容は、感染症の流行傾向と予防方法及び注意事項とし、感染症発生動向調査、自治体 A の保育園サーベイランス、全国及び東京都における薬局サーベイランス、教育委員会から公表されているインフルエンザによる臨時休業、国及び東京都から公表されているデータを参照し、配信文書を作成した。

情報提供の有効性の調査は、情報提供後個人情報は一切扱わない WEB 上でアンケート調査を行った。情報提供の内容、量、時間、頻度、今後も情報の提供を希望するかどうか、今回の情報提供を家族等へ情報伝達したかを尋ねた。

## 結果

感染症流行情報の提供期間中に該当地域で最も多かった疾患はインフルエンザで、インフルエンザのピークに関する情報は一般の報道よりも 3 週間早く提供した。

情報提供の有効性のアンケートには 48 名から回答を得た。情報提供内容の量は 92%、時間は 72%、頻度は 75% で「よかった」、頻度については「もっと増やしてほしい」が 25% であった。内容について「役立った」と回答したのは、流行に関する情報 98%、疾患に関する情報 50%、予防対策 43% であった。今後も情報の提供を希望するものは 98%、今回の情報提供を家族等へ情報伝達したのは 83% であった。

## 考察

リアルタイムな感染症の流行情報がほしい家庭に対して情報提供を行い、評価を実施した。継続希望が多く情報のニーズが高いことが明らかになった。今回の検討は冬期のみであったことからインフルエンザへの関心が高かった。小児の感染症の場合は、手足口病、ヘルパンギーナ等夏期に流行する疾患や、乳幼児が罹ると重症化しやすい RS ウイルス感染症、感染性胃腸炎等も一般に感心が高い。乳幼児が日常的に罹患する感染症の地域の情報を迅速に提供できれば、感染症を予防したり罹患時の対応に役立てたりでき、また職場に早めに情報伝達ができるとこと等から、情報提供は通年を通じて行われることが、子育て支援に役立つと考えられた。

本研究のリアルタイム情報提供は、リアルタイムな情報配信がほしい家庭（保護者）に対して、直接の情報提供を行うことに意義がある。年間を通して情報発信することで、日常的に子どもの体調変化を早期にとらえ、家庭内での予防行動をしたり医療機関受診したりすることを習慣づけられる可能性がある。なお現在、年間を通じての情報提供中である。

日本の子育て支援の課題は保育所に重点が置かれてお



り、保護者が望む看護休暇の取得にはつながっていない。地域での感染症流行の始まりの情報を受けとることは、保護者が休暇を取得しやすくなるばかりでなく、それによって子ども自身も体調不良時に保育園や学校を休めるようになり、保育園や学校での流行を抑制できる可能性がある。保護者が子どもを医療機関に受診させる時間を確保できるようになることにより、子どものQOLが改善することも期待される。

## 学会発表

第78回日本公衆衛生学会総会発表、「子育て家庭への感染症情報の提供とその評価」野原理子、菅原民枝、大日康史

## 公刊

Outbreak Information Delivery to Families with (Pre) School Children and Its Contribution Tamie Sugawara, Yasushi Ohkusa, Michiko Nohora  
Journal of Biosciences and Medicines, 2019, 7, 31-43, December 2, 2019

子育てで支援における感染症流行のリアルタイム情報の有用性についての検討、細井菜々美、小林千幸、畠山佳織、栗田順子、菅原民枝、大日康史、野原理子  
厚生学の指標, 2020, 67 (5), 14-19  
「COIに関する開示」について：演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

演題番号  
P-0510-3

### 子育て家庭への 感染症情報の提供とその評価

野原理子1,2)、菅原民枝3)、大日康史3)

1) 東京家政大学家政学部 2) 東京家政大学女性学系研究科 3) 園芸感染学研究所 感染症疫学センター

**<目的>**  
乳幼児は感染症罹患時に重症化や合併症のリスクが高いため、家庭における対策が必須である。子育てをする保護者の最も高いニーズは地域での感染症流行の情報である。そこで本研究ではリアルタイムの感染症流行情報の提供を試行し評価を行った。

**<方法>**  
情報提供の対象者は東京都内の自治体Aの子育て援助活動支援事業ファミリー・サポート・センターの登録者のうち情報提供を希望した203名とした。配信は2017年12月26日から2018年2月27日まで毎週火曜日10時に計10回行った。  
内容は、感染症の流行傾向と予防方法及び注意事項とし、感染症発生動向調査、自治体Aの保育園サーベイランス、全国及び東京都における薬局サーベイランス、教育委員会から公表されているインフルエンザによる臨時休業、国及び東京都から公表されているデータを参照した。

評価については、情報提供後WEB上でアンケート調査を行い、情報提供の内容、量、時間、頻度、今後も情報の提供を希望するかどうか、今回の情報提供を家族等へ情報伝達したかを尋ねた。  
本研究は、東京女子医科大学倫理委員会の承認(承認番号4561(2017年11月24日))を受けて実施した。

図1 自治体Aにおける保育園のインフルエンザ患者数

**表1 期間中に配信した疾患一覧と患者数**

疾患名	患者数
インフルエンザ	707
流行性感冒	38
細菌性髄膜炎	28
手足口病	26
伝染性紅斑	19
伝染性単核球炎	14
麻疹	7
RSV	4
流行性下痢症	3
アトランタ症	3
ヘルパンギーナ	3
むしりか	2
流行性角膜炎	2
そのほかアライバル感染症	2
マイコプラズマ感染症	2
百日咳	1
そのほか感染症	1

**表2 情報提供後アンケート調査の結果**

項目	回答数	割合
感染症流行情報は役に立つ	47	23.1%
役に立たない	1	0.5%
情報が必要かどうかの量	0	0.0%
どちらでもない	44	21.7%
少なすぎた	4	2.0%
多い	25	12.3%
どちらでもない	13	6.4%
わかりにくい	0	0.0%
もっと詳しく知りたい	13	6.4%
もう少し詳しく	25	12.3%
もっと詳しく知りたい	0	0.0%
流行状況の把握	46	22.6%
保護者の話	15	7.4%
予防対策の提供	17	8.4%
今後の情報提供について	47	23.1%
どちらでもない	1	0.5%
必要	28	13.8%
役に立たない	13	6.4%

**<結果>**  
期間中に該当地域で最も多かった疾患はインフルエンザであった。インフルエンザのピークに関する情報を一般の報道よりも3週間早く提供した。  
アンケートには48名から回答を得た。結果は、情報提供内容の量は92%、時間は72%、頻度は75%で「よかった」、頻度については「もっと増やしてほしい」が25%、内容について「役立った」と回答したのは、流行に関する情報98%、疾患に関する情報50%、予防対策43%であった。今後も情報の提供を希望するものは98%、今回の情報提供を家族等へ情報伝達したのは83%であった。

**<考察>**  
リアルタイムな感染症の流行情報がほしい家庭に対して情報提供を行い、評価を実施した。継続希望が多くニーズが高いことが明らかになった。今回の検討は冬期のみであったことからインフルエンザへの関心が高かったが、小児の感染症の場合は、手足口病、ヘルパンギーナ等夏期に流行する疾患や、乳幼児が罹ると重症化しやすいRSウイルス感染症、感染性胃腸炎等も関心が高い。乳幼児が日常的に罹患する感染症の地域の情報を迅速に提供できれば、感染症を予防したり罹患時の対応に役立てたりでき、また職場に早めに情報伝達ができることから、こうした情報提供は通年を通じて行われることが、子育て支援に役立つと考えられた。

「COIに関する開示」について：演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

# Outbreak Information Delivery to Families with (Pre)School Children and Its Contribution

Tamie Sugawara<sup>1\*</sup>, Yasushi Ohkusa<sup>1</sup>, Michiko Nohora<sup>2</sup>

<sup>1</sup>National Institute of Infectious Diseases, Tokyo, Japan

<sup>2</sup>Tokyo Kasei University, Tokyo, Japan

Email: \*tammy@nih.go.jp

**How to cite this paper:** Sugawara, T., Ohkusa, Y. and Nohora, M. (2019) Outbreak Information Delivery to Families with (Pre)School Children and Its Contribution. *Journal of Biosciences and Medicines*, 7, 31-43.

<https://doi.org/10.4236/jbm.2019.712004>

**Received:** October 21, 2019

**Accepted:** November 28, 2019

**Published:** December 2, 2019

Copyright © 2019 by author(s) and Scientific Research Publishing Inc. This work is licensed under the Creative Commons Attribution International License (CC BY 4.0).

<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>



Open Access

## Abstract

**Background:** Infection transmission among them occurs easily and sometimes causes outbreaks at facilities where children live in groups. Early response is necessary for infection control measures to avoid larger clusters. In Japan, (Nursery) School Absenteeism Surveillance System ((N)SASSy), which is a kind of school absenteeism surveillance, has activated since 2007 and covers about 60% of all schools and 40% of all nursery schools in 2017. **Objective:** The objective of the present paper is investigation and demonstration of how caregivers receive information related to infectious diseases in Japan and how (N)SASSy contributes health of children. **Method:** We randomly selected subjects with children by prefecture in October, 2017. The survey questionnaire asked background information and information about infectious diseases to maintain health in children. We regressed health concern variables on background information and information provision situation about community outbreaks using weighted logistic regression. **Results:** We received responses from 1172 people. Estimation results showed higher concern about a facility providing information about community outbreak. Caregivers whose children attend facilities provided about community outbreak or covered (N)SASSy significantly higher opportunity to arrange a schedule when a child has a high fever. **Discussion:** The obtained results demonstrated that activation in (N)SASSy affects the possibility of arranging a schedule when a child has a high fever. This capability might improve community health.

## Keywords

School Absenteeism Surveillance, Outbreak Information, Families with (Pre)School Children, Nursery School, Infection Control

## 1. Introduction

Because children live in groups in nursery schools, kindergartens, schools, and kodomoen (a hybrid facility of nursery school and kindergarten), infection transmission among them occurs easily and sometimes causes outbreaks. Hereafter, the term “(nursery) school” denotes both a nursery school and schools including kindergartens, kodomoen, elementary schools, junior high schools, and high schools. Early response is necessary for infection control measures to avoid larger clusters, prevent complicated cases, and subsequently minimize health damage deriving from an outbreak.

Actually, because caregivers with preschool children have great concern about sudden onset and infectious diseases among children, they eagerly seek information related to outbreak or infectious diseases [1] [2] [3]. If they can receive such information, caregivers use the information to take precautions at home and to rearrange working schedules if they are working.

Regarding earlier response, earlier detection is necessary to find indications of outbreak and then switch the daily modes of activity from usual hygiene to infection control measures. Particularly, surveillance of prescriptions and absenteeism from (nursery) school have been used routinely nationwide and used by local government, public health centers, (nursery) schools or medical institutions. Information about absenteeism from (nursery) school has been integrated and systematized into the (Nursery) School Absenteeism Surveillance System ((N)SASSy) [4]-[12].

Many surveillance efforts conducted worldwide have assessed school absenteeism [13]-[20]. However, they all monitored absenteeism or only those related to influenza. In Japan, by contrast, all reasons for absence from (nursery) schools related to illness, symptoms, and diagnosed diseases are reported to (nursery) schools. (N)SASSy used this virtue as systematic information sharing to monitor all symptoms and diagnosed diseases. Public health authorities and medical professionals have used this system to control the spread of infectious disease [11]. Moreover, an evidence demonstrates that (N)SASSy can reduce the number of patients with some infectious diseases [12].

Caregivers of students who are absent from (nursery) school because of infectious diseases usually report to (nursery) school. School nurses and other teachers provide information to (N)SASSy through the internet. As of the end of 2016, the system encompassed approximately 37,000 schools, including 10,000 nursery schools, or about 60% of all schools and 40% of all nursery schools in Japan. On a daily basis, it monitors the health conditions of about four million children younger than 18 years old. The information in (N)SASSy is used in (nursery) schools themselves to recognize the situation of the surrounding areas and inform teachers, students, and caregivers, thereby promoting precaution if some outbreak is found in surrounding areas but not at their own (nursery) school. Information in (N)SASSy is also shared between (nursery) school doctors, the educational board, the local government offices for nursery schools, the

public health center, and the local medical association. The shared information encourages earlier awareness of infectious diseases, which engenders earlier response to the initial stage of outbreaks in (nursery) schools. Moreover, having such a large trove of data related to children's health promotes large epidemiological studies. Currently, it is conducted by the Japanese Society of School Health.

In terms of public health, Japan's school system is unique. According to the School Health and Safety Act, at all levels of schools except for nursery schools, when students are diagnosed with certain designated infectious diseases such as influenza, varicella, and mumps, schools must not allow students to attend classes. We designate it as "attendance prohibition due to infectious disease". A student who has a defined infectious disease cannot attend classes, but the lack of attendance does not count as an absence. Caregivers must notify the school if their children are diagnosed with a defined infectious disease. Moreover, even if the children have not visited a doctor or have not been diagnosed with any defined disease, caregivers usually call the school and report a child's symptoms, e.g., fever, vomiting, or diarrhea. In these cases, schools do not apply "attendance prohibition due to infectious disease". No other country has a similar system.

Nursery schools, by contrast, are not classified as education institutions but as welfare facilities. Therefore, the School Health and Safety Act is not applied to nursery school children. They do not fall under "attendance prohibition due to infectious diseases" even if diagnosed with a defined infectious disease. Even if such a disease is not diagnosed or the child did not visit a doctor, nursery school caregivers also usually report a child's health condition to the nursery school. Of course, the law requires no action, but almost all nursery schools require caregivers to give a report based on the guideline from the Ministry of Health, Labour, and Welfare. Additionally, the culture, custom, or rule among schoolchildren's caregivers might affect caregiver behavior because nursery school children might be younger siblings of schoolchildren within a family.

In short, all information related to children's health conditions is integrated in (nursery) schools. (N)SASSy maintains a computerized system comprising such information and network of information sharing among the concerned organizations and individuals. Consequently, (N)SASSy can be used as a form of syndromic surveillance in Japan. It can be a powerful public health tool for use during mass gatherings or important political events [4] such as a G7 summit meeting. In fact, it is intended for use during the 2020 Tokyo Olympic Games. It was also used at school nurse workshops. Public health sector and (nursery) schools have been using (N)SASSy.

Nevertheless, for security reasons, caregivers who need outbreak information [1] cannot access (N)SASSy directly, even though they receive information from (N)SASSy through (nursery) schools. Consequently, the objective of the present paper is investigation and demonstration of how caregivers receive information related to infectious diseases in Japan. This might be the first report of the rele-

vant literature describing an examination revealing the current status of caregivers receiving information of infectious diseases.

## 2. Method and Materials

We randomly selected subjects with children by prefecture in October, 2017 from a list of household which registered to corporate internet survey and has children. This list was provided by an internet survey company. In the survey questionnaire, we elicited background information such as prefecture, age, gender, marriage status, number of children, job status, job status of partner, type of facility the youngest child attends, use of public or private facilities, facility location, and usual information-seeking activities using a smartphone. Moreover, we solicited information about infectious diseases to maintain health in children such as concerns about outbreaks at facilities the children attend, concern about child health conditions, provision of information related to infectious diseases in the facility from the facility, provision of information of infectious diseases in the community from the facility, children's immunization record, whether it is possible to arrange a schedule when a child has a high fever, and concerns about some students in the class in which the child attend showed illness. No personal information for identification in the data was included in this survey. The survey was conducted in October, 2017 and its duration was one week. The survey area was nationwide in Japan. Questionnaire design was similar with the previous studies [2] [3] principally, but it was extended to include the area where (N)SASSy have not been activated so as to evaluate effectiveness of (N)SASSy.

Analysis examined the association among necessarily infectious diseases or health maintenance of children from the survey and activation in (N)SASSy. The activation status of (N)SASSy was classified to two classifications as the facility youngest child attend was covered (N)SASSy. It was activated in (nursery) schools in their residential area. We denoted the former as (N)SASSy in the facility and the latter as (N)SASSy at all facilities.

The area was defined as the municipality. We define caregiver as respondents if the job status of respondents was "no". Conversely, if the job status of respondents was "yes" and job status of respondents' partner was "no", we defined the caregiver as the respondent's spouse. If a respondent was single, or if both the respondent and the spouse worked outside or did not work, then we defined the caregiver as the respondent.

We regressed health concern variables on caregiver age, youngest child age, more than two children, job status of a caregiver, and information provision situation about community outbreaks using weighted logistic regression weighted by the population of the municipality of residence. We presumed five variables as health concern variables: "Are you concerned about outbreaks at the facility the children attend?", "Are you concerned about the health condition of the children?", "Child immunization record", "Are you concerned if your child's classmates show illness?" and "Can you change your schedule if your child has a

high fever?” We assumed three variables as information providing situation about community outbreaks: “Information provision from the facility,” (N)SASSy at the facility, and (N)SASSy at all facilities. As these three variables were supposed to be correlated to each other, we estimated three specifications including one of these three variables separately for each dependent variable.

These dummy variables take the following values: “Caregiver age” is one if the caregiver works outside the home; it is zero otherwise. “More than two children” is one if the family has more than two children; it is zero otherwise. “Job status” takes a value of one if the caregiver works outside home; it is zero otherwise. Also, “Information provision from the facility” takes a value of one if the attended facility provides information about infectious diseases to the community; it is zero otherwise. “(N)SASSy in the facility” is one if the attended facility has activated (N)SASSy; it is zero otherwise. “(N)SASSy at all facilities” is one if the facility located where (N)SASSy was activated in both of nursery schools and schools; it is zero otherwise. “Are you concerned about outbreaks at your child’s facility?”, “Are you concerned about your child’s health condition?”, “Are you concerned if your child’s classmates show illness?” and “Can you change your schedule when your child has a high fever?” were one if answered as yes; they were zero otherwise. “Child’s immunization record” was one if a caregiver kept immunization records; it was zero otherwise.

### Ethics

The survey used for the present study includes only anonymous data that were de-linked from individual patient information with no private information such as a name, address or phone number. Therefore, ethical issues in Japan related to the medical science for humans (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology and Ministry of Health, Labour and Welfare (22 December, 2014, revised on 28 February 2017) were not applicable to this study. For that reason, no formal ethical review was warranted or required.

### 3. Results

We received responses from 1172 people. **Table 1** presents their socio-demographical background. Responders were mainly in their 20 s or 40 s; 99% were women. Marriage status revealed that 89.9% were married; 8.6% were divorced or widowed. Regarding the number of children, one child households were the highest, with 48.9%, followed by two child households, with 38.6%. The age of the youngest child was preschool child under five years old, accounting for 52.2%, followed by elementary school child older than 6 but younger than 11 years old, with 35.4%. Of respondents, 58.3% worked outside the home; 82.5% of respondent partners were working. The youngest children attended elementary school in 35.3% of households, followed by nursery school in 23.9%. Of attended facilities, 55.3% were public (nursery) schools; private were 34.8%. Of them, 94.2% attend a facility in their same municipality. Of respondents, 71.5% collect information from a smart phone.

**Table 1.** Summary statistics of respondents' socio-demographical characteristics.

		Number of respondents	Proportion (%)
Caregiver age	20 - 29	106	9.0
	30 - 39	572	48.8
	40 - 49	449	38.3
	50 - 59	45	3.8
Caregiver gender	male	10	0.9
	female	1162	99.1
Marriage status	married	1054	89.9
	unmarried	17	1.5
	divorce	101	8.6
Number of children	one	573	48.9
	two	452	38.6
	three	131	11.2
	more than four	16	1.4
Youngest child age	0 - 6 years old	612	52.2
	7 - 12 years old	415	35.4
	13 - 15 years old	81	6.9
	16 - 18 years old	64	5.5
Caregiver job status	yes	683	58.3
	no	487	41.6
	unknown	2	0.2
Partner job status	yes	967	82.5
	no	85	7.3
	unknown	2	0.2
	unanswered	118	10.1
Youngest child attends	nursery school	280	23.9
	kodomoen	99	8.4
	kindergarten	234	20.0
	elementary school	414	35.3
	junior high school	54	4.6
	high school	54	4.6
	others	37	3.2
Public or private facility?	public	648	55.3
	private	408	34.8
	others	116	9.9
Is the facility the youngest child attends outside the municipality of residence?	yes	1104	94.2
	no	68	5.8
Usual information seeking activity by smartphone	yes	838	71.5
	sometimes	241	20.6
	no	90	7.7
	unknown	3	0.3

Subjects were asked for background information such as prefecture of residence, age, gender, marriage status, number of children, job status, partner job status, type of facility youngest child attends, and public or private facility.

**Table 2** summarized health concern among respondents and situation of providing information about infectious diseases from community or (nursery) schools. Regarding information gathering of infectious diseases for health maintenance, 74.7% of respondents were concerned about the health condition of children, 73.2% were concerned about outbreak in the attended facilities, and 76.4% of them receive some information about infectious diseases from the attended facilities. The highest proportion of frequencies was “as needed” in 69.4%, followed by “every day” in 11.8%. The most common method to receive the information was mail from (nursery) schools, followed by e-mail and notices on a bulletin board.

Related to providing of information of infectious diseases in the community from the facility, 33.4% of respondents received such information. However, 37.8% of respondents answered unknown. Of those received, the highest proportion of frequencies was “as needed”, with 66.2%, followed by “once a week” with 13.8%. The most common method to receive such information was mail from (nursery) schools, which accounted for 42.7% of responses, followed by e-mail (37.1%), and homepages (32.0%). Moreover, 89.3% of those who received information answered that it was useful.

Though it was not shown in table, (N)SASSy had been activated in at least some (nursery) schools in 73% of respondents’ residential areas. Both of (nursery) schools were activated in 20.3% of these areas, schools only in 39.8%, nursery schools only in 4.6%, part of (nursery) schools in 8.4%.

**Table 3** presents estimation results of health concern. It contains five dependent variable and three specifications for each dependent variables. Only but consistently caregiver’s outside job significantly negative effect on “Are you concerned about outbreaks in the facility the children attend?” Younger caregivers have significantly less concern about a child’s health condition only in cases of information provision situations about community outbreak as “information provision from the facility.” Caregivers were found to have a significant tendency to keep child immunization records if the facility provided information about community outbreaks. If a family has more than two children, then caregivers have significantly greater concern about the class situation in the same class. They also report significantly higher concern about a facility providing information about community outbreak. Caregivers whose children attend facilities provided about community outbreak or covered (N)SASSy significantly higher opportunity to arrange a schedule when a child has a high fever.

#### 4. Discussion

This study examines at first time to approach the situation at caregivers from the survey rather than how public health section [11] or (nursery) schools use (N)SASSy. Older working caregivers with more than two children tend to have higher health concerns. Moreover, to attend the facility provided about community outbreak or covered (N)SASSy makes it easier to arrange the working schedule if a child had onset suddenly. That information about community



**Table 2.** Summary statistics of health concern and situation of providing information about infectious diseases from community or (nursery) schools and.

		Number of respondents	Proportion (%)
Concern about outbreaks at the facility the children attend	yes	857	73.1
	no	249	21.2
	unknown	66	5.6
Concern about your child's health condition	yes	875	74.7
	no	282	24.1
	unknown	15	1.3
Child immunization record	yes	1126	96.1
	no	33	2.8
	unknown	13	1.1
Concern about child's classmates' illness	yes	1101	93.9
	no	47	4.0
	unknown	24	2.0
Can you change your schedule when your child has a high fever?	yes	1080	92.2
	no	92	7.8
If your child were diagnosed as having influenza today, who would care for sick child? (Multiple answers allowed)	me	1072	91.5
	family member except me	146	12.5
	grandparent or other relations	129	11.0
	babysitter	6	0.5
	day care for sick children	31	2.6
	others	6	0.5
	do nothing	10	0.9
Providing of information about infectious diseases at the facility from the facility	yes	895	76.4
	no	158	13.5
	unknown	119	10.2
If yes, its frequency is...	every day	106	11.8
	once a week	76	8.5
	once a month	50	5.6
	as needed	621	69.4
	others	42	4.7
If yes, it was provided by...	homepage	78	8.7
	e-mail	406	45.4
	mail	505	56.4
	board at the facility	204	22.8
	others	46	5.1
Providing information about infectious diseases in the community from the facility	yes	391	33.4
	no	338	28.8
	unknown	443	37.8

## Continued

If yes, its frequency is...	every day	34	8.7
	once a week	54	13.8
	once a month	31	7.9
	as needed	259	66.2
	others	13	3.3
If yes, it was provided by...	homepage	125	32.0
	e-mail	145	37.1
	mail	167	42.7
	board at the facility	80	20.5
	others	16	4.1
If yes, was it useful?	yes	349	89.3
	no	7	1.8
	unknown	35	9.0

Table 3. Estimation result of weighted logistic regression.

	Estimated coefficient	p-value	Estimated coefficient	p-value	Estimated coefficient	p-value
Dependent variable: Are you concerned about outbreaks at the facility the child attends?						
Caregiver age	-0.081	0.836	-0.050	0.895	-0.052	0.890
Youngest child's age	-0.082	0.053	-0.069	0.090	-0.076	0.070
More than two children	-0.221	0.508	-0.171	0.640	-0.217	0.518
Job status	<b>-1.847</b>	<b>0.000</b>	<b>-1.831</b>	<b>0.000</b>	<b>-1.829</b>	<b>0.000</b>
Information provision from the facility	0.273	0.447				
(N)SASSy in the facility			-0.139	0.701		
(N)SASSy at all facilities					0.127	0.745
Constant	<b>4.460</b>	<b>0.000</b>	<b>4.466</b>	<b>0.000</b>	<b>4.450</b>	<b>0.000</b>
Dependent variable: Are you concerned about your child's health condition?						
Caregiver age	<b>-0.686</b>	<b>0.042</b>	-0.645	0.059	-0.646	0.058
Youngest child's age	<b>-0.089</b>	<b>0.028</b>	-0.082	0.062	-0.078	0.073
More than two children	-0.357	0.270	-0.360	0.277	-0.340	0.295
Job status	-0.477	0.120	-0.483	0.108	-0.473	0.120
Information provision from the facility	0.354	0.326				
(N)SASSy in the facility			0.066	0.847		
(N)SASSy at all facilities					0.347	0.381
Constant	<b>2.815</b>	<b>0.000</b>	<b>2.851</b>	<b>0.000</b>	<b>2.774</b>	<b>0.000</b>
Dependent variable: Child immunization record						
Caregiver age	-0.070	0.920	0.018	0.979	0.042	0.949
Youngest child's age	-0.061	0.338	-0.070	0.300	-0.033	0.622

**Continued**

More than two children	0.122	0.871	-0.062	0.935	0.171	0.825
Job status	-0.281	0.659	-0.402	0.552	-0.312	0.633
Information provision from the facility	<b>1.372</b>	<b>0.030</b>				
(N)SASSy in the facility			0.996	0.057		
(N)SASSy at all facilities					0.477	0.489
Constant	<b>4.127</b>	<b>0.006</b>	<b>4.401</b>	<b>0.003</b>	<b>4.167</b>	<b>0.003</b>
Dependent variable: Are you concerned if your child's classmates show illness?						
Caregiver age	-0.700	0.213	-0.523	0.321	-0.536	0.319
Youngest child's age	0.021	0.676	0.024	0.650	0.067	0.296
More than two children	<b>1.337</b>	<b>0.012</b>	<b>1.201</b>	<b>0.021</b>	<b>1.398</b>	<b>0.011</b>
Job status	<b>-1.136</b>	<b>0.034</b>	<b>-1.244</b>	<b>0.025</b>	<b>-1.194</b>	<b>0.030</b>
Information provision from the facility	<b>1.845</b>	<b>0.000</b>				
(N)SASSy in the facility			0.748	0.089		
(N)SASSy at all facilities					1.064	0.069
Constant	<b>4.409</b>	<b>0.000</b>	<b>4.676</b>	<b>0.000</b>	<b>4.438</b>	<b>0.000</b>
Dependent variable: Can you change your schedule when your child has a high fever?						
Caregiver age	-0.068	0.868	0.020	0.960	0.033	0.934
Youngest child's age	-0.045	0.224	-0.046	0.246	-0.019	0.653
More than two children	0.736	0.067	0.580	0.139	0.755	0.075
Job status	-0.065	0.876	-0.214	0.632	-0.151	0.727
Information provision from the facility	<b>1.249</b>	<b>0.001</b>				
(N)SASSy in the facility			<b>0.697</b>	<b>0.046</b>		
(N)SASSy at all facilities					0.564	0.298
Constant	<b>2.463</b>	<b>0.002</b>	<b>2.787</b>	<b>0.000</b>	<b>2.602</b>	<b>0.001</b>

Note: "Caregiver age" is one if the caregiver is younger than 30 years old; it is zero otherwise. "More than two children" is one if the family had more than two children; it is zero otherwise. "Job status" is one if the caregiver works outside the home; it is zero otherwise. "Information provision from the facility" is one if the attended facility provides infectious disease information to the community; it is zero otherwise. "(N)SASSy in the facility" is one if the youngest child attends an (N)SASSy activated facility; it is zero otherwise. "(N)SASSy at all facilities" is one if (N)SASSy is activated at both nursery schools and schools; it is zero otherwise. "Are you concerned about outbreaks in the facility the children attend?", "Are you concerned about your child's health condition?", "Are you concerned if your child's classmates show illness?" and "Can you change your schedule when your child has a high fever?" were one if yes; they were zero otherwise. "Children's immunization record" is one if caregivers keep child immunization record; it is zero otherwise. "Are you concerned about outbreaks in the facility the children attend?", "Are you concerned about your child's health condition?", "Are you concerned if your child's classmates show illness?" and "Can you change your schedule when your child has a high fever?" are dependent variables in logistic regression. For each dependent variable, three specifications, which include one of "Information provision from the facility", "(N)SASSy in the facility" or "(N)SASSy at all facilities", were estimated. "0.000" in *p*-value means less than 0.0004. Significant coefficients were emphasized by boldface.

outbreaks is needed [2] and is used for child care. Therefore, the obtained results were consistent with those reported from earlier studies. Results also show that (N)SASSy can mitigate some difficulties of working schedule arrangements. Better information might contribute to eased absence from (nursery) schools, higher probability of visiting a doctor, and minimizing outbreak scale. In this sense, the obtained results might be consistent with those of earlier studies showing

that (N)SASSy activation can reduce the number of patients with some common pediatric infectious diseases [12]. However, “Information provision from the facility” apparently has a stronger effect than “(N)SASSy in the facility” or “(N)SASSy at all facilities.” Results suggest that activation of (N)SASSy might not be sufficiently useful, but it might become more useful through information being delivered from the facility to caregivers.

Conversely, no significant effect of “(N)SASSy at all facilities” was found. In general, information about outbreak situations of different age classes is useful for a caregiver to take precautions. Therefore, the outbreak situation among different age classes is expected to be very useful for caregivers. Nevertheless, that expectation was not supported by estimation results.

Similarly, the youngest child’s age has no significant effect on any health concern variable in any examined specification. In general, it is presumed to affect caregivers’ health concerns. **Table 1** showed that the youngest child was younger than six years old for about half of the respondents. However, it might include a few respondents for whom the youngest children were zero-year-olds or one-year-olds because the caregivers of zero-year-olds or one-year-olds were expected to be more concerned about health. Alternatively, the youngest child’s age might be multicollinearity with other variables such as “more than two siblings” or “caregiver age.”

The study described in this paper includes some limitations. First, we surveyed health concern variables as a hypothetical situation, except for vaccination records. Responses might not match the actual behavior used if the hypothetical situation is actually realized. Therefore, it is necessary to measure effects of (N)SASSy from data of actual behavior when facing outbreak information at a facility or community. That possible shortcoming remains as a challenge for future research.

A second limitation was few respondents reporting zero-year-old or one-year-old children. Data sampling was unbiased geographically and by age distribution. Therefore, few zero-year-old or one-year-old children were included. Nevertheless, children of this age group are the most vulnerable to infectious disease. For that reason, their caregivers are presumed to be more health conscious than caregivers with older children. Future studies might specifically examine caregivers with children of these ages.

A third limitation is that we cannot evaluate the ability of results to represent actual health concerns. Accumulation of data will resolve this difficulty.

## 5. Conclusion

The obtained results demonstrated that activation in (N)SASSy affects the possibility of arranging a working schedule when a child has a high fever. This capability of arranging a caregivers’ working schedule might improve community health because caregivers can nurse their ill children, they can be absent from (nursery) schools and then outbreak in (nursery) schools will be suppressed. This

report is the first describing benefits of (N)SASSy from a family perspective.

## Acknowledgements

This research was benefited by a Grant-in-Aid for Scientific Research (C) 15K01676 “Research for guidance and effort for introduction of (nursery) school absenteeism surveillance system” headed by Dr. Tamie Sugawara, Senior Scientist, National Institute of Infectious Diseases from Japan Society for the Promotion of Science and by a grant from the Institute for the Advancement of Woman, Tokyo Kasei University headed to Dr. Michiko Nohara.

## Conflicts of Interest

The authors declare no conflicts of interest regarding the publication of this paper.

## References

- [1] Nohara, M. and Kato, I. (2011) Child Raising Support for Working Parents: A Follow-Up Study at a Daycare Facility. *Journal of Tokyo Women's Medical University*, **81**, 408-415. (In Japanese)
- [2] Nohara, M., Kurita, J., Sugawara, T., *et al.* (2018) Does Family with Children Need Information of Infectious Disease? *Journal of Biosciences and Medicines*, **6**, 53-63. <https://doi.org/10.4236/jbm.2018.612005>
- [3] Nohara, M., Kurita, J., Sugawara, T., *et al.* (2019) Providing Infectious Disease Information to Child-Rearing Families and Its Evaluation. *Health*, **11**, 1135-1146. <https://doi.org/10.4236/health.2019.119087>
- [4] Shimatani, N., Sugishita, Y., Sugawara, T., *et al.* (2015) Enhanced Surveillance for the Sports Festival in Tokyo 2013: Preparation for the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games. *Japanese Journal of Infectious Diseases*, **68**, 288-295. <https://doi.org/10.7883/yoken.JIID.2014.233>
- [5] Matsumoto, K., Hirayama, C., Sakuma, Y., *et al.* (2016) Case Study of Early Detection and Intervention of Infectious Disease Outbreaks in an Institution Using Nursery School Absenteeism Surveillance Systems ((N)SASSy) of the Public Health Center. *Nihon Koshu Eisei Zasshi*, **63**, 325-331. (In Japanese)
- [6] Watanabe, M., Kurita, J., Takagi, T., *et al.* (2016) Early Detection and Response for Measles and Rubella Cases through the (Nursery) School Absenteeism Surveillance System in Ibaraki Prefecture. *Nihon Koshu Eisei Zasshi*, **63**, 209-214. (In Japanese)
- [7] Sugawara, T., Fujimoto, T., Ohkusa, Y., *et al.* (2012) The Possibility of Outbreak Control by Real-Time Surveillance with PCR Method Performed Immediately—A Case Study of Hand Foot and Mouth Disease Outbreak in a Day Care Facility for Children. *Kansenshōgaku Zasshi*, **86**, 405-410. (In Japanese) <https://doi.org/10.11150/kansenshogakuzasshi.86.405>
- [8] Matsumoto, K., Sugawara, T. and Ohkusa, Y. (2015) The Influenza Outbreak in 2014/2015 Season, in Sumida Ward, through the (Nursery) School Absenteeism Surveillance System. *Kansenshōgaku Zasshi*, **89**, 748-749. (In Japanese) <https://doi.org/10.11150/kansenshogakuzasshi.89.748>
- [9] Kurita, J., Nagasu, N., Sakurai, N., *et al.* (2019) Descriptive Epidemiology for *Mycoplasma pneumoniae* Infection Using (Nursery) School Absenteeism Surveillance

- System, and Proposal for Countermeasures. *Journal of Biosciences and Medicines*, **6**, 33-42. <https://doi.org/10.4236/jbm.2018.610005>
- [10] Kurita, J., Nagasu, N., Nagata, N., *et al.* (2018) Outbreak of Human Metapneumovirus in Ibaraki, Japan and Its Descriptive Epidemiology. *Health*, **10**, 749-757. <https://doi.org/10.4236/health.2018.106057>
- [11] Kurita, J., Nagasu, N., Sugawara, T. and Ohkusa, Y. (2019) Infection Control in Nursery Schools and Schools Using a School Absenteeism Surveillance System. *Tohoku Journal of Experimental Medicine*, **247**, 173-178. <https://doi.org/10.1620/tjem.247.173>
- [12] Kurita, J., Sugawara, T., Matsumoto, K., *et al.* (2018) Association among (Nursery) School Absenteeism Surveillance System and Incidence of Infectious Diseases. *School Health*, **14**, 21-27. <https://doi.org/10.1111/ped.14023>
- [13] Besculides, M., Heffernan, R., Mostashari, F., *et al.* (2005) Evaluation of School Absenteeism Data for Early Outbreak Detection, New York City. *BMC Public Health*, **5**, 105. <https://doi.org/10.1186/1471-2458-5-105>
- [14] Schmidt, W.P., Pebody, R. and Mangtani, P. (2010) School Absence Data for Influenza Surveillance: A Pilot Study in the United Kingdom. *Eurosurveillance*, **15**, pii: 19467.
- [15] Cheng, C.K., Cowling, B.J., Lau, E.H., *et al.* (2012) Electronic School Absenteeism Monitoring and Influenza Surveillance, Hong Kong. *Emerging Infectious Disease*, **18**, 885-887. <https://doi.org/10.3201/eid1805.111796>
- [16] Kom Mogto, C.A., De Serres, G., Douville Fradet, M., *et al.* (2012) School Absenteeism as an Adjunct Surveillance Indicator: Experience during the Second Wave of the 2009 H1N1 Pandemic in Quebec, Canada. *PLoS ONE*, **7**, e34084. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0034084>
- [17] Cheng, C.K.Y., Channarith, H. and Cowling, B.J. (2013) Potential Use of School Absenteeism Record for Disease Surveillance in Developing Countries, Case Study in Rural Cambodia. *PLoS ONE*, **8**, e76859. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0076859>
- [18] Fan, Y., Yang, M., Jiang, H., *et al.* (2014) Estimating the Effectiveness of Early Control Measures through School Absenteeism Surveillance in Observed Outbreaks at Rural Schools in Hubei, China. *PLoS ONE*, **9**, e106856. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0106856>
- [19] Aldridge, R.W., Hayward, A.C., Field, N., *et al.* (2016) Are School Absences Correlated with Influenza Surveillance Data in England? Results from Decipher My Data: A Research Project Conducted through Scientific Engagement with Schools. *PLoS ONE*, **11**, e0146964. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0146964>
- [20] Xu, W., Chen, T., Dong, X., *et al.* (2017) Outbreak Detection and Evaluation of a School-Based Influenza-Like-Illness Syndromic Surveillance in Tianjin, China. *PLoS ONE*, **12**, e0184527. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0184527>

# 脆弱な人々を支える生活支援に関する研究

～誰一人取り残さない社会を構築するために～

田中 恵美子／野崎 直美

## 2018年度及び2019年度の活動内容（概略）

2018年度から助成を受け、主に知的障害のある人の「自立生活」について研究を行っている。昨年度は支援者2名、当事者の母親の3名にインタビュー調査を行ったが、今年度は当事者の母親3名、支援者10名にインタビューを行った。調査は北九州、京都、大阪、浜松、田無と東京以外にも及んだ。

また、2019年12月21日に立命館大学朱雀キャンパスにて関西方面の調査の報告とシンポジウムを行い、3月8日には東京大学にて全体の調査報告とシンポジウムを行う予定である。

現在報告書の作成を行っており、3月8日のシンポジウムには配布可能な状態にする予定である。

### 1. 本研究の課題

本研究の主題である「脆弱な人々」とは、社会の中で生活を形成していく際に様々な困難を受けやすい人々をさしている。例えば認知症高齢者、障害者、未成年の子どもたちなどといえよう。脆弱であるというのは彼ら自身の特徴であるが、しかし、それは同時に彼らを取り巻く周りの環境との関係の中で決められてくるものである。

筆者がよく引用するのは、一ノ瀬メイというパラリンピック選手の経験である。彼女は生まれつき右手が短い。活発な彼女は幼少期より水泳が大好きでまた上手だった。小学校の時に本格的に水泳を学ぶため、スイミングスクールに入ったが、右手の欠損を理由として「何かあったときに危ない」という判断で競技としての水泳クラスに入ることができなかった。そのあと彼女は父親の仕事の関係でイギリスに移住した。そこでは彼女はスイミングスクールで競技として水泳を習うことができ、多くの試合も経験した。現在の彼女の競技人生はイギリスではじまったのである。

さて、彼女にとっての「障害」とは何か。彼女の生き

にくさを生み出しているのは、確かに彼女の欠損した右手という特徴を含みつつも、それを単に「危ない」とみて排除するのか、それともその特徴を理解したうえで彼女が競技に挑戦したいという気持ちを理解し、それが可能になるような環境を用意するようにするかの違い、すなわち彼女を取り巻く環境の違いである。このような考え方を障害の社会モデルという。障害は身体の特徴（インペアメント）をもとにして、それと環境との相互作用の中で発生する。すなわち社会のありようによって障害（生きにくさ ディスアビリティ）は変化するというものである。

この障害の社会モデルの考え方を基盤に置くと、いわゆる脆弱な人々についての見え方も異なってくるのではないだろうか。すなわち、確かに認知症であったり、障害があつたり、あるいは年齢が若かつたりといったそれぞれの（精神を含む）身体にある特徴をもとにしながらも、彼らが排除されたり、迫害されるような場面を経験するのかどうかはその人を取り囲む環境に大きく依存する。その人たちを「脆弱である」と切り取るのは、脆弱たらしめる社会の側の問題で（も）あるわけである。

このような問題意識の元、本研究はスタートしている。女性未来研究所における研究としては今年度で終了するが、筆者にとっては今後も続く重要なテーマである。この2年間においては特に重度知的障害者を対象とした地域生活の研究を女性未来研究所の助成を受けて始めることができた。

### 2. 特に2019年度の研究

昨年度の研究についてはすでに報告書を作成し、研究所での報告も行ったため、概略は上記に、詳細は報告書と報告に委ねる。2019年度はさらに調査対象を増やし、対象地域も拡大して調査を行った。

親は3名のインタビューを行った。若年の男性2名と40代後半の女性1名の、父親1名と母親3名から話を聞くことができた。ちょうど親との距離でいえば、同

居しながら少しずつ距離を置きだしている者、独り立ちを開始し始めた者、そして一人暮らしをして10年弱のものであった。彼らの経験は個々に異なっているのはもちろんではあるが、ライフサイクルの年齢とも重なりながら、環境との関係も変わってきている。思春期を乗り越えつつある若者については、彼の独り立ちに対して不十分な社会資源をどうにかしていこうという親の環境整備が始まっており、独り立ちをした者については、その環境がようやく整いつつあり、一人暮らしを経験している者についてはそれが確立しつつある状況であった。現在はインタビューが終わった段階であるため、詳細な分析はこれからであるが、この三段階のそれぞれにインタビューが行えたことは今後の結果を導くに際して非常に有意義なものであった。

支援者は10名のインタビューを行うことができた。大きく分けると、法人の立ち上げからかわり、現在も中核的な位置にいる者、組織の運営に関わるというよりも支援者としてより直接的に知的障害者と関わっている者、それぞれの話を聞くことができた。直接支援を行っている者については、その支援に携わるに至った経験などを聞くことができた。社会の中で決して中心にはいない対象者たちに関わっていくことの意味をインタビューからあぶりだすことができると考えている。また組織の立ち上げを行い、今も中核にいる者については、組織の立ち上げの経験や運営上の課題などについて分析する予定である。また彼らが関わっている知的障害者が自立生活に至った経緯や状況についても語られているので、それらについてもまとめ、分析していく予定となっている。

### 3. 今後の展望

来年度以降は女性未来研究所としての研究ではなくなるが、先に述べたようにこの表題による研究はこれからも続いていくことになる。女性未来研究所の助成を得てこの研究を始めることができたことをあらためて感謝したい。ありがとうございました。



# 「安心して住み続けられる」団地再生への挑戦 ～地域変革をめざすCBPR（参加型アクションリサーチ） 5年間のまとめ

松岡 洋子／齋藤正子／和田 涼子

2015年4月よりの継続プロジェクト（CBPR：参加型アクションリサーチ）として5年目（最終年）にあたり、地域の住民のニーズ調査から学び合いの過程を経て住民組織「戸山未来・あうねっと」が誕生し、新宿区の「介護予防・生活支援総合事業通所（B型）」の委託を受けて毎週の活動に育っていったプロセスと未来へのプロジェクトをまとめたい。このプロジェクトは、戸山ハイツでは通称「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」として知られ、現在は活動組織名「戸山未来・あうねっと」として親しまれている。

平成31年度（令和元年度）は総合事業通所B型も2年目に入り、毎週土曜日の「ふまねっと運動」を中心とした「カフェあうねっと」の参加者も20名前後で安定している。支え手のボランティアも約10名を基盤に徐々に着実に増えており、新宿区からの委託金もあることから安定的な運営基盤の上に、地域における介護予防を通じた絆づくりが地道に進められている。

この活動のプロセスは一定の成果をおさめているが、人口43万人の新宿区の全体を俯瞰した時に、あるいは「安心して住み続けられる地域とは？」という初期の目標の全体を視野に入れた時、この活動団体を通して行うべきテーマは多く存在し、それだけになすべき未来への課題もあることが分かる。

## ねらいと目的（CBPRとは）

このプロジェクトは、「安心して住み続けられる戸山ハイツ」を実現するために、『暮らしの保健室』との共同プロジェクトとして2015年よりスタートした。東京家政大学女性未来研究所が支援し、東京家政大学生が実際の支援に入るものの、あくまでも団地住民が主体となって「安心して暮らせる戸山ハイツ」を作っていくための過程を支援（エンパワー）するものであり、その過程を研究して広く社会に発信して共有していくCBPR（Community-based Participatory Research: 参加型アクションリサーチ）である。CBPRとは「研究者

が課題や問題を持つ人々とともに協働し、課題や問題を改革していこうとする実践であり、知識創造にも貢献する研究形態」である（武田、2015）。

よって、そのねらいと目的は、団地住民が主体となって「安心して暮らせる戸山ハイツ」を作っていくための過程を実際のアクションを通して支援し、その過程を知識体系としてまとめ広く社会に発信していくことである。

## I. アクション&研究成果

### 1. 2015年年度研究活動の概要

「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」は、2015年4月、樋口恵子所長の「社会貢献と学生参加をテーマとするプロジェクトを！」に呼応して、団地の33号棟にある『暮らしの保健室』（秋山正子室長）との共同プロジェクトとして始められたものである。

まず、新宿区にある戸山ハイツという都営住宅（約3400世帯、約6000人、高齢化率54.1%、平成28年）の高齢化に関するさまざまな生活課題と住民意識を明らかにすることからスタートした。2015年を「地域になじみ、地域を知るための調査の年」とした。この時、次の2016年度を、「地域を耕しつつ、アクションの第一歩を記す年」と捉えていた。

2015年のアクションを順次述べる。

#### (1) 立上げ記念講演（2015年6月17日）

団地近くの地域密着型高齢者施設「マザアス新宿」にて立ち上げ記念講演を開催した。基調講演を樋口恵子所長に依頼した。住人の方のみではなく、新宿区役所、新宿区社協、保健センター等行政機関からの参加も含めて70名を超える参加があった。告知はチラシ各戸配布で行ない、予約制とした。チラシ配布は東京家政大学生が行った。

このプロジェクトを開始するにあたり、全学的な取り

組みとするために、東京家政大学内にてボランティア募集説明会を開催した。約30名が集まったが、実際にボランティア活動参加を申出た学生は8名で、そのなかに研究代表者である松岡のゼミ生（教育福祉学科）、共同研究者である和田先生の学生（栄養学科）、斎藤先生のゼミ生（看護学科）が含まれていた。

## (2) 井戸端会議（計5回）

量的調査を行う前にグループインタビューを行い、そこで出されたニーズ項目を量的調査で検証する調査設計とした。

チラシ配布によって集まった住民の方に「暮らしの保健室」に集まっただき、グループに分かれて「戸山ハイツの魅力」と「暮らしの課題」について自由に話し合った。人数が多く発言が偏る可能性があったため、ポストイットに書き模造紙に貼っていくワークショップ形式とした。書きづらい方には松岡ゼミ（教育福祉学科）の学生がサポートし全員参加を心がけた。第3回以降は、口頭での話し合いとなった。地域福祉の実践家である猿渡進平氏（大牟田市中央地域包括支援センターセンター長）の協力を得た。



暮らしの保健室での「井戸端会議」（2015年夏）

### 開催日と参加人数

第1回（7/7）17名、第2回（7/14）9名、第3回（9/28）7名、4回目（10/19）5名、5回目（11/16）5名の参加者があり、のべ44名の方からさまざまな意見が寄せられた。

### 結果

得られた情報は、データ密着型分析として知られる継続的比較法にて行い、以下9つの概念が得られた。「一人暮らしと高齢化の不安」「孤独死・認知症の人の問題」

「男性の閉じこもり」「高齢化による自治会消滅」「交流の不足」「子供・若者がいない」「坂が多くて大変」「エレベータなしで大変」「マナーの悪さ」「どこに相談していいか不明」。

戸山ハイツの良い点としては、「歴史ある土地柄」「交通・買物に便利」「自然環境がよい」「病院が近い」などが挙げられた。これらの情報は、アンケートの質問項目として展開し検証することとした。

## (3) アンケート調査

### 調査デザイン

調査デザインは以下のようなものである。東京家政大生が4000票のセット封入を行ない、団地の一戸一戸を訪問してドアポケットに配布した。これは暮らしの保健室室長秋山正子氏よりの「ポストに入れても効果がないので、住戸のドアにいれたほうが回収率が高まる」というアドバイスのによるものである。



アンケート配布の前に暮らしの保健室にて（2015年11月）

**調査対象：**戸山ハイツの全戸（約3400戸）における世帯内の最高齢者（最高齢者が回答できない場合は、家族等による代替を依頼、連絡により学生・教員による支援を受け付けた）

**配布時期：**調査票配布10月14日～18日、回収11月9日～25日（締め切りは11月11日）、督促チラシ配布11月8日

**配布方法：**全戸配布留め置き（一部地区では、棟自治会長を通じての手渡し）

**回収方法：**3方法より選択（返信用封筒で郵送、「暮らしの保健室」へ持参、電話で回収を依頼）、安否確認を兼ねた訪問でも一部回収した。

**倫理面への配慮：**東京家政大学研究倫理委員会の審査を

受けた。(平成 27 年 8 月 27 日申請、9 月受理)

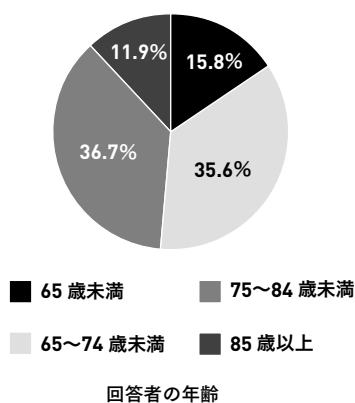
### 結果

1069 票の回答 (回収率:33.9%) を得ることができた。有効回答数は 1069 票である。

特筆すべき点を以下に記述し、考察を加える。

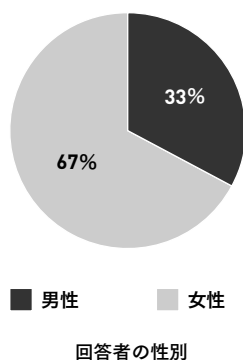
#### ① 回答の半数は 75 才以上の後期高齢者

調査結果では、戸山ハイツがある戸山 2 丁目は高齢化率 52.2% (平成 27 年 12 月、新宿区住民基本台帳) と限界集落の様相を呈している。回答はその人口構成をよく反映しており、回答者平均年齢 73.4 才、最頻値 80 才、最高齢者 98 才であった。回答者の 84% が 65 才以上であり、約半数が 75 才以上である。



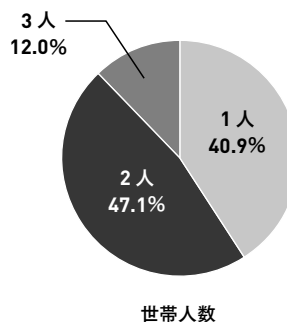
#### ② 女性 67%、男性 33%

性別では女性 67%・男性 33%であった。65 才～84 才では女性は 63%前後であるが、85 才以上では突出して女性 82%であった。



#### ③ 独居、二人世帯 (90%) が多い (全国平均 64%)

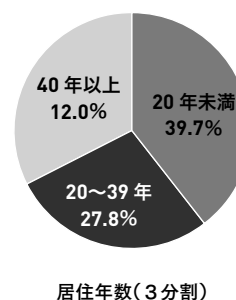
単身 (41%)・二人世帯 (47%) の多さが際立った。全国平均 (平成 22 年国勢調査) ではそれぞれ 30%・34%である。とくに、85 才未満では二人世帯がボリュームタイプであるが、85 才以上だと独居が最多で半数を超えている。



#### ④ 回答の半数は 30 年以上の長期居住者

居住年数の平均は 26.4 年、最頻値 40 年、最も短い人は数か月で最長は 68 年であった。20 年未満が最も多く、40 年未満、40 年以上で二分する形である。

戸山ハイツは戦後間もない 1949 年平屋住宅が建てられたのが最初である。そのころからの居住者である。井戸端会議でも「平屋の頃から住んでいる」という声もあった。



#### ⑤ 課題が多い中で希望ある意見が

「将来への漠然とした不安 (65.7%)」や「このまま倒れたらどうなるのか (55.7%)」といった不安があり、「団地のマナーが悪くなっている (60.7%)」「若い人が少なく淋しい (70.6%)」「認知症の人を見かける (29.5%)」「坂が多くてたいへん (25.6%)」といった課題があることが明らかとなった。一方で、「戸山ハイツが大好き」「住み続けたい」がそれぞれ約 90%と非常に高く、課題に対する考え方として行政にも期待しつつ、「助け合いできるといい (86.9%)」「住民が力を合わせて (89.9%)」と互助のポテンシャルが十分にあることが確認できた。「自分のこと・介護のことで限界 (14.1%)」という厳しい現実も確認できた。

#### ⑥ 自由記入では多様な意見

自由記入では、井戸端会議で出された意見が重複する形で見られた。井戸端会議で見られなかった特筆すべきものとしては、以下のものがあつた。

- ・老々介護の真ただ中で余裕なし
- ・号棟の方が良くしていただき、有難い
- ・若い人の入居を促進してほしい

- ・話し相手がほしい
  - ・長年仕事をしてきたので仕事がしたい (多)
- 特に希望としては、「交流の場がほしい」「仕事がしたい」「ボランティアにも参加したい」等が目立った。

#### (4) 全戸訪問

安否確認を兼ねた全戸訪問は、教授会にて許可を得た上で学生と教員で行なった。リスクを考慮して、2人以上で訪問することとした。井戸端会議、アンケート調査では知り得なかった実態が見えてきた。主な点を挙げる。

- ・さらなるアウトリーチが必要 (無年金の方、老々介護による疲弊、虚弱高齢者)
- ・介護保険へのアクセス確認
- ・精神の病で苦しんでいる方
- ・ゴミ屋敷 (訪問は控えた)
- ・ゴミ屋敷まではいかずとも、掃除不足で衛生面での心配
- ・「閉じこもりの人が多い」という声 (特に男性)
- ・障がい児がおられる家庭で交流を求める声
- ・古くからの居住者間では訪問し合う絆も残存

#### (5) 「わいわいワークショップ」

12月21日(月)に、戸山シニア活動館にて「わいわいワークショップ」を開催した。保健センターの担当者、地域包括支援センター長等を含む17名の参加があり、4テーブルに分かれて茶菓を楽しみながら話し合った。



「わいわいワークショップ」  
(2015年12月21日)

まず、団地で「困っていること」「欲しいもの」を挙げ、つぎに「もったいないこと」「余っている資源」を出し合う「ソニミサンゲーム」である。それらを結合させて「事業」をみんなで考案するものである。次のような「事業」が提案された。4グループの共通項は何らかの「交流の場」であった。

- ・「カフェ」「サロン」など (6案) (移動販売&相談、ビアガーデン、リサイクルなど)

- ・「助っ人参上！」
- ・「戸山ハイツ・コミュニティバス」
- ・「腐葉土で利益還元 (戸山ハイツの落ち葉利用)」

#### 2015年度の成果まとめ

- ① 戸山ハイツの実態、ニーズが明確となった。
- ② 住民が「つどい場」を希望していることが明確となった。(2回開催したワークショップ (2015年12月、2016年6月) では、みんなが集まれる「つどい場」がほしい、という意見が常に最上位を占めた)
- ③ 戸山ハイツの全世帯悉皆調査の結果を報告書 (95ページ) としてまとめ、協力をいただいた関係機関 (新宿区高齢福祉部、新宿区健康部、新宿区社会福祉協議会、地域包括支援センター=若松高齢者相談センターなど) に感謝の気持ちを伝えて配布した。
- ④ プロジェクト活動に関わる人は、東京家政大学学生はもとより全員がピンクのTシャツを着用した。目立つ色であるため、はじめは「何をしているのか？」不審に思われることもあった。2015年度段階で認知度はまだ高まってはいない。

## 2. 2016年度研究活動の概要

2016年度は「地域を耕しつつ、アクションの第一歩を記す年」として、シンポジウム&ワークショップ (6月19日) からスタートした。

年間の継続的な活動としては、「井戸端カフェ」と「キッチン・カフェ」2本の柱で人の輪を広げ、交流を楽しみながら学びの場を提供した。「つどい場」を願う声が多いことは明確になったのだが、どのように動けばいいかは不明なまま、「井戸端カフェ」を「学びの場」、「キッチンカフェ」を「交流の場」と位置付け、このプロジェクトの認知度を高め、地域を耕す年とした。

### (1) シンポジウム&ワークショップ (6月19日・日、戸山シニア活動館)

このシンポジウムは「戸山ハイツ『未来の物語』を語ろう！」と題し、「第3回女性未来研究所シンポジウム&ワークショップ」の位置づけで開催した。住民、関係機関職員、住宅関係者、研究者など160名の参加があり、熱気あふれるシンポジウムとなった。

<シンポジウム>

研究代表松岡の調査結果報告で始まり、樋口恵子所長の基調講演、猿渡進平氏・西上ありさ氏 (スタジオ-L コミュニティデザイナー) の地域づくり実践の講演に続き、秋山正子氏のコーディネートで両名によるディス

セッションが行われた。

樋口恵子所長からは、「戸山ハイツは未来の日本である。日本は大介護時代を迎え、ファミレス社会に突入している。血縁・婚姻による家族が消滅しているが、血縁がなくても『地域』を基盤に互に関心を持ち合って、支え合う社会、誰一人置き去りにしない社会に向けて活動を始めれば日本の未来にも希望がある。高齢化率の高さを武器にして、新しい挑戦をここから発信していきましょう」との力強いメッセージが発信された。

西上ありさ氏からは「趣味や好きなことなど、テーマ型コミュニティで楽しくつながっていきましょう。それぞれの人に能力があり輝きがあり、参加して中心メンバーとして関わるほど得られるものは多く、健康にもいいし、地域課題の解決につながっていく」、大牟田市で認知症 SOS ネットワークを構築している猿渡進平氏からは「地域で暮らし続けるためには、制度的サービスも必要だが、地域の人々のちょっとした支え合いがあれば在宅でも十分に暮らしていける。これはみんなの願いであり、他人事から自分事へと転換して、地域住民から動き出すことが重要。行政との協働をうまく進めることがポイント」との発信があった。

秋山氏は「とにかく、問題に気づいたら無視せずに行動を始めて、つながって継続していくことが大切です」とのまとめがあった。

## 〈ワークショップ〉

ワークショップには約 80 名の参加があり、猿渡進平氏、西上ありさ氏のファシリテーションにより、8 テーブルに分かれて「ソニミサン・ゲーム」を行なった。結果は、「つどい場（サロン）」「助け合い隊」「不用品交換会」が各グループで共通する事業として挙げられた。再び、「つどい場（サロン）への希望が強いことを確認することとなった。

## (2) 井戸端カフェ (4 回)

このあと、6 月から 12 月にかけて 4 回にわたって井戸端カフェを継続した。講師の話聞いて、そのあと参加者で話し合いをした。

これに先立ち、5 月 8 日には「平成 28 年度オープニング・カフェ」として戸山シニア活動館にて焼肉パーティを行ない、参加者の拡大と交流を進展させた。

① 第 1 回・6 月 29 日、猿渡進平（大牟田市中央区地域包括支援センター管理者）、暮らしの保健室

東京家政大学学生（教育福祉学科松岡ゼミ）より実際に行うアクションの提案があり「お散歩 MAP」が支持された。住民の方が持っている能力・特技を生かしてい

くと新しい展望が開けるという提案があったりしたが、「何を始めるか」に対しての共通した意思決定はなかった。

② 第 2 回・8 月 10 日・近山恵子氏（NPO 法人コミュニティ・ネット理事長）、暮らしの保健室

近山氏は自らが高島平団地で挑戦した高齢者住宅住人の会について話した。継続して会合を持つことが重要であり、「戸山ハイツでも『つどい場』があれば、助け合い会や交換会などで多くが解決する」。食事提供すれば家賃くらいは賄えるはず、との提案があった。高島平団地「地域リビングプラスワン」の紹介があり、有志で見学に行くこととなった。

③ 第 3 回・10 月 19 日・西上ありさ氏（スタジオ - L コミュニティデザイナー、戸山シニア活動館）

自治体には財政のゆとりがないので、豊かな地域は住民の手で削っていく必要がある。趣味などの楽しいことをつうじて絆を再生していくのが「テーマ型コミュニティ」であり、「食事、健康、社会参加」が重要である、という話であった。

その後の話し合いでは、「団地内であいさつがない」などの意見が出され、「テーマ型よりも、問題解決で進まなければ、この団地は待ったなしの状況である」という発言が多数を占めていた。

④ 第 4 回・12 月 21 日・井上温子氏（NPO 法人ドリームタウン理事長⇒理事が代理講演、戸山シニア活動館）

初めは 4 人でスタートしたが、継続していくうちに人が集まってくる。「高齢者のみではなく、一人暮らし」などの家族形態に焦点を絞っているのが、幼児と母親、小学生の子どもなどもやってくる。ボランティア中心であるが、ここで食事を作って働く事が楽しく、生きがいを感じている。「何かを始めるにしても、小さなことから始めて継続することが大事なのでがんばってほしい」との励ましの言葉を送っていただいた。

話し合いでは、「あいさつができていないので、あいさつ運動などをはじめてはどうか」という意見が出されたりした。

## (3) 団地住民とともに高島平団地訪問 (9 月 28 日)

5 名の住人の方と高島平団地「地域リビングプラスワン」を訪ねた。そのあと、「ゆいま〜る高島平」を訪問し、サービス付き高齢者向け住宅に改造された住戸とサービス拠点で生活支援の内容について話を聞いた。「雰囲気がいい」「戸山ハイツにもこうした食事のできるつどい場があるとよい」などの意見が多く聞かれた。

## (4) 「キッチン・カフェ」(計 5 回)

このプロジェクトの認知度をアップしつつ、健康志向

を高め、社会交流・参加者増加を目的として、「つくって・食べて・つながろう！キッチン・カフェ みんな元気」を合言葉に開催した。低栄養に陥りがちな高齢者に対して、簡単&栄養満点の料理づくりを学生とともに楽しみながら調理を通して健康増進・社会交流を図るために、各回ごとにテーマを決めて魅力あるイベントとした。栄養学科和田涼子教授が支援を行った。

募集は 井戸端カフェ参加者、暮らしの保健室と外山シニア活動館利用者にチラシを配布した。また、これまでの催しに参加された方に電話等で参加を呼びかけた。毎回、和田先生の健康と食事についての講話を行なった。

#### 開催日

- 5月 8日 (日) 食事会「焼肉パーティ」30名
- 7月 3日 (日) 料理教室「冷凍食品活用」20名
- 9月 11日 (日) 料理教室「食物繊維をとろう」
- 11月 6日 (日) 料理&食事会「豆の知識」
- 1月 8日 (日) 食事会「大鍋大会」31名

場所：新宿区立戸山シニア活動館調理室および学習室  
対象者・人数：戸山ハイツ住人、戸山ハイツ関係機関  
毎回 30名前後

毎回アンケートをとり、満足度を聞いた。参加者全員が「楽しかった」と回答するなど満足度の高いイベントとなった。11月には「男性が料理を作る人、女性は料理を食べる人」というテーマを掲げたが男性の参加もあり、その参加者は現在の「カフェあうねっと」に通ってくださっている。

「キッチン・カフェ」では、料理をすること、食生活の工夫の情報提供、地域交流、社会参加などさまざまな要素を持つ。しかし、食べることは魅力的で毎回参加者が多く、新しい仲間づくりやこのプロジェクトの認知度を高める上で大きな効果があった。さらに、準備をする過程をともにすることで、このプロジェクトへの参加の仲間意識が高まっていった事は、大きな収穫となった。

#### (5) リーダー会の発足、「戸山未来・あうねっと」の誕生

第4回井戸端カフェ（12月21日）のあと、17時よりリピート参加者や地区自治会長などに集まっていたが、今後の活動について話し合う機会を持つことができた。次回の約束（2017年2月8日）なども行なえた。これがリーダー会の始まりである。

リーダー会では、「つどい場」の場所探し、予算の問題などが話し合われて継続された。決定的な解決策はなかったが、団体名を決めて活動を継続することについて

は賛同意見が多く、リーダー会議を継続するにしても、団体名を決めてはどうかという意見が出され、2017年3月のリーダー会議において、「戸山未来・あうねっと」というネーミングが決定され、ロゴ・デザインとキャラクター・デザインが住民の方（現在の代表）から提案され全員一致で採択されることとなった。これにより、住民組織「戸山未来・あうねっと」が誕生した。

#### (6) 2016年度の成果と課題

##### 2016年度の成果

① 問題意識ある住民が集まり「顔の見える関係」が形成され、リーダー会から「戸山未来・あうねっと」誕生へ

井戸端カフェで話し合いを始めると、即座に会話が始まり、戸山ハイツでの問題について話し合いが盛り上がった。問題意識を持つ方が参加しているという証拠であり、「住民は対話に飢えている」という実感をもった。課題は多いにも関わらず、これまで、こうした話し合いの場がなかったということでもあろう。

回を重ねるごとにリピートで参加する方も増えていき、「前回もご参加くださいましたね」などと、大学関係者と住民の「顔の見える関係」が形成され、信頼関係形成の一步を歩みだせているかもしれない、という事実認識は2016年度の最も大きな成果と言える。そこで、2016年12月21日の第4回井戸端カフェのあとで、「リーダー会」を呼びかけ、この継続のプロセスで、2017年3月に「戸山未来・あうねっと」が誕生した。

② 住民の希望により見学会

2016年9月28日には住民の方5名の希望により、高島平団地「地域リビングプラスワン」を住民とともに訪問して、地域における「つどい場」の意義、運営ノウハウを学んだ。団地住民の「この団地を良くしたい！」という思いは強く、学ぶ意欲も高いことを確認した。

③ ワークショップでは課題が深められ、事業アイデアも。

2015年12月21日に続いて、2016年6月19日のシンポジウムでもワークショップを行った。その結果、「近隣との交流が少なくなった」「日頃交流できていない」「一日誰とも話さないことがある」などが出され、「戸山ハイツにあり活用されておらずもったい資源」では集会室、自治会などが挙げられ、「つどい場」の希望が強いことが再確認できた。住民より直接語られる言葉によって、課題の深刻さを認識でき、前向きな姿を見ることができた。この課題について、具体的に

実践に向けて支援していくことが重要である。

#### ④ 若い学生を持つ「力」が歓迎された

これらの過程で、東京家政大学の学生が訪問して、ピンクのTシャツを着て活動を始めたことは、想定外の効果を生むこととなった。最初は訝られた側面もあるが多くの方に「若い人を見るようになってうれしい。元気が出る」と喜んでいただく場面を多く体験した。学生たちも、団地のお年寄りとふれあい、高齢期の暮らしの課題を実体験として学んだ。

#### ⑤ 東京家政大学三学部のプロジェクト

このプロジェクトには、東京家政大学にある三学部に所属する教員が参加している。専門領域を超えて超高齢社会の問題について、住民たちと共有し、多角的なアプローチを行なうものである。とくに「キッチンカフェ」は仲間づくりや信頼関係づくりに効果的であった。

### 2016年度の課題

同時に、課題も明確となった。

#### ① さまざまなコミュニティ、資源が存在するが、それらが繋がっていない。

戸山ハイツには、地区自治会、号棟自治会、戸山シニア活動でのサークル活動や35号棟演芸会など、さまざまなコミュニティが多様に存在している。しかしそれらが繋がっておらず、分断された形となっている。ネットワーキングによって、何らかの力になるのではないだろうか。

#### ② 行政や社会福祉協議会、地区自治会、号棟自治会などとの協働。

今後の課題として、地区自治会長との話し合い、号棟自治会長の方へのアプローチをはじめとして、行政や社会福祉協議会、地域の社会福祉法人との協働についても可能性を模索していくとよいのではないか。

### 全体感想

結果としては、リーダー会などを始めることができたが、2016年度初頭は、前年度の成果を受けて何から始めればよいのか、また「井戸端カフェ」を続けつつも、顕著な進展もない中で、「これでいいのか」という苦しい時期が続いた。しかしながら、リピートで参加して下さる方々の「顔」が見え始め、個人的な会話も広がる中で、信頼関係も少しずつ形成されていっている様子を感じることができた。地域づくりやコミュニティ・ソーシャルワークは、そのプロセスや成果を数値化することができず、エスノグラフィや物語風に記述していくほかない。

地道ないとなみを続け、人とのつながりを作り、「対話」を継続していく。この地味な手法しかないのではないだろうか。来年度も地味に地道に継続している予定である。

また、学生たちも幾度となく各住戸を訪問してチラシ配布やアンケート回収を行ない、また、和田ゼミ・卒論ゼミの学生たちも朝早くからキッチン・カフェの準備をはじめ、最後の片付けまでよくがんばり、住民の方の輪を広げるとともに心温まる「おいしい場」を作り出す上で大いにがんばった。

戸山ハイツは1960年代、1970年代に建設された団地で、住人が一斉に老いていく稀有な状況の中で高齢化率52.2%という都会の限界集落の様相を呈している。これは、まさに日本の未来の先取りであり、樋口恵子所長の言にあるように「ここで、地域を基盤とした血縁に頼らない支え合いがうまくいけば、日本の未来にも希望が生まれる」と考えている。

これからも継続して、住民の方が行動を起こすことを支援していきたい。

## 3. 2017年度研究活動の概要

### 2017年度の目標

2017年度の目標として、活動を軌道に乗せ、住民の方が主体的に運営できるように支援すること、を掲げた。具体的には、キッチンカフェ、井戸端カフェの開催とリーダー会議の継続を中心として、大型イベントによって地域の他の組織・団体とのネットワークを広げていくこと、さらにはリーダー会議の開催によってコア・メンバーの結束を固めると同時にあうねつとのビジョンを語り、活動計画を立てるなどの実践をとおして組織ガバナンス向上へとつなげることを目指した。

実際の活動は次頁表に示すとおりである。

#### (1) 大規模イベント

##### ① 「あうねつと立ち上げ記念シンポジウム」(2017年6月18日)

樋口恵子所長の基調講演に続き、練馬区光が丘団地のNPO法人むすびの荒川直美さん(理事)、川崎市宮前区のボランティアグループすずの会の鈴木恵子さん(代表)などの実践者による話を聞き、「あうねつと」の誕生を祝いつつ今後の活動の構想を住民とともに膨らませた。女性未来研究所シンポジウムとして開催され、約150名の参集を得た。

## 2017年度の活動(イベント開催、カフェの継続、会議継続)

	大規模イベント	井戸端カフェ・キッチンカフェ	リーダー会議(L会議)
1月	*緊急連絡網作成		
2月		1/8「芋煮会」	①12/21: 今後の活動、あいさつ運動
3月			②2/8: 「つどい場」の可能性 2/18: 「サロン11」への参加
4月			③3/8: 年間計画、「あうネット」、キーパーソン
5月			④4/7: 6月シンポジウム、あいさつ運動
6月	6/18「あうねっと」立上記念シンポジウム(女性以来研究所シンポジウム)		⑤5/12: 6月シンポジウム、7-8月活動
7月	7/9「七夕縁日」映画と夕涼みで交流		⑥5/25: シンポジウム
8月		8/5「若気のイタリアン」(調理9名、食事25名)	⑦6/29: シンポ報告、七夕縁日打合せ
9月	9/17「ニコニコフェスタ」参加、PR&賛同者募集		⑧8/5: 「つどい場」、質問者拡大、ニコフェス
10月		10/11「地域で支える認知症」	⑨9/28: ニコフェス振り返り、賛同者リスト、11-12月の活動
11月			⑩10/11: 質問者へのイベント案内
12月		12/3「なんちゅ〜か、いい中華」(調理10名、食事30名)	⑪11/8: 2月の佐藤良子さん講演、とうしん訪問
1月			⑫12/3: 4号棟「つどい場」開設、ファンドレイジング、「いつきの社」訪問
2月		2/8「大山団地の取組に学ぶ」 2/27訪問「たまり場・とうしん」板橋区	



### ② 「七夕縁日であうねっと！」(7月9日)

あうねっと主催で、子どものゲームなどもある多世代型イベントを開催した。飲み物、カットすいかは住民が準備&販売して自主の道を歩み始めた。東京家政大学学生(松岡ゼミ、和田ゼミ、齋藤ゼミの学生が中心)は側面支援にまわり、すいかの準備やバルーンアートの実演などで花を添えた。約300名の参加があり大いに盛り上がった。



### ③ 「ニコニコ・フェスタ」参加(9月17日)

「ニコニコ・フェスタ」は戸山ハイツ西地区自治会主催のイベントであるが、あうねっとも参加した。学生はあうねっと誕生の歴史を説明するパネルを制作してフェスタ参加者に紹介し、住民の方とともに、あいさつ運動と賛同者募集のPRを行なった。約30名の新たなる賛同者を得ることができた。フラダンス同好会「Pau Lani プアウラニ」の出演もあり、大盛況であった。



## (2) キッチンカフェ

キッチンカフェは2回開催された。料理を作って食べていただくだけでなく、一緒に調理することで、住民主体性の醸成を狙った。

2回ともに食事30名前後、調理10名前後の参加があった。食材調達から住民の方に参加していただき、今後自分たちでできるように支援した。調理には栄養学科の学生が和気あいあいとしたムードとともに調理の楽しさを盛り上げ、教育福祉学科の学生は食事後のレクリエーションで和やかなひと時を演出した。

8月5日(日)「若気のイタリアン」では、スパゲティナポリタン、ミニピザが提供された。食事参加が25名、調理参加が9名であった。12月3日(日)「なんちゅ〜か、い〜い中華」では、水餃子、中華おこわ、杏仁豆腐。本格的な味わいに舌鼓を打った。食事参加30名、調理参加10名という賑わいぶりであった。



## (3) 井戸端カフェ

10月11日(水)には「地域で支える認知症」と題して、暮らしの保健室の杉本弥生看護師(室長代行)に認知症について講義していただき、家族としての悩みや近隣の様子について話し合った。約20名の参加があり、初めての参加者も多く、学びながら仲間を増やし、交流を深めることができた。

2018年1月25日(木)には、「水引をならう」と題して、住民で元水引職員の方に水引細工についてならう井戸端カフェを開始した。難しい作業を互いに助け合う行為をとおして交流を深めることができた。

2018年2月8日(木)は、立川市大山団地(公営団地)の自治会活動をリードしておられる自治会長の佐藤良子さんの実践にまつわる話を聞いた。さらに、2月27日(火)には、住民の方と板橋区でカフェ「たまりばとうしん」(NPO法人健やかネットワーク)を訪問した。

## (4) リーダー会議

リーダー会議は毎月継続して、2018年1月25日(水)には第13回リーダー会議を開催した。毎回10名前後の参加者で、メンバーが安定している。

活動内容についての話し合いが主たるテーマであるが、

「戸山未来・あうねっと」は誕生したものの、「安心して住める戸山ハイツ」「つどい場」という課題に向けては、顕著な進展は見られず、忍耐の1年であったような印象がある。

第12回リーダー会では、「現在、東京家政大学から支援を受けているがゆくゆくは自立しなければならない。その準備を始めなければならない」という意見が出された。その流れで、シニア活動館の拠点に加えて、戸山ハイツ4号棟にオープンした(2017年9月)「小規模多機能型居宅介護 戸山いつきの杜」の地域交流スペースにおいて、新しい「つどい場(あうねっとカフェ)」を新設してはどうか、という積極的な意見が出されるようになった。模索の時代ではあるが、地道な継続の中で大きな進展はなかったが、2年間の活動継続の成果であると言えよう。

## (5) 新宿区住民主体型通所事業の受託

2018年2月、新宿区が「新宿区通所型住民主体サービス事業」の担い手を募集していることが分かった。「リーダー会議」を緊急に招集して、みなで話し合った。「毎週の開催を実際に我々ができるか?」「参加者が集まるのか?」などを不安に思う意見が出された。「戸山未来・あうねっと」ができたとはいえ、実際にどのような活動をして「安心して暮らせる戸山ハイツ」を作ることができるのか、新しい展開に限界を感じていた時期でもあり、全員一致で応募することに決まった。

応募書類を作成し、新宿区の審査を経て、2018年3月受託が決定した。開催場所は、東地区にある「小規模多機能型居宅介護 戸山いつきの杜(新宿区戸山2丁目4-1)」の地域交流スペースを借りて開催することとした。名称は、「カフェあうねっと」とした。

## (6) 2017年度の成果と課題

### 2017年度の成果

#### ① 「井戸端カフェ」「キッチンカフェ」の定着

キッチンカフェと井戸端カフェを新宿区立シニア活動館にて開催しているが、固定客もでき、その上毎回新しい参加者も増えて安定した運営となった。とくに、キッチンカフェは安定している。シニア活動館を拠点として、ひとつの「つどい場」が完成したとも言える。ここには、シニア活動館(ワーカーズコープが指定管理事業者として管理運営)のPR協力が大きく貢献している。

また、井戸端カフェでは「地域で支える認知症」と題して暮らしの保健室の杉本弥生看護師に講演をしていただいた。的確でわかりやすい内容で好評であった。これも、共同プロジェクトならではの強味である。

② リーダー会議の定着と「新宿区住民主体型通所事業」の受託

リーダー会議は13回を数えるまでになり、毎回参加して議論して下さる様子は「私達住民が主体である」との気持ちの表出である。また、明確に意見を述べられる様子にも真剣に戸山ハイツを良くしたい！という気持ちがほとばしっており、お互いにより影響を与えあいながら、相乗効果が発揮されていた。

このリーダー会での話し合いの蓄積が、2017年3月の「新宿区住民主体型通所事業」の受託へとつながった。

③ 自立に向けて…4号棟進出のビジョン

また、今は大学からの金銭的・人的支援があるが、住民として自立していかなければならないという意識があり、「大学が支援してくれている今がチャンス！」という声が住民の方から上がっている。また、11号棟で開催されている「サロン11（シニア活動館主催）」から「人手が足りないので助けてほしい」という要求があった際も、「それだけあうねつとが必要とされる存在になったことは素晴らしい！」と、「あうねつととして支援していこう」という意見が出されたりした。

**2017年度の課題**

① 組織性

「あうねつと」は誕生したが、規則も予算も組織フォーメーションもなく、お互いの信頼によって成り立っている。

② 賛同者の拡大

さらなる賛同者の拡大、具体的には実際にボランティア活動で実働できるメンバーの拡大が求められる。賛同者リストを無理なく着実に増やしていき、新しい「つど

い場」運営への土台形成が必要である。

③ 地域との連携

地域の連携については、リーダーの方々のネットワークもあるので、「カフェだんだん」「サロン11（11号棟）」「30カフェ（30号棟）」などのカフェ運営組織、高齢者総合相談センター（地域包括支援センター）との交流は広がっている。今後は、パルシステム東京、高齢者クラブ、社会福祉協議会、新宿区などとも、地域プラットホームを形成して情報交換できれば、あうねつとの地域活動にもさらなる広がり可能性が生まれる。

**4. 2018年度研究活動の概要**

**2018年度の目標**

2018年3月に「新宿区住民主体型通所事業」を受託することが決まり、2018年度の目標としてはまず、「カフェあうねつと」の活動を軌道に乗せ、住民の方が主体的に運営できるように支援する、とした。キッチンカフェ、大規模イベント、リーダー会も継続した。下表のとおりである。

**(1) 新宿区住民参加型総合事業「カフェあうねつと」**

新宿区通所型住民参加型通所事業「カフェあうねつと」の開始に先立ち、リーダー会のメンバーを中心に研修を行った。

4月21日「高齢者の健康観察と緊急時対応（斎藤正子）」を、4月28日「総合事業について（松

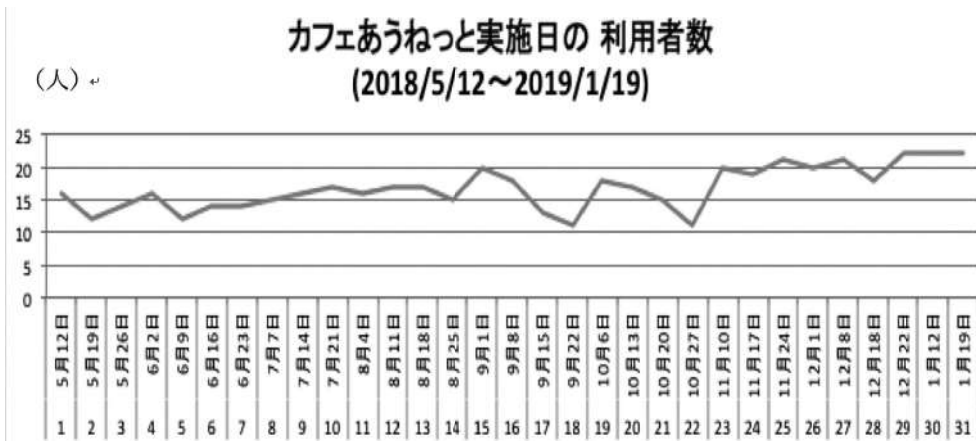


写真1 カフェあうねつとの看板

**2018年度の活動**

	カフェ・あうねつと	大規模イベント	キッチンカフェ	リーダー会 (議題)
1018年 4月	4/14、4/21、4/28 勉強会			準備会と同時開催
5月	5/12、5/19 5/26	6/24「戸山未来・あうねつと」記念シンポジウム		
6月	6/2、6/9 6/16、6/23			6/30 カフェあうねつとの担当
7月	7/7、7/14 7/21	7/8「七夕縁日であうねつと！」		
8月	8/4、8/11 8/25		8/26 キッチンカフェ	8/18 キッチンカフェ、ニコニコフェスタ
9月	9/1、9/8 9/15、9/22	9/16「ニコニコ・フェスタ」		
10月	10/6、10/13 10/20、10/27			
11月	11/10、11/27 11/24			11/3 クリスマスカフェ(キッチンカフェ)
12月	12/1、12/8 12/22		12/26 ホッカホカのクリスマス	
2019年 1月	1/12、1/19			

表1 カフェあうねっと実施日の利用者数



岡洋子)」である。

この事業を「カフェあうねっと」と名付け、2018年5月12日より、を毎週土曜日（第5土曜日を除く）10:30～12:00に開催することとなった。高齢者の歩行機能と認知機能に改善効果のある「ふまねっと運動」を導入した。「ふまねっと運動」の導入については、最初に、本学の教員3人が、「ふまねっと運動」研修を受けて、指導者の役割を担った。その後、住民組織「戸山未来・あうねっと」のリーダー4人も研修を受け、指導者として活動している。

現在、「ふまねっと運動」は、参加者から好評を得て、毎回、継続して行く看板メニューとなっている。その他、音楽演奏会、なつかしい歌の合唱、健康講話、チアリーダーサークル（本学）、工芸など様々な活動内容となっている。

カフェあうねっとの参加者は、1回につき、12～22人である。11月からは20人前後と利用者数が安定し、利用者も固定化してきた。年代は60～90歳、性別は、男性より女性の参加者が多い。夫婦での参加者もいる。

## (2) 大規模イベント

### ① 新宿区通所型住民全体主体サービス事業「戸山未来・あうねっと」記念シンポジウム（2018年6月24日）

カフェあうねっとの代表矢沢正春氏の「新宿区通所型住民主体サービス事業」の受託報告から始まり、樋口恵子所長の基調講演「いまこそ地域の絆」、ヒグチ・地域活動ラッキーセブンの法則をご披露頂いた。

応援講演として、服部真治氏「総合事業において、住民に求められていること」、佐藤智彦氏「新しい支えあいの地域づくり（北海道池田町）」、実践者による話を聞き、シンポジウム討論「介護予防で地域のきずなを創る」を開催した。次に「ふまねっと運動」をインストラクターの薬師寺清幸氏にご指導を頂き、体験タイムを設けた。このように「カフェあうねっと」の

誕生を祝いつつ今後の活動の構想を住民とともに膨らませた。女性未来研究所シンポジウムとして開催され、130名の参集を得た。



シンポジウム



ふまねっと運動体験

### ② 「七夕縁日であうねっと！」（7月8日）

「七夕縁日」は三世交代交流をテーマとする「戸山未来・あうねっと」主催の夏まつりであり、7月8日（日）に新宿区戸山シニア活動館で開催された。入口には願い事を書いて飾りつける「七夕かざり」があり、ヨーヨー釣りや妖怪玉入れなどが楽しめる「こども広場」、東京家政大学生（松岡ゼミ、和田ゼミ）によるバルーン



アートの実演などが前庭で繰り広げられた。館内では、「戸山未来・あうねっと」メンバーによるカレーライス、カットフルーツが販売され（「えんがわ屋台」）、リサイクル品を販売する「バーザーコーナー」があり、駄菓子販売の「たがしの家」があり、世代を超えて交流し楽しむことができた。「カフェあうねっと」で毎週行っている「ふまねっと運動」を楽しむコーナーでは沢山の方にこの運動を体験していただいた。また、あうねっと副会

長（八木橋萌絵さん）のアイデアによる「家族写真」は、絵浴衣や着物を着て家族写真が撮ってもらえるとあって人気を集めた。各地区、各号棟の自治会長の方も参加していただき、世代交流のうちに「戸山未来・あうねっと」をPRすることができた。

### ③ 「三世代交流・ニコニコ・フェスタ」へ参加（9月16日）

「ニコニコ・フェスタ」は戸山ハイツ西地区自治会主催のイベントであるが、「戸山未来・あうねっと」も参加した。学生はバルーンアートの配布など、住民の方とともに、「ふまねっと運動」を行い、カフェあうねっとの参加者募集のPRを行なった。フラダンス同好会の出演もあり、非常に喜ばれて大盛況であった。



松岡ゼミ、和田ゼミのバルーンアートづくり

### (3) キッチンカフェ

8月と12月、2回開催した。

#### ① 第1回 2018年8月26日（日）

メニュー：カレーライス、夏野菜サラダ、果物

調理スタッフ：住民5名、栄養学科学生他6名 計11名

食数：60食 参加費：500円

#### ② 第2回 2018年12月16日（日）

メニュー：鶏のから揚げ、白菜スープ、カップケーキ

調理スタッフ：住民5名、栄養学科学生他4名 計9名

食数：50食 参加費：500円

夏には食材の買い物に苦勞したが、冬には買い物はお手伝いしますよ、受付をしますよと、あうねっとメンバーからの声があった。調理班は50 - 60食を提供できることに自信を得、会場の設定にもクリスマスらしい飾りつけを考えるなど自分たちの活動であるという意識が高まっていた。

冬のキッチンカフェでは、栄養学科の学生はカップケーキを用意し、教育福祉学科の学生はレクリエーション

でサンタに扮してクリスマス会らしく盛り上げた。サンタさん（あうねっと代表）が登場し、みかんをプレゼントするなど、これまでの絆を強くしつつ、新しい仲間づくりに効果のあるカフェである。



調理の様子



楽しい会食



鶏のから揚げ盛り付け



教育福祉学科学生によるレク

### (4) 2018年度の成果と課題

#### 2018年度の成果

##### ① カフェあうねっとの安定と住民の自信

「カフェあうねっと」を戸山いつきの杜にて毎週1回、土曜日に開催しているが、毎回、20人前後の固定の利用者で安定するようになった。

大規模イベントや「キッチンカフェ」への参加者から、「カフェあうねっと」の参加者へつながった利用者があり、安定した運営が可能となっている。特に、「カフェあうねっと」の参加者が安定してきたことで、サポーターの住民（あうねっとシスターズ）の初期の不安は「これ以上参加人数が増えると会場に入りきらない」「参加者が多すぎて、ふまねっと体操の時間が少ないのではないか」という心配に変化するほどである。

このような中で、「カフェあうねっと」を運営するあうねっとシスターズの成長が著しい。その要因は、ふまねっと運動の研修を受けて指導者となっていることである。指導者となり、自信をつけると同時に、この活動を楽しみ、真の意味での「住民主体の活動」になってきている。

##### ② 参加者の満足

参加者から、「ふまねっと運動により、足が上がるようになった」「杖の使用方法が上手になった」「車いすで参加していた利用者が杖で歩いてくるようになった」という声が聴かれるようになった。また、「ここに参加して、隣の棟の人だとわかって挨拶するようになった」「閉じ

こもりだったが、外で出られるようになった」という発言もあり、コミュニティづくりや精神的、社会的な支援にも関与している成果が表れ始めた。

### ③ リーダー会議の定着

リーダー会議は、1-2ヶ月に1度、定期的で開催している。毎回参加して議論する様子は「私達住民が主体である」との気持ちの表出である。リーダー会の議題は、カフェあうねっと、大型イベント、キッチンカフェの運営や課題についてなどを話し合うことが多い。

## 2018年度の課題

### ① プログラムの工夫、経費の問題

今後も継続して参加して頂くためには、ふまねっと運動を主軸として、他のプログラムの充実が必要となる。参加者の声を聞きながら、「参加したくなる」プログラム開発が必要である。

経費の課題として、参加者から1回100円の参加費で茶菓子を賄っているが、不足している。また、サポーターへの謝金を2名分、支払っているが全員分の支払いは難しい。そのため無償のボランティア活動で成り立っている。新宿区からの予算があるが使用の制限があり、経済的に余裕がない現状である。さらに参加者が多くても、この事業の参加対象者の割合が少ないと支援金が削減するシステムになっている。このように参加費や新宿の支援金では、すべての運営を賄うことが難しい現状がある。継続するための運営資金の調達を考え、資金運営に関する課題と要望を新宿区へ政策提言するなど「カフェあうねっと」が継続できるシステムづくりが必要である。

### ② 参加者の拡大

大型イベントの継続、キッチンカフェを継続し、参加者を募っていく。同様に「カフェあうねっと」の参加者の拡大が必要であるが、現在の戸山いつきの杜の

一室では、収容人数に限界がある。今後はサテライトを検討するなど、現在の「カフェあうねっと」がモデルとなり、新宿区通所型住民主体サービス事業が各地で開催されることを目指していく。

### ③ 地域との連携

地域との連携については、リーダーの方々のネットワークもあるので、「カフェだんだん」「サロン11（11号棟）」「30カフェ（30号棟）」などのカフェ運営組織、高齢者総合相談センター（地域包括支援センター）との交流を深めたい。また、バルシステム東京、老人会、社会福祉協議会、新宿区などとも、地域プラットフォームを形成していくための行動を開始したい。

## 5. 2019年度研究活動の概要

### 2018年度の目標

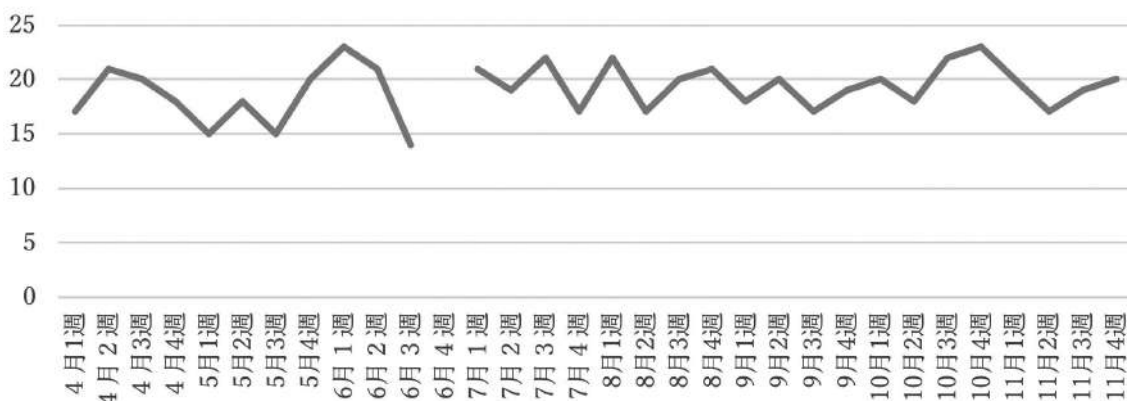
毎週土曜日に開催している新宿区住民参加型通所事業「カフェあうねっと」の安定的継続を主軸に、①さらなるボランティア・参加者の増加、②この活動と新宿区・専門職との連携強化、③「戸山未来・あうねっと」の組織としての未来展開を考える、などを目標に掲げた。③のためには、リーダー会も月一回のペースで開催し、イベントの打ち合わせだけでなく、組織のこれからについても話し合いの機会を持ちたい。

### (1)「カフェあうねっと」

参加者数は下表のとおりであるが、安定的な運営の様子は次のようにまとめることができる。

- ① 平均参加者は19.2名（2019年4月～11月平均）であり、半数以上が要支援1・2と総合事業対象者であった。補助金満額をクリアする水準である。
- ② 利用者はリピーターが中心であり、「今月の皆勤賞」は毎回10名前後で11月には最高の14名を記録した。

2019年「カフェあうねっと」参加者



「土曜日を楽しみにしている」との声も聞かれる。

- ③ 準備体操と「ふまねつと運動」が核になっているが、「お楽しみタイム」では、絵手紙、ぼっちゃ、ギター伴奏による歌、日本舞踊鑑賞、健康小話など、多様なエンターテインメントがあり非常に充実している。
- ④ あうねつとシスターズ（ボランティア）は毎回2人のシフトを組んでいるが、毎回5人前後が「楽しいから」という理由で参加している。
- ⑤ 東京家政大学（教育福祉学科松岡ゼミ）からも毎回5人（9月以降は3人）が参加して受付、準備体操でお手伝いし、若さを届けている。
- ⑥ バスによる移送サービスも「戸山未来・あうねつと」として提供しており、遠く離れた北地区・西地区からも4名の方が乗って来ている。

## (2) 東京都北区「介護予防リーダーの会」との交流

「カフェあうねつと」における「ふまねつと運動」による機能維持効果をエビデンスとして蓄積するために計測しようということになり、9月日東京都北区より「介護予防リーダーの会」の方9名に来ていただき、「おたっしゃ21」という計測システムについて説明していただいた。地域におけるボランティアの交流の場（新宿区と北区）ともなった。



北区「介護予防リーダーの会」の方と一緒に

## (3) 大型イベント：シンポジウムなど

このプロジェクトでは毎年6月にシンポジウムを開催しているが、今年は6月23日（日）新宿区戸山生涯学習館にて開催した。

樋口恵子所長の基調講演のあと、東京家政大学学生（教育福祉学科松岡ゼミ生4年）が「カフェあうねつと利用者・ボランティアに関する調査」の結果発表を、同3年生が利用者インタビューを行い、シンポジウムでは地域包括支援センター長大瀧頭一氏・東地区自治会会長河原田啓介氏・あうねつと代表矢沢正春氏が登壇するなど、

戸山ハイツの資源を活用しての開催となった。戸山ハイツ住民・関係機関によるシンポジウムとなった。



その他、西地区自治会主催による「ニコニコフェスタ」には「あうねつと」として参加した。東京家政大学学生（教育福祉学科松岡ゼミ生）としてはタピオカを作って販売し、バルーンアートを作って子供も含めた地域交流に参加した。

## (4) 大型イベント：「リエイブルメント講座」（井戸端カフェ）

12月12日には、作業療法士であり株式会社トラピ代表取締役社長である鎌田大啓氏を呼んで「リエイブルメント講座」を開催した。

これは、総合事業通所B型を一年半運営していて、参加者の機能低下が見えるようになってきたにも関わらず、それをリハビリにつなげたりする制度・機関がないことに疑問に感じたからである。総合事業には短期集中でリハビリを行い機能低下を予防する「短期集中C型（通所・訪問）」が存在する。にもかかわらず、そのような対応ができないことが残念に思われたからである。より多くの新宿区の方々（住民、専門職など）とこのことを考える機会にできればと思い、新宿区健康腹部・地域包括・介護保険事業所などにも呼びかけた。

カフェあうねつと参加者10名、あうねつとボランティア8名、東京家政大学学生15名、新宿区健康福祉部2名、地域包括支援センター2名、介護保険事業所3名、社会福祉協議会1名、新宿区区議会議員2名の参加があった。総合事業B型が新宿区に増え、また既存のつどい場も一緒になって専門職と有機的につながり、介護予防に実質的な効果を発揮できるよう、これからも対話を続けていきたい。

## II. 5年間の成果とまとめ、考察

この5年間のアクションリサーチの経過を振り返ると、以下のような形にまとめられよう。

- 2015年度：調査による戸山ハイツ実態・ニーズの把握
- 2016年度：仲間づくりとリーダー会「戸山未来・あうねっと」の発足
- 2017年度：「戸山未来・あうねっと」としての活動模索
- 2018年度：新宿区住民参加型通所事業「カフェあうねっと」の開始と運営の安定化
- 2019年度：新宿区住民参加型通所事業「カフェあうねっと」と他の事業所とのネットワークと専門職連携

団地住民の方々との話し合いによって、「安心して住み続けられる戸山ハイツを目指して」という目標をもってスタートした事業が、「介護予防・日常生活総合事業」の「住民参加型通所事業（B型）」を受託することで一気に団結が深まり、「ふまねっと運動」の導入によって、住民主体化が無理なくスムーズに進んでいった。

2016年度、2017年度、この活動をどのように支援して、一つの形としてまとめればよいのか模索が続いたが、5年かけてなんとか一歩が踏み出せたのではないかと考えている。

その成功要因、残る課題などについて考察してみたい。アクションリサーチはまだ確立されていない領域なので、初期・中盤・終盤に分けて自由に書いていく。

### (1) 当初目的に関する達成度

- ① 「カフェあうねっと」という「つどいの場」の創造  
当初の目的は「安心して住み続けられる戸山ハイツ」を作ろうということであったが、調査の過程で団地住民の多くが「つどいの場」を希望していることが分かった。常設型ではないが、現在「カフェあうねっと」として、毎週土曜日 10:30～12:00 開設して10名のシスターズがコンスタントに20名の参加者を笑いと笑顔のうちに介護予防をとおして安定して活動していることは、一定の成果をおさめたとと言える。  
しかし、ここで注意しなくてはならないのは、「つどいの場」は手段であって、最終目的ではないという点である。「安心して住み続けられる戸山ハイツ」であるためには何が必要なのか、継続して問い続け活動し続けることが重要である。

### ② 外で会ってもあいさつする関係

2019年秋の学生のインタビューで明らかになったように、「カフェあうねっと」で会う人々は、買物先で会ってもあいさつする関係であり、「顔を見知った」関係ということができる。交際範囲に限られる都会生活の中で、「毎週会って、楽しい時間を過ごす」関係は、「安心して信頼できる」人間関係であり、まさに社会関係資本（Social Capital）である。そうした社会関係資本を「カフェあうねっと」で創りだしていることは、「安心して暮らし続けられる地域づくり」に実質的につながっていく。

### ③ 「互いに気づかい合う」関係・「支える / 支えられる」を超えた関係の醸成

2019年秋の学生のインタビューで明らかになったように、「カフェあうねっと」参加者は、来ていない人のことを気遣ったり、シスターズは参加が途絶えた方に電話をかけたりしている。また、シスターズが参加者を支えているのみではなく、参加者と合って互いに元気に笑うことで「元気をもらっている」「やりがいを感じている」のである。これは、学生と参加者・シスターズとの関係でも言えることであり、「カフェあうねっと」の運営を通じて「絆」が生まれていることが分かる。これは、そのまま安心感につながるものではないが、こうした絆が重層的に構築されていくことにより地域で暮らすことの安心感につながると考えることは不自然ではない。

## (2) 事業運営の成功要因と課題

### 〈成功要因〉

#### ●初期

#### ① 秋山正子氏と「暮らしの保健室」の存在

秋山氏は最初に新宿区役所、社協など地域の主要機関に案内していただき、悉皆アンケートには共同研究者として「暮らしの保健室」の名前を記載した。「暮らしの保健室」はすでに戸山ハイツではよく知られており、信頼していただくことができた。何の縁故もないところに落下傘部隊のようにして舞い降りたとしたら、今回のような展開は難しかったであろう。

#### ② 戸山ハイツ悉皆調査と学生の頑張り

3400世帯へのアンケート配布は松岡ゼミ生（東京家政大学教育福祉学科）が24名いたとはいえ、大変な仕事である。一人あたり10回以上は戸山ハイツに足を運び、アンケート配布するだけでなく、回収にも各戸のドアをノックして訪問した。この体験を通して、学生は、高齢者が自宅から出にくい状況、老々介護に苦しんでおられる様子などを生々しく学び取り、就職

活動にも影響を受けた。

③ 猿渡進平氏など適切な専門家からの助言

井戸端会議での定性情報の収集法、ワークショップの展開法などを指導いただいたのは主に猿渡進平氏（大牟田市地域包括支援センター長）であり、他にも多くの専門家より適切な助言が得られた。

④ 樋口恵子所長基調講演によるシンポジウムの威力

毎年6月にはシンポジウムを開催した。樋口恵子所長の知名度と集客力は抜群で、プロジェクトの広報を行う上で多に助けたいいただいた。

⑤ 女性未来研究所の支援

上記のことを可能ならしめたのは、ひとえに女性未来研究所の予算であり、活動の意義を認めていただき、正規の枠を超えた配分を頂戴した。研究所のご理解と予算があったことも、大きな成功要因である。

●中盤

① 根気よくみんなで勉強を続けた

正直なところ、2年目、3年目は、団地住民の方が「つどい場」を希望していることはわかったのだが、これを住民主体でどのように進めればよいのか不明で、「暗黒の模索の時代」であった。とにかく、地域づくりの実践家を講師として呼び出して勉強を続け、一人でも仲間が増えればという意識で続けた。

② キッチンカフェを通じた仲間づくり

なかでも、「ともに食べる」ことには力があり、栄養学科の和田教授が「キッチンカフェ」を開催して、食の大切さを伝えつつ、仲間づくりに力を発揮して下さった。「私食べる人、あなた作る人」と題した料理教室には男性の参加も多く、現在の「カフェあうねつと」の常連さんとして続いている。

③ 継続して参加して下さる方の存在

こうした活動を通じて、リピートして参加して下さる方の顔が見え始め、声をかけて「リーダー会議」をスタートしたことは、行き詰まる中でも大きな前進であったように感じる。とくに、現在の活動を力強くおすすめてくださっている方より、「松岡先生が止めたら、私も止めるから」と言われた一言は忘れられず、「逃げられない」と覚悟した一瞬であった。

④ 代表者の出現

リーダー会の中から、現在の「戸山未来・あうねつと」の代表者が現れ、みなさんから信頼を集める方に代表を務めていただくことができたことは本当にありがたく、幸運なことであると言える。

●終盤

① 新宿区住民主体型通所事業を受託

2018年2月、新宿区が総合事業受託者を募集していることを知り、区役所を訪問してみると、現在のあうねつとでも十分に資格があることがわかり、代表者とともに超特急で書類を作成して応募することとなった。代表の方に「そんなの難しくてできないよ」と言われれば、それまでの話である。「YES！で受けとめ、みんなで決めよう！」と言ってくださり、リーダーさんに緊急招集をかけ全一致で「受託」を決めた。

この事業は、月1回以上開催し、11名以上の参加者があって、半分以上が要支援者、事業対象者であれば、補助金が支払われる。この事業を受託できたことは、真に大きなステップとなった。

② 「ふまねつと運動」がマッチし、魅力あるプログラムが多く、シスターズが魅力的

「カフェあうねつと」では、北海道で生まれた「ふまねつと運動」を採用することとした。研修を受ければ誰でもサポーターになれば、住民主体で介護予防の場を運営できると考えたからである。現在、あうねつとでは、6名の方が研修を受け、サポーターとして「ふまねつと運動」を指揮している。

③ 学生の若さ、笑顔と笑いがあふれる「カフェあうねつと」

毎週の「カフェあうねつと」では、本当に笑顔と笑い声があふれる。それは、ふまねつと運動では、ステップを踏み終えた時にハイタッチで共に喜び合うという基本があり、「失敗したら、笑い飛ばしましょう」というルールがあるからである。失敗して笑い、できたとって笑い、、、笑いにあふれている。また、東京家政大学生が参加して若々しく明るい雰囲気づくりにも一役かっており、みなさんから感謝とねぎらいの声をかけていただいている。

④ 素晴らしいリーダーさんと「戸山未来・あうねつと」代表の熱意と柔軟性

「カフェあうねつと」のボランティアである「シスターズ」さんは、リーダー会議に初期から来ていた方であるが、本当に強く「戸山ハイツを良くしたい！ここで安心して暮らしたい！」と願っている方で、他にも様々なボランティア活動をしている。人を思うやさしさにあふれ、リーダーシップもある。また、代表の方がみなさんからの信頼厚く、運動あとの余興に毎回工夫を凝らして魅力アップに余念がないこと、さらにはさまざまな提案をYESで受け入れ「それなら、こうしたらいいね」と発展的に考えて下さった。このことも、偉大な力となっている。現在、シスターズさ



人も各人の声かけによって、一人二人と増えており、現在 12 人となっている。

## 課題

一方で課題もある。

### ① 未来構想と組織の発展性

「カフェあうねっと」は順調に進んでいるが、「安心して住み続けられる戸山ハイツ」であるために、何が必要なのか？初期の目的を中心に据えて、次の未来構想をえがいていくこと、また、現在は任意団体であるが、組織のあり方についても話し合っていくことが必要である。

### ② 事務仕事の負担とその分担

住民参加型通所事業は、3ヶ月毎に成果・経費等をまとめて新宿区に提出しなければならない。戸山ハイツは「若松高齢者総合相談センター」管轄であるが、他から来ている方もいて、圏域を超えた書類提出はさらに煩雑で、事務仕事に慣れた人でなければできない膨大な作業である。現在、代表の方がこの作業を行っているが、こうした事務仕事の軽減を新宿区にお願いすると同時に、分担システムの構築が必要である。

### ③ 専門職との連携

参加者の約 70%が要支援であり、ケアマネは高齢者総合相談センターにいる。カフェあうねっとには毎週来られるので、状態の変化などがよくわかる。待っている変化はないので、「カフェあうねっと」より、月一回のカンファレンス・ミーティングを提案するなどの積極性が必要である。さらに、新宿区には総合事業短期集中 C 型が存在しないので、地域のリハ職の方々と話し合っ、機能低下が顕在化する前の何らかの対策をともに考えていけたらと考えている。

## (3) 社会への広報活動

アクションリサーチでは、論文だけではなく、その成果を広く社会に広報していくことも重視されている。本アクション・リサーチによる学会活動、社会広報活動をまとめる。

〈学会発表・海外・口頭〉

Matsuoka, Y., Wada, R., Saito, M., 'Residents' Potential in a Super Aged Social Housing Community in Japan' presented at ENHR 2018 Conference Uppsala, 29/6/2018, Oral presentation and full paper submitted.

Matsuoka, Y., Wada, R., Saito, M., 'Community Social Work in a Super-aged Social Housing Neighborhood: a Tokyo Case Study', presented at ENHR 2016 Conference Belfast, 28/6/2016, Oral presentation and full paper submitted.

〈国内〉

松岡洋子 (2018) 「総合事業通所 B 型『カフェあうねっと』1」『文化連情報』No.489, 56-59pp.

松岡洋子 (2019) 「総合事業通所 B 型『カフェあうねっと』2」『文化連情報』No.490, 60-63pp.

松岡洋子 (2019) 『さあ、言おう：ひとりごと』2019年6月号

〈マスコミ〉

シルバー新報「新宿区都営団地で住民ワークショップ」2016年7月1日

読売新聞「独居住民『保健室』で相談（年間連載・老いをどこで）」、2018年7月3日

シルバー新報「住民団体が新宿区総合事業 B 型を受託」2018年7月13日

福祉新聞「戸山ハイツで住民シンポジウム」、2016年7月16日

産経新聞「都営団地戸山ハイツで住民のカフェあうねっと」、2019年9月20日

産経新聞「東京・新宿の住民組織『戸山未来・あうねっと』復活した『ご近所づきあい』」2019年9月20日

〈その他〉

「高齢化する社会を語ろう」『東京家政大学 by AERA (AERA ムック)』24 - 27pp.、2016年10月

\*最後になりましたが、長きにわたりご支援くださいました女性未来研究所（樋口恵子所長、伊藤節副所長 2015-2016 年度、並木有希副所長 2017-2019 年度）に心より御礼申し上げます。

# 生涯を通じた女性の健康づくり

## —未就学児の母親に焦点をあてて—

大久保 麻矢／杉田 理恵子

### I. プロジェクト実施期間

2017年4月～2020年3月

### II. プロジェクトメンバー

2017年度：大久保麻矢、米澤純子、井上直子

2018年度：大久保麻矢、井上直子

2019年度：大久保麻矢、杉田理恵子

### III. 本プロジェクトの背景と目的

本プロジェクトの最終目的は、女性が自身の心身に関心を持ち、健康管理を行う動機づけをすることである。

女性の心身は性ホルモンにより大きな影響をうけている。ライフサイクルから考えると、思春期には、ホルモンの影響により女性は女性らしく身体が変化していく。性成熟期は女性にとって大きな分岐となる。子どもを望む、望まない。妊娠・出産のホルモン変化は基礎疾患の憎悪や産後うつなど女性の心身に大きく影響を与え、これを機に健康を害するものも少なくない。逆に捉えれば、健康な女性にとって妊娠は医療と接触する貴重な機会であり、健康意識も高まる機会であるといえる。加え、このライフイベントは心身だけではなく社会的にも女性を大きく変化させる。母という役割はその後の女性に大きな影響を与える。更年期は症状の程度の差はあるものの、出産に関わらずすべての女性に訪れる。卵巣機能の低下による女性ホルモンの減少は、高血圧や心疾患、骨粗鬆症等多くの疾患の誘因となる。このように、女性の健康は性ホルモンにより支配されているといっても過言ではない。

限られた期間で、すべてのライフサイクルの女性を対象にすることは難しい。そこで、本プロジェクトでは対象を末子が乳幼児（就学前）の子どもをもつ女性とする。この時期の女性たちに焦点をあてた理由は、健康意識が高くとも日々の子育てに追われ、時間・気持ちの余裕が

ないこと、核家族化している現在は気軽に子どもを預ける事ができない、一時保育のサービスが充足されていないなどの社会的制約に加え、子どもを他人に（有料）預けることへのうしろめたさなど女性自身に内面化された規範により自身の健康管理が後回しにされる傾向にあるからである。

成熟期以降の更年期、老年期の健康は成熟期以前の健康の上に成り立っており、そのため生涯を通じた健康管理が重要となってくる。2008年厚生労働省が「生涯を通じた女性の健康づくりについてのワーキンググループ」を組織し、国レベルでの取り組みを始めている。しかし、女性自身が多くの制約にとらわれず、健康管理を行うためには行政から提供されるサービスシステムにのるだけではなく、女性たち側からも変化するよう働き掛ける必要がある。

ここで、研究のキーとなる語句を整理する。ここで使用する健康とはWHOの定義に基づき「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」とする。よって、健康管理も健康診査受診などに留まらず、女性や母親に課せられた制約を乗り越え自ら主体的に行動する意味も含んでいる。

本プロジェクトは子育て期の女性たちが自分自身に関心を持ち、健康に向けて主体的に行動することをエンカレッジする目的で行った。

### IV. 2017年度実施内容

#### ①イベントの開催

2018年度からの本格的なプロジェクト実施にあたり、その啓蒙を目的に未就学児の母親を対象としたイベントを実施した。また、狭山・板橋両キャンパスで実施予定であったが、狭山キャンパスでの実施日が、保育園のイベントと重なったことで中止とし、板橋キャンパスのみで実施した。

実施日：2018年1月20日（土）

場 所：板橋キャンパス 1-3A 教室、森のサロン（託児・外部委託）

担当者：大久保・井上（ともに看護学科）

実施内容：女性の健康に関するミニレクチャー  
：自宅で簡単にできるヨガストレッチの実施

参加者：1名（託児2名）

### 〈ヨガストレッチ実施風景〉



\*参加者の写真掲載やお話内容を報告書に記載する旨は了承を得ています。

イベントの参加者は1名であったが、今年度実施できたことで来年度に活かせることは多くあると考える。参加者からは肩こり・腰痛等の訴えと、日常的に子育てに追われ食事等自分のことが後まわしとなっている現状を聴くことができた。安心して子どもを他者に託し、自分の心身と向かい合うことのできる時間の提供は、自身の健康管理の動機づけには必要であると思われる。今年度の経験を踏まえ、来年度はこのような機会の提供の回数を増やすとともに、参加者の増員に務める。また、単なるイベント提供にとどまらず研究成果として形に残す努力を続けていくことを課題とした。

### ②学内公開定例研究会発表

『女性の一生涯に寄り添う助産師－女性のライフサイクルに焦点を当てて－』のテーマで発表させていただいた。プロジェクトメンバー全員が看護職であり、母子保健をはじめ女性の健康に関する職種を経験している。助産師という職業に焦点を当て、女性やその家族の一生に寄り添い続けた歴史から、女性の置かれている背景、健康課題などを中心に発表を行った。

## V. 2018年度実施内容

### ①未就学児の母親の健康ニーズについて（アンケート調査）実施

出産が高齢化した現在、産後を機に尿失禁をはじめとする骨盤底筋群の弛緩が原因と考えられる問題が顕在化

してきている。また、現時点で問題がなくともエストロゲンの減少による支持靭帯の弛緩で、加齢とともに訴えが多くなる問題でもある。女性の生活の質を保証するためにも尿失禁や骨盤底筋の弛緩の早期からの予防は、重要な視点であると考え、未就学児の母親の心身の健康の実際とニーズ（尿失禁等を中心に）を把握することを目的にアンケート調査を実施した。

0～3歳児対象の子育て支援施設、保育園、幼稚園等複数の施設に協力いただき、アンケート調査を行った。（具体的な内容は2018年度報告書を参照）この調査で、未就学児の女性が自身の不調への対処や健康増進に向けた行動が後回しになっている現状が明らかになった。特に、尿失禁や頻尿は生活の質を脅かし、女性の生涯に影響を及ぼしかねない。来年度は、日常で行える尿失禁や頻尿対策を中心とした健康クラスの開催を中心に活動を行っていくことを課題とした。

### ②学内公開定例研究会発表

『バングラデシュ農村部の女性の出産と育児』のテーマで発表させていただいた。大久保が青年海外協力隊助産師隊員としてバングラデシュ農村部で働いた経験や修士課程時の調査をもとに、国際的視野での女性やその家族の健康を、「妊婦健康診査」や「子どもの栄養失調」などを中心に発表を行った。

## VI. 2019年度実施内容

### ①イベントの開催

2017年度のイベント時のニーズ、2018年度のアンケート調査結果をもとに女性未来研究所の兼任研究員である児童学科の梅谷先生とともに、イベントの共同開催を行った。

実施日：2019年11月10日（日）

場 所：板橋キャンパス 中体育室

担当者：梅谷（児童学科）・大久保

実施内容：女性のホルモンについて・今後起こる心身の変化

：ちょこっとトレーニング（簡単にできる運動法）

参加者：1名（託児1名）学生5名（児童学科、保育科）

あいにく、七五三のシーズンと重なってしまいイベントの参加者は1名であった。乳児を連れてきてくださった参加者は児を前に抱き、大きな荷物を持ち肩こりや腰痛などの症状があった。子育て期女性の現在や今後に起こりやすい身体の問題の話や、その予防法、つらい症状を予防・緩和する手軽な方法などの実技を参加者はボラ

## 〈トレーニング実施風景〉



\*参加者の写真掲載やお話内容を報告書に記載する旨は了承を得ています。

ンティア学生とともに楽しそうに実施されていた。今回の参加者はボランティア学生と遊ぶ我が子を見て「抱っこされているときこんな表情しているんですね。自分が抱っこしていると表情が良く見えなくて…」とおっしゃっていた。2017年度の報告同様、安心して子どもを他者に託し、自分の心身と向かい合うことのできる時間はこの時期の母にとってとても貴重である。対象者は1名であったが満足していただけた時間であったと考えている。

今回は、他学科の先生と合同でイベントを開催することが出来た。それぞれの専門がある中で、打ち合わせの時点からたくさんの示唆を得ることが出来た。キャンパスが離れているためなかなか調整の時間が取れずイベントは単発で終わってしまったが、この様なイベントが開催できたのも女性未来研究所のお陰であると感謝している。

## ②日本助産学会学術集会ポスター発表

3月の学会で2018年度のアンケート調査と2019年度のイベントに関する内容を日本助産学会学術集会にてポスター発表の予定であったが新型コロナウイルスにより学会が中止となったため、抄録集で発表した。

## VII. 今回の3年間を振り返り

女性未来研究所の兼任研究員となり、大きなテーマを持って挑んだが達成できなかったことも多くある。しかし、他学科や職員、外部の方々がそれぞれの分野で『女性』をキーワードに行っている研究や活動を知り価値観や視野を広げることが出来た。また、最終年に他学科の先生と協働でイベントを開催することが出来たことをうれしく思う。この成果を教育や地域活動に活かしていくことを今後の課題としたい。

# 男女共同参画で取り組む地域防災・減災 ～女性防災リーダーの育成プロジェクト～

齋藤 正子／谷岸 悦子／齋藤 麻子

第1期2014～2016年度は、男女共同参画の視点を基に地域防災・減災の推進することを目的として、地域のニーズや他大学の活動を調査した。その結果をもとに第2期2017～2019年は、地域連携および大学間連携を通して、次世代の女性防災リーダー育成を目指し、研究プロジェクトに取り組んだ。

## I. 3年間の研究成果

3年間の研究成果は、女性の防災リーダーの育成として①学生が、トリアージやBLSの勉強会などを通して、災害時の対応に興味関心を持ち、対応できる力が備わってきた。②平時からの地域連携・大学間連携を行い、災害時に協力できる体制づくりができた。③学生とともに教材「男女共同参画の視点を踏まえた防災・減災カルタ」（以下：防災カルタ）づくりを行い、活用した。④2019年度は、3年間の成果として、女性未来研究所シンポジウムを開催した。これらの3年間の研究成果を報告する。

## II. 研究の目的

男女共同参画の視点で取り組む地域防災・減災の結果を活かし、地域連携および大学間の連携を通して次世代の女性防災リーダー育成に取り組むことを目的とした。

## III. 研究の対象者

研究の対象者は、本学の看護学科の看護ボランティアサークルの学生（1年生64名、2年生16名、3年生7名、4年生10名の合計97名：2018年度）であるが、年度により加入の学生人数が変化した。また、開催した内容によっては、サークル以外の学生も参加した。健康科学部看護学科では3年次から年間を通して臨地実習にであるため、本取り組みでは、1・2年生を中心として活動した。

平時のボランティア活動を通して、地域での顔の見える関係性づくりが、災害時のリーダーとして活動できるのではないかと考えている。また、平時の地域と大学の連携づくりや強化が災害時の備えとなり、地域防災・減災の推進に繋がる。このため、平時から地域住民との連携

を図り、ボランティア活動や研修会を協働で行ながら、防災・減災に限らず、健康に関するスキルと知識を身に付けることなどから人材育成に取り組んだ。

## IV. 研究の方法

アクションリサーチ（Schwartz-Barcott：ミューチュアルアプローチ）

## V. ボランティア活動を通じた人材育成

研究者は、活動のプロセスを重要と考え、防災リーダー育成には、研究者の他に看護学科の教員の協力を受け、指導にあたった。具体的にはボランティアの活動場所との連絡調整および準備を手助けし、主体的に活動できるように導いた。また、活動後に振り返りを行い、活動の意味づけを促し、学生の変化を見ながら人材育成を行った。

ボランティアに取り組む行事や勉強会などは2年生から活動リーダーを募り、リーダーが中心となってボランティア活動を選択し、活動した。毎年、看護ボランティアサークルの学生のニーズを確認することから始めた。主な活動は、①サークルの先輩による後輩への講義、②「かせい森のおうち」にて健康教室、③狭山市の「不老荘」にて、60歳以上の方を対象とした健康カフェ「ナースのたまごカフェ」の開催、④被災地での活動として、南三陸町「ボランティア活動」、⑤復興支援のイナリヤマフェスタへの参加、⑥第9回社会貢献学会大会及び復興支援ボランティア活動にて活動を発表、⑦狭山市ボランティア活動発表会にて発表、⑧大学間連の携ボランティア活動「そなエリア東京」にてワークショップに参加した。以下に具体的な内容を述べる。

### 1) サークルの先輩による後輩への講義

(2) 2017年度は、大学3年生が実習前の時間を利用して、後輩の1-2年生向けに災害看護やトリアージについて、講義や演習を行った。大学2年生が大学1年生へ救急法の演習シナリオを作成して、BLS (Basic Life Support: 一次救命処置) を全員が体験できるようにした。また、本学の教員による小児の救急法の講義と演習としてBLSや気道閉塞時の対応について共同研究者の谷岸先生が講義と演習を実施した。

(2) 2019年度は、大学4年生と3年生が1年生を対象としたBLS講習と南三陸の活動報告を実施した。4月27日(土)、参加者は1年生27人、スタッフとして4年生7人・3年生5人だった。参加者の1年生から、「南三陸の活動が知れてよかった。」BLS講習は、「様々な状況での救命活動を体験することができた。何かあったら看護学生として手を差し伸べられるようにしたいと感じた。参加して看護ボランティアサークルに入りたい。」などの意見が挙った。



写真1 BLS講習の様子

### 2) 「かせい森のおうち」の教室の開催(年1回)

狭山キャンパス内にある「かせい森のおうち」にて健康教室を開催した。2017年度は、2歳児を対象とした「手洗い教室」を実施した。2018年度には、3歳児を対象とした「バランス良く食べよう」というテーマで栄養バランスを開催した。食材は当時の昼食のメニューをもとに身体にどのように作用するかを園児が分かるように絵や文字に書いてクイズ形式で説明した。2019年度は、3歳児を対象とした「手洗い教室」を開催した。毎年、1年生が入学から間もなかったが緊張しながらも2年生とともに活動した。健康な子どもたちと交流する機会になったとともに2年生のリーダーシップも発揮していた。

### 3) 狭山市の不老荘「健康カフェ」の開催

2018年度から狭山市の不老荘にて健康な高齢者を対象とした健康カフェを開催した。学生は血圧測定やハンドマッサージにより、高齢者の話を聞くコミュニケーションの機会となった。開催の日時は、ほぼ毎月1回第3日曜日11:00~13:30だった。ここでの活動には、研究者と教員2名から協力を受けて指導を行った。不老荘での継続したボランティア活動は、学生たちのコミュニケーションのスキルアップに繋がり、地域の元気

な高齢者がどのようなことに興味を持ち、どのようなことを不安に考えて生活されているかを知る機会となっていた。利用者と手と手を取り合い、マッサージを行うことで、物理的、心理的な距離が縮まり、円滑にコミュニケーションをとることができていた。この看護職を目指す者として、地域に暮らす生活者としての高齢者の方々の声を聴く機会は、非常に重要なものであると学生たちは考えていた。しかし、2018年度の課題は、継続して活動する学生数の確保が難しいことが挙り、2019年度からは、活動者を当番制として年間の予定を組んだことで学生数の確保ができた。ハンドマッサージなどの提供するケアの質の担保が課題であったため、セラピューティック・ケアのミニ講習会を開催し、スキルアップを促した。学生の参加者は17人だった。

### 4) 被災地「南三陸町」へのボランティア活動

宮城県「南三陸町」のボランティア活動は毎回、研究者と教員1名が引率し、指導にあたった。

2017年度は、南三陸病院、訪問看護ステーションやデイサービスへのボランティア活動として8月に学生が11名参加し、ハンドマッサージの実施やレクリエーションを行った。被災時の様子や復興の状況を聞く機会となった。

2018年度は、8月21日から22日、同場所へ学生が16名参加した。活動は「南三陸病院」と「りあす訪問看護ステーション」、「デイサービスしづがわ」におけるボランティア及び同行訪問に加え、震災語り部のS

さんによる講話を受けた。3回目となった今回は、複数回参加の学生や4年次の学生が中心となり、協力しながら主体的に取り組んでいる。また、初めて1年生から4年生の各学年が揃って参加できた。

参加した学生は、被災した患者や利用者、病棟の看護師のお話、社会福祉協議会の職員の話、そして語り部の元消防士による講話等、様々な状況でどのような被災体験をしたのか、その実際に被災された方々の言葉を現地でも聞いたことで、新鮮な学びに繋がっていた。

特に語り部のSさんの講話では、災害の最前線でどのような活動、決断をされ、どのような思いを持っていたのか、愛する人を助けられなかった自責の念を含め、現在までの心の葛藤、そして現在の活動に対する使命感や



写真2 病棟でのボランティア活動

覚悟を、被災された専門職という立場でお話頂いた。発災当時の消防隊長として精力的に活動されていたSさんから、リーダーとしての役目・役割や震災を経験したので今後、私たちがこれからどのように行動していかなければ



写真3 語り部Sさんの講話

ならないのかなど講話を通して教えて頂いた。学生は、「心の傷は消えないけれど癒すことはできる」との言葉を教えて頂き、寄り添うことの大切さを実感したと述べていた。被災したのは住民さんだけではなく、地域で活動する専門職も同じであり、抱える重責や苦悩の大きさについても知ることができ、自分たちは震災をどう考えるのか、何ができるのかを真剣に考える機会を頂いた。そして、震災を風化させないように語り継ぐことやこの状況を何らかの形で発表したいと考えていた。課題として特に1年生や初参加者に対してマッサージスキルの質の担保、事前学習（訪問看護やデイサービスの機能や流れ）やボランティアの心構えの周知（災害ボランティア活動ガイドライン等）、グリーンディングの時間を設けるなどを検討したいと考えた。

2019年度は、8月3日（土）に語り部のSさんと訪問看護ステーションの看護師Aさんをお招きし、シンポジウムを開催した。

また、同年8月6日～7日、学生20人がこの活動に参加した。前年と同様の活動に加え、学生主催による災害復興住宅居住者に対する「健康カフェ」開催した。場所は、災害公営志津川東住宅第



写真4 応急仮設住宅での活動

一（6日）および同第二（7日）の集会室にて、コミュニケーション、フラダンス、合唱、ラジオ体操等のレクリエーションや血圧測定、ハンドマッサージなどの健康支援活動を2時間程度で実施した。集会室に常駐しているライフサポートアドバイザーさんの協力を得て、準備や実施および後片付けに至るまで学生が主体的に運営した。最初から最後まで笑顔の絶えない会であり、終了後はお集まり下さった住民の皆さんより「本当に楽しかった」「また来てね」等、大変多くの喜びのお声をいただいた。

今年で4回目となる本プログラムは、過去3回の実績を土台にすることで、より充実度が高まったと思われる。例えば、昨年度の内容を引き継ぐ形で実施した「健康カフェ」では、ライフサポートアドバイザーの皆さんが「普段は（住宅から）出てこない人が、今日は来た」「みんな、とても良い顔をして参加していた」と驚かれる一幕もあった。短時間ではあったが、居住者の居場所や交流の場および娯楽を提供する一端を担えたと推測する。

加えて、ピラ配り、会場設営、マッサージやフラダンスなどのアクティビティは4年連続でボランティアに参加しているリーダー学生を中心に、チームワーク良く助け合いながら誠実に役割を果たす様子が見受けられた。特に上級生は慣れない下級生に対し実践面のフォローにあたっており、この点、昨年の課題であった「マッサージの質の担保」や「ボランティアの心構えの周知」等はある程度達成できたと考える。学生の主体性が育まれ、リーダーおよびメンバーシップの育成に繋がっていた。

## 5) 狭山市イナリヤマフェスタへの参加

2018年10月7日（日）、2019年10月6日（日）11:00～18:30。狭山稲荷山公園でイナリヤマフェスタが開催され、学生1～2年生が参加した。研究者が指導に入った。イナリヤマフェスタは、復興支援のチャリティイベントである。防災カルタと並行してお茶とワッフルをセットで販売し、収益は全額寄付した。

学生たちは、近年、自然災害が多く発生しているため、地域の人々と共に災害について考え、正しい知識を身につけることを目標にした。その教材として、2017年度に学生たちが作成した防災カルタを用いてカルタを行った。防災



写真5 防災カルタ

カルタの参加者は毎年約30名だった。参加した学生から「防災カルタは多くの人が遊んでくれて、防災に対して興味を持ってもらえて、小さい子どもたちがすごく楽しんでくれて嬉しかった。」「販売してくださいと言ってくださる親御さんもいらして、みんなで作ったカルタが役に立ち、良かったと思った。」振り返りの時に感想が挙がった。

また、同じスペースにて、南三陸のボランティア活動をポスターにして、掲示した。震災を風化させないことや看護ボランティアサークルのボランティア活動を発表した。

## 6) 東北福祉大学ボランティア活動 50 周年記念感謝祭・第 9 回社会貢献学会大会及び復興支援ボランティア活動への参加

2018 年 12 月 15 日～16 日（土・日）、宮城県の東北福祉大学ボランティア課から招待を受けて本学の学生 2 名が参加した。

1 日目の東北福祉大学で開催された学会のパネルディスカッション・ポスターセッション・口頭発表が行われ、本学の学生たちはポスター発表を行った。テーマは、今年



写真6 2018年度東北福祉大学にてポスター発表

の夏にボランティア活動に参加した「南三陸復興支援ボランティア」についてだった。参加した学生は、ポスターセッションで発表した学生のポスターにも興味を持って質問をしてくださり、「私たちの活動の発表を通して情報を発信しただけでなく、聞きに来てくれた方がどのようなところに興味を持っているのかを語ってくれたことで、新たな視点を身につけることができました。」と感想を述べていた。

2 日目は、被災地見学として東松島市震災復興伝承館での DVD 鑑賞、旧野蒜駅の見学した。上野学園大学と東北福祉大学の協奏事業に参加して、「私たちとは違った立場からの復興支援の方法を学ぶことができた。」と語っていた。

このように震災を風化させないためにも被災地の現状やボランティア活動を発表したり、発表や大学間での協働したことにより、協奏事業のボランティア活動に参加したことから、違った立場からの復興支援の方法を学ぶことができ、ボランティア活動の多様性を知ることができていた。

## 7) ボランティア活動体験発表会

2019 年 2 月 3 日（日）13:30～16:00。場所は狭山市中央公民館第一ホールにて学生 2 名が日頃の看護ボランティアサークルの活動内容について発表した。この活動は、狭山市の「ボランティアの止まり木」から依頼があり参加した。

## 8) 大学間連携「そなエリア東京」の活動

2019 年 3 月 9 日～10 日（土・日）、東京臨海広域防災公園内にある防災学習施設「そなエリア東京」にて、大学間連携によるボランティア活動紹介としてワーク

ショップが開催され、本学の学生は、延べ 13 名が参加した。東北福祉大学、神戸学院大学、工学院大学、上野学園大学の学生との連携である。ここでは、各大学のボランティアの教職員が指導に関わっている。活動は、来場者へ本学で作成した防



写真7 そなエリア東京にてワークショップ

災カルタを用いてカルタも行うことや他大学の防災スゴロクやゴミ袋の活用でレインコートを作成などのワークショップを行った。この施設を体験することで防災について知識を深め、他大学の学生との交流が行われ、学生の視野を広める場となった。

## VI. 3年間の研究成果のまとめ

研究の成果は、学生が女性の防災リーダーの成長として 4 点ある。①女性防災リーダーが数名育成された。先輩が後輩を育成する育成力が備わってきた。看護ケアの技術の資質を担保するためにシンポジウムの開催やハンドマッサージの講習会開催により、学生たちが女性防災リーダーの重要性を知り、技術のスキルアップに繋がっていた。②学生が学内や狭山市内、被災地のボランティア活動を通して、地域活動や災害時の対応に興味関心を持ち、知識や技術を修得できた。また、活動したこと発表することで、次世代につなげるために発信する力が備わってきた。③平時からの地域連携・大学間連携を行い、平時から災害時に協力できる顔の見える体制づくりができた。④教材として作成した防災カルタを用いて、防災教育を地域の方々と一緒に考え、知識を深めることができた。研究の課題に挙げていたリーダーが学生の学年進行に伴い、交代するため、学生同士で次の世代に活動を継続できる仕組みづくりの基盤が構築できたと考える。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆さん、活動を受け入れてくださった狭山市不老壮・南三陸・かせ森のうち・イナリヤマフェスタ・東北福祉大学をはじめ大学間連携の皆様にご心より感謝申し上げます。尚、この研究は女性未来研究所の助成を受けて実施した。



# 中学生・高校生の自立とキャリア形成 家庭科教育からの アプローチ (SDGsと家庭科教育)

鮫島 奈津子／崇田 友江

## 1. はじめに

思春期・青年期は、アイデンティティ（自己同一性）がテーマであり、「自分とは何か」「自分は何がしたいのか」「自分は何を求めているのか」を問いながら、「自分らしさ」を見つけ、将来につなげて（進路選択して）いく大切な時期となります。

昨年の公開研究会では、「将来の夢・なりたい職業」のアンケートを基に、中学1年生（入学時）、高校1年生、高校3年生の進路選択（夢・職業）の推移と進路決定者の中から数名の生徒へ実施したインタビュー結果からキャリア形成の変化についてまとめ・分析した結果を報告しました。同時に、発表者の専門教科である家庭科の授業において、思春期・青年期の自立に向けて、「リスクマネジメント」という同一題材を、中学生・高校生同時期に実施する取り組みを報告しました。

今年度も引き続き、進路選択の分析とともに、自立に向けた家庭科の授業実践を報告します。中学3年生は、家族・家庭生活の領域の中で、自立のピラミッドの頂点にある“性的自立”について学びます。生命の継承者として“性と生を考える”授業を通し、疑問に思ったことや深く学びたいと思ったことを調べ、KP法でまとめ、ポスターセッションとして発表しました。同様に高校3年生選択保育の“人間らしく育つ・生きる”授業の取り組みについても報告します。

## 2. SDGs と家庭科教育

国連は、2001年から2015年まで「ミレニアム開発目標（MDGs）」を掲げ、発展途上国の課題に取り組んできました。その取り組みに続くものとして、2015年9月に国連持続可能な開発サミットを開催しました。その中で、国連は、2030年までに、先進国も新興国も途上国も、国も企業もNPOも個人も、あらゆる垣根を越えて協力し、よりよい未来を作るための17の目標（ゴー

ル）と169のターゲットからなるSDGs（持続可能な開発目標）を設定しました。「誰も置き去りにしない（No one will be left behind）」をコンセプトに、この目標に向けて、世界的な取り組みが始っています。

教育現場においても、新学習指導要領（2017年3月）の中で、小学校・中学校・高等学校、いずれも「持続可能な社会の創り手」の育成が明記され、学習内容の中にSDGsと深く関係していることが示されました。中学校の家庭科においては、関係する学習内容として、「身近な消費生活と環境」「家族と家庭生活と子どもの成長」が挙げられています。また、高校においては、「家族・家庭及び福祉」「衣食住」に加えて、「持続可能な消費生活・環境」が一つの領域となりました。まさに、家庭科は「持続可能な社会」の実現に向けた教科であり、生活上のさまざまな問題を通して、知識や情報を基に解決策を考えたり、議論したり、表現したりする主体的・対話的な深い学びの場として、より重要になると考えています。

## 3. 教育実践 I 中学3年生

### (1) 中学校の取り組み

附属中学校の技術・家庭科は、中学1年生で家庭分野「被服」技術分野「木材加工」の2単位、中学2年生で家庭分野「食物」技術分野「情報」の2単位、中学3年生では家庭分野「家族と家庭生活」1単位の合計5単位を履修しています。平成29年度までは、中学3年生も2単位を履修していましたが、現在では1単位減となっています。しかし、義務教育最後の学年において、「家族と家庭生活」の中で自立について扱うことの重要性を考えると、2単位で行っていたことを、できる限り実施できるように授業を組み立てています。今回は、中学3年生の自立の授業（性と生を考える）の中にSDGsを取り入れて行った授業実践を報告します。



### (3) まとめ

生徒たちの感想には、「良かった」「理解が深まった」など、やりがいを感じる感想を言ってもらえて嬉しかったし楽しかった」や「先生方から“成長したね”“説明が上手だった”などと言ってもらって、もっともっと多くの人に発表を聞いてもらいたくなった」「分かりやすく説明が出来て、自分でも納得のいく発表でした」など、発表を通して、自信をつけ、積極的に取り組む姿勢が見られました。また、人それぞれ、関心のあるテーマが違うことやテーマが同じでも切り口や視点に違いがあることを学べたこと、生と性に関する問題を、LGBT、ジェンダー、売春、貧困、差別など、中学生の自分と重ね合わせて取り組んだことが、発表の内容からも伺えました。

今回の取り組みにより、多くの生徒たちが、できなかったことができるようになったり、そのことを周りの人に認められることが自信につながることを体感しました。と同時に、生徒の感想の中には「発表前と発表後で考え方や見方が変化したことも、この授業の魅力的部分だと感じました」とあるように、自ら学ぶことのおもしろさに気づいたことは、これから始まる探究の時間にも大きくつながるものと考えています。

## 4. 教育実践Ⅱ 高校3年生

### (1) 高等学校の取り組み

高等学校の家庭科は、高校2年生の「家庭基礎」2単位と高校3年生の選択科目の履修となっています。中学校の技術家庭科と同様に平成27年度までの「家庭総合」4単位に代わって、現在では、「家庭基礎」2単位の履修になっています。単位数の減は、新学習指導要領においても「持続可能な社会の創り手」が明記されている中、とても残念なことではあります。

今回は、中学同様にSDGsを取り入れた高校3年生の選択科目である「保育」の授業実践を報告します。

### (2) 授業実践

今年度の保育の年間テーマは、「子どもを大切にできる社会をめざして～より良い未来のために私たちにできること～SDGs for Children」とし、次の①～③を目標に授業を計画しました。

#### ①子どもの環境（いのち・健康・生活）を考える

（社会の仕組みに目をむけ、子どもたちの安全を考えよう！）

#### ②子どもの教育・発達を考える

（世界中の子どもに目をむけ、子どもたちの現状を知

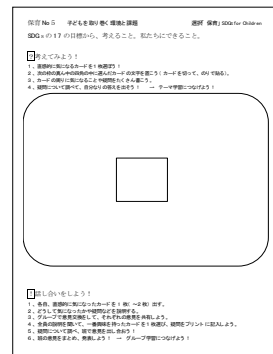
ろう！）

#### ③子どもを大切にできる社会をめざして、私たちにできることを考える

（共生社会の実現に向けて、世界規模で考える力をつけ、実践しよう！）

まずは、①子どもの環境として、SDGsの目標から一番気になるカードを選び、話し合うことからスタートしました。子どもを取り巻く環境には、どのようなことがあるのか、その中で、自分が一番問題だと思うこと、大事だと思うこと等を探ることによって、1年間興味を持って取り組めるように設定しました。

### 授業プリント



### グループ活動



その後、SDGsの17の目標の中の「5: ジェンダー平等を実現しよう」の視点で、妻と夫の役割分担ロールプレイと子育てディベートを実施しました。

### 妻と夫の役割分担ロールプレイ



### 妻と夫の子育てディベート



次に、②の子どもの教育・発達を考えるとして、SDGsの目標からは、「4: 質の高い教育をみんなに」、「5: ジェンダー平等を実現しよう」、「1: 貧困をなくそう」、「3: すべての人に健康と福祉を」の視点を取り入れながら、JICA地球広場での学びを実施しました。JICA地球広場では、世界の安全保障展が開かれ、その中で、教育・福祉・貧困・健康等についてのさまざまな世界の状況が展示されていました。特に、教育ブースの女子の教育環境についての内容に興味を持っている様子が伺えました。また、カカオ農園を題材にグループワークを行い、「生

活の保障」「貧困」「児童労働」などについて学びました。

教育ブース



SDGsの世界の達成率ブース



児童労働についてのワークショップ



最後に、③子どもを大切にする社会をめざして、私たちにできることとして、1年間の学びのまとめを行いました。日本でのSDGsの達成率を踏まえ、自分たちにできることを、50年後の未来を想像しながら、自分の考えをまとめ、班で発表したあと、グループディスカッションの時間も作りました。

授業プリント

学習No15 子どもたちの権利「私たちが自分たちへ 権利を保障、SDGs for Children」

SDGsは、「地球上のみんなの権利」を守るためのものです。その中で、「地球上の誰一人として取り残さない」を目標として、地球上の誰一人取り残さない、先進国は後進国を助けていくのが使命です。

7つ選んでみよう！ 日本のSDGsへの取り組みはどうなっているのか？

1. 1-目標の達成状況？ 1枚 2枚 3枚 4枚 5枚 6枚 7枚 8枚 9枚 10枚

2. どの目標が？ イチノエ 自 アフリカ 自 中東 自 中アフリカ 自

3. 日本のSDGsの達成率を調べよう！ 56%未満です。(2018年度)

4. SDGs達成度で、私たちの生活は？

5. 未来の日本をどうする？

6. 未来の日本をどうする？

7. 未来の日本をどうする？

8. 未来の日本をどうする？

9. 未来の日本をどうする？

10. 未来の日本をどうする？

11. 未来の日本をどうする？

12. 未来の日本をどうする？

13. 未来の日本をどうする？

14. 未来の日本をどうする？

15. 未来の日本をどうする？

16. 未来の日本をどうする？

17. 未来の日本をどうする？

18. 未来の日本をどうする？

19. 未来の日本をどうする？

20. 未来の日本をどうする？

21. 未来の日本をどうする？

22. 未来の日本をどうする？

23. 未来の日本をどうする？

24. 未来の日本をどうする？

25. 未来の日本をどうする？

26. 未来の日本をどうする？

27. 未来の日本をどうする？

28. 未来の日本をどうする？

29. 未来の日本をどうする？

30. 未来の日本をどうする？

31. 未来の日本をどうする？

32. 未来の日本をどうする？

33. 未来の日本をどうする？

34. 未来の日本をどうする？

35. 未来の日本をどうする？

36. 未来の日本をどうする？

37. 未来の日本をどうする？

38. 未来の日本をどうする？

39. 未来の日本をどうする？

40. 未来の日本をどうする？

41. 未来の日本をどうする？

42. 未来の日本をどうする？

43. 未来の日本をどうする？

44. 未来の日本をどうする？

45. 未来の日本をどうする？

46. 未来の日本をどうする？

47. 未来の日本をどうする？

48. 未来の日本をどうする？

49. 未来の日本をどうする？

50. 未来の日本をどうする？

51. 未来の日本をどうする？

52. 未来の日本をどうする？

53. 未来の日本をどうする？

54. 未来の日本をどうする？

55. 未来の日本をどうする？

56. 未来の日本をどうする？

57. 未来の日本をどうする？

58. 未来の日本をどうする？

59. 未来の日本をどうする？

60. 未来の日本をどうする？

61. 未来の日本をどうする？

62. 未来の日本をどうする？

63. 未来の日本をどうする？

64. 未来の日本をどうする？

65. 未来の日本をどうする？

66. 未来の日本をどうする？

67. 未来の日本をどうする？

68. 未来の日本をどうする？

69. 未来の日本をどうする？

70. 未来の日本をどうする？

71. 未来の日本をどうする？

72. 未来の日本をどうする？

73. 未来の日本をどうする？

74. 未来の日本をどうする？

75. 未来の日本をどうする？

76. 未来の日本をどうする？

77. 未来の日本をどうする？

78. 未来の日本をどうする？

79. 未来の日本をどうする？

80. 未来の日本をどうする？

81. 未来の日本をどうする？

82. 未来の日本をどうする？

83. 未来の日本をどうする？

84. 未来の日本をどうする？

85. 未来の日本をどうする？

86. 未来の日本をどうする？

87. 未来の日本をどうする？

88. 未来の日本をどうする？

89. 未来の日本をどうする？

90. 未来の日本をどうする？

グループ活動

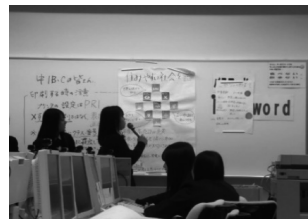


グループ発表の準備



ダイヤモンドランキングを用いて、グループ発表の準備を行いました。

グループ発表の様子



5. まとめ

個人で選んだカードを基に話し合い、各班でSDGsの17の目標を9つ選び、ダイヤモンドランキングを作成し、グループ発表を行いました。17の目標を3つに分類し(表1)、各班のランキングを色分けした結果(表2)が以下の通りです。

表1

人生として基本的な生活を維持するための目標

1. 貧困をなくそう
2. 飢餓をゼロに
3. すべての人に健康と福祉を
4. 質の高い教育をみんなに
5. ジェンダー平等を実現しよう
6. 安全な水とトイレを世界中に

人々の生活の質を向上させるための目標

7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに
8. 働きがいも経済成長も
9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
10. 人や国の不平等をなくそう
11. 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任 つかう責任
13. 気候変動に具体的な対策を
14. 海の豊かさを守ろう
15. 陸の豊かさを守ろう

表2

目標	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
2	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
4	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
5	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
6	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
7	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
8	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
9	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
11	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
12	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
13	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
14	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
15	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10

選ばれた目標は、子どもの生活の視点で選んだものが多く、基本的な生活を維持する中からは、「貧困をなくそう」と「質の高い教育をみんなに」が10班中8班、生活の質を向上させるの中からは、「人や国の不平等をなくそう」が8班、「平等と公正をすべての人に」が7班、地球環境を保全する中からは、「気候変動に具体的な対策を」が7班という結果になりました。子どもたちの未来とこれからの自分の行動を一緒に考えることで、保育者としての進路選択につなげる姿が伺えました。全体で見ると、90枚の(目標)の内、基本的な生活を維持するための目標から41枚(45%)、生活の質を向上させるための目標から31枚(34%)、地球環境を保全す

するための目標から 18 枚 (20%) となりました。

班での発表を通し、「新しい視点からの見方に気付けた。」「意外とみんなが大切に思っていることはバラバラで、いろいろな意見があり、面白かった。」という感想からは多様な視点に気づいたこと、さらに「班によって 9 つのカードの順位が違った。自分ではこれが大切と思ったが、他班の説明を聞いて、納得した。」「自分とは違う環境で育った人、考え方が違う人など様々な人を受け入れる姿勢が大切だと思う」などからは、多様性を受け入れる姿勢が伺えました。

同時に、現在の世界各地での環境破壊や気候変動の状況から考えると、「自分のことだけではなく、次世代のことや、生態系等すべての命のことを考えて行動し、地球規模レベルの問題を解決していくことが大切である」こと、そして、「募金・水や電気を大切にする・ゴミを減らすなど、自分のできそうなことからやってみようと思う」「未来の子どもがよりよく過ごすためには、今の私たちが行動すべきだ」など、行動へとつなげていく感想が多くありました。

学校での学びがリアルな社会とつながったときに、生徒たちは創造性を発揮し、自ら学ぶ力を付けていきます。この実践を通し、SDGs が生徒の興味関心と社会課題をつなぐものとなったと感じています。

## 4. おわりに

1994 年男女共通必修家庭科が全面実施となってから 26 年になります。男女が互いに尊重し、性別にとらわれずに個性と能力を發揮することができる社会の実現を目指し教育実践を行ってきました。今でも「調理」「裁縫」の技術習得というイメージを強く持たれることもありますが、本来の家庭科は、1999 年「男女共同参画社会基本法」が公布されたように、男女共同参画社会の実現に向けて、生活を基盤にししながら、生活を科学的に捉え、実生活に生かしていくことを目標としています。そのために、授業時数の 1/2 の時間を実習（話し合い等も含む）にする教科であるという特徴を生かし、これまでも、“社会とのかかわり”を意識しながら、積極的にアクティブラーニングにも取り組んできました。他教科や外部団体（企業や NGO・NPO）との連携もしやすく、各自が自分の行動につなげることができる、まさに「持続可能な社会の創り手」を担う教科であると自負しています。

しかし、家庭基礎 2 単位を履修させる学校が増える中、本校も同様に 2 単位となり、今後どのように授業を充実させていくことができるかが課題としてあります。アクティブラーニングを行う目的を明示し、“話し合いを

行う”ということだけではなく、実生活につなげていくための仕掛け（教材選び）が、今まで以上に大切になります。「どのように社会・世界と関わっていくか」という視点を大切に、来年度から始まる総合探究の時間や IB 教育の内容、そして、他教科との連携も含めて、多くの可能性を模索したいと考えています。

今回の教育実践は、中学校・高等学校ともに、SDGs の 17 の目標と絡めながら組み立てました。

生徒の感想や取り組む姿勢からも実感しましたが、社会や誰かのためになると思うことで、生徒の学ぶ意欲は一気に上がります。社会も自分の人生も、誰かが変えてくれるわけではありません。家庭科の授業を通して、生徒たちには、自ら行動を起こして、未来を変えていくことの大切さを学び、自分らしく生きる道を見つけて欲しいと思っています。

女性の自主自律を建学の精神としている家政大学の中で学べることを誇り思い、社会や自分の将来につなげていける機会をたくさん与えていくことによって、“自立とキャリア形成（自立に向けた進路選択）”につながる教育を実践していきたいと思っています。

# 「家庭内の男女共同参画のあり方」プロジェクト

守屋 眞二／野々村 宜政／仲谷 ちはる

## 1. 題目

「次世代に向けた男女共同参画家庭創出のためのジェンダー教育—性別役割分業的職業観による家事・育児からの脱却—」

## 2. 研究計画

### 2-1 研究の背景と目的

本研究は、専業主夫としての生活体験からジェンダー観に基づく性別役割分業という個人および社会全体に通底している常識が大きなバイアスであると強く認識したことによる。それまでも、大学院時代にジェンダー教育に関しても学び、ある程度は理解していたつもりであったが、実体験による現実、机上での認識を超えた個人の尊厳に関わる問題であった。

昔話に出てくる「お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に」というフレーズは男が稼ぎ手であり、女は家事を担うという性別役割分業的職業観に基づいており、その認識は21世紀の今においても払拭されてはいない。男女雇用機会均等法（1986）や男女共同参画基本法（1999）が施行されて久しいが、法律が目指した社会の実現には至らず、多くの課題が存在する。

また、昨今は若年層を中心に「イクメン」などの新語が登場するほど、男性の育児や家事への参加が進んでいくとも言われる。しかし、そうした理解ある男性の意識下にも育児や家事に対して「手伝う」という性別役割分業的職業観に支えられた根深い意識が横たわっている可能性も否定できない。

真のジェンダーフリー社会を構築するためには、制度や法律の整備だけでなく、市民一人ひとりの意識下にまでジェンダーフリーを浸透させる必要がある。その為の教育プログラムイベント等の実施および参加者の意識変容を調査することで、性別役割分業的職業観から女性が解放され、男性に「手伝う」から「自分の役割」としての主体的な家事育児への取り組みを促すことで、将来世

代の男女共同参画家庭創出の支援につながれば、その意義は小さくないと考える。

## 3. 2017年度（初年度）活動概要

活動初年度は、21世紀の現代においても社会に通底している性別役割分業的職業観を払拭させるため、広く一般市民を対象としたジェンダー問題を考える場として、専門家による講演会と落語会を併せたイベントを開催した。

### (1) 講演会 「家事育児は誰の役割？—ジェンダーの本質を考える—」

講師：立教大学大学院教授 萩原 なつ子 先生

講演会は、始まると直ぐに1枚の写真がスクリーンに映し出された。講師の萩原先生は「これはどこでしょう？」といきなり会場に問いかけた。写真には1匹のサルが写っていたが、参加者たちは怪訝そうに顔を見合わせ、質問の意図をはかりかねている様子だった。一瞬の間において「動物園」との声が会場から発せられた。

「それでは、この動物園はどこでしょう？」参加者へ向けて矢継ぎ早に質問が出される。今度は参加者の中に入り、一人ずつ質問をしていく。何人目かに「シンガポール動物園」という正解が出される。参加者は何が始まっているのか、一様に良く分からないといった顔をしている。

「では、皆さんの知っている動物園のサルはどこにいますか？」との先生の問いかけに、「檻の中」と今度は直ぐに参加者から声が上がった。段々と参加者も先生のペースに慣れてきたようだ。

「普通は檻の中ですね。でも、檻の中の動物たちは幸せなのではないでしょうか？」と重ねて問いかける。説明によれば、シンガポール動物園は動物の視点で運営されており、檻は存在しないようだ。日本にも旭山動物園が、自然に近い環境による動物の行動展示を行っていることは良く

知られているが、当初は大きな反対があったという。

「動物は『檻の中』にいるもの」という固定観念に縛られている人間が多い為、反対が生じてしまう。つまり、私たちは『普通』という名の『固定観念』に無意識で囚われているため、発想や行動が窮屈になってしまっており、そこから解放される必要があるのです」と先生は参加者へ語りかける。

「では、これは何でしょう？」またしても、1枚の写真が映し出され、参加者への質問が出された。スクリーンには白い虎が映し出されている。「トラ」と元気よく返事する子どもに続き、「ホワイトタイガー」との答えも返ってきた。

すぐさま、正解は「トラ」だと会場に告げた後、なぜ「ホワイトタイガー」と思うのかを先生は会場の参加者に問いかける。ここでも、トラの体は「黄色に黒い縞模様である」という「固定観念」に囚われている為、白い虎は「普通」ではなく「ホワイトタイガー」という言葉に繋がってくる。「固定観念」から解放され「多様性」を理解することが重要であると先生は訴える。

「多様性」とは、「こうあらねばならない」「こうあるべきだ」という常識から解放されることから始まるようだ。つまり、「女性が家事・育児をやるべきだ」という「固定観念」から解放されることで、多様性が生まれ、家庭内の男女共同参画も実現するということなのであろう。先生の話に会場の参加者は皆、頷きながら真剣に耳を傾けている。



続いて、さらに写真がスクリーンに写し出された。「この写真は、何でしょう？」再び、先生は会場に向かって問いかけた。「ゾウさん」という子どもの声につられて、他の参加者からも「ゾウ」という声がチラホラと聞こえた。萩原先生は「では、皆さん。ぞうさんの歌は知っていますね。皆で歌ってみましょう」と言うと、真っ先に歌いだした。それに続いて、参加者も歌い出し、「ぞうさん」の大合唱となった。歌い終わるとすぐさま、先生は会場に向かって質問する。「この歌の意味を知ってい

る人はいますか？」会場からは手が上がらない。「この歌は、まど・みちおさんが作った歌ですが、実は『人権』を歌っているのです」

この歌は、他の動物たちから「鼻が長い」とからかわれている子ゾウが「大好きなお母さんも長いのよ」と明るく返し、自分の鼻に誇りさえ持っている様子を描いているという。萩原先生は続けて「鼻が長かろうが、短かろうが、関係ない。皆がそれぞれ違って良いのです。まど・みちおさんと同郷の金子みすずの詩『私と小鳥と鈴と』に出てくる有名なフレーズ『みんな違ってみんな良い』と全く同じです。そして、これこそが『多様性』なのです」と参加者全員に視線を向けて優しく語りかける。

「多様性」とは、お互いの違いを認め合い、皆がそれぞれに「自分らしく」生きられることであり、男女共同参画の基本も多様性にあるのだ。ジェンダーの問題は、決して女性だけの問題ではない。性別や世代や人種など様々な違いを「固定観念」で決めつけるのではなく、「多様性」の視点で捉え直し、人それぞれの生き方・考え方を否定しないことが重要なのである。一人ひとりが自分の意志で役割を選択できる社会こそが、ジェンダーフリーの社会であり、男女共同参画が実現した社会なのであろう。

萩原先生は、人口減少問題にも言及された。女性が子どもを産みやすくするために社会はどうあるべきか。先生は23区で唯一「消滅可能性都市」とされた豊島区から依頼され、区内から子育て世代を中心とした若い女性を集めて立ち上げた「F1会議」を主導し、様々な政策提言をされている。その経験から女性の視点の重要性を行政はもっと認識すべきだと言われる。8割が共働きの現在、かつてのように男性だけの収入で暮らすことは困難である。しかし、先生によれば、20代女性が結婚相手に求める年収は520万円だが、20代男性が結婚相手に求める年収は220万円であり、まだまだ「一家の大黒柱は男性である」との認識が強いらしい。もっと、女性の視点で考え、女性が活躍できる環境を整えることで、女性が子どもを産みやすくなるだけでなく、男性にとっても「一家の大黒柱」というプレッシャーから解放され、女性にとっても男性にとっても優しい社会に変えることができるのではないだろうか。

次に、100人の男子大学生が参加した会で講演をされた時の話になったが、「専業主夫」になりたい男子大学生が驚くことに8割もいたそうである。将来の選択肢の一つに「専業主夫」を加えたいという本音が彼らの中にはあるようだ。確かに若い世代の感覚は変わりつつあるのだろう。しかし、一方で「一家の大黒柱にならなければ」というプレッシャーを受けているのも事実なので


ある。

先生は続けて、男子大学生がなりたいたいという「専業主婦（主夫）」についての問題を提起された。専業主婦（主夫）は、アンペイドワークと呼ばれ、お金が支払われない仕事である。「男女共同参画」においては、お金が支払われる仕事ばかりが問題とされるが、アンペイドワークである「家事」「育児」そして「介護」などの家庭内労働の問題を是正しなければ「男女共同参画」は実現しない。総務省による直近の発表（2017年10月）によれば、女性のお金が支払われる仕事と支払われない仕事の労働時間がともに増えているようだ。

働き方改革によって長時間労働が減ったとしても、女性のアンペイドワークの負担が増すばかりでは、何の為の働き方改革かわからない。働き方改革を意義あるものにするためにも男性の家事・育児への参画を促進する必要がある。

最後に、萩原先生はある替え歌を披露された。この替え歌は、かつて樋口先生が介護保険制度を確立するため、そして広くその意義を社会に訴えるために作られたそうである。萩原先生は、またも美声で替え歌を歌い始め、参加者も途中から一緒に歌い、最後は会場全体で大合唱となった。

歌で語るジェンダー問題 元祖は樋口恵子先生！	
あなた負担はいやですか 日毎 手足が弱ります 来てはもらえぬヘルパー おむつめらして 待ってます 公的介護は灯でしょうか 介護恋しい 日本の老い	あなた生きてもいいですか 長生きしてもいいですか 家族頼みの 介護では 老いのこころは晴れません 政治の世界に届くでしょうか 老いて不安な国民の声 替え歌作詞：樋口恵子先生



樋口先生の替え歌が発端になり、その後ジェンダー問題を替え歌にして、女性の悲しみ・苦しみを訴える活動が全国に広がったそうである。樋口先生の替え歌以外にも何篇か紹介され、全員で歌い、大いに盛り上がったまま講演は幕を下ろしたが、その歌詞に込められた悲しき、淋しきは参加者の心に深く響いていたのではないだろうか。

自らを「歌う研究者」と称される萩原先生の講演は終始笑いに包まれながらも、ジェンダーの問題を多様性の視点から分かりやすく説明された内容であった。家事・育児等の家庭内労働は女性だけの役割ではなく、男性の役割でもあり、家族全員で果たすものである。ジェンダーの問題とは決して「男女間」の問題ではなく、人が「自分らしく生きる」ために解決しなければならない問題である、ということが参加者にも十分に伝わった講演であった。

## (2) 落語会

演者：古今亭菊千代師匠

次の落語会では、初の女性真打となった古今亭菊千代師匠に、弟子入りの際のエピソードや男社会の中での苦労話をジェンダーの視点からユーモラスに語って頂いた。その後は落語（既火事）が披露され、聴衆はその巧みな話芸に聞き入っていた。



## (3) 鼎談

鼎談では、樋口恵子所長にも加わって頂き、活発な意見が交換された。まず、樋口先生は話の冒頭で「家事・育児・介護という人間にとって絶対に必要なことをテーマにしたイベントが、こんなに面白いものになるとは思ってもみなかった」と話され、会場からも笑い声とともに大きな拍手が湧き起った。

樋口先生は「人生100年時代が到来し、介護は皆の問題となった。先ほどの替え歌は、介護の社会化の必要性を感じ、介護保険制度を確立するために作ったものだ」と話された。驚いたことに、ホームヘルパーは1960年代に労働省の政策課題になっていたそうである。海外のホームヘルパー制度を日本に持ち込むことで、女性の雇用上の不平等を解消する狙いがあったとのことだ。女性差別撤廃条約批准へ向けた動きの中で考えられていたそうである。

続いて、主婦の仕事の大変さについて意見が交わされた。樋口先生によれば、海外に比べて食器・什器の標準化が日本では進んでおらず、その為家事が煩雑になっており、男性にしてもヘルパーにしても家事をいきなりやるのが難しいのだ。

さらに、萩原先生の指摘は「和・洋・中」等、食事メニューが日本は外国に比べて極めて多く、家事のし過ぎがストレスを生み、主婦を苦しめているとのことである。





続いて樋口先生は、日本で男女の役割が固定化したのは「家父長制」の下、性別役割分業的職業観に基づく役割分担で高度経済成長を生み、成功したことが大きな要因であるとの見解を示された。加えて、「学校教育に『技術・家庭』が導入され、国家によって男女の役割が固定化されたのだ」と鋭く指摘をされた。「現在では、(女性差別撤廃条約により)家庭科が男女共修となり、イクメンと言われる若い男性も増えた。最近、良く見かけるベビーカーを押している若い男性は家庭科男女共修化の産物なのです」と樋口先生は笑顔を参加者に向けられた。

萩原先生は経験談として、新卒で就職した某広告代理店の話をされたのだが、その会社では男性が皆、深夜までの残業の為、会社で寝泊まりしており、「男性も自分らしく生きられてはいない」と実感されたそうだ。古今亭菊千代師匠も新卒で就職したのが広告代理店であり、女性の不利益・生きづらさを感じるとともに、男性の辛さも目にされたそうである。やはり、男女の役割の固定化は女性だけでなく、男性も苦しめているのだ。

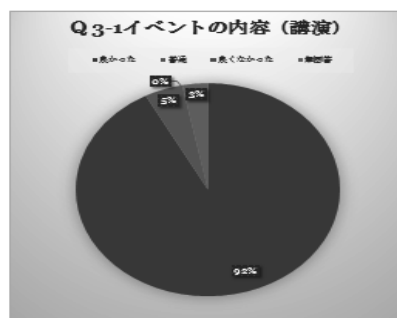
最後に、樋口先生は「ジェンダー問題を解決するために、女性の不平等を改善する制度が生まれ、それによって女性だけでなく男性の意識も変わり、皆の意識が変わることで、また新たな制度が生まれていく。こうして社会は変わっていくのです」と述べられた。こうした循環がより良い社会を形成していくとの共通認識が確認されたところで、鼎談は締めくくられた。

#### (4) アンケート結果

本イベントでは、参加者へのアンケート調査を行い、83名の参加者中、63名の方にアンケートに回答していただいた(回収率75.9%)。その内、50名の方に自由記述をしていただいた(回答率79.4%)。

イベント内容ごとの集計は以下の通りである。

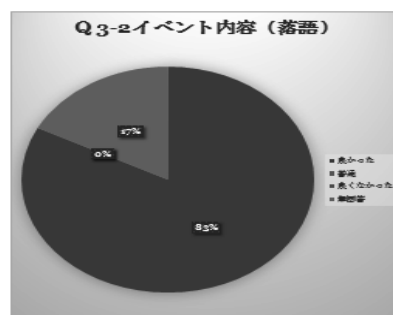
#### ①講演会



a	良かった	50
b	普通	3
c	良くなかった	0
	無回答	2

講演の評価では、92%もの人が「良かった」と答えており、満足度が非常に高かったことが分かる。一方的に話すのではなく、常に参加者に問いかけ、さらには一緒に歌うなど、参加者と一体になった動きのある講演に参加者は大いに満足したようである。

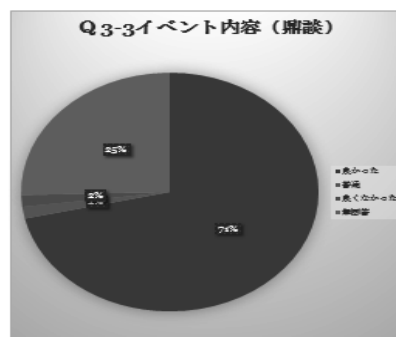
#### ②落語会



a	良かった	55
b	普通	0
c	良くなかった	0
	無回答	0

落語についても83%の方が「良かった」という評価であった。落語を初めて聞いたという参加者もいたようで、ジェンダーの講演会とセットにしたことで興味を持ってくれた方もいたと思われる。

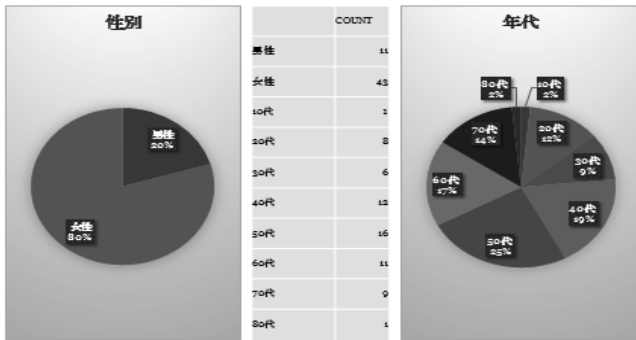
#### ③鼎談



a	良かった	45
b	普通	1
c	良くなかった	1
	無回答	16

鼎談では、71%の方が「良かった」と答えてくれている。自由記述では「多様性を取り入れたイベントで、最後に鼎談で纏めたことに納得です」というコメントもあった。

#### ④参加者属性（性別・年代）



当日の参加者は年代別比率では10代・20代から80代まで幅広く参加していただいた。性別では8割が女性であり、男性は2割と少ないのが特徴であり、男性のジェンダーに対する意識を向上させる必要性を強く感じる結果となった。自由記述からは、「夫へ家事をお願いする事に罪悪感がなくなり、気が楽になった」、「男と女の役割を分けて考えていたが、考え方を見つめ直したい」、「男性が家事を『手伝う』という意識が違うのだなと感じた」等々、『家事・育児は誰の役割?』という今回のテーマに対する答えをしっかりと見つけてくれていることが分かり、開催した者として強い手応えを感じた。

以上が、本プロジェクトが活動初年度に企画・運営したイベントの報告であるが、今回の経験を踏まえて、次年度以降も家庭内の男女共同参画の普及・促進をプロジェクトの重要な目標と位置づけ、研究活動を続けていく。

## 4. 2018年度（2年目）活動概要

男女共同参画社会を実現する上で、これからの社会を担う若者がジェンダーに関してどのような意識を持っているのかを知ることは重要である。そこで、2年目の活動として大学生を対象とした意識調査を基に「ジェンダー教育による意識変容の可能性」について検証した。

### (1) 実施目的

性別役割分業的職業観に関する若者への意識調査を実施するとともに、ジェンダー教育の有効性を検証することを目的とする。

### (2) 実施対象

- 調査対象は下記の通りである。
- ・都内共学大学人文系学部1年生 95名
  - 男性 44名、女性 48名
  - ※ジェンダーレス1名、無回答2名

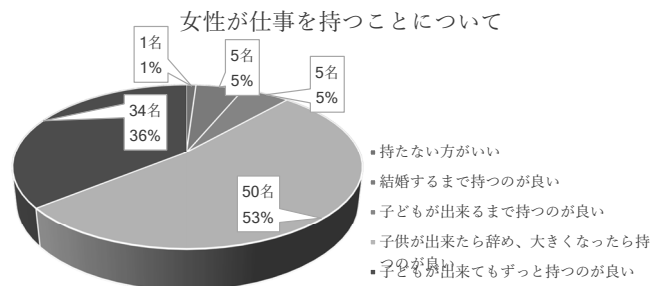
### (3) 実施方法

受講前に三つの大設問及び二つの小設問に回答した後に、ジェンダーに関する授業を実施し、その後の意識変容について回答を求めた。

### (4) 意識調査の内容と結果

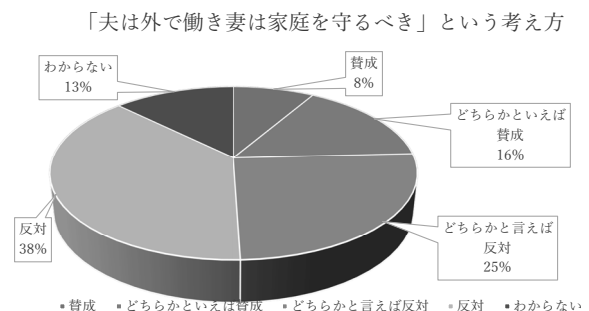
まず、ジェンダーに関する講義を受ける前の意識調査の内容（設問）と結果は次の通りである。

#### (Q1) 女性が職業を持つことについて、あなたはどのように思いますか？



「子どもが出来てもずっと持つのが良い」も2番目に多かったが（36%）、「子どもが出来たら辞め、大きくなったら持つのが良い」という回答（53%）をはじめ、仕事よりも家事・育児を優先する意見が64%に上り、子育てのために仕事を辞めるという典型的なM字曲線が今後も続いていくことが予想される結果となった。

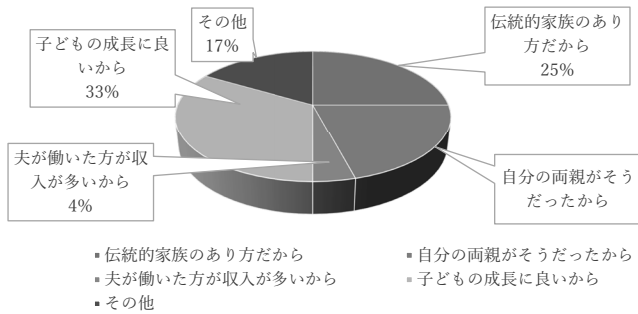
#### (Q2) 「夫は外で働き妻は家庭を守るべき」という考え方についてどう思いますか？



Q1で、子どもの為に仕事を辞めるという回答が多かったが、Q2では63%が「性別役割分業的職業観」に反対している。女性も仕事を持って社会進出すべきとの意識はあるが、一方で子どもの為には仕事をあきらめることも止むを得ないと認識もあると考えられ、育児と仕事がトレードオフの関係にあることが分かる。

### (Q2-1) それはなぜですか？

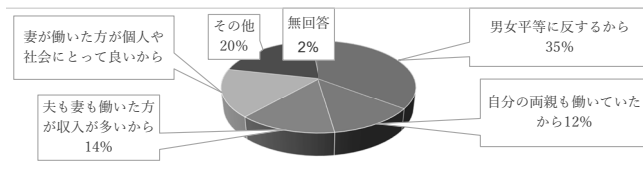
※ Q2 で①②と回答した人への質問



Q2で「夫は外で働き妻は家庭を守るべき」という性別役割分業的職業観に肯定的だった学生（24%）に対して、その理由を聞いてみると「子どもの成長に良いから」（33%）や「伝統的家族のあり方だから」（25%）、「自分の両親がそうだったから」（21%）など多くが両親や周囲の大人たちからの影響により、ジェンダーバイアスがかかっていると推測される。

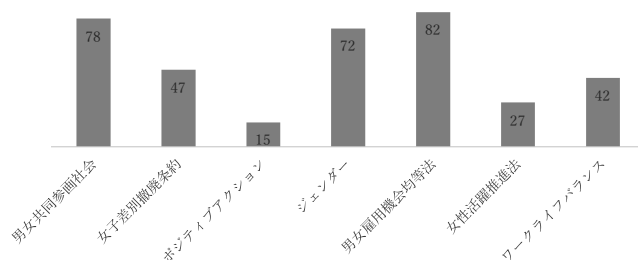
### (Q2-2) それはなぜですか？

※ Q2 で③④と回答した人への質問



Q2で「夫は外で働き妻は家庭を守るべき」という性別役割分業的職業観に否定的だった学生（63%）に対して、その理由を聞いてみると「男女平等に反するから」（35%）、「妻が働いた方が個人や社会にとって良いから」（17%）と半数以上が男女共同参画社会を望ましいと考えていることが分かった。また、「夫婦で働いた方が収入が多いから」という現実な理由を挙げた者（14%）やそれと同程度（12%）「両親も働いていたから」という者もあり、やはり両親の影響が少なからず存在する。

(Q-3) あなたが見たり聞いたりしたことがあるものを全てあげてください。



Q3では、男女共同参画に関連するワードを学生たちがどの程度知っているかを聞いてみたが、最も知られていたのが「男女雇用機会均等法」（82名）であった。やはり「就職」に関係するワードは身近であり、認知度も高いようである。次に「男女共同参画社会」（78名）、「ジェンダー」（72名）と続くが、「ワークライフバランス」（42名）を知っている者が半数にも満たなかったのは意外であった。

### (5) 受講後の意識変容

意識調査後にジェンダーに関する講義を行い、受講した学生の意識にどのような変化が生じたかをアンケートによって調査した。

その結果、以下のような事象が確認できた。

#### ①意識変容が確認できたか？

受講前のアンケート（Q2）で、「性別役割分業的職業観」に肯定的だった23名の学生のうち、17名（73.9%）が「性別役割分業的職業観」に対し、否定的になった。つまり、ジェンダー教育によって意識変容が生じる可能性は高いという結果を得ることができた。

#### ②男女によって意識変容の差がみられたか？

次に男女によって、ジェンダー教育の有効性に差異があるかどうかを調べるために「性別役割分業的職業観」に肯定的だった23名と意識変容を確認した17名について性別を調べることにした。

まず、男性は「性別役割分業的職業観」に肯定的だった12名の内、7名（58.3%）に意識変容が見られた。それに対し、女性は11名の内、10名（90.9%）に意識変容が生じており、男性より意識変容が生じている割合がかなり高いといえる。

#### ③受講後の自由記述の意見

受講後の意識調査で95名中、92名（96.8%）が自由記述に回答している。主な回答を以下に列挙する。

- ・「自分らしく、その人らしく」を大事にしたいと思った。
- ・男女は平等なので「男だから」とか「女だから」とかはなくしていくべきだと思う。
- ・「男は働いて、女は家事」などの固定観念に縛られるのは良くないと感じました。
- ・すべての人が関心を持たないと解決できない問題だと認識できました。「一家二柱」という考え方が凄くしっくりきました。
- ・LGBT問題に興味があったのでジェンダーのことは少しは考えていたつもりでしたが、女性だけの問題だと思っていた。しかし、男性の問題でもあると分かった。

## (6) おわりに

今回の調査だけではサンプル数が少ないため、明確とまでは言えないが、女性の方が意識変容を生じやすく、男性の方が意識変容しにくいという結果となった。おそらく、男性の方が女性よりもジェンダーバイアスの影響を受けているため、意識変容が阻害されていると推測される。

今後、家庭内の男女共同参画を進め、真の男女共同参画社会を構築するためには、市民一人ひとりの意識を「性別役割分業的職業観」から脱却させる必要がある。今回の意識調査では、ジェンダー教育が有効であると思われる結果となったが、特に男性へのジェンダー教育が今後の大きな課題であると考えられる。

また、若い世代での意識変容の可能性は大きいことが分かったが、アンケートにもあったように親世代が「性別役割分業的職業観」に縛られている実態があり、その意識を変えていく必要がある。

今後は親世代の意識調査の実施と意識変容の可能性も併せて研究していきたい。

## 5. 2019年度（3年目）活動概要

最終年では、研究者の介護実践をベースに「超高齢社会における介護のあり方」、そして「持続可能な介護のあり方」について考察した。

### (1) 研究の背景

高齢の両親を介護するために毎週木曜の夜から日曜まで実家の岡山（倉敷市）まで遠距離介護に通っている。退職して介護に専念するのではなく、働き「ながら」家族と「トモニ」遠距離介護という道を選択したが、男性による持続可能性をもった介護であるためには何が必要なのかを実践を通して考察してみたい。

### (2) 研究の意義・目的

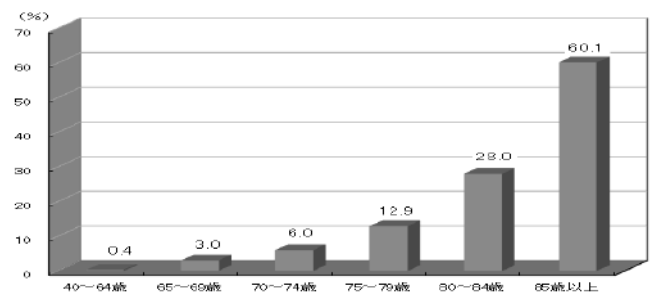
家庭内労働（アンペイドワーク）の中でも今後の比重が益々増大するであろう介護に対し、自らの実践を通して男性が介護に関わる意義と持続可能な介護の在り方を考えてみたい。

### (3) 介護を必要とする人の割合

長寿社会においては「介護」は誰にでも起こりうる問題である。要介護者の発生率は、40～64歳では0.4%、65～69歳では3.0%だが、加齢とともに急速に高まり、80～84歳では28.0%、85歳以上では60.1%となっている（図1）。

言い換えれば、長寿になればなるほど要介護者が増加し、介護期間も長くなることになる。今や、「介護」は国民全員の問題として考えるべき重要課題といえる。

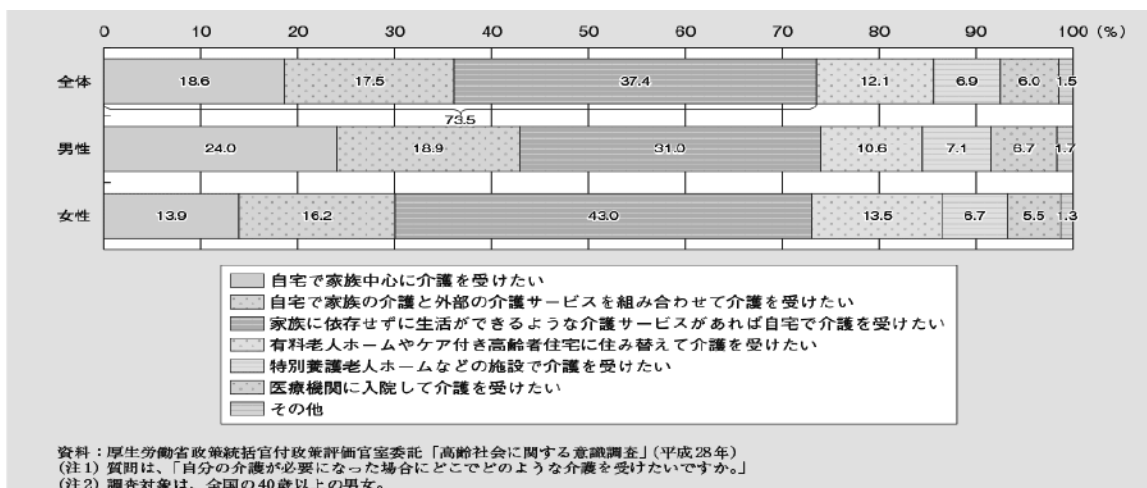
【図1】 介護が必要な人の割合



### (4) 自宅で介護を受けたい人の割合

何らかの形で自宅での介護を希望する人の割合は、全体で73.5%にのぼるが、男性は「自宅で家族中心に介護を受けたい」と回答した割合が24.0%と女性の13.9%より10.1%も高い（図2）。男性の方が保守的で

【図2】 どこでどのような介護を受けたいか

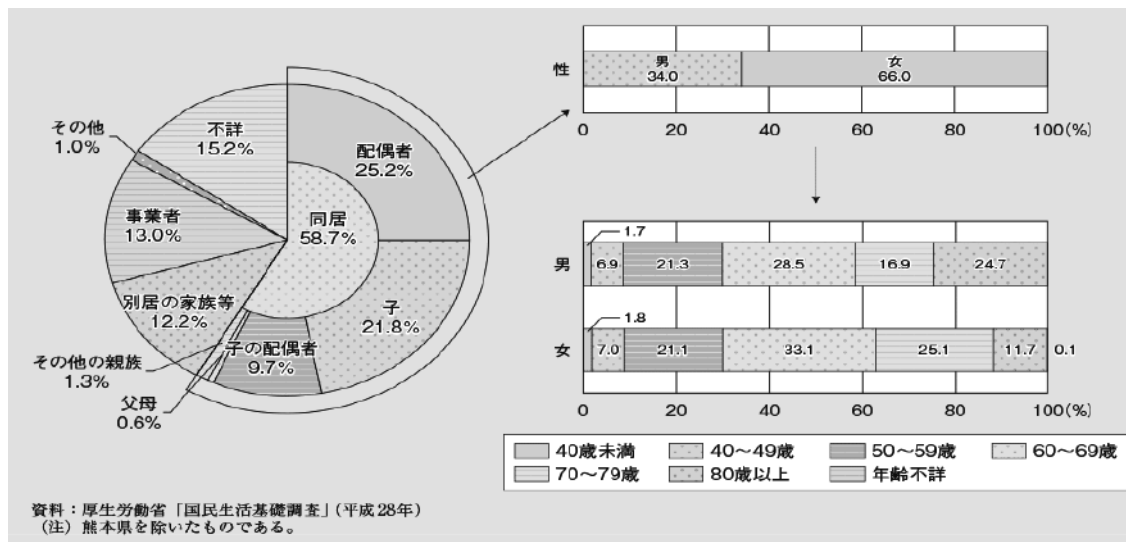


あり、女性が家庭内で介護を行うべきという「性別役割分業」の意識が根底にあるのではないか。

### (5) 介護者の続柄と男女比（男性介護者が三分の一超）

要介護者から見た主な介護者の続柄は、6割弱が同居している家族等であり、その内訳は、配偶者が25.2%、子が21.8%、子の配偶者が9.7%となっている。また、性別については男性が34.0%、女性が66.0%と女性の方が多いが、男性も3割を超えていることに驚かされるとともに、男性にとっても他人事ではなくなっている現状が浮かんでくる。また、同居している主な介護者の年齢は、男性が70.1%、女性では69.9%が60歳以上であり、いわゆる「老老介護」のケースも相当数存在していると思われる（図3）。

【図3】 要介護者からみた主な介護者の続柄



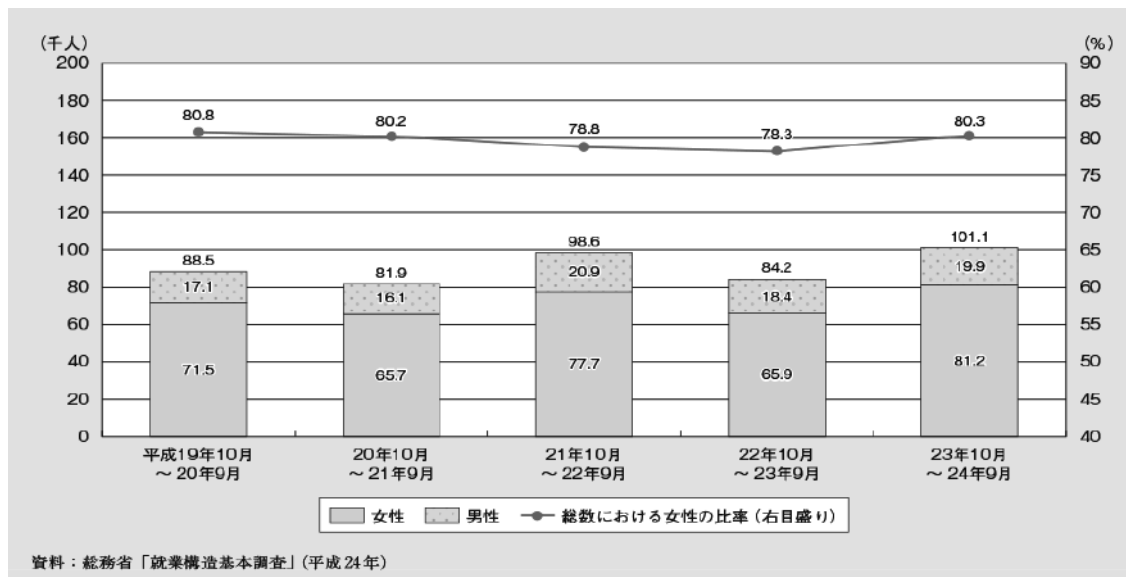
### (6) 介護や看護の理由により離職する人は女性が多い

家族の介護や看護を理由とした離職者数は平成23年10月から平成24年9月の1年間で101.1千人であったが、女性の離職者数が81.2千人であり、全体の80.3%を占めている（図4）。このことは「女性は仕事を辞めても良い」あるいは「仕事を辞めるべき」という性別役割分業的職業観が社会全体に通底していることによるものと考えられる。

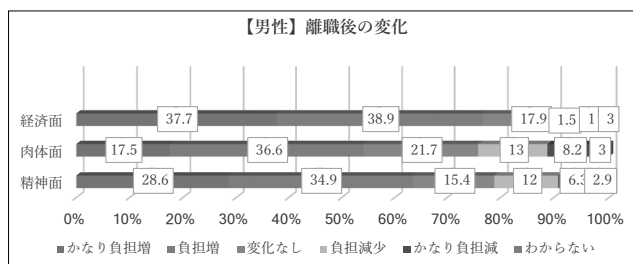
### (7) 介護による離職後の変化

介護を機に離職した場合、「経済面」・「肉体面」・「精神面」での負担増が大きな問題となるが、男女別に負担を感じる面にどのような違いがあるのだろうか。男性は「経済面」での負担を最も多く感じていることがわかる。

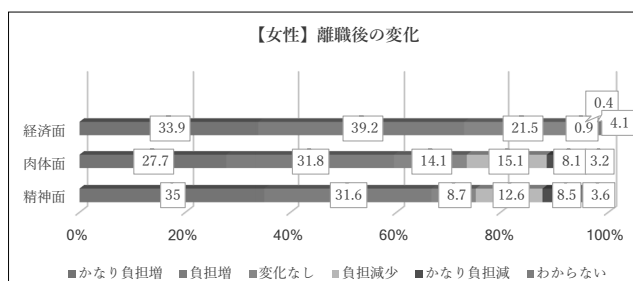
【図4】 介護や看護の理由により離職する人は女性が多い



これも「性別役割分業的職業観」に基づく意識が顕在化していると考えられる。



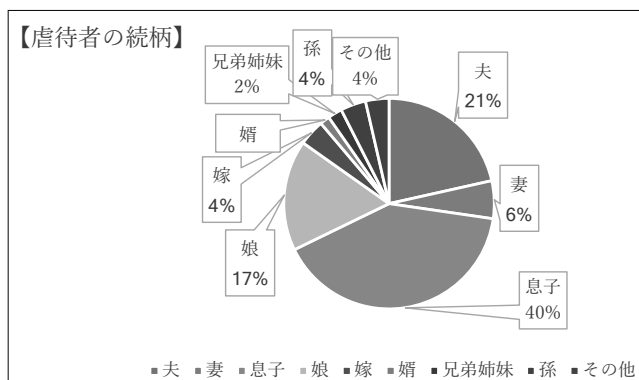
女性が介護を機に仕事を辞めた場合は、男性と異なり精神面が最も大きな負担となっている。社会との関係性が希薄になることが最も大きなストレスになっていると思われる。



男性の「経済面」、女性の「精神面」。両方の負担（ストレス）は仕事を続けることで解消される。持続可能な介護とは「仕事を続けながら介護を行うこと」（樋口，2017,P）であろう。

### (8) 虐待者の続柄

仕事を辞め、それまでの社会との関係性がなくなることによってストレスが大きくなり、そのことが介護虐待に繋がることがある。下図の通り、息子（40%）と夫（21%）で虐待の6割を占めていることから、男性は家事に慣れていない為のストレスが加わることもあり、女性よりも虐待に向かう可能性が高いと考えられる。介護虐待を防ぐ為にも男性は炊事・洗濯等の家事ができるようになるべきである。本プロジェクトが目指す「家庭内の男女



共同参画の推進」は持続可能な介護においても有益なものとする。

### (9) まとめ

介護は、経済面・肉体面・精神面のすべてで大きな負担となり、厳しい状況に追い込まれることを認識する必要がある。さらに、男性が介護を行う場合、「性別役割分業的職業観」が阻害要因になっている面があり、ジェンダー意識の改革を進めることが介護の持続可能性を高めると考えられる。以下に持続可能な介護に必要と思われる4つのポイントを挙げる。

#### ① 「性別役割分業的職業観」を払拭する（ジェンダー教育）

- ・家庭内労働（家事、育児、介護）は女性がやるべきものという固定観念を捨て去り、男性も「介護」について、当事者意識を持つ必要がある。

#### ②ながら介護（自助）

- ・仕事を辞めると「経済面」でも「精神面」でも大きなストレスとなる為、仕事を続けながら介護に挑戦すべき。
- ・仕事を辞めると社会保険（公助）の原資不足に拍車をかけることにもなる。

#### ③トモニ介護（共助）

- ・介護に関わる負担や悩みを一人で抱え込まない。
- ・夫婦、兄弟姉妹、親戚、ご近所等あらゆる人たちの連携でトモニ介護を。

#### ④公的支援を利用（公助）

- ・ソーシャルワーカー、ケアマネジャー等専門家に相談し、可能な公的支援を最大限に活用する。

「ながら介護」、「トモニ介護」は樋口恵子先生が提唱する介護の姿であるが、これこそが「持続可能な介護のあり方」である。そして、その本質は「自助」だけに頼らず、「共助」、「公助」を含めた「互助」の精神だと考える。この考えは国連が推進するSDGs（持続可能な開発目標）の「誰一人取り残さない（Leave No One Behind）」という精神と合致している。お互いがお互いを認め合い、誰もが助け、助けられることを自然に受け入れられる社会。それこそが、ジェンダーフリーの社会ではないだろうか。

## 6. さいごに（3年間を振り返って）

「家庭内の男女共同参画のあり方」をテーマに本プロジェクトは研究をスタートさせた。この3年間での活動は前述した通りであるが、予定通りにいかないことも多く、お二人の共同研究者の協力がなければ、本プロジェ

クトは途中で消滅していたかもしれない。まずは、野々村さんと仲谷さんに心より感謝申し上げたい。

特に3年目は私事ながら、両親の介護のために時間が取れず、予定していたNPOとのコラボイベントも実現できなかった。野々村さんが先方との調整役として奔走してくださったにも拘らず、イベントを断念することになってしまったことは慙愧に堪えない。

止むを得ず(?) 取り組んだ「介護」のテーマであったが、樋口恵子先生の著書「その介護離職、お待ちなさい」を読んだことで、自身が遠距離介護を決心し、更には自身の実践を基に文献・資料研究を行い、「持続可能な介護」について考察することができた。結果として、家庭内の3Kと呼ばれる「家事 (Kaji)」「子育て (Kosodate)」「介護 (Kaigo)」のすべてを取り扱うことが出来たのは幸運であり、正に怪我の功名といえる。

樋口先生には研究初年度のイベントでも大変なご尽力を頂いた。先生と旧知であった私の院生時代の恩師である萩原先生とともにイベント開催が出来たことは、この上ない喜びであり、忘れられない思い出となった。更に、先日の公開研究会で遠距離介護の話をさせて頂いた際、先生から直接励ましの言葉を頂き、「何が何でも介護離職はしない」と決意を新たにすることも記憶に新しい。

樋口先生が本年度をもって女性未来研究所の所長を退任されることは、残念極まりないが、健康に留意され、益々活躍されることを心より願いながら筆をおくこととする。

# 健康寿命の延伸を目指した ライフスタイルの提案

## ～地域高齢者を対象とした定期的なフレイル(虚弱)測定 会およびふれあい食事会の実施～

内野 美恵／木元 幸一／清水 順市／澤田 めぐみ／西村 純一／大畑 瞳／田淵 千晶

協力：東京都北区役所健康福祉部長寿支援課

### 【背景および目的】

我が国の平均寿命は男女共に世界最高齢の水準となっているが、人生の後半10年を介護状態で不自由な生活となる人達が多い。健康寿命と平均寿命の差は男性よりも女性の方が長く、平均寿命の長い女性にとってより深刻である。

フレイルとは、高齢者が筋力や活動が低下している状態（虚弱）と定義されている（日本老年医学会）。フレイルを自覚し、その時点から要介護に陥るまでの期間をできるだけ延ばすか、またはフレイルから挽回してより健康体へ戻すためのとりくみが重要となる。健康寿命延伸のための介護予防の取り組みをより効果的なものとするために、高齢者の筋力や生活活動などを定期的に測定し、フレイルの実態把握と現状の自覚がフレイル予防に有効に作用するかを検証する。

### 活動内容

東京都北区在住の65歳以上の高齢者で北区ふれあい食事会\*（東京家政大学会場またはダイニング街なか会場）への参加者87名に本研究の主旨を口頭及び文書で説明し、文書で同意の得られた73名を対象に、厚生労働省がCHS基準を日本版に修正したJ-CHS基準を改変した独自の評価項目を用いたフレイル測定会を、東京家政大学構内にて、年に2回、合計5回開催した。参加者は、フレイル測定後、本取り組みが主催するふれあい食事会に参加した。

2017年9月の初回測定では38人が参加し、2回目の2018年2月には30人、3回目の2018年7月には新年度の新規参加者19人を含む42人、2018年12月には38人、2019年6月には同じく新年度の新規参加者16人を含む50人について測定を実施した。

全5回の測定会に全てに参加した被験者は18人、4回参加は7人、3回参加は11人、2回参加は11人、1回のみ参加は10人（2019年6月新規参加者16名を除く）であった。

フレイルの兆候と推移について、フレイルおよびプレフレイルの発現傾向を分析した。

※東京都北区ふれあい食事会とは

東京都北区在住の介護認定のない65歳以上の方を対象に、20～30名がグループとなり、1年間同じ会場で定期的に食事をする取り組みである。北区の高齢者率は、約25%と都内23区のトップであり、要介護者を増やさないために、高齢者の外出機会を増やし、孤独感の解消や閉じこもりの防止、生きがいづくり等で健康寿命の延伸に役立たせる目的で、平成14年度より実施されている。

本研究で用いたフレイル評価項目と評価基準

評価項目	評価基準
1. 体重減少	「6か月間で2～3kg以上の（意図しない）体重減少がありましたか？」
2. 疲労感	「（ここ2週間）わけもなく疲れたような感じがする」はい・いいえ
3. 身体活動量	「1回30分以上の外出を週に何日していますか？」
4. 握力	利き手の測定で男性26kg未満、女性18kg未満の場合
5. 通常歩行速度	（測定区間の前後に1mの助走路を設け、測定区間定5mの時を計測する）1m/秒未満の場合

\*以上1～5の基本事項に対し、3つ以上該当する場合はフレイル、1～2つ該当する場合はプレフレイル、いずれにも該当しない場合は健康判定とする。3については週5日未満を該当すると判定した。



## フィードバック

毎回測定後約1か月後を目安に、測定結果とフレイル予防に役立つアドバイスシートを郵送にて自宅に送付した。測定結果表およびアドバイスシートについては、本研究用に独自で作成した。(資料参照)

## 活動報告

本研究への参加者の初回測定時では、フレイル判定者は少なかったが、健康判定者よりプレフレイル判定者が多い結果であった。

フレイル測定会に複数回参加した47人では、2回目以降、経時的に健康判定者が増加し、プレフレイル判定者は減少する傾向が認められ、このような定期的な測定会の実施が、高齢者のプレフレイルを改善し進行を遅らせるのに効果的であることが明らかとなった。

身体的フレイルは、加齢とともに進行するが、その進行具合には、可逆性が認められており、本研究においても、測定項目の判定結果には変動が認められた。判定結

果が変動しつつも、参加者の最近の判定結果では、60%が健康維持または健康判定に向かって改善していた。

参加者からは、本測定会について肯定的な声が多く寄せられており、このような行政との協働による地域高齢者への定期的なフレイル測定および食事会の実施は、参加者の健康寿命を延伸しようという意識を啓蒙する機会として、介護予防に貢献できる可能性が示唆される。また、大学の地域貢献事業として、地域住民の本学に対する理解を促すことにも作用している。

今後さらに事例を増やし、得られた知見について公表していきたい。

## 成果のアウトプット

\*平成30年12月1日 香川県高松市

第8回日本リハビリテーション栄養学会 学術集会にてポスター発表

\*今後論文として発表する予定

## フレイル測定会の様子



受付の様子



握力測定



質問表の確認



肺活量測定



# 人生100年時代 女性の歴史を概観する基礎資料としての 年表づくり

樋口 恵子／佐藤 千里

## I 研究プロジェクトの概要

### 1 目的

『人生100年時代』を迎え、広く女性の生き方を考える事業を展開するため、その基礎資料として、明治以降現在に至る日本の近代女性史を年表の形としてまとめ、女性関連の歴史を明確化する。政治・経済・労働の分野のみならず、家政大学の強みを活かして生活史、教育史を充実させたものを作成し、資料として印刷・配布し、今後の本学の教育・研究に資する。

### 2 研究の具体的内容・方法

- (1) すでに発行されている各種の年表を調査し、主な出版物を精査する。
- (2) 家政大学独自の取り組みとなりうる女性の生活史、教育史の部分を、家政大博物館や同窓会の協力を得て作成する。
- (3) 学外の研究所、各種機関の協力を得て、様々な視点を含んだ総合的な歴史記述を試みる。女性未来研究所の特色を生かして、本学にとっての財産となる、家政大ならではの英知と物語り性を結集した網羅的な歴史記録を作成する。

### 3 期待される成果

- (1) 東京家政大学及び女性未来研究所の特色と強みを生かした教育の基礎資料ができる。
- (2) 年表を作る過程において、東京家政大学が日本の女子教育に与えた影響を明らかにし、大学ブランディングに役立てる。
- (3) 年表づくりを切り口として、他大学・学外諸組織と本学・本研究所の連携協力関係を強め、効果をあげる。

## II 研究プロジェクトの実施状況

### 1 プロジェクト実施期間及び体制、スケジュール

実施期間は、平成31（2019）年4月から11月を目途とした。体制としては、本研究所の樋口所長を統括・監修をつとめ、女性史や女性学の知識があり、年表作成の経験のある者を業務担当として置き、各種年表・出版物の調査、年表案の作成、印刷までの諸業務を担当させた。

〈スケジュール〉

4月 体制の検討・整備

5月～6月 各種年表・出版物の調査

7月～8月 年表案の作成

9月～10月 年表入稿、画像の手配、デザイン決定、印刷、校正

11月 年表完成（11月14日所長退任記念講演会において配布）

### 2 年表の内容

#### (1) 年表の時代設定について

今回の年表作成においては、我が国日本が近代国家として歩み始めた明治時代から現在までを対象とする。すなわち明治元年～令和元年（1868～2019年）の151年をまとめる。

#### (2) 年表資料の題名について

はたらく くらす ささえる 自分をのばす

女性の150年 年表—明治・大正・昭和・平成・令和へ—

#### (3) 年表の構成

150年を次表のとおり、7期に分け、わかりやすく見出しをつけた。

	見出し	年代
①	日本の近代国家としてのスタート（明治期）	1871～1910年
②	「職業婦人」と「主婦」の誕生（大正期）	1911～1928年
③	昭和恐慌から戦時（昭和前期）	1929～1945年
④	戦後の改革期（昭和中期1）	1945～1955年
⑤	高度経済成長期（昭和中期2）	1956～1974年
⑥	男女の雇用機会均等、男女共同参画社会の実現に向けて（昭和後期－平成前期）	1975～1999年
⑦	少子高齢社会－暴力の否定とワーク・ライフ・バランスの実現へ（平成後期）	2000～2019年

## 〈各期の概要〉

### ①日本の近代国家としてのスタート（明治期）

「学制」の公布により、6歳以上のすべての男女の義務教育が始まった。さらに高等女学校、女子師範学校、私立の女学校、裁縫・編物などの職業技術を教える学校が次々と設立された。明治14（1881）年に渡邊辰五郎先生が、本学の前身である私塾「和洋裁縫伝習所」を本郷湯島に設立した。

一方、明治政府は、各地に官営の工場を設立し、全国から士族の娘たちを集めて伝習工女を養成し、産業の育成を図った。その後各地につくられた民営の製糸・紡績工場で生産の主力となったのは、主に貧しい農家から集められた10～20代の女性たちであった。また、教育や医療の分野では、専門教育を受けた女性たちが少数ながら専門職のパイオニアとして教師や看護婦、医師などの職に就いた。

この時代、民法により「家」制度が法的に確立し、女性の地位は男性の比べて極めて低く位置づけられた。

### ②「職業婦人」と「主婦」の誕生（大正期）

第一次世界大戦期の急速な経済発展に伴い、都市では企業や官公庁で働く事務員などの需要が高まった。女性も事務員やタイピスト、バスの車掌、電話交換手、商店の店員などの仕事に就くようになった。このような新分野の仕事に就いた女性たちは「職業婦人」と呼ばれた。女性が働くことに対して偏見は根強かったが、一方で周囲から先進的な女性と見られることもあった。

大正デモクラシーの影響下で女性による権利獲得や社会的な地位の向上を目指す動きも盛んになり、『母性保護』や『女性の自立』をめぐって論争が展開された。また女性の教育水準がさらに高まり、創刊された『婦人公論』『主婦之友』などの雑誌を読み、活字文化に親しむ女性も増えてきた。

この頃、都市部の俸給生活者（サラリーマン）の妻として一家をきりもりしている女性を「主婦」と呼ぶようになった。

### ③昭和恐慌から戦時（昭和前期）

昭和5（1930）年に昭和恐慌が発生し、都市も農村も

これまで経験したことのないほどの困窮に陥った。特に農村は大凶作と重なり打撃は大きかった。

昭和12（1937）年の日中戦争の勃発以降、国民の生活は戦時体制へ突入していった。この時期、次々に徴兵されていく男性に代わって、農業や工業をはじめ様々な仕事を女性が担っていった。未婚女性や女子学生までが動員されて労働に携わる一方、総動員体制の下で人口政策として早婚と多産が奨励された。

戦争末期、戦局が厳しさを増し、食糧・物資の不足が深刻となった。空き地に畑を作るなどの有効利用や代用品などの工夫が求められ、生活は厳しかった。

### ④戦後の改革期（昭和中期1）

民主主義国家として新たなスタートを切り、戦後改革が進められる中で、婦人の参政権の実現、男女平等を定めた新憲法の制定、「家」制度を廃止した民法の改正、教育の機会均等、男女共学を定めた教育基本法の制定など女性の権利拡大が図られ、女性の社会進出と地位向上への基本的な条件が整えられた。

女性が初めて選挙権を行使した昭和21（1946）年4月10日の総選挙では、女性79名が立候補し、39名の女性代議士が誕生した。

### ⑤高度経済成長期（昭和中期2）

昭和31（1956）年の『経済白書』で「もはや戦後ではない」と述べられた頃から、日本は急速に高度経済成長期へと移行していった。人々の生活は節約を美德とする生活から消費型生活へと変貌していった。家庭用電化製品が大量に普及し、家計に占める教育費、レジャー費の比率が増大した。

人々は国の経済的発展と個人の生活レベルの向上を求めて、懸命に働いた。女性たちは、学校を卒業すると結婚までの一時期働くことが一般的になった。しかし長く働くケースはまれであり、結婚・出産を機に退職し子育てに専念する「専業主婦」が大半を占めた。

職場や家庭における女性の地位向上に取り組む女性たちや、主婦として地域の政治・教育・平和運動などの活躍に参加する女性たちも現れた。1960年代にアメリカに生まれた「ウーマンリブ運動」は日本にも波及し、若い世代を中心に影響を与え、政策にも反映されていく。

### ⑥男女の雇用機会均等、男女共同参画社会の実現に向けて（昭和後期－平成前期）

昭和50（1975）年を契機に女性の地位向上、男女平等の推進を目指した国際的な潮流はわが国にも大きな影響を与え、職場等様々な分野で男女平等を求める動きが活発となった。昭和55（1980）年の『国際婦人の10年』

中間年世界会議」において我が国が署名を行なった「女子差別撤廃条約」の批准のために、関係省庁は各々の分野で諸条件の整備に努めた。雇用の分野では男女平等の確保のための法的整備について長期にわたり検討が続けられ、昭和60(1985)年に「男女雇用機会均等法」が成立した。同年わが国は「女子差別撤廃条約」を批准した。

「男女雇用機会均等法」が施行されて以降、女性の就業に対する国民一般の意識や企業の取り組みが動き出し、働く女性の雇用環境の整備促進の法的整備が進んだ。平成3(1991)年には「育児休業法」が成立し、平成7(1995)年には「育児・介護休業法」となった。平成11(1999)年には、「男女共同参画社会基本法」が公布・施行された。また、中学、高校での家庭科男女共修も実現した。(中学1993年、高校1994年実施)

### ⑦少子高齢社会－暴力の否定とワーク・ライフ・バランスの実現へ(平成後期)

夫・パートナーからの暴力、性犯罪、売買春、セクシュアル・ハラスメント、ストーカー行為等女性に対する暴力は、女性の人権を著しく侵害するものであり、男女共同参画社会を形成していく上で克服すべき重要な課題である。平成9(1997)年には均等法改正でセクシャルハラスメント防止規定が加えられ、平成13(2001)年には「配偶者暴力防止法(DV防止法)」が成立した。

予想を上回る急速な少子高齢化の進展は、21世紀の国民生活に深刻かつ多大な影響をもたらすものであり、とくに少子化の進展に歯止めをかけるための施策の推進が求められ、平成15(2003)年には「少子化社会対策基本法」「次世代育成支援対策推進法」が公布された。また平成19(2007)年には「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」が策定され、「ワーク・ライフ・バランス」へ向けた動きが活発化した。

人口減少時代に突入した我が国の持続的な成長戦略として、女性活躍推進が位置づけられ、「女性活躍推進法」の制定や育児・介護と仕事の両立支援策が強化された。またセクハラ・マタハラ・パワハラ等の予防・対応、過労死・自殺の増加等を契機に働き方改革に向けた法整備も進められた。

2020年に始まるコロナ禍はきっと人間の生活に大きな爪痕を残していくであろう。その災禍について謙虚に学びつつ、悲劇を悲劇に終わらせない人間の力を、若い世代の皆様方に受け継いでいただきたい。悲劇だからこそ、そこから尊きものを生み出す力、それが人間力ではないだろうか。

## 3 さいごに～女性の150年年表編集後記

人は生まれる時期を選べません。

だから歴史を知って、自分の立ち位置を知る必要があります。

### ・未来をたっぷりと持つあなたへ。

どうぞこの年表から、先輩たちの歩みを知ってください。今のあなたがこれから生きる条件は、すべて歴史の中で人間がつくってきたこと、とくに女の生き方の広がりは女性自身が声を上げてきたことを知ってください。その知識が未来をひらく勇気と元気を支えます。

### ・今、人生の半ばを生きる方へ。

人生100年社会の真っ只中ですね。人生後半の長さを自覚して生きる最初の世代とも言えます。50年単位でみれば、社会は確実に変わります。あきらめないこと、自分を伸ばすこと、人々と力を合わせることを。年表から知ることができます。

### ・人生100年の終盤を生きるあなた、それは私自身でもあります。

戦中戦後の貧苦から立ち上がり、平和と豊かさの証しである人生100年に出会えた幸せ、老いて命は日々新た。つねに生き方を模索し良い伝統の初代となる。この年表を役立ててください。

〈東京家政大学 女性未来研究所 初代所長 樋口恵子 名誉教授〉

### ※参考資料

『渡辺学園の百十周年：学園設立百年から百十年への歩み』渡辺学園、1991

『渡邊辰五郎と今日の教育／女子教育の先駆者 校祖生誕15年記念』渡辺学園、1994

『渡辺学園125年史：現況と歩み／写真でみる現況と戦後60年の歩み』渡辺学園、2006

『緑窓会のあゆみ：緑窓会記念誌』渡辺学園東京家政大学緑窓会、2011

『「女性と仕事の未来館」展示案内 過去から未来へ 働く女性のあゆみ』、(財)女性労働協会、2000

『未来を拓く～労働省女性行政半世紀のあゆみ』労働省女性局監修、(財)女性労働協会、2000

『女性のデータブック～性・からだから政治参加まで』井上輝子・江原由美子／編、有斐閣、1995

『資料集成 現代日本女性の主体形成史 9年表・索引』千野陽一編、ドメス出版、1996

『写真集 女たちの昭和史』『女たちの昭和史』編集委員会編、大月出版、1986

『ドキュメント女の百年』もろさわようこ編、平凡社、1978

『週刊20世紀－女性の100年』朝日クロニクル、朝日新聞社、2000

『年表 昭和・平成史』中村政則・森武磨／編、岩波書店、2012

『昭和・平成家庭史年表』下川歌史編、家庭総合研究所、2001

『明治・大正家庭史年表』下川歌史編、家庭総合研究所、2000

『労働行政史』労働省監修、労働法令協会、1961・1969・1982

『女性展望』(バックナンバー)(公財)市川房枝記念会女性と政治センター

『女性情報』(バックナンバー)パド・ウィメンズ・オフィス

# 渡辺学園アーカイブズ

## 卒業生の声

太田 八重美／木元 幸一／岩井 絹江

創立90周年を期に昭和45年から54年にかけて録音された「卒業生の声」というテープが東京家政大学博物館に保存されている。明治から昭和初期ごろの卒業生が当時の授業内容や寮での生活などについて思い出を語ったもので、これまでの報告書では、その中から辰五郎の教えや人となりを紹介してきたが、今回は当時の学生生活の様子を中心に紹介する。

### 朝の風景

何百人という生徒が学校へ出てきますのに、当時のことでございますから、多くは下駄履きでございます。学校では、下駄が無くなっても困る、間違っても困る。今のロッカーのような設備は考えもつかない時代でございましたから、学校の方でお当番の先生が毎日下足番をしてくださいました。その下足番を辰五郎先生も職員の人としてなさってくださいました。泥だらけの汚い下駄を感謝の意を込めて先生にお渡ししたことも数回ございます。それから雪の降った時など、頭巾をお被りになり、襟巻をお巻きになって、私達のために門前の雪をかいてくださいました。ごあいさつしますと、「どうだ、途中困らなかつたか。」と、おっしゃってくださいました。(明治39年)

朝、登校すると昇降口で先生方から給仕さんまで総出で出席の印を押してくださいました。欠席を大変やかましく仰いました。(大正5年)



校舎(明治32年～大正12年 本郷区東竹町)

### 肩揚げ

肩揚げとは、肩山を中心に前身頃から後ろ身頃にかけて縫いつまむことを言い、成長が早い子供の着物を全体に大きく仕立て、成長に合わせて揚げで調整するという合理的な方法である。肩揚げはまだ成長する存在、子供・半人前を意味する。

ある日の授業中机間巡視の時、先生は一番後の席の私の肩揚げを「もう大人になったのだから」と、ハサミで取ってしまわれました。まだ付けておきたかったのに、その時は18歳でした。(大正12年)

私どもはすべて和服でございましたので、まず先生が「肩揚げを取りなさい」「早くこちらの言葉に慣れなさい」と言われました。伊勢弁でございますので、大変苦勞をいたしました。(昭和3年)

### お直し

本学の服飾美術学科で「お直し」と言うことばが使われている。提出した製作品に不備があると戻され、修正して再度提出することをいう。

大正時代の卒業生の声の中に「お直し」と言うことばが数多く見られる。百年以上使われ続けている伝統のことばである。

当時、作品のお直しというのがありまして、それが苦手でした。やっとできて提出しましても寸法が合わなかったり、裏表が合わなかったり、留めが違ったりすると直さなければなりません。日頃から手が遅くて時間のかかるうえにお直しに時間を取られますから、いくら時

間があっても足りません。夏休みになって皆が帰省の支度をしている頃でも、私はまだ作品が完成しないので、汗だくでなければなりませんでした。

その頃、真夏でも下襦袢に必ず長襦袢を重ねていないとすぐ乾先生に見つかります。白羽二重の下着を縫っておりましたら、大きな汗がポトンと落ちてシミがつきました。先生が「下前でよかったね。」と笑わないでおっしゃいました。(大正5年)

1年の時は大変宿題が多くございました。それに「お直し」が多くございますし、本当にこれで続くのかと一学期で引き上げて帰ろうかと思いましたが、頑張りまして2年になりました。3年になりましたからは、乾先生でございました。乾先生は非常に厳しい先生でございましたので、「お直し」も多ございました。2年の時、帯を縫ったときに何度してもできなかつたことは今でも忘れられませんが、3年になりましたから、やわらかいものを縫わなければならないのでその苦労は本当にひとしおでございました。こんなにお直しの多い学校は本当に大変だと思いましたが、それだけ自分の腕を磨かせていただきましたことは喜ばしいことではございました。

渡辺式というのは本当に厳しい、技術をしっかりと教え込まれる伝統の学校でございますので、他の学校を出られた方とはちょっと違っております。家庭料が改革されまして、家族関係とか家庭経済とかいう科目ができてきまして、専門の経済学・心理学などを教えていただいたことが役立って、昔のノートを紐解いてみたりするようなこともございました。3年間の学校生活は本当に楽しくもありましたが、有益なものだったと思います。(昭和3年)

一日平均2時間ないし3時間のお裁縫で、他に修身、国語、作文、教育学などを習いました。裁縫は速成科におりましたから、いくらか自信はあるつもりでございましたが、お直し、お直しで大変。一学期に7、8枚も仕上げなければならない。誰もが悲鳴をあげていました。私は麻布から通学いたしておりましたので、大きな包みを抱えて市電で往復しておりました。やっと一学期が終わり、久しぶりに両親のもとへ帰りましたが、お裁縫の厳しいのに嫌気がさし、夏休み後の上京を迷っておりましたら、兄から大目玉をいただき、再び上京いたしました。

2学期になって学校に行ってみますと半数以下になっていました。私と同じ気持ちの人が多かったのでしょうか。私は3年間、先生の厳しいご指導に泣かされましたが、卒業し就職して他の学校の卒業生より技術は優れていたように思え初めて先生に感謝いたしました。

(大正11年)

## 寮生活

寄宿舎に入寮させていただきましたのは明治36年の1月で17歳の時でした。起床の鐘が鳴るのを待って、急いで跳ね起き、着替えをして床をたたみ戸棚へしまうように心がけました。食堂は一階で長いテーブルと腰掛で食事をとりました。教室は2階でしたから、お裁縫の道具と材料と座布団を持って、仲の良い方の隣に席を取りました。昼食は食堂へ行き、また教室へ戻り3時まで針を運び自室に戻ります。

夕方は入浴と買い物です。夕食後は9時まで自習ですが、明かりは今のように電灯が無いので机の上の小さなランプです。3日目くらいに石油が無くなりました。その時は学校の前の雑貨屋のおばさんが、夕食後に学用品や日用品を売りに来て石油も入れてくれました。1回2銭位だと覚えております。(明治37年)

寄宿舎は、バラックの2階建てで、1階は玄関や30畳敷きや、間取りの都合で10畳敷きもありました。窓際に4人1組のグループで各自の机を置き、机の下が洗面道具の置場となり、学校から帰ると袴を脱いで夏でも腹合帯をお太鼓に締め白い割烹服を着用しておりました。それが書生制服とも言えましょう。ただし、寄宿舎を1歩でも出るときは割烹服を脱ぎ、玄関のお当番さんのところで行き先、帰着予定を記入しました。

入浴は一般の銭湯で済ませて、おやつを買って帰ります。火、水、木、日と曜日が定まっておりました。寄宿舎の並びに氷屋があって、小倉アイス1個5銭、普通クリーム10銭でした。その当時、父兄からの送金が1か月40～50円くらいでした。食費代、1か月7円支払いました。(昭和3年)



寄宿舎で自習する学生(明治44年)

## Chapter 3

# 共同研究

### 3-1 自尊感情とレジリエンスの向上に着目した育児期女性に対する 支援体制構築に向けての基礎研究

[並木有希／平野順子／平野真理／特別区長会調査研究機構（板橋区・北区・千代田区・文京区・豊島区）]

3



# 自尊感情とレジリエンスの向上に着目した育児期女性に対する支援体制構築に向けての基礎研究

並木 有希／平野 順子／平野 真理／特別区長会調査研究機構

令和元年度に板橋区他と共同で行った調査の概要です。特別区長会調査研究機構より報告書を発行した他、啓発用パンフレットを作成しました。広く広報・啓発の用に役立てたいと思います。

## 令和元年度 調査研究報告書【概要版】

### 自尊感情とレジリエンスの向上に着目した 育児期女性に対する支援体制構築に 向けての基礎研究



令和 2 年 3 月 特別区長会調査研究機構

## 調査概要方法

アンケート調査及びグループインタビューによる

板橋区・北区在住の、第1子が0歳から5歳である女性 3,000人（人口按分によって、板橋区1,840人、北区1,160人）板橋区、北区の住民基本台帳から単純無作為抽出 自記式調査票を郵送にて配布、郵送にて回収

	配布数	有効回収数	有効回収率
全体	3,000	1,459	48.6%
板橋区	1,840	815	44.3%
北区	1,160	644	55.5%

高い回収率  
=  
高い関心を  
表す

## 研究目的

育児期女性の育児状況、自尊感情、レジリエンス等について実態を把握することを目的とする。

・育児中の家庭に対しては既に様々な施策が行われているが、育児期にある女性は自尊感情が低い傾向にあり、そのことが社会復帰への障害となっていることが分かっている。

・諸外国では、育児期女性のメンタルヘルス状況を把握し、彼女たちに対して必要な支援を政策に反映させている例もあり、わが国でも育児期女性の心理的側面への理解と支援の整備が必要である。

## 結果①：2年目以降の支援が必要

- ・「育休中」の人が一番ポジティブ（高レジリエンス、高自尊感情）
- ・産後すぐ（休職中）よりも、2～3年後の方がネガティブになる（低レジリエンス、低自尊感情）

提言：

行政サポートも、産後1年間は手厚いが、その後がない。  
未就学の幼児を育てる母親への支援をさらに充実させる必要がある。

## 今回のキーワード

**性役割**：性別と社会的なあり方を結びつけた考え方  
（例：男は泣かない、女は愛嬌）より具体的に性別役割分業（例：男は仕事、女は家事育児）の形をとることも多い。

**レジリエンス**：困難な状況にもかかわらず、しなやかに適応して生き延びる力

**自尊感情**：自分の個性やあり方を尊重する気持ち  
自分は、あるがままで価値のある人間だと自覚し、社会のなかで意義があると感じる

## 結果②：社会へつなげる支援が必要

・妊娠出産にあたり、「仕事を辞めざるを得なかった」お母さんが一番ネガティブ

→ 自尊感情を持つのに、母親役割だけでは不十分である。

提言：

育児以外で社会から必要とされている感覚を支援することが大切。  
行政・地域などが、母親役割に固定されない社会参画の方法を提供していく必要がある

## 結果③：母親役割からの解放が必要

- ・社会から求められている性役割（お母さんはこうあるべき）を強く感じてしまう人ほど、ネガティブになる。

### 提言：

時代に即した性役割のイメージ形成や啓発事業を行政でも促進していく必要がある

7

## 千代田区の例

- ★「母親役割」だけでは不十分

→「子育て支援」の部署と「男女平等参画」の部署等、庁内の連携が不可欠

### ○庁内連携の好事例

【DVや虐待等家庭内の暴力に対して、庁内で関係部署が連携して防止啓発】

児童・家庭支援センター（児童虐待防止）、  
国際平和・男女平等人権課（女性への暴力防止）、  
障害者福祉課（障害者虐待防止）、  
在宅支援課（高齢者虐待防止）



11

## 板橋区・北区の例



### ★女性を社会につなげる支援

【子育てママの未来計画】  
（板橋区・北区・東京家政大学の  
3者共催事業）

子育て中の女性が、自分自身の生活や希望を見つめ直し、参加者相互で自己肯定感を高め合って、今後のキャリアをイメージできるよう構成された託児付き連続講座。

#### 〈参加者の声〉

- ・子どもと離れて集中して学ぶことができました。
- ・久しぶりに社会とつながった気がした。
- ・自分自身を見つめなおすことができてよかった。
- ・自分に優しくしていいことを知った。

8

## まとめ

- ・現代の、育児期女性の心理的状況とその特徴が明らかになった
- ・東京都特別区が先進的な取り組みをすることで、全国に先駆けて先例を示せる。
- ・以降も、継続的な調査が必要である。
- ・令和2年度は同じグループの「父親」に焦点をあて、育児と性別役割についての状況を調査する。

12

## 豊島区の例

### ★女性を社会につなげる支援

【待機児童を解消し、女性の職業生活における活躍を推進】

民間保育所の積極的誘致などに重点的に取り組み、平成29年・30年は待機児童がゼロとなった。

○女性の声をダイレクトに施策に反映

【としまF1会議】

“消滅可能性都市”との指摘を受け、対応策の一つとして「女性にやさしいまちづくり」を掲げて女性を中心としたメンバーの「F1会議」を立ち上げ、調査・研究を重ねて区長に提案、次年度予算に反映し、11事業を具体化した。



9

## 研究体制

リーダー	並木 有希	（東京家政大学女性未来研究所副所長）
研究員	平野 順子	（東京家政大学短期大学部保育科准教授）
	平野 真理	（東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科講師）

提案区：板橋区

参加区：北区、千代田区、文京区、豊島区

13

## 文京区の例

### ★母親役割からの解放

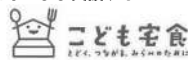
【区長のリーダーシップと情報発信】

行政のトップがジェンダー平等・女性活躍に関して、積極的にメッセージを発信することで、女性を母親役割だけの存在から解放

○経済状況の厳しい子育て世帯へのゆるやかな見守り

【子ども宅食プロジェクト】～見えない貧困を見えないまま支援する～

児童扶養手当、就学援助受給世帯等に対し、企業等から寄附された食品等を定期的に自宅に届ける。



配送等を通じ、各家庭とつながることで、生活の困りごとに気付き、必要な支援につないでいくこと、地域や社会からの孤立を防ぐことを目的としている。

10

# 啓発用パンフレット(各区にて配布)

子どもや家族と同じくらい、「自分」を大切にしていますか？

キーワード

性別役割


性別と社会的なあり方を結びつけた考え方(例:男は泣かない、女は愛嬌)。より具体的に性別役割分業(例:男は仕事、女は家事育児)の形をとることも多い。

レジリエンス

困難な状況にもかかわらず、しなやかに適応して生き延びる力。

自尊感情

自分の個性やあり方を尊重する気持ち自分は、あるがままで価値のある人間だと自覚し、社会のなかで意義がある、と感じること。



令和元年度 特別区長会調査研究機構 調査研究テーマ

**自尊感情とレジリエンスの向上に着目した  
育児期女性に対する支援体制構築に向けての基礎研究**

■調査方法  
アンケート調査及びグループインタビュー

■調査対象  
板橋区・北区在住の、第1子が0歳から5歳である女性3,000人


■研究体制  
リーダー 益木 有希(東京家政大学女性未来研究所副所長)  
研究員 平野 蘭子(東京家政大学短期大学部保育科准教授)  
平野 真理(東京家政大学人文部心理カウンセリング学科講師)

提案区:板橋区  
参加区:北区、千代田区、文京区、豊島区

東京家政大学 女性未来研究所 [板橋校舎 大学8号館1階]  
〒113-8602 東京都板橋区高旗1-1-1  
TEL 03-3961-5305 FAX 03-3961-5513  
E-mail josei-mirai@tokyo-kasei.ac.jp  
URL <https://www.tokyo-kasei.ac.jp/research/woman/index.html>

私たちがそれぞれが輝く未来に向けて

令和元年度 調査研究報告書



令和2年3月  
特別区長会調査研究機構  
東京家政大学女性未来研究所

### 各区の取り組み

**板橋区・北区**

女性を社会につなげる支援  
子育てママの未来計画  
[板橋区・北区、東京家政大学の3者共同事業]  
子育て中の女性が、自分自身の生活や希望を見つめ直し、参加者相互で自己肯定感を高め合って、今後のキャリアイメージができるよう構成された託児付き連続講座。

参加者の声

- 久しぶりに社会とつながった気がした。
- 子どもと関わりながら集中して参加することができた。
- 自分自身を見つめ直すことができてよかった。
- 自分に感心していることを知った。



「子育てママの未来計画」プロジェクトについてはこちらから  
<https://josei-mirai.wixsite.com/website>



### 研究結果

特別区長会調査研究機構と、板橋区・北区・豊島区・文京区・千代田区との研究の結果、子育て中の女性について、こんなことがわかりました。

- 1 子育ては2年目以降がたいへん**

●「育休中」の女性はレジリエンスや自尊感情が比較的高い  
→一方で「産後2~3年後」には、そうした状態が低下しやすい

※ 行政サポートも、産後1年間は手厚いが、その後がない。未就学の幼児を育てる母親への支援をさらに充実させる必要がある。
- 2 子育ては、ひとりじゃできない**

●妊娠出産にあたり「仕事を辞めた」女性は、自尊感情が低くなりやすい  
→母親としては強靭であっても、個人としての自分に価値を感じられなくなる

※ 育児以外で社会から必要とされている感覚を支援することが大切。行政・地域などが、母親役割に固定されない社会参画の方法を提供していく必要がある。
- 3 「お母さん」に正解なんかない**

●社会から求められる性別役割(母親はこうあるべき)のプレッシャーを強く感じている人ほど、自尊感情が低くなりやすい

※ 時代に即した性別役割のイメージ形成や啓発事業を行政でも促進していく必要がある。

**豊島区**

女性を社会につなげる支援  
情緒児童を解消し、女性の職業生活における活躍を推進  
民間保育所の統一的誘致などに重点的に取り組み、平成29年・30年は特種児童がゼロとなった。

女性の声をダイレクトに施策に反映  
としまF1会議  
「活躍可能性都市」との指摘を受け、対応策の一つとして「女性にやさしいまちづくり」を掲げて女性を中心としたメンバーの「F1会議」を立ち上げ、調査・研究を重ねて区長に提案、次年度予算に反映し、11事業を実施した。



**文京区**

母親役割からの解放  
区長のリーダーシップと情報発信  
行政のトップがジェンダー平等、女性活躍に関して、積極的にメッセージを発信することで、女性も母親役割だけの存在から解放。

経済状況の厳しい子育て世帯へのゆるやかな見守り  
子ども等ケアプロジェクト→思えない負担を思えないまま実質する一  
児童扶養手当、就学援助奨励金等に対し、企業等から寄附された資金等を定期的に寄附に活用し、配分等を通じ、効果とつながること、生活の困りごとに寄り添い、必要な支援につなぐこと、地域や社会からの孤立を防ぐことを目的としている。



**千代田区**

「母親役割」だけでは不十分  
→「子育て支援」の部署と「男女平等参画」の部署等、庁内の連携が不可欠

庁内連携の好事例  
DVや虐待等家庭内の暴力に対して、庁内で関係部署が連携して防止防止  
●失業・求職支援センター(失業虐待防止)  
●困難子育て・男女平等参画支援(女性への暴力防止)  
●障害者福祉課(障害者虐待防止)  
●在宅支援課(高齢虐待防止)



# 「産後2～3年」の支援が重要

## 23区的課題 特別区長会 調査研究機構レポート

4



今年の会合はコロナ禍を受け、リモートで開催している＝9月、東京区政会館で

育児中の家庭に対してした上で支援策を講じるは既に行政が様々な支援 例もある。

策を講じているが、東京 ことした観点から、調 家政大学と板橋区、北区 査・研究「自尊感情とレ が連携して行う子育て中 シリエンスの向上に着目 の女性への支援講座」子 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で

育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で

## 育児期女性の支援

育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で 育てママの未来計画」で

最も多く、「家庭生活を優先」(26・9%)、「仕事と家庭生活地域・個人の生活を共に優先」(24・2%)の順となったが、現実に近いものでは、家庭生活を優先(47・9%)が最も多く、家庭外活動は希望通りにきていない実態が浮き彫りとなった。

一方、育児期の女性がレシリエンスをどの程度有しているかを育児年数などクロス集計したところ、最もポジティブな状態だったのが「育休中」であり、また「産後すぐ(休職中)」よりも「産後2～3年後」の方がネガティブになる傾向が明らかになった。

「母親」が能力を発揮できる支援を interview

研究者 ▶ 並木有希  
部保育課准教授  
研究者 ▶ 平野順子  
東京家政大学短期大学  
心理カウンセラー  
東京家政大学心理学部  
心理カウンセラー

「母親」が能力を発揮できる支援を interview

研究者 ▶ 並木有希  
部保育課准教授  
研究者 ▶ 平野順子  
東京家政大学短期大学  
心理カウンセラー  
東京家政大学心理学部  
心理カウンセラー

「家庭生活」「地域・個人の生活の優先度について」「希望に近いもの」「現実に近いもの」を「育児期女性の支援」を充実させる必要性を強調した。

また、板橋区と北区に在学中、5歳までの第一子がいる女性3千人にアンケートを実施。この中で「育児期女性の支援」を充実させる必要性を強調した。

「家庭生活」「地域・個人の生活の優先度について」「希望に近いもの」「現実に近いもの」を「育児期女性の支援」を充実させる必要性を強調した。

また、板橋区と北区に在学中、5歳までの第一子がいる女性3千人にアンケートを実施。この中で「育児期女性の支援」を充実させる必要性を強調した。



## Chapter 4

# 共催事業

- 4-1 女性未来研究所・板橋区・北区 女性の活躍推進に向けた三者共催事業  
「子育てママの未来計画」  
[並木有希]
- 4-2 女性未来研究所・豊島区 共催  
「子育てママの未来計画」  
[並木有希]
- 4-3 板橋区 いたばしI(あい)カレッジ (3回連続講座)  
「ママでもなく、妻でもない"私"を考える」  
[並木有希]
- 4-4 女性未来研究所・生涯学習センター共催講演会  
「超少子高齢社会と女性の生き方・働き方」  
[樋口恵子]
- 4-5 英語コミュニケーション学科・女性未来研究所・グローバル教育センター共催講演会  
「異なる文化の狭間で想うこと～地球人として生きる道～」  
[並木有希]
- 4-6 入間市・女性未来研究所共催  
「人生100年時代 ～すべての人に居場所と出番～」  
[樋口恵子]
- 4-7 北区 女性職員向け研修会(3～10年目職員対象)  
「はじめてのキャリアデザイン ～私らしい働き方・生き方を実現するために～」  
[並木有希]

# 4

# 女性未来研究所・板橋区・北区 女性の活躍推進に向けた三者共催事業 「子育てママの未来計画」

並木 有希

子育て中のお母さんが自分らしい人生を考える時間を  
作るために構想し実行されている事業「子育てママの未  
来計画」は、心理カウンセリング学科 平野真理先生、  
保育学科 平野順子先生と内容を吟味し、カリキュラム  
を作り上げた結果、三部構成の授業として完成しました。  
ワークブックにもヒューリップのお力をお借りし、お母  
さんたちの気持ちがふと軽くなるような内容に完成しま  
した。板橋区・北区の担当部署には全面的に趣旨に賛同  
していただき、実施に関して強いバックアップと助言を  
いただいていること、学校と地域の協働のモデルケース  
となっていると考えました。理解と協働に改めて感謝し  
たいと思います。ありがとうございました。本年は、東

京家政大学での実施だけでなく、板橋区の独自会場、ま  
た、豊島区の会場での実施もさせていただくことができ  
ました。途中、台風や新型コロナウイルスという思いが  
けない事態もありましたが、無事に終了することができ  
ました。来年度は、千代田区、東京都（東京ウィメンズ  
プラザ）での開催も予定されております。社会情勢に対  
する不安が強く、個人に難しい舵取りが求められている  
時代にこそ必要な講座だと確信しておりますので、以降  
共ますますプロジェクトを強化発展していきたいと思ひ  
ます。託児・お菓子作り・運営を通して、講座に関わっ  
てくださいました全ての皆様に感謝します。

2019年度 東京家政大学・板橋区・北区  
女性の活躍推進に向けた三者共催事業

託児付き  
0才児以上の  
未就学児

受講料  
無料

## 子育てママの 未来計画

子どもや家族と同じくらい、「自分」を大切にしていますか？  
出産育児という大きな変化を機として、自分の「これまで」や「こ  
れから」をイメージして、ポートフォリオ化するワークショップです。  
私たちそれぞれが輝く未来を、一緒に考えてみませんか？

### レジリエンス編

心忙しい毎日の中でも自分らしくいるために

2日間連続講座

7/6 (土) 7/13 (土)

10:45~12:15

新しく育児や家事に求められる毎日、  
なやまらずに生きていく。一緒にして  
自分のことを見つめなおしたい方へ。  
この先を「レジリエンス」を軸に  
考える方法を学び、自分の特徴を取り戻  
してみませんか？

定員：30名  
託児定員：16名（先着順）

### 家政学入門編

子どものいる毎日を充実したものにするために

2日間連続講座

7/20 (土) 7/27 (土)

10:45~12:15

家政学の考え方を学び、自分の生活を  
改善し、自分自身でいる「家事」を  
整理していきます。忙しさに悩む、  
自分と家族にとって大切なことを見  
つけ、いきいきと生活を創る方法を学  
べてみませんか？

定員：30名  
託児定員：16名（先着順）

※お申し込みは、10:00~12:00の間、受付を行います。  
お申し込みは、12月31日までに必ずお申し込みください。  
※お申し込みは、12月31日までに必ずお申し込みください。

東京家政大学 女性未来研究所 板橋区 東京都北区

2019年度 東京家政大学・板橋区・北区  
女性の活躍推進に向けた三者共催事業

託児付き  
0才児以上の  
未就学児

受講料  
無料

## 子育てママの 未来計画

子どもや家族と同じくらい、「自分」を大切にしていますか？  
出産育児という大きな変化を機として、自分の「これまで」や「こ  
れから」をイメージして、ポートフォリオ化するワークショップです。  
私たちそれぞれが輝く未来を、一緒に考えてみませんか？

### レジリエンス編

心忙しい毎日の中でも自分らしくいるために

2日間連続講座

9/6 (土) 9/20 (金)

10:45~12:15

新しく育児や家事に求められる毎日、  
なやまらずに生きていく。一緒にして  
自分のことを見つめなおしたい方へ。  
この先を「レジリエンス」を軸に  
考える方法を学び、自分の特徴を取り戻  
してみませんか？

定員：30名  
託児定員：16名（先着順）

### 家政学入門編

子どものいる毎日を充実したものにするために

2日間連続講座

9/28 (土) 10/12 (土)

10:45~12:15

家政学の考え方を学び、自分の生活を  
改善し、自分自身でいる「家事」を  
整理していきます。忙しさに悩む、  
自分と家族にとって大切なことを見  
つけ、いきいきと生活を創る方法を学  
べてみませんか？

定員：30名  
託児定員：16名（先着順）

※お申し込みは、10:00~12:00の間、受付を行います。  
お申し込みは、12月31日までに必ずお申し込みください。  
※お申し込みは、12月31日までに必ずお申し込みください。

東京家政大学 女性未来研究所 板橋区 東京都北区

2019年度 東京家政大学・板橋区・北区  
女性の活躍推進に向けた三者共催事業

託児付き  
0才児以上の  
未就学児

受講料  
無料

## 子育てママの 未来計画

子どもや家族と同じくらい、「自分」を大切にしていますか？  
出産育児という大きな変化を機として、自分の「これまで」や「こ  
れから」をイメージして、ポートフォリオ化するワークショップです。  
私たちそれぞれが輝く未来を、一緒に考えてみませんか？

### ライフデザイン編

心忙しい毎日の中でも自分らしくいるために

2日間連続講座

2/21 (金) 3/6 (金)

14:00~16:00

これまでの講座を受講された方へ

いままでの「レジリエンス編」「家  
政学入門編」を両方受講された方向  
けの「ライフデザイン編」になります。相手の  
気持ちに共感し、理解することから、  
自分の心にある考えの整理と自分  
の未来を見つけてみましょう。

定員：30名  
託児定員：16名（先着順）

※お申し込みは、10:00~12:00の間、受付を行います。  
お申し込みは、12月31日までに必ずお申し込みください。  
※お申し込みは、12月31日までに必ずお申し込みください。

東京家政大学 女性未来研究所 板橋区 東京都北区

# セミナー「子育てママの未来計画」に関するアンケート レジリエンス編（7月6日・13日）

アンケート回収数 20枚(参加者28名)

※自由記述欄は原文通り

1. 「子育てママの未来計画」を知ったきっかけを教えてください。（複数回答）

①区広報	14
②区のホームページ	1
③チラシ	5
④その他※	2

※関連の講座 1

板橋区の1カレッジ 1 1

2. 「セミナー」に参加したきっかけは何ですか？（複数回答可）

①講師に興味・関心があったから	4
②このセミナーに興味・関心があったから	20
③知人・友人に薦められたから	0
④託児付だったから	9
⑤その他	0

3. 今回のセミナーの満足度を教えてください。

①大変満足	17
②どちらかといえば満足	3
③どちらかといえば不満	0
④不満	0
無記入	0

4. あなたは、日常生活において、自分に対して肯定的な感情を持つ（自分自身に満足する、自分を価値ある存在と感じる、自分に自信を持つなど）ことはありますか。

肯定的に思うことが…

①よくある	3
②たまにある	9
③あまりない	6
④ほとんどない	2

それは、どのような時ですか？

①よくある

・子育て、資格の勉強

・小さな目標をたてて、達成できたとき

②たまにある

・1日がうまくいったとき。子どもに大好きと言われたとき

・用事を入れてそれをこなせたとき。ルーティンをすべて（よく遊ばせて、早めに寝かせる）こなせたとき

・うまく生活をまわせたとき（ごはん、お風呂や子どもが思いきり遊ばせられた）。お友達と話をして共感でいたとき。話を聞いてもらえたとき

・ママ友と話をしている「すごいね」「優しいね」と言われるとき

・肯定的よりもネガティブに感じる事が少し多いのですが…。社会との関わりをもつときに肯定的感情をもつことが多いです

・物事がうまく進んだとき

・決めた事を計画通りにできたとき

・無意識の完べき主義に気づいて、それを手放せたとき

・子どもの為に遊び場（泥んこ遊び）へ連れて行ったり、手作りおもちゃを作ったり、アルバムを作ったとき

③あまりない

・日常の小さい失敗に対してすごく落ち込むけど、それが大した失敗じゃない、むしろ成功だったかもしれないなどの発想に至ると、ひっくり返って肯定的な感情になる

・子どもと遊んであげられたとき。夫に優しくできたとき。周りの人（ママさんなど）のことを気遣えたとき

・周りと同じ立場の人と話すとき

④ほとんどない

・毎日やっていることに、生産性があるのか不安になることが多い

・子どもオシッコ（トイレ）ができたとき

5. 逆に、自分に対して否定的な感情を持つ（自分に不満を感じる、自分が価値ある存在と感じられない、自分に自信がないなど）ことはよくありますか。

否定的に思うことが…

①よくある	9
②たまにある	11
③あまりない	0
④ほとんどない	0
無記入	0



それは、どのような時ですか？

① よくある

- ・毎日。一日の終わりに、今日も何も大したことできなかったと思ったりする
- ・生活がきちんとできているか不安
- ・義父母（同居）に不平不満をもつとき。他のママさんと話せないとき。夫にお弁当を作れなかったとき。子どもを計画的にお昼寝させて自分の時間を作ったとき。友達からのLINEの内容が自分とキョリをおきたいのではと思ってしまうとき
- ・日常の小さい失敗に対してすごく落ち込むとき
- ・家事ができない、子どもにテレビばかり見せてしまった
- ・1日中、誰かに謝っている気分になる。働くママの同僚もよく言っている。職場に、子どもに、保育園に、親に、夫に、いつも「ごめんなさい」と言いながら生活していて、がんばっても誰かにごめんねと言うのはやめたいと思う
- ・子どもの都合（機嫌など）と自分の都合をつめこみすぎて、うまく行かなかったとき。やっぱり、自分の都合を強行することはできない。もっと上手くやらないと…と反省します
- ・やらないといけない事を後回しにする
- ・家事がたまってる、子どもにイライラする、時間ギリギリ、忘れ物

② たまにある

- ・子育てについて迷うとき。正解が分からないとき
- ・食事の仕度が遅い
- ・眠くて疲れて横になり。子どもをひとり遊びさせたとき
- ・物事がうまく進まないとき。疲れているとき
- ・自分のことが思い通りにならないとき、育児に自信をなくしたとき…
- ・子どもを感情的に怒ってしまったとき。子どもがお友達を傷つけてしまったとき
- ・離乳食関係でイライラして叱ってしまったとき。子どもと一緒にいたくないと思ってしまうとき。他のお母さんとくらべて楽しく遊んであげられてないと感じたとき。子どもより自分を優先しているとき
- ・子どもを感情的に叱ってしまったとき。1日がうまくいかなかったとき
- ・育児だけで1日がおわってしまったとき
- ・身体の具合が悪いとき。ママ友と上手く話せないとき

6. セミナーのご感想やご意見、今後のご要望等がありましたら、ご自由にご記入ください。

- ・勉強になりました。他のママさんともお話できて、勇気づけられました。ありがとうございました
- ・自分自身に関して関心が持てなくなっていたので、自分の良さやできたことなど、考えたことがなかった。ただ淡々と何事も起こらず、娘を育てることしか考えることができなかった
- ・久々に母親、妻の立場から、おこがましいかもしれませんが学生気分をいただけて、とても楽しい一時でした。ほめてもらえたことも嬉しかったです。また、自分のことを見る新たな見方を教えてもらえ、「沼」に入りかけていたのが、出られたように思います。また機会があれば是非参加させていただきたいです。本当にありがとうございました
- ・資料を丁寧にご用意くださったことや、お茶菓子があること。思った以上に気持ちが和みました。椅子が座りやすのもであったことも安心材料でした。どうもありがとうございました。
- ・とてもとてもリフレッシュになりました。肩の力が抜けました。少しかまえて参加したのですが、本当に子育てママに寄り添った講座でとても感動しました。総務課長さんのお話も感動しました。板橋に住んでよかった！
- ・2人目の育休から1年で仕事に復帰し、様々な葛藤を抱えながら「無」の状態新しい生活をスタートしていました。感じること、思いを言葉にすることの大切さを思い出し、強さとは「しなやかさ」で、「強固」なものではないというのは、新鮮な発見でした。1回では物足りないので2回×2の連続講座でとてもよかったです。土曜のAMかPMもありがたいです（平日講座には参加できないので）。夫婦参加など、男性陣にも知らせるセミナーがあって欲しい
- ・参加を通じて、とても前向きな気持ちになりました。同じような気持ちを持つ方とお話できたこともすごくプラスになりました
- ・久しぶりに勉強ができ、楽しい講座でした。とても良い講座だったので、連続で講座が受けられたら、うれしいです
- ・“お母さん”ではなく“私自身”を支援するセミナーというのが有難かった。自己肯定感が低く毎日辛かったのが溶け、前向きになれた。自分のことも大事にすることで、家族のことも周りのことも大事にできると実感
- ・自分のことを考える時間がない中、講座に参加し、色々な視点で自分について考えることが出来たのが貴重な経験だった

- ・視点の転換になりました。おいしいお菓子とお茶もありがありがとうございました。ごちそうさまです。
- ・少しの時間、自分だけのことを考えることができ楽しかったです。子どもをあずけるのが初めてでしたが、泣かずに遊べたのも良かったです。
- ・皆さんからシールを頂き、色々な見方、考え方があるなと思いました！ とてもいやされました！！自分を大切に…なかなか時間がとれず難しいですが、忘れないようにしたいと思います。ありがとうございました！
- ・とてもセミナー内容も雰囲気も楽しくて良かったです。1回目の講座は夫も同席して知ってほしいなと思いました。とても心に響くお話でした。頭では分かっているつもりでも、なかなか実践できていない日常でした

- (自分のことに目を向けること)。並木先生のトークがとても面白く、トーク術を学びたいです
- ・とても役立つ内容。すべてのお母さんに聞いてほしいと思いました。ぜひ託児、告知、席を増やして参加者を増やしてください
- ・託児を増やしてほしい。託児があいていなければ、子ども連れで参加可能にしてほしい
- ・自分を見つめ直す事が出来て良かった。1日5分でも振り返り見つめ直したい。ありがとうございました
- ・今後託児付き or 子連れで受講できる保育士、介護士などの資格講座を開催してほしい。仕事を辞めてしまったけれど、子育て(おわったら)おちついたら仕事をしたいので

## セミナー「子育てママの未来計画」に関するアンケート 家政学入門編(7月20日・27日)

※自由記述欄は原文通り

1. 「子育てママの未来計画」を知ったきっかけを教えてください。(複数回答)

①区広報	5
②区のホームページ	0
③チラシ	8
④その他※	3

2. 「セミナー」に参加したきっかけは何ですか？(複数回答可)

①講師に興味・関心があったから	3
②セミナーに興味・関心があったから	17
③知人・友人に薦められたから	0
④託児付だったから	8
⑤その他	0

3. 今回のセミナーの満足度を教えてください。

①大変満足	14
②どちらかといえば満足	1
③どちらかといえば不満	0
④不満	0

4. あなたは、日常生活において、自分に対して肯定的な感情を持つ(自分自身に満足する、自分を価値ある存在と感じる、自分に自信を持つなど)ことはありますか。

肯定的に思うことが…

①よくある	1
②たまにある	9
③あまりない	4
④ほとんどない	2

それは、どのような時ですか？

- ・夫に感謝されたりほめられた時
- ・子供に向きあって遊んだり、写真アルバム(みてねアルバム)を作って両親に送付したとき(毎月)
- ・1日スケジュール通りに進んだ時。
- ・自分のやりたいことを割とやっているなあと思ったとき
- ・やりたくない、大変だと思うこと(食べちらかしの片づけなど)を終わらせたとき
- ・子供が頼りにしてくれる時
- ・「レジリエンス編」を聞かせて頂いてから意識するようになれました！小さな家事がかたづいた時。
- ・自分に向きあう時間があまりない(積極的にとろうとしていない・・・反省)
- ・ほめられる機会・認められる機会がない
- ・目標を達成した時

- ・ワンオペがうまくいったとき、美容院に行ったり、マツエクしたりオシャレを楽しめたとき、勉強ができたとき
- ・がんばれたとき
- ・生活をうまくまわせたとき
- ・家事・子育てなどうまく（思うように）いかない

5. 逆に、自分に対して否定的な感情を持つ（自分に不満を感じる、自分が価値ある存在と感じられない、自分に自信がないなど）ことはよくありますか。

否定的に思うことが…

①よくある	10
②たまにある	4
③あまりない	1
④ほとんどない	1

それは、どのような時ですか？

- ・物事が自分の思うように進まない時
- ・疲れたり眠い時に子供を放置してひとり遊びさせてしまう時
- ・うまく事が進まなかったとき。失敗が続いたとき。
- ・疲れたり、体調が悪くなったとき
- ・家事をあまりこなせないとき
- ・子どもを必要以上に怒ってしまった時
- ・夫に理解してもらえないと感じるとき
- ・イライラしてしまう。マナーが悪い。
- ・寝不足が続くと泣いている息子にやさしくできない時がある。愛情いっぱい親元で育ててもらえたら彼はもっと幸せになれたのになと考えてしまう
- ・子供が言う事を聞かず、自分の言い方が悪い、しつっこいと思ってしまう
- ・人と話した後にこれで良かったのかな？と思う。間違ったこと言っていないかな？とか。できていないことばかり考えた時。人と比べた時。
- ・ワンオペがうまくいかなかった時、一日ボーっとして、何もせず一日が終わったとき
- ・疲れている時、物事がうまく回らない時
- ・スケジュール通りに事が進まない
- ・家事がたまっているとき
- ・子どもの機嫌が悪い時、子どもを怒鳴ったとき、生活をうまく段どりよくまわせなかったとき
- ・失敗するとき

6. セミナーのご感想やご意見、今後のご要望等がありましたら、ご自由にご記入ください。

- ・無料かつ託児付きでこのようなセミナーを開催していただけて本当にありがたいです。できれば産前の健康福祉センターでの面談の際にこんなセミナーがあることもまとめて教えていただけると助かります（産後、余裕がない人も多いと思うので）
- ・時々勉強したいので、またこのような講座があるととてもありがたいです。区外でしたが参加させていただき、どうもありがとうございます。
- ・テキストの柔らかい感じがとても好きでした。自分のことを考える、見つめる時間ができてとても充実した2時間でした。できたこと日誌のささいな内容を周りの方に評価してもらえると嬉しい気持ちになりました。もっとこういう講座が社会全体に広がって（特に男性）いけば良いなと思いました。
- ・自分のことを考えるきっかけになってよかった。今後も続けていただけたらうれしいなと思いますが、もうちょっと参加者の方にシェアする時間があるといいなと思いました。
- ・セミナー期間中はちょっとしたことでも「これはどういうこと？」「なぜこう思う？」と自問できたことが成長でした。
- ・セミナーがきっかけで、視野が広がり、したい事、やってみたい気持ちが沸き、情報収集できました。託児もしていただき、リフレッシュできました。有難うございます。
- ・レジリエンス編同様、大変有意義な時間をすごさせていただきました。またこのような会があればぜひ参加したいです。託児付きが助かります。
- ・ご多用の中、ステキな講座を開催してくださり、ありがとうございます（\*^^\*）!! 土曜が楽しみで一週間ががんばれました。30代になってくると『自分』というものが確立され、なかなか柔軟に考えることができず・・・年と重ねるとガンコになってしまう部分もあるので、いくつになっても学びは大切だなと思いました。60代になってもガンコバーバではなく、柔軟性のあるバーバになりたいです。なので、今後も頭が柔らかくなる、学びになる講座をよろしく願います（\*^^\*）♡託児があり、本当に助かりました!!
- ・「子育て」ではなく「女性自身」をフォローするセミナーがとても有り難く、未来を考えるきっかけになった。
- ・ワーママ（育休等含め）とディスカッションできる機会がもらえて、自分の心を整理することができた。
- ・講演会ではなく参加型なのがよかった。
- ・人生100年時代の話が興味深かった。自分の人生（キ

- キャリア) を考える機会になった。
- ・ワークに取り組む時間<シェアの時間にもっとしてほしい(家政学の1回目は書く時間が長かったように感じました)
  - ・P26「これからの私」をシェアできなかったのは残念
  - ・できたこと日記はとても前向きになれた
  - ・自分に優しくすることで家族にも優しくできると気づいた
  - ・こんなセミナーを受けたいと思ったとき、どこで探せるか分からない→HP 見てみます
  - ・ありがとうございました。
  - ・自分にも人にも優しい気持ちになれました。
  - ・すばらしいセミナーをありがとうございました。生活経営していきたいです!!! 人生の活力がもらえました。
  - ・自分のことをふりかえる良い時間になりました! ありがとうございました!!
  - ・女性が子育てしながら自己実現するにはまだ、ソフト・ハード両面足りないと思います。主に政治をになっている男性の意識を変えないと変わらないと思うので、

男性向けの講座、啓蒙活動をしていって頂きたいです。行政より、ソフト・ハード共に支援して頂けない時は、専業主婦(子育て期限定)に、金銭面で支援して頂けたら、各家庭に合ったサービスを向けられるのではと思います。

- ・前回、板橋区の男女社会参画課の方がお話しして下さいましたが、あのような志を持ってお仕事して下さいな女性が、板橋区にいらっしゃることを知り、とても心強く感じました! ご活躍を期待しております! ありがとうございます!!
- ・月一など定期的で開催していただけると、うれしいです。
- ・レジリエンスには参加していないので、次回、参加したいと思います。託児付がありがたい。
- ・前向きに考えるきっかけになってよかった。自分をふりかえり、ほめることが大事だと思った。アプリでできたこと日記をぜひやってみます!! おかし、のみ物、託児もありがとうございました。平野先生; 明るくハキハキして、とてもよかった。励みになった。

## セミナー「子育てママの未来計画」に関するアンケート レジリエンス編(9月6日・20日)

アンケート回収数 19枚(参加者30名)

※自由記述欄は原文通り

1. 「子育てママの未来計画」を知ったきっかけを教えてください。(複数回答)

①区広報	9
②区のホームページ	1
③チラシ	6
④その他※	3

※ 友人からの紹介…1、以前に参加した知人より紹介…2

2. 「セミナー」に参加したきっかけは何ですか?(複数回答可)

①講師に興味・関心があったから	1
②セミナーに興味・関心があったから	17
③知人・友人に薦められたから	2
④託児付だったから	11
⑤その他	0

3. 今回のセミナーの満足度を教えてください。

①大変満足	14
②どちらかといえば満足	4
③どちらかといえば不満	0
④不満足	0
⑤無記入	1

4. あなたは、日常生活において、自分対して肯定的な感情を持つ(自分自身に満足する、自分を価値ある存在と感じる、自分に自信を持つなど)ことはありますか。

肯定的に思うことが…

①よくある	1
②たまにある	12
③あまりない	3
④ほとんどない	2

それは、どのような時ですか？

①よくある

- ・好きなことをやって笑顔のとき。子どもが喜んでいるとき

②たまにある

- ・分からないけど、あった気がする。でも思い出せない
- ・やりきったり、やりとげたり、1日育児をめげなかった時
- ・やろうと思っていたことが、ぜんぶできた時
- ・タスクをこなせた時。おいしいご飯ができた時
- ・毎日娘を寝かしつけ始めた時に、今日もここまでこれたかと満足します。出かけたり、遊ばせたり、食事をしたり、寝る準備をしたり
- ・家族で夕食を食べている時に、夏休みママががんばったことを発表した時
- ・何か結果が残せたとき。なんとなくうまくまわったとき
- ・育児、家事だけで、普段（日常）の成果が見えづらいので、逆に自分自身頑張っていると言いつけてやるようにしている
- ・楽しかった日。ほめられた時。やりたいことが出来た時
- ・バレエレッスンに行き、汗をかいて運動できた時はポジティブになれる
- ・自分の時間でやりたい事をする。アクセサリ作り。作った食事を子供が美味しいと言ってくれるとき
- ・子どもがすくすく成長してくれている時

③あまりない

- ・意識してないと自分を否定的な面ばかり目が向いてしまうので、一日に何度か意図的に「今の自分のよかった点はどこか」考える時間を持った時

④ほとんどない

- ・責めることばかり
- ・子どもをおこってばかり。他人と比べてしまう。出来なかった事ばかり見つめ返してしまう

5. 逆に、自分に対して否定的な感情を持つ（自分に不満を感じる、自分が価値ある存在と感じられない、自分に自信がないなど）ことはよくありますか。

否定的に思うことが…

①よくある	7
②たまにある	11
③あまりない	0
④ほとんどない	1

それは、どのような時ですか？

①よくある

- ・子どもを怒りすぎてしまったとき。家事に追われて子どもの相手ができないとき。時間が足りず遅刻しがちなとき
- ・普段、思うようにやりたいことが進まないとき。子育てで不安があるとき
- ・失敗したり、この選択で良かったのか振りかえる時。子供にきつくあたったり、イライラしてしまった時
- ・感情的になっている時。自分の気持ちを言語化できない時
- ・周りの人と比べたとき
- ・できないことが多すぎる
- ・その場を楽しめばいいのに、マナーや人の目を気にしてしまうので

②たまにある

- ・よく眠れない時
- ・出来なかったコトを数えてしまったり、忘れていたコトがあった時
- ・体調が悪いとき。うまく事はこぼさない時
- ・旦那にあたる時。（家族など）近い人に優しくできない時
- ・家事をやっていない、夫が帰ってきてから色々やってくれる時に申し訳ないと思います。
- ・思ったようにものごとがいかなかったとき。夫に対するイライラを娘に見られたとき
- ・失敗したなと思った日。思うようにならなかった日←今はほとんどこんな日？
- ・主人の帰りが遅く（飲み会などで）一人で泣いて子を寝かしつけている時
- ・社会にまた出て働けるだろうか心配になる。体調が悪い時なにも出来なくなる
- ・家事ができていない時
- ・子供に離乳食がうまくあげられなかった時

6. セミナーのご感想やご意見、今後のご要望等がありましたら、ご自由にご記入ください。

- ・なかなか1人になる時間がない中、このように子どもを預けてゆっくり学べる場があると嬉しいです。今後も託児付きの講座があればどんどん参加したいと思います。他のママさんたちとも情報交換ができ、リフレッシュできました。
- ・初めて子どもをあずけて、同じように子どもがいるお母さん方と一緒に講座をうけられて息抜きができました。基本的に自分のことはないがしろだったので、自分を見つめなおすきっかけになってよかったです。
- ・講師の方々が予想だにしない面白い語り口で楽しかった

たです。飾らないありのままのエピソードなどを伺えて、もう一つの家政学編も参加したいと思いました。並木先生がまるで茂木健一郎（←褒め言葉です）のようにみえました。遅れてこられる受講生もいらっしゃいますが、定刻通り開始してもいいのでは。周りの人に薦めたいと思えるセミナーでした。ありがとうございました。

- 教授方、区の職員の方、大学関係者の方、貴重なお時間をこの会に割っていただき、ありがとうございます！！ 企画、運営ありがとうございます！！ 月1くらいであるとうれしいくらいステキな会でした。
- 皆さん仕事を持っていたり、子供が複数いたりして刺激をたくさん受けました。
- 新鮮なことがたくさんあった。
- 参加できて本当に良かったです。上記のような考えで日々を過ごしていたので、自分自身の「良さ」に気がついたこと、こんなに出来ていたんだ！と思えることがたくさん発見できました。今後もアプリでレジリエンス日記をつけてみます。無料・託児付きも大変助かりました。
- とても勉強になりました。先生のトークがとてもおもしろかったです。言葉にしてアウトプットするコト、文字にして、形にしていくコトが大切で、重要なのだとか感じました。実践していきますし、ワークライフバランスについても学びたいです。時間をうまく使いたい…。
- 昨年も参加させてもらったのですが、もう一度参加したいと思って申し込みました。定期的な自分と向き合う時間をもてるようにしたいなと改めて思えました。家政学編も行きたいです。日程が合わず…。また別の機会に開催してほしいです。あと、レジリエンスのアプリ Android でもほしい…！
- 先生の率直でスマートな雰囲気がとても気を楽しみ、場

を楽しく講習して頂け、とても好感のもてる女性のタメになる講座でした。このような機会を無料（しかも託児付き！！）で設けて頂き、ありがとうございます。

- このように前向きに自分を振り返ったり、考えたりする機会を頂けたことにとてもありがたく思います。江東区でも開催されると嬉しいです。ありがとうございました。
- また参加したいです。とても参考になりました。ママに限らず、考え方を広めていきます。講師の方々もとても良かったです。
- わかりやすく、癒される時間でした。とっても良いと思うので、他のものもあれば受けてみたいです。産め、働け、輝けとプレッシャーばかり与えられ女性は大変です。
- 未来計画を具体的に立てられるワークショップがあると良いと思いました。自分にできること、子供がいての働き方、自分に必要なこと、社会のニーズ。
- ママ同士の会話が出来てうれしかったです。ありがとうございました。
- 自分を見つめ直す機会が持てるのは嬉しかったです。保育があると参加しやすくありがたいです。
- 数回、このセミナーに参加させていただいています。毎回、楽しみにしていました。日々の育児を「頑張る」と評価してもらえる、あたりまえを評価してもらえると、とても心が軽くなり、原動力になりました。いつも楽しい時間をありがとうございました。また機会があったら参加したいです。託児付きはとてもありがたいです。本当にありがとうございました。
- 自分自身を見つめ直す、よさについて考える大切な機会になりました。ありがとうございました。自分の好きなこと（日々の育児で忘れていた）をする時間を作ってみようと思います。

# セミナー「子育てママの未来計画」に関するアンケート

## 家政学入門編（令和元年9月28日・令和2年2月8日）

※自由記述欄は原文通り

1. 「子育てママの未来計画」を知ったきっかけを教えてください。（複数回答）

①区広報	5
②区のホームページ	1
③チラシ	4
④その他※	2

※（家政大から届いた資料・友人から）

2. 「セミナー」に参加したきっかけは何ですか？（複数回答可）

①講師に興味・関心があったから	2
②このセミナーに興味・関心があったから	12
③知人・友人に薦められたから	0
④託児付だったから	6
⑤その他	1

3. 今回のセミナーの満足度を教えてください。

①大変満足	11
②どちらかといえば満足	1
③どちらかといえば不満	0
④不満足	0

4. あなたは、日常生活において、自分に対して肯定的な感情を持つ（自分自身に満足する、自分を価値ある存在と感じる、自分に自信を持つなど）ことはありますか。

肯定的に思うことが…

①よくある	4
②たまにある	6
③あまりない	3
④ほとんどない	0

それは、どのような時ですか？

- ・楽しい時、だんなにほめられた時…  
もう自分以外変えようがない存在だと思うから常に肯定的に思っています。
- ・子供に必要とされているとき
- ・日々、自分は頑張っている！と思えているから

- ・毎日時間に追われて必要最低限のことしか出来ず、自分のやりたいこと、やろうと思っていることが出来ない。→そしてそのまま忘れて、次から次にやりたいことが出てくる。
- ・予定をうまくこなせたとき、夫や子どもが喜んでくれたとき
- ・子育てがうまくいかない、イライラする時にわざと思う事がある。自分をはげますつもりで。
- ・家事がひととおり出来て、子どもが元気に過ごせている姿を見ている時。ありがとう、と言ってもらえた時。
- ・美味しい料理ができた時、子が笑っている時など

5. 逆に、自分に対して否定的な感情を持つ（自分に不満を感じる、自分が価値ある存在と感じられない、自分に自信がないなど）ことはよくありますか。

否定的に思うことが…

①よくある	4
②たまにある	6
③あまりない	1
④ほとんどない	1

それは、どのような時ですか？

- ・仕事の再開を考える時、子育てでイライラする時
- ・子育てで反省する時
- ・仕事で失敗した時、やれるか不安になったとき
- ・うまく回らないとき、自身が持てないとき、仕事のこと・先のことを考えたとき
- ・4、と同じ（日々、自分は頑張っている！と思えているから）
- ・4、と同じ（毎日時間に追われて必要最低限のことしか出来ず、自分のやりたいこと、やろうと思っていることが出来ない。→そしてそのまま忘れて、次から次にやりたいことが出てくる。）
- ・やりたいと思っていたことが全然できなかったとき。  
子どもが泣きやまないとき
- ・子育てしている時、ちょっとしたことで。時間がないとき。
- ・子どもを怒ってしまった時。SNS等で社会活動など有益なことをしている人を見て、自分は何もしていないとふと感じることがあります。

6. セミナーのご感想やご意見、今後のご要望等がありましたら、ご自由にご記入ください。
- 自分と向き合う時間が持てて、似たような世代の子どもを持つ意識の高いママとお話しができて、貴重な時間でした。
  - とても勉強になったし、何よりも「頑張っている」と先生が言って下さった言葉が本当に嬉しくて救われる気がしました。気付かない間に色々ためてしまっているんだとか将来についても考えるきっかけになりました。
  - なかなか普段は自分を見返すことがないので、2hとても貴重な時間でした。ありがとうございました。
  - とても勉強になる時間でした。皆さんとお話する中での発見や、考えさせられることも多く、すごく良かったです。ありがとうございます。
  - 毎回毎回とても楽しく有意義な時間を過ごさせて頂いております。是非また再受講、新たな講義も受けさせて頂きたいです。(できればまた土曜日だと嬉しいです!) 本当にありがとうございました!
  - セミナーを受講していなかったら、気づかなかった視点がたくさんありました。また、仕事と将来のビジョンのことを語ってくださる先生方がとてもステキに見えました。「いつか子どもの手が離れた時、もう一度自分の時間が訪れる」、それはすぐに来る、という言葉が今の励みになっています。本当にありがとうございました。

- 自分を振り返るいいきっかけが出来ました。本当は「レジリエンス編」「家政学入門編」しっかり受けたいのですが、平日は仕事のため行けないのが残念です。土日開催のこういった講座(他の話題でも)があることを楽しみにしています。
- 託児付はとても助かります。子育て中はいろいろ悩むことが多いので、自分を見つめる時間があるのはとても良いと思いました。
- 今日は他のママの意見が聞けて良かった。また積極的に意見が交換できるセミナーがあればいいなと思った。
- 何より大変楽しめました。グループワークで他のママさんの日常生活を参考にすることができ、同じ悩みを抱えていたりすると共感できて嬉しかったです。お菓子もごちそうさまでした!また参加したいです。
- 自分のもつ資源について、ふりかえりができてよかったです。頭がスッキリしました。
- レジリエンスという言葉を初めて知り、今回の講座以外にも色々知りました。すごくおもしろいです。勉強になりました。



# 女性未来研究所・豊島区共催 「子育てママの未来計画」

託児付き  
4ヶ月以上の  
未就学児

## 子育てママの 未来計画

受講料  
無料

子どもや家族と同じくらい、「自分」を大切にしていますか？  
出産育児という大きな変化を機会として、自分の「これまで」や  
「これから」をイメージして、ポートフォリオ化するワークショップです。  
私たちそれぞれが輝く未来を、一緒に考えてみませんか？

〓4日間連続講座〓

レジリエンス編	家政学入門編
<p>❖忙しい毎日の中でも自分らしくいるために❖</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; font-size: 1.2em;"> <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">2/7 (金)</span> <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">2/14 (金)</span> </div> <p style="font-weight: bold; font-size: 1.1em;">10:30～12:00</p> <p style="font-size: 0.8em;">忙しく育児や家事に追われる毎日、 ちょっとつかれてしまい、一休みして 自分のことを見つめなおしたい方へ。 こころの元気「レジリエンス」を取り 戻す方法を学び、自分の時間を取り戻 してみませんか？</p> <p style="font-size: 0.8em;">定員：20名 託児定員：10名</p>	<p>❖子どものいる毎日を充実したものにするために❖</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; font-size: 1.2em;"> <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">2/21 (金)</span> <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">2/28 (金)</span> </div> <p style="font-weight: bold; font-size: 1.1em;">10:30～12:00</p> <p style="font-size: 0.8em;">家政学の考え方を使い、自分の生活を見直し、自分の持っている「資源」を整理していきます。忙しさにのまねず、自分と家族にとって大切なことを見つけ、いきいきと生活を回す方法を考えていきましょう。</p> <p style="font-size: 0.8em;">定員：20名 託児定員：10名</p>

- 4回続けて受講できる方を優先いたします。
- 板橋区・北区との共催講座「子育てママの未来計画」と同内容です。
- 不明な点は窓口までお問い合わせください。

**講師**

東京家政大学女性未来研究所  
所長 並木 有希氏 (東京家政大学人文学部准教授)  
副所長 平野 順子氏 (東京家政大学短期大学部准教授)

東京家政大学女性未来研究所  
「子育てママの未来計画」  
プロジェクトチーム

**会場**

としま産業振興プラザ (IKE-Biz) 3階  
エポック10

**交通アクセス**

● JR線、東京メトロ (丸の内線、有楽町線、副都心線)、  
西武線、東上線、都バス、私営バス  
各線「池袋駅西口」下車徒歩7分

※公共交通機関をご利用の上お越しください。

**お申し込み**

QRコードを読み取り、フォームに情報を入力し、送信してください。

**入力内容**

① メールアドレス ② お名前(よみがな) ③ ご住所 ④ 電話番号  
 ⑤ 託児希望の有無 ※託児を希望する場合は、申し込み期間までに申し込みください。  
 ⑥ お子さんのお名前(よみがな)、生年月日 ※託児希望の場合はのみ入力

❖ 申し込み開始：2019年12月21日(土) 9:00

❖ 託児申し込み：2020年1月15日(水) まで

**お問い合わせ**

東京家政大学 女性未来研究所  
 TEL: 03-3961-5305  
 E-mail: josei-mirai@tokyo-kasei.ac.jp  
 月～金 / 9:00～17:00 土・日・祝/休

Designed by Tokyo Kasei Pulp

## 受講者アンケートまとめ

講座名	子育てママの未来計画 レジリエンス編	一般参加者合計	22 名
講師	並木 有希さん(東京家政大学人文学部准教授) 平野 順子さん(東京家政大学短期大学部准教授)	アンケート集計枚数	22 枚
受講日	令和2年2月7日(金) 午前10時半～12時	事務局 スタッフ等	3 名
会場	研修室2	参加者 合計	25 名

講師は含めない

### ◎お住まい

豊島区	豊島区以外	合計	※豊島区以外の市区町村名
22 名		22 名	

### ◎年代別

～10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	年齢未回答	合計
	3	12	7						22 名

### 1. この講座を何で知りましたか？(複数可)

a. 広報としま	7 名	30.4%	b. チラシ	7 名	30.4%	c. 区ホームページ	2 名	8.7%	
d. 知人・友人	7 名	30.4%	e. メルマガ		0.0%	f. その他		0.0%	計 23 回答
b. チラシの場所	・区民ひろば4件・千早図書館・エポック10・保健所								
d. その他内容									

### 2. この講座に参加した理由はなんですか？(複数可)

a. 内容に関心がある	22 名	61.1%	b. 講師に関心がある		0.0%
c. 男女共同参画に関心がある	1 名	2.8%	d. 保育が利用できる	13 名	36.1%
e. その他		0.0%			計 36 回答
その他内容					

### 3. エポック10の講座に参加したことがありますか？

a. 初めて参加した	18 名	81.8%	b. 2～3回	3 名	13.6%	c. 4回以上	1 名	4.5%	計 22 名
よかった講座、内容:									

#### 4. 講座の内容を10点満点で評価すると？(○はひとつ)

平均 8.7 点

10. 満足	7 名	31.8%	5. ふつう		0.0%
9.	6 名	27.3%	4.		0.0%
8.	7 名	31.8%	3.		0.0%
7.		0.0%	2.		0.0%
6. ふつう	2 名	9.1%	1. 不満足		0.0%
			0. 未回答		計 22 名

#### 4. の理由

- ・自分自身の事について考える時間が取れて良かったです。
- ・自分が元気になるもの/ことを忘れてしまっていることに気付いた。次回以降も楽しみです。
- ・要求される事が少なく気楽だった。楽しかった。
- ・楽しい時間を過ごせた。
- ・内容を掘り下げ、浅いに不満有り。
- ・初回ですが、色々なママさんと話せたり、講師のお話も大変おもしろく、今後の回がたのしみです。
- ・思っていたより気軽に受けられ、楽しめました。
- ・自分をふり返り、他の方とお話し、よい気分転換になった。
- ・大学時代をおもいだした。
- ・子供を持つお母さんとお話できる。正解、間違いはないというところ。
- ・グループの紹介ができなかったのが、うちとけるまで時間がかかってしまったのが残念。次回は違う席でもいいのでしょうか？
- ・託児用のお湯を用意していただけるとありがたいです。
- ・気持ちがスッキリして楽しかったから。
- ・自分の時間を持ち、考える機会をもてる。子供も子供だけの時間をもてる。
- ・とても親しみやすく、楽しい講座だった。
- ・新しい人とお話した。先生の話し方が好き。

#### 5. 講座をとおして男女共同参画社会(一人ひとりの個性や能力が尊重される多様性にあふれた社会)について気づきがありましたか。またそれは何ですか？(○はひとつ)

平均 3.3 点

5. はい	1 名	4.5%	2.		0.0%
4.	7 名	31.8%	1. いいえ	2 名	9.1%
3. どちらともいえない	12 名	54.5%	0.未回答		計 22 名

#### 5. の気づき

- ・まだピンと来ていないところがあるけれど、次回以降気付けたらいいと思っています。
- ・普段意識せずこなしていることに目を向けるきっかけになった。
- ・母親だけががんばっていることから皆でがんばれば。
- ・母としての規範が社会的に求められる傾向にあること。

#### 6. 講座で使用したテキストブックはいかがでしたか？感想をお聞かせください。

- ・分かりやすかったです。
- ・しっかりしていて、良いと思う。
- ・分かりやすい。もう少し小さいと持ち歩きやすい。
- ・分かりやすい。

- ・分かりやすかった。
- ・見やすくて良い。
- ・見やすくて使いやすい。
- ・見やすい大きさと、冒頭のイメージ切り張りもたのしかった。
- ・分かりやすかった。
- ・自分で書きこむところが色々あり面白かった。
- ・テキストとスライドが一致すれば良いと思った。
- ・文字が大きく見やすかった。書き込むところがあったので、きちんと考えられた。
- ・とても分かりやすくてよかったです。
- ・紙質が良すぎる。
- ・文字が少なめで気軽に読めそうな印象が良いです。
- ・良かった
- ・わかりやすかったです。
- ・わかりやすく、あとでよみかえせてよい。
- ・記入できてよかったです。

## 7. 講座に参加し学んだこと、得たものは何ですか？

- ・自分の事をもう少し認めてあげるのもアリなんだと思いました。
- ・同じくらいの小さいお子さんを育てている人と話して、共感する部分が多かったのしかった。
- ・自分の気持ちが客観的に見れるかもしれないと思った。
- ・“自分”に目を向けれた事(久しぶりに)
- ・自分を振り返ることができた。
- ・自分を振り返る時間。
- ・レジリエンスの大切さについて。
- ・自分だけじゃないんだなあと思いました。
- ・頑張りすぎないこと。ささやかな幸せに目を向けること。
- ・落ち着いて自分の好きなことを振り返ることができた。
- ・今日から生活を見直すこと。
- ・レジリエンス＝やわらかい強さ
- ・自分が楽しければストレスに負けない。
- ・がんばりすぎて、自分に、まわりに、つぶされないようにすること。
- ・レジリエンスについて。
- ・自分に向きあう時間をもとうと思った。
- ・あつという間ddした。今後も楽しみです。
- ・自分をもっと大切にしようと思いました。

## 8. ご意見、ご感想、印象に残ったキーワードをお聞かせください。

- ・「できたこと」を貯めるというのは初めての発想でした。
- ・正解も不正解もない。
- ・レジリエンス
- ・コラーージュワークは各々の個性が出ておもしろかった。
- ・お菓子おいしかったです。自分の飲み物を用意する時間がなかったので、もらえて嬉しかったです。
- ・“レジリエンス”“ストレス”
- ・普段、自分を振り返る機会がないけど、こういう機会があつてうれしい。
- ・一時保育は初めてのため不安dしたが、たくさん同じような立場の方がいらして安心しました。思い切ってきてよかったです。
- ・先生が気軽なかんじで良かった。
- ・“ストレス”“うれしいこともストレスになる”自分のしあわせのもとがまだよく分からないので次回も楽しみにしています。
- ・「みんながんばっている」という言葉
- ・レジリエンス
- ・「メンタルヘルスになるのは、その人が弱いからではない」ということ。

- ・来週もたのしみにしています。
- ・自分にやさしくすること。言語化することの力をあなどらない。
- ・みんな頑張ってると思いました。私はもっと頑張った方が良いと思いました。

### 8. 今後どのような講座を受けてみたいですか？(複数可)

a. 性別役割	b. 性暴力・DV防	c. ワーク・ライフ・バランス	d. 子育て	e. 介護	f. 法律・政治	g. 働き方	h. 男性の生き方	i. 子どもの男女共	j. 高齢者の男女共
3名	1名	12名	17名	2名	1名	8名	1名	3名	1名
k. LGBT	l. セクシャル・ハラスメント	m. 貧困	n. その他	未回答	その他	・コーチング			
1名	3名	2名	1名	1名	内容				

## 受講者アンケートまとめ

講座名	子育てママの未来計画 レジリエンス編	一般参加者合計	20 名
講師	並木 有希さん(東京家政大学人文学部准教授) 平野 順子さん(東京家政大学短期大学部准教授)	アンケート集計枚数	20 枚
受講日	令和2年2月14日(金) 午前10時半～12時	事務局 スタッフ等	3 名
会場	研修室2	参加者 合計	23 名

講師は含めない

### ◎お住まい

豊島区	豊島区以外	合計	※豊島区以外の市区町村名
19 名		19 名	・未回答1名

### ◎年代別

～10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	年齢未回答	合計
	2	10	5					3	20 名

### 1. この講座を何で知りましたか？(複数可)

a. 広報としま	6 名	28.6%	b. チラシ	6 名	28.6%	c. 区ホームページ	2 名	9.5%	
d. 知人・友人	7 名	33.3%	e. メルマガ		0.0%	f. その他		0.0%	計 21 回答
b. チラシの場所	・区民ひろば3件・雑司が谷・エポック10・保健所								
d. その他内容									

### 2. この講座に参加した理由はなんですか？(複数可)

a. 内容に関心がある	20 名	62.5%	b. 講師に関心がある	1 名	3.1%
c. 男女共同参画に関心がある	1 名	3.1%	d. 保育が利用できる	10 名	31.3%
e. その他		0.0%			
その他内容					
					計 32 回答

### 3. エポック10の講座に参加したことがありますか？

a. 初めて参加した	13 名	65.0%	b. 2～3回	6 名	30.0%	c. 4回以上	1 名	5.0%	計 20 名
よかった講座、内容:									

#### 4. 講座の内容を10点満点で評価すると？(○はひとつ)

平均 9.0 点

10. 満足	8 名	40.0%	5. ふつう		0.0%
9.	6 名	30.0%	4.		0.0%
8.	5 名	25.0%	3.		0.0%
7.		0.0%	2.		0.0%
6. ふつう	1 名	5.0%	1. 不満足		0.0%
			0. 未回答		計 20 名

#### 4. の理由

- ・普段自分をほめる、認める事がないので振返ることができて良かったです。
- ・普段ほめられることがないので、ワークを通して何気ないことでもほめてもらえて嬉しかった。
- ・子どもと別の時間を持ち、母どうしでいろいろ話せた。
- ・今日からまた頑張る力になった。
- ・託児でミルクを飲ませてほしい(できればお湯も用意してほしい)
- ・疲れている今の自分に合っていたし、楽しかった。
- ・同じ境遇のママ友と知り合え、更には自分自身をみる時間が持てた。
- ・おもしろかった
- ・同じような立場の方たちと自分のことをふり返る時間が持てた。
- ・講師の先生のエピソードにほっとします。

#### 5. 講座をとおして男女共同参画社会(一人ひとりの個性や能力が尊重される多様性にあふれた社会)について気づきがありましたか。またそれは何ですか？(○はひとつ)

平均 4.1 点

5. はい	7 名	38.9%	2.		0.0%
4.	5 名	27.8%	1. いいえ		0.0%
3. どちらともいえない	6 名	33.3%	0.未回答	2 名	計 18 名

#### 5. の気づき

- ・まだまだ母親(女性)の負担は大きいなと思いました。
- ・自分をほめてあげるチャンスになった。
- ・父親より母親に求められることが多い。
- ・やはり女性の社会復帰はまだ厳しい。
- ・母に対する世間のきたいの話など。

#### 6. 講座で使用したテキストブックはいかがでしたか？感想をお聞かせください。

- ・講座が終わっても、自分で振返るときに役立つと思いました。
- ・育児の合間にほっと出来る内容。自分と向き合える。
- ・大変分かりやすかった。
- ・書き込みスペースが十分あり、使いやすい。
- ・わかりやすい
- ・自分のエピソードに花が咲くのがうれしかった。
- ・良質紙→もっと考えても良いと思う。パツと思いついて書けない・・・ので、紙におとしこむのはとてもむずかしい(特に自分のこと)

- ・書き込みしやすく良かった。
- ・分かりやすく、記入もしやすくてよい。
- ・イラストが多く、わかりやすい。配置がすっきりしていて見やすい。
- ・もう少し小さいと持ち歩きやすい。
- ・とてもかわいくて、大事にした。
- ・自分で考えたことを書きこむことができ、使いやすかった。
- ・自分ができたことを発表して、グループの皆様にシール(ごほうび)をもらったこと。

## 7. 講座に参加し学んだこと、得たものは何ですか？

- ・もっと自分に優しく、認めるという事を意識しようと思いました。
- ・日々のちょっとしたことでも、できてすごいんだ！と思えるようになった。
- ・向上
- ・落ちついて自分を分析することができた。落ち込んでも柔軟性をもって立ち直ることが大切なことであり、その方法はいくつかあることが分かった。
- ・自分の良さ＝自分が大切にしていること、自分で自分が好きなところ、という考え方が好きです！
- ・自分をほめる機会がなかなかないので新鮮だった。
- ・自分をみつめる時間をもてた。
- ・また帰ってから頑張ろうと思えた。
- ・自分の事を客観的に見るのはむずかしい。自分は意外とちゃんとできてることもある(少しだけ)
- ・定期的に自分を肯定することの大切さを学んだ。
- ・日常で忘れていたこと、自分の良さを見つけることができてよかった。
- ・自己肯定感を得た。
- ・みんなそれぞれ長所がたくさんあっても、それに目を向けることが少ない。意識的に目を向けるようにするとよいということ。
- ・自分の気持ちに目を向ける時間が持てた。
- ・改めて自分の良さに気づき、頑張っていない時でも「いいんだ」と思えた。
- ・自分のよさがすこし確認できてよかった。
- ・自分のことをもっと誉めてあげるとのこと。
- ・ごほうびシールは子供も大好きだけど、親も大好きになりました。

## 8. ご意見、ご感想、印象に残ったキーワードをお聞かせください。

- ・自分の良さを探ることの大切さ。
- ・「自分をほめる」ということが印象に残りました。
- ・子育て世代の方々と話せて楽しかった。+能力話が多かったけどーの話もききたかった。講師の先生方が面白かった。常にほめてくれてうれしかった。席は決めておいてくれるといいナ。1.5Hは短いナ・・・
- ・“レジリエンス”のちからを身につけていきたいと思った。
- ・自分をほめる。
- ・よいところを発表し合うワークショップがとてもよかったです。
- ・母親として求められている世間に惑わされていると気づけました。
- ・自分は自分が思っているよりも頑張っているのだと思った。前回、一時保育をお願いするのも初めてで不安だったが、よい方たちだったので安心して、今回も来ることができた。あと2回も来たいと思います。
- ・自分のよさシール

## 9. 今後どのような講座を受けてみたいですか？(複数可)

a. 性別役割	b. 性暴力・DV防	c. ワーク・ライフ・バランス	d. 子育て	e. 介護	f. 法律・政治	g. 働き方	h. 男性の生き方	i. 子どもの男女共	j. 高齢者の男女共
2名	1名	13名	17名	2名		8名		2名	
k. LGBT	l. セクシャル・ハラスメント	m. 貧困	n. その他	未回答	その他	・防災 ボランティア ・女性の社会復帰			
2名	2名	1名	2名	2名	内容	計 52 回答			



## 受講者アンケートまとめ

講座名	子育てママの未来計画 家政学入門編	一般参加者合計	20名
講師	並木 有希さん(東京家政大学人文学部准教授) 平野 順子さん(東京家政大学短期大学部准教授)	アンケート集計枚数	20枚
受講日	令和2年2月21日(金) 午前10時半～12時	事務局 スタッフ等	3名
会場	研修室2	参加者 合計	23名

講師は含めない

### ◎お住まい

豊島区	豊島区以外	合計	※豊島区以外の市区町村名
20名		20名	

### ◎年代別

～10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	年齢未回答	合計
	2	10	7					1	20名

### 1. この講座を何で知りましたか？(複数可)

a. 広報としま	6名	30.0%	b. チラシ	6名	30.0%	c. 区ホームページ	2名	10.0%	未回答・1
d. 知人・友人	6名	30.0%	e. メルマガ		0.0%	f. その他		0.0%	計 20 回答
b. チラシの場所	区民ひろば、雑司ヶ谷、IKE・BIZ3階、保健所								
d. その他内容									

### 2. この講座に参加した理由はなんですか？(複数可)

a. 内容に関心がある	20名	71.4%	b. 講師に関心がある		0.0%
c. 男女共同参画に関心がある		0.0%	d. 保育が利用できる	8名	28.6%
e. その他		0.0%			計 28 回答
その他内容					

### 3. エポック10の講座に参加したことがありますか？

a. 初めて参加した	12名	60.0%	b. 2～3回	6名	30.0%	c. 4回以上	2名	10.0%	計 20名
よかった講座、内容：									

4. 講座の内容を10点満点で評価すると？(○はひとつ)

平均 9.3 点

10. 満足	12 名	63.2%	5. ふつう		0.0%
9.	4 名	21.1%	4.		0.0%
8.	1 名	5.3%	3.		0.0%
7.		0.0%	2.		0.0%
6. ふつう	2 名	10.5%	1. 不満足		0.0%
			0. 未回答	1 名	計 19 名

4. の理由

- ・自分の生活を見つめ直す。自分の時間が作れる。
- ・書くことで自分の考えがまとまること。
- ・自分について考えるなんて、考えたこともなかった事に気付けた。
- ・皆さんの意見が聞ける、先生の意見が聞ける。
- ・集中して楽しい時間を過ごせた。
- ・講座の内容が、共感できるものが多い。

5. 講座をとおして男女共同参画社会(一人ひとりの個性や能力が尊重される多様性にあふれた社会)

について気づきがありましたか。またそれは何ですか？(○はひとつ)

平均 4.0 点

5. はい	9 名	45.0%	2.		0.0%
4.	1 名	5.0%	1. いいえ		0.0%
3. どちらともいえない	10 名	50.0%	0.未回答		計 20 名

5. の気づき

- ・女性の方が人間としての変化が大きい。
- ・子育てから解放された自分が未来にいること。

6. 講座で使用したテキストブックはいかがでしたか？感想をお聞かせください。

歯車の9ページが分かりやすかった。  
 内容が重すぎず、良かった。  
 見やすく、わかりやすかったです。  
 分かりやすかった。  
 カラフルで自分自身を見つめなおすきっかけになるテキスト  
 良かった  
 あとから読かえしても面白い。  
 とても分かりやすい  
 わかりやすく、見やすくてよかった  
 書き込みやすく、カラフルで見やすかった。  
 わかりやすい。

イラストが多く、わかりやすい。  
 分かりやすい、記入しやすい。  
 わかりやすい。  
 装飾がきれいで書きこむ学習するのが楽しくなる  
 レジデンスのテキストよりキレイでかわいく良かった。  
 イラストがかわいいので大事にしていきたい。

### 7. 講座に参加し学んだこと、得たものは何ですか？

- ・自分の時間を作る。子離れした時に自分に残るものを何か探したい。
- ・過去の自分の好きだったこと忘れてました。振り返ることが出来ました。
- ・自分の時間を持つこと。
- ・忘れていた過去の自分。
- ・自分の時間を作るために工夫する事。
- ・自分の価値観、やりたい事の明確化。
- ・自分を大切にすることの大切さ。
- ・生活の考え方。
- ・家政一という分野が初めてだった。
- ・自分がいかに母として時間を使っているかに気付いたこと。
- ・自分の振り返りが出来て良かった。
- ・自分の生活を棚卸してみる事が出来て良かったです。
- ・自分軸で考える事の大切さ。
- ・自分がどんな自分だったか振り返った。
- ・自分の事を考える時間があり、価値観を見直せた。

### 8. ご意見、ご感想、印象に残ったキーワードをお聞かせください。

- ・ライフイベントで生活が変わる。
- ・自分時間ほとんどないことに気付きました。
- ・自分をもっと大切にしたいと思った。
- ・子供がうまれて、自分の事が全く出来なくなる事に辛い気持ちを持っていたが、それが当然だと言われ、気持ちが楽になった。
- ・自分自身の時間の大切さ。
- ・生活資源。
- ・先生のエピソードが面白い。
- ・したいことを色々書いたけど、子供がいる今もとても幸せ。
- ・空の巣症候群。
- ・産前の自分を振り返るワークショップが面白かった。

### 9. 今後どのような講座を受けてみたいですか？(複数可)

a. 性別役割	b. 性暴力・DV防	c. ワーク・ライフ・バランス	d. 子育て	e. 介護	f. 法律・政治	g. 働き方	h. 男性の生き方	i. 子どもの男女共	j. 高齢者の男女共
3名	3名	7名	13名	1名	2名	6名		3名	
k. LGBT	l. セクシャル・ハラスメント	m. 貧困	n. その他	未回答	その他				
1名	2名	1名		6名	内容	計 42 回答			

# 板橋区 いたばし I (あい) カレッジ (3回連続講座) 「ママでもなく、妻でもない“私”を考える」

参加者アンケート 結果・3日目ワークショップの意見 ※自治体によるアンケート集計結果

日 時：令和元年6月6日・13日・20日(木)

10:00～11:30

会 場：成増アクトホール洋室(託児会場：和室)

参加者数：6日10人、13日12人、20日8人  
(延べ30人)

託 児：6日8人、13日10人、20日7人

アンケート提出数：8

1. この講座を何でお知りになりましたか？

- ①広報いたばし 0人
- ②チラシ4人  
(施設名 しまじろうコンサート ※文化会館、赤塚庁舎、児童館、蓮根地域センター)
- ③ホームページ 1人
- ④友人・知人から 2人
- ⑤その他(子育てママの個別カウンセリング) 1人

2. セミナーに参加したきっかけは何ですか？(複数回答可)

- ①講師に興味・関心があったから 3人
- ②セミナーの内容に興味・関心があったから 7人
- ③託児付きだったから 5人
- ④友人・知人に勧められたから 1人
- ⑤その他( ) 0人

3. 講座の内容はいかがでしたか？

- ①満足できた 7人
- ②おおむね満足できた 0人
- ③あまり満足できなかった 0人
- ④満足できなかった 0人
- ⑤未回答 1人

4. 板橋区男女平等推進センター「スクエア・I(あい)」について、ご存知ですか？

- ①利用したことがある 11人
- ②利用したことはないが知っている 33人
- ③知らなかった 44人

5. 講座講座の中で、特に印象に残っている内容や言葉があれば教えてください。

- ・言語化する力を侮ってはいけない
- ・周りに言いたくないことは言わなくていい
- ・自分のよさを発揮している時の「できたこと」を話し、シールを貼ってもらったこと
- ・自分のできないことを探してしまいがちだけど、十分がんばっている
- ・意識的に自分のコンディションを整える
- ・「レジリエンス」という言葉で、いま自分に必要なことを言語化してもらえたこと
- ・自分の中の話だけでは終わらず、最後に政治参加についてお話ししていただけたことがすごく良かった
- ・政治を変えなければならないと思いつつも後回し、気づかないフリをしていたところにお尻を叩かれたような気持ちです。
- ・謙遜しない
- ・認める
- ・育児などのポジティブなライフイベントもストレスであるということ
- ・自分を客観視すること
- ・自分の置かれている状況を冷静に考え、今後のことなど改めて考えるきっかけになった。
- ・“子育てしているママは充分頑張っている。もっと自分を褒めてあげて良い”と言われた時は、自分のやってきたことを評価してもらえたような気がして、心がホッとした。
- ・価値観が時間と共に変化するのは当たり前のこと。
- ・完全に過去に戻るのが人生ではなく、新しく手に入れた能力を手にかけてからの人生を歩む

- ・過去の棚卸をする事で無駄に過去をなつかしんだり、後悔しない
- ・幸せな変化（結婚・出来事）にもストレスはつきもの
- ・お母さんはがんばっている
- ・日本のお母さんは期待されすぎている

6. その他、自由意見. その他、自由意見ががありましたらありましたらお書きください。お書きください。

- ・区民ではありませんが、保育園に落ちてこれから退職（2歳の育休終わり）にあたりモヤモヤしてしまいましたが、新たな気づきが得られました。託児も初めてでしたが、無料で見てくださりありがとうございます。毎日お菓子とお茶もごちそうさまでした。
- ・本当に学びがたくさんある講座で感謝しております。このような講座をもっと開いていただけたら嬉しいです。

※ただ、託児のスタッフさんのリーダーの方が誰だか分からなかったり、託児のスタッフからの伝言に何も書かれていなかったりと、今までの託児ではなかったようなことがあったので、少し改善していただけたら嬉しいです。

- ・最初は自己啓発セミナーとして参加したが、それ以上に学ぶこと、心に響くことの多い講座でした。子ども2人を託児させていただいて本当に助かりました。
- ・先生とたくさんもっと話がしたいと思いました。ありがとうございます。
- ・託児付きの講座で、短い時間ながらじっくり取り組むことができ、大変良かったです。1回限りでなく、連続講座なので内容の定着を図ることができ、今後もぜひ続けていただきたいと思います。ありがとうございます。
- ・託児付きでとても助かりました。その後にランチ会などがあると、もっと交流が深まるかなと思いました。
- ・私は、3週連続講座は全く辛くありませんでした。楽しみにしていました。大学の方で3か月連続で講座があったら、ぜひ参加してみたいです。今後区外に移住してしまうかもしれないので、区外からも参加できるようにしてもらえると嬉しいです。
- ・飲み物やお菓子等のお心遣いがうれしかったです。
- ・先生の楽しいお話しに心が軽くなりました。
- ・先生のオシャレなお洋服やアクセサリに良い刺激を受けました。
- ・普段、お会いすることのないお母さんたちと色々な意見交換できたのも楽しかった。日々、がんばっているお母さんたちがこんなにも沢山いるんだなと心強い。同じ気持ちを共感しあえてうれしかった。もっと自分をほめてあげたい。友人に先生がいいから行った方が

言われてきましたが本当によかったです。ありがとうございました。

\* 3日目ワークショップ「こういう町に住みたい」全意見

#### 【教育】

- ・モンテッソーリなど、理念のある教育
- ・「みんなと同じ」を目指さない教育
- ・保育所を利用できる大学の生涯学習プログラムがほしい！
- ・教育委員会・学校がもっと子どもによりそう教育に目を向けてくれたらいいのにな。
- ・ママ同士の情報交換の場
- ・学校の先生を増やす
- ・教育面の格差がないこと（塾に行かなくても大丈夫）
- ・子どもがのびのびできる場所がほしい
- ・安く行ける大学！ OR 返さなくてよい奨学金
- ・もっと自由な奨学金（給付）
- ・放課後も安全に過ごせる環境（設備、大人の目）
- ・小学校の担任の先生が2人だったらいいのにな
- ・地域に公開授業（学校工場企業）（慶応志木高校の自然観察会、生物の授業

#### 【子ども】

- ・保育園が不足している。お母さんたちが安心して働けるようにしてほしい。
- ・子どもとバスや電車に乗りやすい空気づくり
- ・パパが他のママと話せるセミナーなど
- ・誰でも入れる保育園
- ・予防接種が全部無料だといいな・・・
- ・託児の充実（イベント・買い物・お出かけ）
- ・子育てのお金をかからなくする
- ・老人ホーム保育園 赤ちゃんボランティア

#### 【社会全体】

- ・外国の方々も一緒に楽しめるイベントがあったらいいのにな
- ・医療保険無償化
- ・同性婚もOKな制度、雰囲気
- ・年寄りとの交流+子ども
- ・他の人の決定にあれこれ言わない寛容な人々
- ・夫婦別姓をえらべる
- ・子どもが欲しいカップルに子どもを（里親・養子
- ・IT技術を駆使して、諸手続きをもっと便利にする
- ・妊婦健診の助成券を全国どこでも使えるようになってほしい

## 【街づくり】

- だって広い空き地 芝生でピクニックができるような何の決まりもない場所（クリーニングはボランティアか有料）
- 大声で叫んでもよくて、古着の交換会とか地域の人たちが集まっているいろいろなできるフリーな場所、Wi Fi 有り（だって広くて陽が入る、フローリング）
- 自転車レーンをきちんと作って歩道を広くした道がほしい
- ベビー室のある施設を増やす。気軽にどこでも入れるお店
- 子連れでも入りやすい、周りの目を気にしなくてすむ飲食店が増えてほしい
- みんなで作る本当にきれいなガーデン 畑がほしい
- 大学（学食、ベンチ、図書館、学祭）
- 夏に子どもも大人もゆったり涼める広場
- 自転車が通れるレーンを安全に整備してほしい
- 地域のいろいろな人々が集えてコミュニケーションをとることのできる場所があったらいいのにな
- 公園などの公共の場に自由に弾けるピアノがあったらいいのにな
- ドトール
- 移住のしやすい環境
- もっと花火ができる場所があったらいいのにな
- カフェが併設されている木のおいにする図書館
- ボールあそびができて、見守りの人がいつもいる公園
- いろいろなスポーツができる開かれた場所
- 足湯
- プラネタリウム
- 子どもと親と一緒に楽しめる施設の充実（科学館とか）
- 遊び場 自然いっぱい
- 朝霞の森プレーパーク（火おこし OK、ボール遊び OK）
- じゃぶじゃぶ池
- 過ごしやすい公園 居心地のいい場所
- 街並みがキレイ（ハトのフンがヤダ！）
- 通学路の安全
- 道の整備 おむつ交換台の設置
- 交通量の多い道路で事故が減ってほしい 安全になってほしい
- 広くて安全でキレイな公園&トイレ（洋式もつけて！）

# 女性未来研究所・生涯学習センター共催講演会 「超少子高齢社会と女性の生き方・働き方」

樋口 恵子

**司会:** 私は本日司会を務めさせていただきます東京家政大学女性未来研究所副所長の並木と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日は、女性未来研究所、生涯学習センター共催の講演会で、「今、女の生き方・働き方」というタイトルで、樋口恵子先生に講師をお願いしております。

まず、この会に先立ちまして、会の開催にあたりまして、東京家政大学生涯学習センターの共催の労をお取りいただいたことを、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

講師の樋口先生をご紹介いたします。と言っても、有名なのでご紹介の必要もないかもしれませんが、樋口先生は、東京家政大学女性未来研究所の所長でいらっしゃいます。東京大学文学部美学美術史学科および新聞研究所本科を修了し、時事通信社、学習研究社、キャノン株式会社などの勤務のあと、評論活動に入られました。内閣府男女共同参画会議議員、厚生労働省社会保障審議会委員、社会保障国民会議構成員、消費者庁参与などを歴任。現在は、NPO 法人「高齢社会をよくする女性の会」理事長、東京家政大学名誉教授でいらっしゃいます。著書はもうご紹介しきれないぐらいたくさん、たくさんあるのですけれども、新刊『老〜い、どん!』という名前のお〜いというのは老いるという、このあと先生からもご紹介があると思うのですが、新しい本が婦人之友社より、2月、出版予定でございます。

本日は先生のいろんな生きてきた中からのお話をうかがいながら、子どもの育て方から老年期に至るまで、女の一生ということはどういうことがあり、そのことが我々の生活にどう影響を与えていくのか、心構えのようなものもうかがえる貴重な機会になっております。それでは樋口先生、どうぞよろしくお願ひいたします。拍手でお迎えください。

並木先生、丁寧なご紹介をいただき、まことにありがとうございました。今日はまだ授業時間中なので、現役の学生さんとそれから本学生涯学習センターとの共催のもと、地域住民の皆さま、中高年の方が多いようにお見か

けしますが、二つの世代の方にお出かけいただき、本当にうれしゅうございます。よく「世代間対立」と言われますが、「今の乙女は明日のばあさん」「今日の若者あすはじいさん」でありまして、公平なことに人は必ず年老い、そして必ず死にます。人生の一回性、死の必然性、公平性というものの上に立ち、もちろん多くの運不運はありますが、私は最大多数の人々が、いつでもどこでも運命に挑戦できるような、そんな人生の条件が整った社会を築きたいと願って生きてきました。今もそう願いつつ、老いの道を毎日、下り坂を意識しつつ歩んでいます。

今年には戦後 75 年。戦争（第二次大戦）に日本がかかわった期間は足掛け 15 年（1931~1945）に及び、世界最長期間です。イギリス、ドイツが 7 年、アメリカは 4 年しか戦っていません。私はときどき、日本人が目先の利害に夢中になったり、他の諸国に比べて「企業戦士」などということばが生まれ、過労死（あえて言えば戦死）がなかなか後を絶たないのは、あの近過去の大戦争が長過ぎたせいではないか、と時折思います。戦時体制という非日常の日常化があまりにも長く続いたために、日本人は日常の平和の尊さも退屈さも辛抱強さも忘れ果てて、何となく進軍ラッパが似合う社会が続いてしまったのではないのでしょうか。

いずれにせよ、日本社会の戦前と戦後で何が変わったかと言われれば、すべて人口に関することから出発すると言っても過言ではありません。人口の基本的数字、構造的変化を踏まえつつ、女性の未来について必要なこと、配慮すべきことを述べさせていただきます。女性の未来の輝きが、男性との利権の争奪戦ではなくて、結果として男女双方、あらゆる人々の幸せにつながるように考えるのはもちろんのことです。国連の SDGs の標語「だれ一人置き去りにしない持続可能な社会へ」は、私たちの目標です。<sup>(注1)</sup>

思いがけない人類への試練ともいべきコロナ禍によって、2020 年の地球上は今、混乱の中にあります。人間の基本的性格ともいえるコミュニケーションを避けなければ生き延びられない、という試練に直面しています。私たちがこの試練にどう対応したか、歴史の一コマの中

にしっかり記録され、記憶され、検証されなければならないと思います。悲劇のあとに人間ならではの良きものを生む力を今、皆さまと共に備えたいと存じます。

この稿は2019年11月14日、学生さんと地域の皆さまにお話した項目を基本とし、その後のコロナ禍の動きが拡大するのを見据えながら、私からの直近のメッセージとして2020年9月現在、大巾に書き換えました。変化を踏まえつつ、人生100年を生きる女性の力を、ご自身と社会双方に役立てる生き方をして下さるよう切に願います。せっかく生まれてきたのですから。

(注1) 国連のSDGsは Sustainable Development Goals の略、国連総会で採択された2016年から向う15年間の国際的活動目標、No one Leave Behind (“だれ一人置き去りにしない社会”がスローガン。以下17項目の具体的目標を定めている。(1) 貧困、(2) 飢餓、(3) 健康と福祉、(4) 教育、(5) ジェンダー平等、(6) 水やトイレ、(7) クリーンなエネルギー、(8) 働きがいも経済成長も、(9) 産業と技術、(10) 不平等をなくす、(11) 住みつけられるまちづくり、(12) つくる責任つかう責任、(13) 気候変動対策、(14) 海の豊かさを守る、(15) 陸の豊かさを守る、(16) 平和と公正、(17) パートナリーシップで目標達成

## I なにが変わったか

### 人口構成—ピラミッドから先細りの糸へ

申し上げたいことは山々あるのですけれど、何より大きな変化は、戦前(1935.昭和10)と比べて平均寿命が7割以上も伸びたこと。男性は44.82年から81.41年へ、女性は46.54年から87.45年へ伸びました。現在の数字は、女性世界2位、男性世界3位で、日本はベスト3の常連であり、日本は基本的に健康長寿を支える条件に恵まれた豊かな国です。

緊迫した国際的国内的対立や、この1~2年クローズアップされた地球温暖化問題の陰であまり目立ちませんが、「高齢化」というのは実は先進国を中心とする世界共通最大課題の一つです。全人口比65歳以上をもって「高齢化率」と呼びますが、日本は世界断頭の28.7%、すでに2位に水をあけた世界の比率で、今後ますます増える見込みです。日本の国内的課題の難問であり、私はこの難題を乗り切るために、介護保険に対する負担を国費も個人もさらに多く担うなど、抜本的な改革が必要と思いますが、これはこの20年間ずっと先送りにされてきました。

そして、重厚長大化した介護は、家族だけで担いきれるものではありません。2019年11月、福井県で70代の嫁が90代の義父母と夫を殺し、自害をはかる(未遂)事件が人々を驚かせました。もう20年来、周囲から称賛的だった嫁だそうです。老老介護、介護者もまた老いて心身ともに衰弱する。その介護者の状況について、

地域行政の目配りと介入の必要をあらためて痛感した事件でした。

この20年、せつかくできた介護保険は、人手不足、予算削減の結果、要介護認定に要する期間は長くなり、介護サービスの内容は厳しく制限する傾向が強くなっています。これでは、いくら政府や識者が「在宅」を掲げても、「おうち(在宅)はだんだん遠くなる」は厳然たる事実です。頼みの綱の施設・特別養護老人ホームは入居資格が要介護ⅠからⅢまで引き上げられました。要介護Ⅲは、まずは一日中目が離せない「寝たきり」に近い状態です。

私は日本中から聞こえてくる介護負担の嘆きを早く政策責任者が聞きつけて、国民的論議を起こし、日本社会で各家庭や個人が担っている介護負担を、国民全体の間でどう担い合うか、財政面は勿論、労働力の面でも、介護の場の面でも、制度の円滑な運営の面でも適切な政策を掲げてほしいと思います。

2020年の年初以降、日本は世界に広がるコロナ禍に巻き込まれ、国民全体がかつて予想もしなかった困難の中にいます。コロナによる困難な状況を乗り越えることが第一の課題ですが、日本社会に課せられた近未来の課題は、これから解決していかなければなりません。

まず、私たちこの国の国民の未来に課せられた課題を「超高齢化」という視点からあらためて見据え、対策を立てていきましょう。

## II 私たちの確実な未来

### 人生100年、寿命の延伸、老後の拡大、少子化

どんな時代でもどんな場所でも、その社会の構成の基本を決めるのは人口です。人口構成です。日本のこれからの人口構成が、世界の少子高齢社会のトップランナーであることはよく知られています。平均寿命は女性世界第2位、男性第3位。今の80代の人たちが生まれた1940年には、戦中でしたが国勢調査が行われ、平均寿命は男性46.92歳、女性49.63歳でした。ということは平均寿命が人の一生のうちに7割も伸びた、ということになります。20歳からおとなの人生と仮定すれば、人生はほとんど「倍増」です。

私たちが立ち向かう男女共通の未来は、この長寿化—長くなった人間の一生を、すべての人々の幸せにつながるように構築することです。長く生きれば、短命がもたらした多くの悲劇から決別することができ、長寿は基本的に人間の幸せにつながります。歴史的に一つの国が長寿を獲得する要件はいろいろあるでしょうが、最大の



要件は、平和と豊かさです。Peace と Development です。

1945（昭和20）年、長い戦争は国土の多くを焦土と化しての無条件降伏で終わりました。国勢調査は不可能でした。それでも日本の官庁は手に入る限りの資料を使って、簡易生命表という形でこの年の平均寿命に近いと思われる数字を記録しています。それによると、終戦の年の「平均寿命」は女子37.5歳、男子はなんと23.9歳。1939年9月から1945年9月までの日本の死者数は310万人。広島、長崎、沖縄、民間人も多く亡くなりました。死者は、女性よりも軍人を含む男性はるかに多く、これらの数字の男女差をつくっています。私の結婚相手は5歳年上で終戦時20歳。この年頃の男性の話を聞く機会はよくありましたが、多くの方が「自分の寿命は20歳台だと思っていた」と語っていました。私は中学（当時は高等女子学校）に入ったばかりでしたが、昨日までの「潔く国のため命を捨てよ」という教育が、「命を大切に、個性を伸ばせ」という教育方針の大転換に戸惑いながらも、ああ、生きていいんだ、という喜びが徐々に全身に広がっていったことが忘れられません。長寿は平和が最大の条件です。1945年に戦争が終わると、翌年の1946年は、発疹チフスが流行ったり、結核は国民病と言われ、私も初期の肺結核で学校を休学して寝込んでいました。食糧不足は著しく、栄養失調という名の餓死をした人は少なくなかったでしょう。ほんの何歳か年下の少年たちが上野の地下道で戦災孤児と呼ばれていた場面を、何か後ろめたい思いで早足に通り過ぎたのを覚えています。

そんな貧しい状況にもかかわらず、戦争が終わった、空襲がなくなった、というだけで1947年の平均寿命は男子50.06歳、女子53.96歳と戦前の平時を上回る数字に回復しています。そして日本の経済が復興するに従って寿命は伸び続け、今や常に世界トップ3に位置する長寿国ということはすでに述べました。繰り返しますが、長寿の大前提は平和です。平和の条件のもとで経済が発展し、社会保障の支えなどが出来て平均寿命が伸びていきます。本学東京家政大学で学んだ人材が、日本国中で、平和に支えられて、国民の健康と生命の質を向上発展させるために貢献していることを、私は喜びにも誇りにも感じております。長寿の条件はいろいろありますが、基本的には平和と、出来るだけ格差少なく行きわたる豊かさです。人間が自らの力で創出し得るおよそ善なるものの結果、長寿があるのです。ぜひこの成果を受け継いで、あなたの長寿を大切に、他者の長寿も大切に人生を設計し、実践していただきたいと思います。

### III これからの長寿社会 明らかな未来について

アメリカに有名な経営学者・ドラッカーという人がいて、「社会を理解するには人口構造を知ることが必要」という意味のことを言っています。私は経営学については全く無知な人間ですが、社会を理解するために、人口構造の現状と変化を見直すことが大切だ、ということは身に染みて実感しています。

いろいろな政策も、その社会の人口構造に対応していないと上手くいきません。いくら新しい産業施設をつくらうにも、そこで働こうという人がいなければどうしようもありません。何よりも人口の予測というのは、めったに外れることがなく、天気予報よりはるかに正確です。

私は人口学に素人ですが、これから本章で述べることは、日本の過去の人口構造の変化と今後の推計に基づいています。近未来の社会は少なくとも以下の5項目が確実に現実となると思います。

- (1) ケアを必要とする大介護社会
- (2) 血縁が少ないファミレス社会
- (3) 新しい共生のための地域の創造
- (4) もう一つの働き方改革＝ワーク・ライフ・ケアバランス
- (5) 生涯学習社会 人生100年、スタートラインは何度でも

#### (1) ケアを必要とする大介護社会

私が最初に指摘しておきたいのは、大介護時代の到来です。現状から要介護高齢者の数がピークに達するのは2040年ごろと推計されます。要介護者は957万人に増加すると推計されます。大介護時代の到来です。要介護者が増えて、相対的に支える人口が減っていくのですから。

#### (2) 血縁が少ないファミレス (fami-less) 社会 (家族・血縁が減る社会)

時代の人口構造は前章で述べたとおり、おそらく有史以来初と言ってよい「家族・血縁の少ない人」が多い時代を迎えています。家族（ファミリー）が減る社会なので私は、ファミレス社会（家族減少社会）と呼んでおります。高齢世帯でひとり暮らしが激増し、すでに65歳以上の人がいる高齢世帯の27.4%。「老夫婦のみ」が32.3%（2018年）。長生きして配偶者に死別して独身になるだけでなく、今後は生涯単身の人が増える見込みです。直近の50歳通過時の独身率は男性23.4%、女性14.1%に達しています。世界には、たとえばスウェーデンやフランスのように、法定の婚姻率は低くても出生率

が下がらない国があります。フランスは常に先進国中第1位1.8~2.0の出生率を保っています。背景にはシングルマザーが差別されない事実があるようです。私は、妊娠したら何よりも子どもに嫡出の地位を与えようとする日本人の律義さというのは嫌いではありません。しかし、子どもが生まれやすく育てやすいのは、何よりも母一人の収入でも自立できる仕事があること、実の父親の扶養の義務が社会的公正として保たれること、母親の就労を保障するための出産・育児休業、保育所の整備、などが必要でしょう。

いずれにせよ、日本の未来は今よりはるかに独身が多いという「老いの大シングル社会」が到来します。夫婦でも同時に死ぬことはほとんどあり得ません。「老いと女性」については、後程述べつもりですが、ここでは、現在でも高齢単身者737万人のうち、女性は65%を占める圧倒的多数派だということを指摘するにとどめます。

そもそも日本の少子化は世代を経るごとに子どもの数の半減を繰り返してきました。現在、最高齢グループに属する80代以上（昭和一桁以前の生まれ）が生まれたころの合計特殊出生率は、5を超えていました。乳児死亡率が高く生後一年間に1割が死亡するという事実を計算に入れても、子どもの数は親の2倍。明治以来世代ごとにほとんど倍増する末広がりの文字通り人口ピラミッドを築いてきました。どの家にも「長男」が居て、そこへどこかの女子が嫁として親の介護をする、という日本型の老親ケアは、子の数が親の2倍ほどあって、嫁なる女性は実家の親のケアから完全に解放されていた——という人口構造によって成り立っていたのです。

日本の少子化が急激にすすんだのは、団塊の世代が生まれた直後の1950年から1960年の10年間で、3.65という数が1960年（昭和35）には、2.00を記録、以後2の大台を切って二度とそこまで上昇に転ずることはありませんでした。世は本格的な高度経済成長期を迎えていましたが、男は仕事、女は家庭という性別役割分業意識が強まった時期です。たとえば、高校における家庭科は、終戦当初男女とも選択でしたが、文部省（当時）の方針である「主婦養成」のため、女子のみ必須となったのが、1960年のことです。その後、国際条約である女子差別撤廃条約批准の要件として、私たちが願った「男女とも4単位必須」となったのは1989年、実施されたのは中学の技術・家庭科の共修が1993年、高校が1994年のことです。家庭は人間の生活の基盤であり、生活の場であり、その場には男女共々が参加して当然という考え方が、ようやく国の方針として採用されました。家族が少なくなるファミレス社会では、ますます男女の家庭参加と協力が求められます。（そのことは、2020年3月以降のコロナ禍で明確に立証されています。）

### (3) 新しい共生のための地域の創造

ファミレス社会でケアを担う家族が減り、一方で介護を必要とする高齢者が増え、労働力不足で今まで以上に子育て中の女性も就労を求められるとしたら、新しいケアの担い手はどこにいらっしゃるのでしょうか。国は福祉政策で、企業も経営戦略として、一国の存在を賭けてケアを支える必要があります。同時に、家族の住みかである地域のあり方がクローズアップされてきます。幼い子ども、要介護の高齢者、心身に何らかの不自由を持つ障がい者の共通点は、毎日の満員電車による通勤などはとても不可能ということです。介護保険の保険者が国でも県でもなく基礎自治体（市区町村）となったこと、そして中学校区を単位に、地域包括ケアがすすめられていることに、私は基本的に賛成です。そこへ昔から「向こう三軒両隣」と言われた近隣の親しさをどうつなげるか——人生100年時代を無事に乗り切るためにはこうした地域の助け合いが必要です。

と言っても、近所隣りというのはある意味で一番気を使い合い「迷惑をかけない」ことをモットーに生きてきた現実があります。戦争中の「隣組」に相互監視のような苦い思い出のある方も少なくないでしょう。古くは「村八分」のような排除の論理も、これまた地域社会がつくった一種の掟でした。この地域を21世紀人生100年型共生の場に組替えていくのは容易なことではありません。しかしこれまで申し述べたような大変革の時代では、誰が介護を支え、この大介護社会を乗り切るかと言ったら、地方自治、情報の共有、住民の参加と提言を前提とした「共生」、住民を主体としたケアの創造と配分しか方法はないのでは、と思います。介護の場は施設か自宅か、の論争がありますが、私はどちらも本人の状態と希望によって地域の中によりよき在宅、よりよき施設を目指してほしいと願っています。これからあと30年ほどが急速に超少子高齢化が進行する時期です。若い皆さまがその主役です。

### (4) もう一つの働き方改革

#### ワーク・ライフ・ケア バランス

#### 「びんぼうばあさん」を防止のために

私は決して未来に絶望しておりません。試行錯誤しながら世の中はだんだんと「正解」に近づいているではありませんか。「正解」は一つとは限らないということも途中で気づきながら。

コロナ禍のせいではありますが、なかなか進まなかった在宅勤務やリモート会議が普及し、「働き方改革」という言葉がアフターコロナの合言葉となろうとしています。その働き方改革が、自由で柔軟な働き方をもたらし、

しばしば「日本型働き方」の見本とされた過労死などが根絶されてほしいと思います。何よりも、働く女性の非正規雇用率は、男性が約22.3%であるのに対して56.4%にも及びます。「非正規」は多くの場合、長期的雇用の保障がなく、低賃金で、休暇などの労働条件も低いことが多い。雇用を通して得られる社会福祉、社会保険なども、なかつたり著しく不利であることが多いのです。たとえば、老いの生活費の柱になる被用者年金（民間は厚生年金、公務員などは各種共済年金）に加入できないことが多いのです。被用者年金は、保険料を労働者と雇用主が同額を払います。本人だけが保険料を払う国民年金に比べて有利であることがこれだけでも分かります。今後、パートなどで働く女性に厚生年金加入の枠をひろげていく政策がすすめられるはずですが、目先の収入は保険料を天引きされて減るかもしれませんが、私は長い老後を考えて、加入することをおすすめします。女性は老いて一人暮らしになる可能性が高いことはすでに述べました。男女の一人暮らし世帯の家計を比べると、残念ながら女性の方が格段に貧しく、年収180万円以下は、男性は全体の三分の一ほどなのに、女性は半数を超えます。ひとりぐらし女性の4人に1人は年収120万円以下です。長い寿命、貧しい老後——これが現状の女性の老いの経済状況です。戦後も長い間「夫は仕事、妻は家事・育児」という性別分業意識が続いていました。夫は家計の柱・妻は働いても家計の補助。戦前から戦後を通して、日本人は「結婚好きな国民」と言われ、生涯に一度は結婚する人が9割以上を占め、多くの人が子や孫を持ちました。ファミレス社会の項で述べましたように、たった一世代の間に日本は、生涯シングルが一定の比率を占める社会になりました。女性の一生を、経済的に自立できる働き方に変えることは、社会の安定のためにも必要なことです。

今論じられている柔軟な「新しい働き方」に加えて、私はここで「もう一つの新しい働き方」を提言しておきたいと思います。それは、男女の家庭内での働き方の変革です。近頃日本では「ワーク・ライフ・バランス」ということばで政府も主導して、労働と生活、とくに家庭生活とのバランスをとろう、という動きが高まりました。2010年代に入ってから、育児・介護に関する休暇・休業制度が改善されました。「待機児童ゼロ」政策は今や全国にひろがっています。部下の男性に育休を取るようすすめる「育ボス」が推奨されたり、世の中の雰囲気はかなり変わってきました。私はここで、ワーク・ライフ・バランスにもう一つ、ケアを含めて「ワーク・ライフ・ケアバランス」を提唱したいと思います。ワークは勿論職場の労働。ライフは衣食住、趣味、社会参加を含む自由時間。ここにもう一つ「ケア」は、家族の代代的

循環に不可欠であり、社会全体の存在意義でもある「育児」「介護」を中心とするケアです。社会にはさまざまな障がいを抱え、他者のケアを必要とする人々がいいます。国の制度として施設などでケアが提供される場合もありますが、家庭で、家族の手でケアされることが多くあります。とくに少子高齢社会にあつては、高齢者へのケアの増大は必然です。私たちは家庭において行われるケアが、男女間でも世代間でもなるべく公平に分担され、ケアすることがケアラーたちの重圧でなく、人間として成長し、人生の学びと喜びに通じるような分かち合い方を望みたいと思います。ケアする人が幸せでなかつたら、ケアされる人も幸せになれません。人間の一生の中で、何らかの支援が必要な人を支えるケアこそは、この社会の連続性の基盤であり、歴史を刻む土台となるものです。人生の中で、ワークとライフとケアは三位一体として尊重される必要があります。

ケアは基本的に、ケアを受ける子どもや高齢者の居住地にあるべきです。遠くまでは通えません。ケアは地産地消が原則です。ケアには宅急便も持ち帰りもききません。介護を必要とする人のいるところ、その場を含む地域がケアの現場です。新しい地域の創造を促すものもあります。

さてそのケアの分野の男女差は極めて大きいものがあります。生理的な男女差である妊娠、出産、授乳に関しては、最も尊重すべき人間の中の違いとして、現在以上に公的制度上も、社会慣習上も敬意をもって支えられなければなりません。その上で、育児をはじめ高齢者・障がい者など家族のケアは、できるだけ男女が平等に担わなかつたら、職場での男女の働き方にも影響を与えるのは当然のことでしょう。「令和2年版内閣府男女共同参画白書」は、「家事・育児・介護」と「仕事」のバランスについて特集していますが、「夫婦＋子供世帯」で夫婦とも仕事をしている人の「仕事がある日」の育児時間は、女性が男性の2.1~2.7倍になります。最近の新しい傾向は「介護」についての男女差が縮まってきたことで、「同居の主な介護者」の男性比率は、32.9%（夫＋息子）と三分の一に達しています。20年前、介護保険制度が発足したときの男性比率は17%に過ぎませんでした。その後、少子化時代の子どもたちが介護者年代に達し、「親2人子2人」の時代となり、妻は「嫁」である前に娘として実家の親を介護せざるを得なくなりました。結果として「嫁」の介護が減って、「娘＋息子」という血縁の介護者が増えました。毎年10万人前後の介護離職の中でも徐々に男性の比率が増えています。とはいえ、今でも介護離職者の四分之三は女性です。女性の就労期間が短く、育児や介護で小間切れになることは、職場で安定した地位確保や昇進の機会に恵まれず、年金等の社

会保障の恩恵を受ける機会も少なく、男性に比べて老後貧しい生活を送ることもつなげられます。「貧乏ばあさん」の発生理由です。<sup>(注2)</sup>

日本政府のワーク・ライフ・バランス政策は、ここ数年の間にも2017年に育児・介護休業法が改正されるなど進化していますが、例えばこんな国もあります。合計特殊出生率常に2、前後と、先進国中第一の出生率を示すフランスでは、来年夏から妻の出産の際に取得できる「父親休暇」を現行の2週間から4週間に倍増、うち1週間は休暇を義務とするそうです。日本の場合、同様な父親休暇はありますが、義務化されていないので取得率は7.48%に過ぎません。(女性は8割以上取得)

働き方改革と言うならば、職場だけでなくもう一つの働き場所——家庭を中心とした働き方の改革が同時に進行しなかったら、職場における「もう一つの働き方」もスムーズに進まないのではないのでしょうか。

(注2) 内閣府男女共同参画局「高齢男女の自立した生活に関する調査(2008年)」。その後男女別高齢者の経済状況の格差について、明確な調査は見当たらない。

## IV そして政策決定に参画する

このところよくマスメディアで話題になるのは、日本における女性の社会参画の立ち遅れです。

男女共同参画をすすめるために、政府は2003年、2020年にはあらゆる分野の指導的立場に女性30%を目標とする、と決めました。当時は時間的な余裕もあり、達成を可能視する声もあり「202030」が時代の合言葉のような感もありました。女性側の働き掛けも一定の力を持ち、2018年には「政治分野における男女共同参画推進法」が成立という成果も上がりましたが、数値目標も罰則もない、極めて緩やかな法律で、その後1回の総選挙がありました。女性議員数は減りこそしなかったものの目立った増加ではありませんでした。

近ごろ、マスメディアで例年取り上げられるのは、国際機関・世界女性フォーラムが毎年発表する「ジェンダー・ギャップ指数」です。今年2020年、日本は151か国中121位。前年の149か国中110位からさらに順位を落としてしまいました。このジェンダー・ギャップ指数は、経済、政治、教育、健康の4分野で評価され、合計点で順位が決まります。日本は平均寿命が世界トップクラス、新生児死亡率は世界一低く、「健康」ではよい評価を得ています。「教育」も、ある時期までは「男子は四大、女子は短大」という傾向が長く続きましたが、少子化と「男女雇用機会均等法」の影響で高学歴女性の就労の道が拓けたことと相まって、教育における男女差

は減少しています。しかし、なぜか東大の大学当局は、女子比率を増やそうと女性専用の奨学金を作ったりしているのに、女性比率は20%を超えることはありません。

何といっても、経済の分野で115位、政治の分野では144位という男女格差がたたって、日本はトータルで先進国中最低の地位にあります。

「日本女性がそれで満足しているのだったら、順位が低くてもいいのではないか」という意見もあるでしょう。しかし、国のあらゆる政策を決める政治において、政策決定をするのは、基礎自治体(市区町村)から都道府県、国会に至るまで、選挙で選ばれた議員です。そして私たちは有り難いことに、原則として公平公正で安全な選挙が行われる民主主義国に住んでいます。男女の別以前に、各政党の主張によって支持政党を選ぶ、というのはむしろ当然のことでしょう。一方で、男性か女性か、生理的・社会的条件によって政策の優先順位が変わってくるのも当然です。人口からいえば多数派の女性、とくに平均寿命の差から高齢になればなるほど同世代の中で女性の比率が増加します。高齢期の経済的、家族的な条件は男女で大きく違います。政策決定には、議員の比率を含めて、男女それぞれの代表性が確保されるのが当然ではないでしょうか。

2011年、日本創成会議(座長・増田寛也氏)が、自治体の若年女性(20~39歳)の人口減少率が50%未満と以上に分けて、将来消滅するか存続するかのバロメーターとしたことで話題となりました。<sup>(注3)</sup>

若年女性の去就を自治体存続のバロメーターにしたところは慧眼だったと思います。この時点で、全国の基礎自治体数は1,683。そのうち女性ゼロ議会はこの時点で357。全体の21.2%を占めていました。女性議員の数は平均で11.8%。今の国会議員の衆議院女性比率は11%。ほとんど変わりありません。そして若年女性の流出率が高く人口の少ない自治体ほど、女性議員ゼロ議会の比率が高いことが分かりました。

家族の中で、嫁や女性の地位が低い伝統的な家父長制は、地方へ行くほど根強く残っていることが多いようです。何はともあれ、若い女性・中年の主婦が立候補して仲間と共に選挙運動に駆け回り、首尾よくいけば当選し、男性と共に議場で討論する——という風景が身近にある地域と、そんなことをしたら地域で嫌われるからじっとしている社会と——。本人が政治参加を志すかどうかは別として、女性たちが候補者を囲んで、伸び伸びと選挙運動できる地域のほうが、若い女性が「若い女性」なるが故に軽んじられることが少なく、地域でのびやかに息づき、定住できるに違いありません。立候補するかどうかは、本人の資質と選択によるべきですが、中年若老年を問わず女性が身近な課題を取り上げて立候補できる

かどうかは、その地域の未来を左右する条件だと思いません。地域を変える、社会を変える、一人一人がお互いに生きる喜びを持てるよう、少しずつでも現状を変える。議員になるならないは問わず、これからの人生を支え合う場合は、家族が急激に減少する今、地域が大きな役割を担います。どうぞ、それぞれの持ち味を活かして地域の中でもご活躍ください。東京家政大学の地域学習センターをどうぞご利用くださいますようお願い申し上げます。

(注3)日本創成会議、東日本大震災後の復興を新しい国づくりのきっかけにしようと2011年5月スタートした有識者会議。座長は、前岩手県知事・元総務相の増田寛也氏。2014年、同会議の人口問題減少問題検討分科会が、2040年には若年女性の流出が多い896の市区町村が人口減少による「消滅可能都市」になると発表、注目を集めた。

## 最後にひとこと 人生100年は生涯学習社会

「人生100年型社会」と誰もが言う大変な長寿の社会になりました。この時代を生きる資質はそれこそ多様性で、いろいろあっていいと思います。違うからと言って排除するのではなく、違いを面白がり、違いを取り入れて自らを成長させる寛容さが求められます。

これからを生きる人間として、必要な条件を挙げるとしたら、私は「勉強好きであること」をまず挙げたいと思います。

今も昔も、一日は一日、一時間は同じ一時間です。同じペースで時は刻まれていくのですが、人の一生は二倍近くに伸びました。その分、私たちは昔の人よりも、変化に対応し、自分自身を成長させ、昔よりずっと多様な人々と共に生きながら、今を未来に引き継いでいく立場にいます。

私たちは法治国家に生きていますが、その法律は時々刻々の人々のニーズ、意識の変化に応じて新しくつくり、あるいは改正されています。人生には山もあり谷もあります。自分の状況の変化に応じて、国や自治体のさまざまな法制度を利用しつつ、自分の生き方を高め、人生を楽しみ、一方でさまざまな場面で他者の人生にかかわり助け合っていく。勉強好きであり、人間好きであることも大切な資質だと思います。

「人生100年時代」と言われたと思ったら、政府や識者はたちまち生涯現役、70まで働こう、人によっては90まで働こう、などと言うようになりました。私も今年88歳になりますから「90まで働こう」の仲間かも知れません。

文科省も若年の未来を拓くばかりでなく、中高年のリカレント教育に力を入れる方針を打ち出しました。数年

前に訪れたスウェーデンでは、中高年の職種転換に奨学金を出していますが、50歳までの年齢制限を55歳に延長した、と聞きました。高齢者へのパソコンなどICTの講習は中年のボランティア先生を講師に地域の中で盛んに行われていました。

おとなの学びは、あくまでも個人の自由。しかし三代前の2倍、一世代前の6割増しに延びた人生。目まぐるしく勝手に変わっていくかのような環境。人生100年にわたって学びの場を提供していくのは国や自治体の「義務」ではないか、と思います。私は以前から、超高齢社会には「人生二度目の義務教育」が必要と主張してきました。この「義務」は学ぶ側の義務というよりは、そうした中高年の学習機会を提供する義務が国や社会にある、ということです。

超高齢社会という慣れない道を歩む私たち。でも冒頭から述べましたように、それは①平和と豊かさの所産であり、家族減少は②他人と助け合う必要を教えてくださいました。思えば「100年人生」は、ゼロ歳~10歳の人と100歳の人が③経験や思いを伝達することが可能になった、コミュニケーションが途方もなく多様になり、歴史が現実となっていく社会です。④そしてだれもが年を取ることを通して、障がいを持つ人と健常者とと呼ばれる人の距離は縮まってきました。悩みは尽きませんが⑤何度でもスタートラインに立てる。考えようによっては五つ星社会です。皆さまとご一緒に、星の輝く社会の基礎を築いていきたいと存じます。

本日はどうもありがとうございました。

**司会：**樋口先生、ご講演ありがとうございました。未来をあきらめず扉を開いていく、素晴らしい言葉をいただきました。こうして聴衆の皆様を見ていても、三世代、ひよつとした四世代の人たちがいるようなところで、大変な勇気をいただきました。今年の新入生は先生、2001年生まれでございます。なので、もう未来を担う皆様ですね。

では、お時間もあるのですけれども、もしよろしければ聴衆の皆様のご質問、ご感想、ご意見などある方いらしたら、挙手のほうをお願いできればと思うのですけれども。

**樋口：**どうぞご質問なんでも。学生さんどうぞ。地域の方もどうぞ。こういうとき質問するっていうのは、しにくいのですけれど。感想だけでもいいです、なんでもいいです。今度11月に退職記念の講演会をまたやりま

**フロア1:**日にちを教えてください。

**樋口:**11月14日にもう一度講演会を、退職記念の講演会を開きますので、どうぞまた御鼻根に、どうぞいらしてください。また同時に、どうぞ今日質問しといてくださったら、今度はこういう話をせいっていうご注文でも結構ですから、いただけましたらうれしいと思います。まあ、とくに学生さんね、まだ二十歳にもなってないでしょうから、まあ、100年近く、100年生きなくてもいいんですが、90年ぐらいでも、90年だって本当にその年数があればたいいのことはできますからね。失望してもいいから、絶対絶望せず、あきらめの悪い女になってください。もう、一代でできなかつたら、化けて出るぐらいの覚悟でやりたいと思ったことには取り組んでほしいと思っています。

**フロア2:**本日はありがとうございました。私、卒業生で、先生のお話を今日、20年ぶりに聞かせてもらって、とても懐かしく思っていたんですが。今日も学生さんがいらっしゃるといことで、私も先生のお話を聞いて、ワークライフバランス保ってきたつもりではいるんですけども、先生が今の若い方にどうあってほしいっていう、この流れの中で、より思っているのかっていう。そのあきらめないっていうところだけでも、どこの部分によりフォーカスして生きていってほしいみたいなメッセージをお持ちなのかなっていうのを、ちょっとお聞きしてみたい。具体的にもしあつたらお聞かせいただけるとありがたいなと思っています。

**樋口:**ありがとうございます。まあ、あきらめないでっていうことが一つございましたけれど。やはり、一番大事なのは、立ち直る力だと思います。大きなことも、小さなことも、失敗は山ほどございます。もう私も、本気で死ぬ気はなかったけど、でも死んじゃおかと思ったときはありましたよ。私はね、仕事をしたくて、仕事をしてくれて、しょうがない人間だったんです。結婚もしたい、子どももちたいけれど、何よりも、多少研究的なジャーナリストになりたかった。そのためには新聞社に入りたかった。上を見ると、たまに入っている先輩がいるんですよ。で、私は一生懸命勉強して、大学の学部だけではなく、また試験があるんですけど、東京大学新聞研究所本科というところに合格もし、そして入社試験を受けようと思ったら、朝日毎日読売の三大紙のうちの2社は試験をしなかった、受けさせない。昨年女は2人とったから、今年はいりません。そんな時代でした。朝日だけ受けさせてくれて、最後の女一人だけですけど、50人残ったうちに私入ったんです。結局最後のところで、その年一人も女は入りませんでした。でも、マスメ

ディアの一角である時事通信社というところによく拾ってもらえたんですけども。

つまりこれは情報不足で、私の不勉強のせいです。結局世間知らずですよ。女性の就職状況がこんなだとは、夢にも思わなかった。もしそんなことがわかっていたら、私は恐らく法学部へ行ったでしょう。で、猛勉強して司法試験に挑むか、国家公務員試験に挑むだろうと思います。

それでもメディアの時事通信社が拾ってくれた。ここからの私の生き方は今思っても最低です。たしかに職場ではなかなか所属先が決まりませんでした。社内に若い女性は少なく中年が多く、男性は「ババアが居てもジジ通信」なんて大笑いしてました。ヤワな私はすっかり戦意喪失、2年足らずで結婚退職してしまいました。その頃の私は、その程度にバカでした。つけるくすりが無いくらいバカでした。だから私は、このくらいいい加減な女でも、働く気になって行動すれば何とかなる見本です。

家庭に入り、子どもをもちました。それらもすべて、何一つ無駄な経験はございません。そして夫に励まされて私は新聞の三行広告から、あちらこちらあたり、そして初めて日本の女性の就労状況を知りました。あるところでは、あんた非常勤だから募集しているけれど、この常勤の女性社員は全員就職するとき、結婚したら退職しますという念書を入れて採用しているんですよ、という有名な研究所がありました。またあるところでは、あなたお子さんいるの。ここは共働きの人はいるけれど、妊娠4カ月で退職の内規があるんです。という時代がありました。私がいかに物を知らなかったか。入社試験ができたりすれば入れると思っていた。そんな社会じゃないんです。

だったらこういう社会を、一番底辺からやり直そう。そして三行広告で、拾ってくれた、学研という出版社。そこへ入り、すばらしい先輩たちがいました。一から、その人たちに教わりながら、私は遅まきながら、30近くなってから編集者の修行を始めて、そこからあとはなんとなく道が開けてやってきたということ今でございます。「婦人問題」と当時呼ばれた今で言う「ジェンター論」の研究会発足も新聞の一段記事で知り、扉を叩いて入れてもらいました。プライドが高すぎなかったのがよかったと思います。

ですから私は、こんな時代になってきたのは、ほんの最近なんだ、ということであり、そしてこれからの社会はどんなふうに変化すると、さっき言ったように人口構造という条件は、絶対にその社会を制約します。はっきり言えることは、この日本の人口で、外国人の助けもおおぎながら、もちろん日本人の人たちはみんな商売の中に男も女も。だから保守的な政府まで、一億総活躍

なんて言い出しているんであります。たしかに、女性は出産の部分っていうことを、社会にうんと助けてもらわなければなりませんけれど、何らかの仕事を持ち、何らかの役立つ仕事を持ち、そして何らかの人を助け、人生100年の間、100年もあるんですから、人を支え助け、そしてなんといっても固有名詞の自分自身をあきらめず、自分を伸ばしていく。女性未来研究所は、私はまあ、ある立場は引退させていただきませうけれども、生涯にわたって、女性の未来、まだまだ男ほどは開けていないんです。男も変わらなくちゃいけない。

そうだ、もう一つ、これの特徴は、男もどの程度変わってきたか。この年表は、男女共同参画。男性年表というのがあるところが、ミソでございまして。男性も今、変わりつつあります。必ず変わります。ですから変化を信じて、決してあきらめず、己に関しては謙虚に、常に学ぶ立場、ある意味では変なプライドをもたず、謙虚に

徹して学んでいけば、必ず道は開けます。嘘は言いません。嘘だったら、お互いにあの世へ行ってから、私に化けて出てください。必ず道は開けます。

**司会：**ありがとうございます。それでは、お名残惜しいですが、お時間になりました。謙虚に、あきらめず、未来を信じて、学んでいきたいと思います。

それでは、女性未来研究所・生涯学習センター共催講演会、今お集まりの方、これで終了とさせていただきますと思います。今一度、講師の先生に大きな拍手をお願いいたします。今日はありがとうございました。

**樋口：**今後も、東京家政大学、女性未来研究所、生涯学習センターとともに、未来をつくっていただきたいと思います。司会の並木先生、ありがとうございました。(拍手)

# 英語コミュニケーション学科・女性未来研究所・ グローバル教育センター共催講演会 「異なる文化の狭間で想うこと ～地球人として生きる道～」

他部署との協働を推進するため、英語コミュニケーション学科の一年生向け講演と、グローバル教育センターの「グローバルマインド育成」事業として、タレント・

矢野デイビット氏に講演をいただきました。各学部の1年生を中心に外部の来場も含めて満場の聴衆となり、矢野さんが語りかけるメッセージに耳を傾けていました。

**東京家政大学**  
英語コミュニケーション学科・女性未来研究所・グローバル教育センター 共催

## 異なる文化の狭間で想うこと ～地球人として生きる道～

開催日 令和元年  
**11月21日(木)**

場所 小講堂／三木ホール

時間 15:30～17:00

講師 矢野デイビット氏

入場料無料・申込要

1981年4月7日生まれ 国籍：日本  
日本人の父とガーナ人の母との間にガーナで生まれる。当時外国人を輩った植民地時代に一家が襲われ、6歳から日本に移住。  
自立支援団体「Eto」を設立。教育を机にガーナで学校建設や教育する側の教育、運動会やサッカー大会を打ながら支援を続けている。  
また、ちがいをこえて共に生きることをテーマに、音楽や演劇を通して活動している。ミュージシャン、一般社団法人 Enje 代表、明治大学客員講師。

東京家政大学 飯橋キヤンパス  
(〒123-8602 東京都港区飯橋1-18-1 16号館1階)

◆センター・事業についての説明◆  
グローバル教育センターは、これまでの「高い専門的知識・能力に加え、「グローバルマインド」・英語力（語学力）を身につけた学生を育成するために、令和元年4月10日開校のグローバル教育センターより発足しました。

【問い合わせ先】東京家政大学グローバル教育センター  
【mail】glovis@yokohama.ac.jp  
【TEL】03-3961-1861(平日9:00-17:00)





## 2019年11月21日(木) 矢野デイビット氏講演会アンケート集計結果

アンケート回収合計枚数 内訳					
合計	156 枚	100%			
一般	3 枚	2%	※ 10代 2名 (他大学、高校生)、50代 1名		
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール非受講生)	50 枚	32%			
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール受講生)	103 枚	66%			
参加動機					
	矢野デイビット氏の話を聞いたかったため	支援活動に関心があるため	英語を使った仕事に興味があったため	その他・授業の一環	その他・友人に誘われた
一般	3	1	1	0	0
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール非受講生)	15	2	1	37	1
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール受講生)	34	4	35	35	0
講演内容について					
3-1. 講演内容について理解できましたか。					
	よく理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	無回答
一般	3	0	0	0	0
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール非受講生)	29	18	0	0	2
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール受講生)	64	33	0	0	6
3-2. 一番印象に残った内容は何ですか。					
一般	・自分との約束、解釈。				
	・原稿丸読みのようなスピーチではなく、そのときに生まれる言葉を会場全員に配ってるようなお話でした。一言一言が心にまでちゃんと届きました。				
	・海外とのちがいがい。				
	・車が故障した時のお話が印象に残りました。				
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール非受講生)	・自分との約束、自分の解釈を磨く、他者の解釈に歩み寄る。				
	・自分の当たり前が相手の当たり前ではないと経験を通じて感じたということ。				
	・ガーナで盗賊に襲われたこと。ガーナのサバンナで起きた事故の話。自分の居場所を決めつけないこと。				
	・矢野デイビットさんの人生				
	・私も自分との約束事を決めて、その約束を守って小さいことから大きい約束にいつかして実現させたいと思いました。				
	・自分はこんなに小さいことで悩んでいたのかとか、こう考えれば良かったのかとか新しい考え方が増えた。				
	・枠が無くなった。心のもちよう。				
	・ガーナで作った公立学校が州で最も優秀な学校となった。「捉え方」「自分の中の世界」を変える。				
	・心の国境は溶かすことができる。				
	・東日本大震災をガーナの子どもたちが知って涙を流している動画と心の国境はないということ。				
他					

東京家政大学学生 (基礎ゼミナール受講生)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えを持つということはとても大切で、人と違っていいという言葉が心に残りました</li> <li>・自分の解釈を育てることが大事。できる、できないではなくて、やらざるを得ない、追い込まれる環境に身を置けるかどうか。</li> <li>・すばると！で英語がそんなに話せなかったのに、自分で追い込まれる環境を作って、半年ほどで英語を話せるようにしたこと つまり、可能か不可能かじゃなくて、追い込まれる環境を自分で作れるか。</li> <li>・追い込まれる環境に身を置く</li> <li>・ガーナに旅をした時に子供と出会ったことから、Enije を立ち上げた話</li> <li>・ガーナの子供達が日本の震災の話聞いた後の反応。気持ち。</li> <li>・矢野デイビットさんが6歳のときに盗ぞくにおそわれた話</li> <li>・自分との約束をすることが一番大変であるため私たちは日頃から自身に決まりを課すことを無意識に避けているということ。</li> <li>・生まれたときから、文化、人種関係なく、共感しあえること。自分から、世界に飛び込んでみる。自分の中の世界を変える。心は大切。</li> <li>・東日本大震災があり中学校建設が止まってしまうとガーナの小中学生に話したときに隣町より12000km以上はなれている日本のことを身近に感じ泣いていた動画。</li> <li>・日本で「外国人」といわれガーナでも「外国人」といわれたので「地球人」として生きることに決めたという話</li> <li>・サバンナの真ん中で車が故障した時、相手の思い、解釈が全く違って、私自身の考えは本当に一部なのだと感じた。自分は常に正しいわけではない。</li> <li>・デイビット氏の生い立ちを聞いた上で、NGOなど自分にできることをやりたいという行動力に驚きました。</li> <li>・周囲の変化を求める前に自分の中の世界を変える。「耳を傾けるけど信じない」</li> <li>・旅の話が印象に残りました。横暴だと思ふ発言も、かみくだいて落ちついて理解することが大事だと気づかされました。ありがとうございます。</li> <li>・旅の話でガーナの人の言っていた価値観のことや自然が必ずしも正しいとは限らないという言葉ガーナの子供達の映像</li> <li>・雇われている盗賊の言葉、車が止まった話、スポーツ番組の話、東日本大震災のときのガーナの学校のビデオ</li> <li>・デイビットさんがある子供との出会いによって、子供たちの学校を作ったこと。</li> <li>・まずは自分の内面を変えること。</li> <li>・どの国の人かではなく、一人の人間として生きると決めた時の話</li> <li>・他人の納得いかない部分に対して、もっとこうして欲しいと思うばかりでなく、自分がまず変わることで周りも自然と変わってくるということ</li> <li>・児童保護施設の高校1年生の話。</li> <li>・やりたいことが必ずしも日本にあるわけじゃない</li> <li>・海外に学校を建設したこと。建設しただけで何もしていない。通う子供たちがポジティブにならないと意味がないと仰っていたこと。 大切なのは他人との約束ではなく、“自分”との約束であるということ。</li> <li>・ガーナの子供が日本の東日本大震災で話をきいて泣いていたこと</li> </ul> <p>他</p>
	3-3. 参加する前と参加した後では、あなた自身にどのような変化がありましたか。
一般	<ul style="list-style-type: none"> <li>・魂 to 魂でメッセージが響いた。笑顔がステキです。</li> <li>・解釈はいくつもあってよいという話で、自分に自信をもつことができました。</li> </ul>
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール非受講生)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手におもいやりをもって接しようと思いました。</li> <li>・日々課題におわれて時間がある時はただぼっとするだけになっていたのですが、もう少し目的をもって大学生活を過ごそうと思いました。</li> <li>・自分はとても狭い世界にいるんだと、また、人によってまったく解釈が違うんだなど他にもたくさん気づくことができました。</li> <li>・自分を見てくれない人の事ばかり気にして悩んでしまうが、見てくれている人の方が数倍多いということを知りました。衝撃でした。</li> <li>・自分の望むことができないときに環境のせいにするのがあったが、自分で変わっていかうと思った。</li> <li>・世界の人々とながってつながりをつくりたいと思った。</li> <li>・日本の文化を大事にしたい、自分の考えや思いを大事にしていきたい。</li> <li>・枠にあてはまらうとしないという考え方はとても大事だと思ったけど、自分が急いでそんなに変わるか不安になった。</li> <li>・やわらかい頭と心で生きていきたいと思うようになった。</li> </ul> <p>他</p>

東京家政大学学生 (基礎ゼミナール受講生)	・自分との約束を守ることをしてみたいと思った。
	・今まで自分の考えに自信が持てなかったけどもっと自信を持とうと思いました また、視野を広げるために海外にはいっぱい行こうと思いました それから、何か1つ自分との約束事を作ろうと思いました
	・自分で幅を決めてしまうのではなく、外の世界に飛び込んでみることで、違う意見があったり、変えられることがたくさんあるということ。
	・さまざまなことに挑戦したい、自分にうそをつかずに。
	・何事も恐れなくて動いてみることで、自分が見てみないと分からない世界が沢山あることを学びました。
	・自分の心の中で考える。そして、自分の人生を生きる。解釈の違いを理解する。
	・人それぞれのものごととのとらえ方が分かることが分かり、かいしゃくを理解することが大切だと思う。いつも自分に甘い環境を選んでいただけ、これからは自分のためになる環境を自分で選択して、生きていきたい。
	・変えられないものは、ないという言葉が心に響いた。
	・留学をするか迷っていたけど、日本を飛び出してみたいと思った。
	・後悔のない人生にするために、今ある時間を大切に使おうと思った。
	・私は、怖いこと不安なことから、逃げてしまいがちだが、勇気をだしてやってみることがやはり大切だと思う。
	・もっと幅広い視点で人生を見つめ、自分だけの価値観だけをおしつけず謙虚に生きたいと思いました。
	・自分を変える為の環境に行ってみよう。自分の中の解釈を変えながら、色々な人とかわかってみたい
	・嫌い、苦手な人をそれで終わらせないようにしようと思った。
	・自分には知らないことが沢山あること。でも、「なにかかも」はできなくても「なにか」はきっとできること。
	・自分の考えを大切にしたいと思った。その上で、相手の意見、考えも自分と同じくらい大切にすることが大事なんだと思った。
	・今より時間がある将来はないから時間を有意義に使おうと思った。
	・自分から変われば世界はかんたんに変わるということ。自分の価値観を押しつけてはいけないこと。
	・自分の解釈次第でどうにでも変わることがあると感じ、ポジティブに考えられるようになりそうだと思う
	・自分に妥協せずに生きていこうという気持ちになりました。自分のことを考える時間、成長させられる時間を大切にしていこうと思いました。
・最近ずっと思い悩んでいました。自分は他人と違って、どこか浮いているところがあるかもしれないと、本当の自分が分からなくなって、何をしたいかも分からなかったのですが、(人生とは?)自分ともっと向き合い挑戦しつづけようと思いました。感じたことはたくさんあったのですが、全て思い出せなくてモヤモヤします。心に刻むために、矢野さんの話をもっと何度も聞きたいです。	
・外国人だけでなく、周りの人との解釈の違いでイライラすることがなくなりそうだなと思った。	
・自分の捉え方をもってはいたけど、周りに出していなかったの、出してみようと思った。自分の時間を見つめなおそうと思った。	
・自分にはできないとすぐに決めつけて、避けてきた事が多くあったけれど、自分に向き合い、もっと多くの事に挑戦していきたいと思いました。	
・人と関わっていく中で、自分の中での考えをポジティブに持っていく方が、人生はより豊かになると感じた。	
他	

本講演会の総合的な満足度

	非常に満足	満足	不満	非常に不満	無回答
一般	2	0	0	0	1
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール非受講生)	38	12	0	0	2
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール受講生)	71	33	0	0	1

その他意見

一般	・今時間がなかったら時間がある日は一生来ない、格言。
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール非受講生)	・自分の考え方にとっても影響しました。ありがとうございました。
	・今回のようなグローバル関係の講演を開催してほしいです。
	・ずっと後悔していたことを解釈を変えるという話を聞いて初めてポジティブに考えられた。今自分の進んでいる道に大きな影響を与えられた。
	・矢野デイビットさんのお話、もっと聞きたいです。
	・私は自分の意見をあまり持たないのでもわりと比べる術がないとマイナスになってしまっています。相手の意見ばかり聞いてそれを吸収し自分の意見とするのはだめな事ですか。
他	
東京家政大学学生 (基礎ゼミナール受講生)	・心にずっと入ってくる分かりやすく優しい言葉で世界とのつながりの話を聞いて考えられて良かったです。
	・とてもためになる話でした。私は、相手の意見を受け入れることができないので、どうするべきかを改めて考える機会になりました。もう1度矢野先生のお話を聞きたいです。
	・この解釈は自分の物語のはじまり。
	・今回の講義で気づけた事がいくつもあります。ありがとうございました。
	・とても素敵な講演でした。三木ホール一体が矢野さんのつくり出す空気一色になっていたように感じました。
・とくになし	

# 「人生100年時代」 ～すべての人に居場所と出番～

2019/12/7 (土)

入間市主催、男女共同参画セミナーにて、講演会を行いました。

※アンケート結果は自治体によって集計されたものです。

令和元年度男女共同参画セミナー公開講演会  
それぞれの人権を尊重しあい、個性と能力を高めよう入間

## 「人生100年時代」 ～すべての人に 居場所と出番～

**入場無料**

**講師**  
**樋口 恵子 氏**

評論家  
東京家政大学名誉教授  
同大学女性未来研究所 所長  
NPO法人 高齢社会をよくなる女性の会 理事長  
高齢社会 NGO 連携協議会 共同代表

**日時** 令和元年 **12月7日(土)** 13:30～15:30 (開場 13:00)

**会場** イルミン3階 (市民活動センター 活動室1)

**対象** 市内在住、在学、在勤の方

**定員** 先着100人

**託児有**

**託児** 先着5人 要予約(1歳～就学前)

**申込み** 11月5日(火)より  
人権推進課 男女共同参画推進センター  
電話 04-2964-2536 FAX04-2964-2539  
メ-ル danjo@ictv.ne.jp

オリジナルのハンドメイドの品物が大集合!!  
お土産さん  
**イルミ～ナ**  
9:30～15:00

同時開催  
イルミ～ナ  
9:30～15:00

※手話通訳・要約筆記が必要な方は11月4日までにお申し出ください。  
※ヒアリンググループ対応  
主催：入間市  
企画運営：入間市男女共同参画セミナー企画運営委員会

### 講師プロフィール

◆経歴  
東京大学文学部美術史学科卒業・東京大学新聞研究所本科修了。その後、時事通信社・学習研究社・キャン株式会社を経て、評論活動に入る。  
内閣府男女共同参画会議議員、厚生労働省社会保障審議会委員、「社会保障国民会議」メンバーなどを歴任。現在、評論家・NPO法人「高齢社会をよくなる女性の会」理事長、東京家政大学名誉教授・同大学女性未来研究所所長・「高齢社会NGO連携協議会」代表(複数代表制)。

◆主な著書  
『その介護難職、おまちなさい』(潮出版社)  
『前向き長持ち、人間関係の知恵』(海竜社)  
『老い、どん！あなたにも「ヨタヘロ期」がやってくる』(婦人之友社) (近日発売)  
『大介護時代を生きる』(中央法規出版)  
『人生100年時代への船出』(ミネルヴァ書房)  
『サザエさんからいじわるばあさんへー女・子どもの生活史』(朝日新聞出版) 他多数。

◆会場アクセス

◆お土産さん  
**イルミ～ナ**  
同時開催!!  
カワイイ手作り小物や美味しい  
食べものがいっぱい!!

◆日時  
12月7日(土) 9:30～15:00

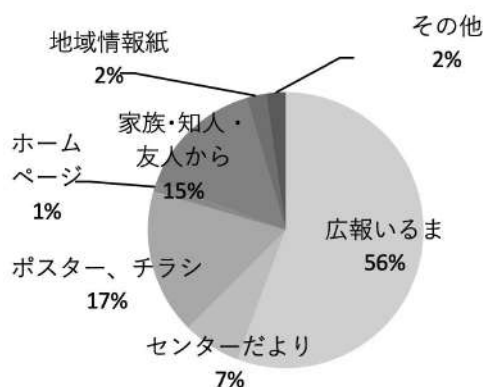
◆会場  
イルミン2階 (男女共同参画推進センター)  
イルミン3階 活動室2, 3  
(市民活動センター)

活動室2  
**Café イルミ～ナ**  
★Work shop  
フェルトアクセサリー  
参加費 800円

# 男女共同参画セミナー公開講演会『「人生100年時代」 ～すべての人に居場所と出番～』について アンケート結果

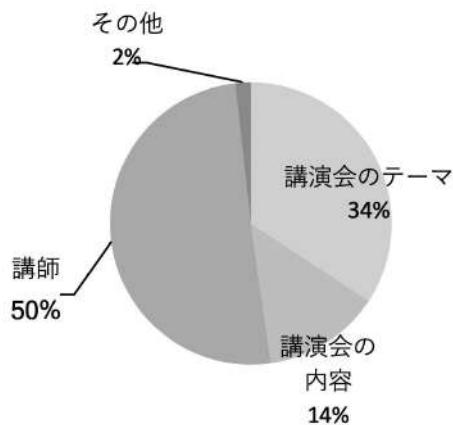
問1 今回の講演会を何で知りましたか (複数回答可)

- ① 広報いるま 49 人
  - ② センターだより 6 人
  - ③ ポスター、チラシ 15 人
  - ④ ホームページ 1 人
  - ⑤ 家族・知人・友人から 13 人
  - ⑥ 地域情報紙 2 人
  - ⑦ その他 2 人
- 計 88 人



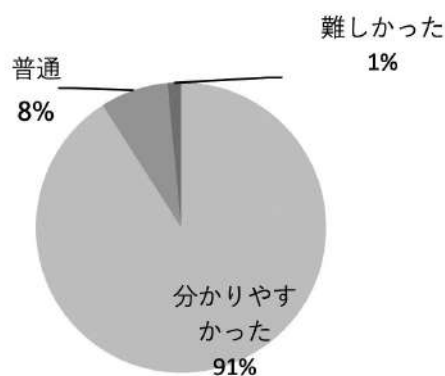
問2 この講演会に参加しようと思った決め手は何でしたか(複数回答可)

- ① 講演会のテーマ 38 人
  - ② 講演会の内容 15 人
  - ③ 講師 56 人
  - ④ その他 2 人
- 計 111 人



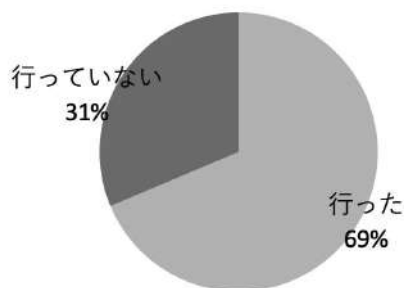
問3 今回の講演会の内容はいかがでしたか

- ① 分かりやすかった 60 人
  - ② 普通 5 人
  - ③ 難しかった 1 人
- 計 66 人



問5 本日、同施設内にて開催されている「イルミ〜ナ」に行きましたか

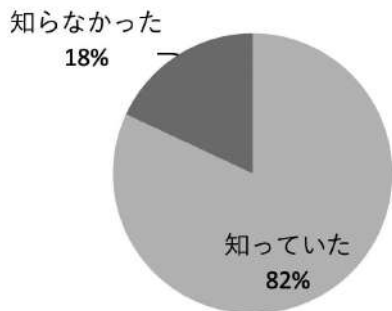
- ① 行った 46 人
  - ② 行っていない 21 人
- 計 67 人



## 「男女共同参画」について

問1 「男女共同参画」という言葉は知っていましたか

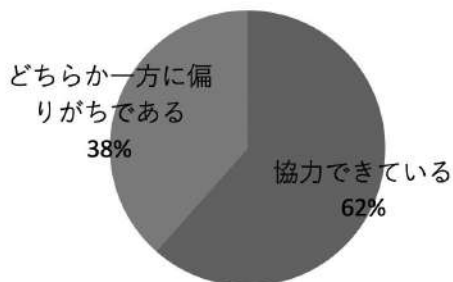
- ① 知っていた 59 人
- ② 知らなかった 13 人
- 計 72 人



問2 家庭生活において、性別に関わりなく男女が協力して家事・育児・介護等に携わっていると思いますか。

☆あなたの家庭では…

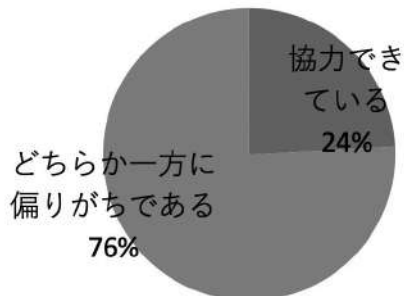
- ① 協力できている 40 人
- ② どちらか一方に偏りがちである 25 人
- 計 65 人



問2 家庭生活において、性別に関わりなく男女が協力して家事・育児・介護等に携わっていると思いますか。

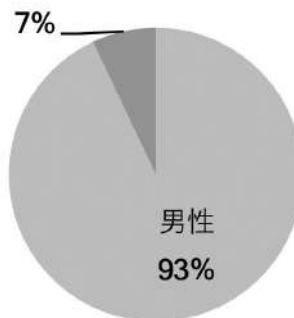
☆社会全体では…

- ① 協力できている 14 人
- ② どちらか一方に偏りがちである 44 人
- 計 58 人



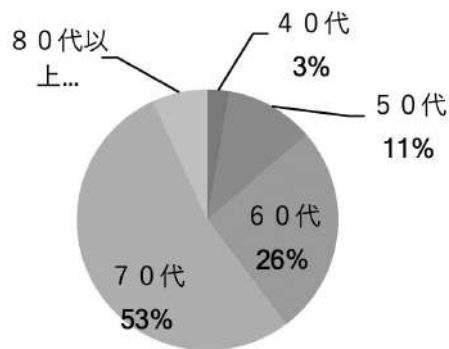
問3 性別

- ① 男性 66 人
- ② 女性 5 人
- ② その他 0 人
- 計 71 人



問3 年齢

- ① 30代未満 0 人
- ② 30代 0 人
- ③ 40代 2 人
- ④ 50代 8 人
- ⑤ 60代 19 人
- ⑥ 70代 39 人
- ⑦ 80代以上 5 人
- 計 73 人



## 受講者の声

- 家政大での講演会、10年前だったでしょうか。先生お変わりなく、衰えを述べられていましたがハツラツとされていました。認知症にならない為にはどう暮らしたら良いのか個人的なご意見を伺いたかったです。テーマと違うので、質問あきらめました。
- やさしい思いやりのある内容、時には厳しいお話もあり、とても良かったと思います。
- ユーモアを交えての講義、本当にありがとうございました。
- 東京家政大の卒業生です。先生にはいつまでも美しくご健康でご活躍されますように。
- マイクのボリュームが、もう少し大きくてもよい。特に司会・進行者の話が早口で聞きとりづらい。
- 分かりやすい話の中、より一層少しの社会参加に心を燃やしていこうと思いました。
- まとめにある「三ショックのハッピーコミュニティー」をどう実現していくかを入間市が、わが地域が具体的に考え実行していくことが、今日の講演の恩返しになるのではないかと思います。
- 樋口先生の語り方が好きです。また、鋭い物の見方がとても好きです。
- 歯切れの良い話し方ですっきりしました。
- 将来が心配でしたが少し楽になりました。
- 自分の年齢を再確認しました。
- これからの老後のことが考えられるようになりました。
- 講師の樋口先生の話が、身近で切実な話で勉強になりました。
- 若い時よりも樋口先生がおだやかになられた様に思う。
- ヨタヘ口期は何ですか、話してほしかった。70歳代なので聞きたかった。
- 3つのショックの話、最後でしたが記憶に残りました。元気に年を重ねたいと思います。
- 65歳で仕事も終わりました。自分のこれからの生き方を見直し、心構えを考えたいと思う。
- 分かりやすく良かったですが、少し間が長く感じました。
- 平均健康寿命の10年の差をどう生きるかももう少し聞きたかった。
- 子供が東町小学校卒で一度講演を聞いております。もう一度年齢を重ねましたので、またお聞きしたいと思いました。大変有意義なお話有難うございました。
- 今迄考えていない問題をわかり易く話していただいた事、とても勉強になりました。
- わかりやすかった。
- わかりやすく親しみやすい語り口。人生100年時代の大切な話、内容。若い世代や様々な世代の女性にも男性にも聞いていただき、考えて・・・危機感を持っていただきたい。
- 堅苦しくなく楽しく面白いお話でした。今後の日本を支えていく若者にも聞いて欲しいです。
- 統計資料に基づく説得力のある内容でした。将来(大介護時代)を考えると暗く重いテーマですが、お話を伺い自分でできることを考えてみようとして今後の生き方とヒントをたくさんいただきました。
- 元気そうで何よりでした。キャッチコピーが上手いのはいつまでもですね。
- 健康寿命を延ばすことが大切で、そのためWork Life Care のBalance を維持する様、人生100年時代に向かって個人々々が多様性・コミュニケーション学を持った生活をする様に務めることが必要である。
- 人生100年時代と言われているけど、100年時代が本当に来るのか、疑問です。食べる物、環境etc、健康寿命は縮まりそうです。
- 出生率が2.08で日本は万歳でしょうか。今、新生児の体重が減っていて、アレルギーの子供も増えている。質は確保されていない。
- 人生100年時代の生き方について考えさせられた。これから食・職・触を頭において生きていきたい。
- ケアマネージャーとして、この地域の高齢者の支援をしています。今日の講演会で地域の中で支え合っていくには、食・職・触と聞き、人とのコミュニケーションが生きていくのに大切と感じた。

- 健康寿命を伸ばし、しっかり働いていけたら良いなと思いました。
- 楽しく意欲を持って子育てを楽しみながら暮らせる社会になって欲しいなと思いました。
- 社会保障の充実が大切だと思いました。
- 非常に身に詰まされる内容であった。3つの“しょく”
- 私は72歳になります。もう随分昔から家政大学で講演される樋口先生の講演会に参加させてもらってましたが、最近入間に引っ越してきて、またこの機会に恵まれました。嬉しいです！ 感じましたが、まず先生のお考えが時代と共にずい分変化されてきたのを感じました。今の時代に沿って非常に良く理解できる話で元気をもらえました。
- 今日は有難うございました。日本の現状を分かりやすく説明して頂き、良く分かりました。自分自身、社会の為に働かなければと思った。
- 健康人生(精神的健康・肉体的健康)どう生きていくか具体例をあげて、生活に活用出来るものに関した話を、自分にも他人にも社会にも、上手に生きられるように、ためになるアドバイスをいただきました。
- 一人暮らしを始めて7年を迎えます。今日の先生の話参考にして、健康寿命を伸ばして人と触れ合いながら、元気に生活していきたいと思います。
- 社会の変化、高齢者のあり方がよくわかった。
- 講演会終わってからの先生以外のあいさつ長い。
- 今の年齢に沿ったテーマなので、興味深く聞きました。
- 樋口先生、87歳とは思えない話し方、内容の講演でした。上手に笑いを引き出す話術は流石です。
- 樋口先生のお元気な様子を見て、自分も健康な日々で過ごしたいと思います。
- ユーモアを交えた楽しいお話でした。ありがとうございました。
- 老いを感じさせない先生のパワー、目標にして頑張らないと老け込んではいられないと思いました。
- 色々なデータ等、とても参考になる講演でした。ありがとうございました。
- 男性の協力、職場の理解が必要。地域とのかかわりが必要で重要と思いました。
- 全然顔が見えず、これではテレビでもラジオでもいいと思いました。年齢のために椅子に座る事は良いのですが、スタッフは台の上に椅子を乗せて見えるようにしてほしかった。残念。
- 落ち着いて聞けました。5分でも休憩入れたらば100点。
- 成長は両親の助けもあるが、国(税金)の助けもある。三つの(しょく)食べる事、職業、コミュニケーション。
- 70代からの100歳に向かってのハリのある生き方といったことのお話が伺いたかった。最後の現実的なお話が大変参考になりました。面白おかしく・・・どうぞお元気でお身体をお大事にお願いします。
- 元気に外へ出てコミュニケーションを・・・初代なんだから・・・拍手・・・ どうもありがとうございました。
- 「どうせ死ぬんだから」を心に、まだ30年頑張ろうと思いました。回りの人と地域の方に楽しみながら。



## 北区 女性職員向け研修会(3～10年目職員対象)

# 「はじめてのキャリアデザイン」

## ～私らしい働き方・生き方を実現するために～

2020/02/26 (水)

北区からの依頼を受け、採用3年目以降の女性職員  
へ向けた「キャリアデザイン講座」を行いました。

※受講アンケート結果は自治体によって集計されたものです。

公務サポート

# はじめての キャリアデザイン

～私らしい働き方・生き方を実現するために～

**2月26日 (水) 13時15分～16時20分**  
**北区役所別館 2階 研修室**



未来の自分について考えたことはありますか？

いつまでもいきいきと働き続けるために、自分らしい働き方をデザインしてみませんか。

キャリアデザインは、仕事と人生を主体的に描き、「なりたい自分」を実現していくためのものです。

今回の講座は、キャリアデザインを通じて「未来の自分」を描くとともに、活躍している先輩職員からのアドバイスや参加者同士での情報交換などを通じて、自分らしい働き方・生き方のヒントを学びます。

<b>講師</b>	東京家政大学女性未来研究所 副所長 並木 有希 氏
<b>対象</b>	採用3年目～10年目の女性職員 32名程度
<b>問い合わせ</b>	職員課人事係 内線2233／直通3908-8039 担当 中山

## 令和元年度 公務サポート研修「女性活躍推進」受講アンケート結果

### 1 研修概要

#### (1) 研修名

令和元年度 公務サポート研修

「はじめてのキャリアデザイン～私らしい働き方・生き方を実現するために～」

#### (2) 目的

女性の活躍が求められている背景を理解し、キャリアデザインやワーク・ライフ・バランスについて考えるきっかけとなることを目指します。

また、先輩職員や参加者同士の交流により職員間のネットワーク構築を図ります。

#### (3) 日時

令和2年2月26日(水)13時10分～16時20分

#### (4) 会場

北区役所別館2階 研修室

#### (5) 受講者・先輩職員等

受講者35名(採用3年目～10年目の女性職員)、先輩職員8名

### 2 アンケート結果(回答40名)

#### ① 内容は理解出来ましたか

非常に理解出来た	85.7%
理解出来た	14.3%
あまり理解出来なかった	0.0%
理解出来なかった	0.0%
計	100.0%

#### ② レジюме・資料は分かりやすいですか

非常に分かりやすい	85.7%
分かりやすい	14.3%
あまり分かりやすくない	0.0%
分かりにくい	0.0%
計	100.0%

#### ③ 講師の教え方は適切でしたか

非常に適切である	94.3%
適切である	5.7%
あまり適切でない	0.0%
適切でない	0.0%
計	100.0%

#### ④ 今後の業務に役に立つと思いますか

非常に役に立つ	91.4%
役に立つ	8.6%
あまり役に立たない	0.0%
役に立たない	0.0%
計	100.0%

## 1 受講生からの意見や感想

・同じ悩みをもつ方たちと話ることができてとても、充実した研修でした。先輩の方のお話も、自分が近い将来に立ち向かうべき内容でとても興味深く聞かせていただきました。自分の「よさ」を見つけ、今後の仕事にもいかしていきたいと思います。

・思ったより楽しい研修となりました。自己肯定感が低いので、高められるようにたまには自分で自分をほめてあげたいです。

・普段、自分のことを考えることはあまりないので、じっくり自分を見つめ直し、ワークブックに自分の言葉で自分を描くことができてとても良かったです。今後、色々な壁にぶつかったときに、振り返ったり、自分を正しい方向に立て直したりする際に、このワークブックを使いたいです。

・今の自分の生活を振り返り、自分と向き合う時間は大変有意義な時間でした。仕事でミスをすると、「自分はダメだ」と落ち込んでしまうことがたびたびありますが、自分の良い所に少しでも目をむけ、ワクワクなりたい自分に近づけるように公私ともに頑張りたいと思いました。また、先輩のお話は分岐点に立ったときの決断の決め手等も聞けて大変参考になりました。

・すごく楽しかったです。母である私にとっては自分を見つめ直すとても良い機会を与えていただきました。「参加のルール」を示してくださったことにより自分らしく参加できました。

・まずは自分を見つめ直してどういう自分になりたいか、どうすればそうなるのかを考えることが今後の自分にとって大切であることを学び、とても良い研修となりました。また、育児との両立をしながらキャリアアップをする難しさを先輩職員の方から聞き、将来自分がそうなった時の参考にしたいと思いました。この研修に参加できて良かったと思います。

・館長のお話が参考になりました。別の職場ではありますが、上司にあたる方の人生や人生の転きについてお話を聞いたことがとても良かったです。一生懸命やっていたら終わっている、色々なころが最後には何とかなっていることがわかり、不安だった気持ちが少し和らぎました。自分を見つめ直す時間が忙しくなかなかとれないのでありがたいです。

・自分の将来について、具体的に考える機会となりました。今の自分のことも褒めてあげたいと思いました。

・今回の研修で自分のことを振り返り、見つめなおす良い機会となりました。自分がどうなりたいか、どう考えているかを定期的に見つめ直すことの大切さを感じました。また、先輩職員の話聞いて壁にぶつかった時、周りの人に支えられるということを自分の経験からも思い出しました。“人”がいるから

生きていける”ということ胸に生活していきたいと考えました。

・自分を見つめ直すことがあまり好きではなく、する機会もなかったが、今回無理のない範囲で楽しく行うことが出来た。また、先輩職員の方のお話はとても興味深いためになった。全体的に有意義な研修だったと思う。

・先輩職員のリアルな声を聞く機会がないのでとても良い機会になりました。今後、キャリアアップを考えるにあたり不安に思っていたことを聞けたので良かったです。

・どうしても仕事を優先しなければいけないと思っていましたが、自分の人生、もっと好きなことやりたいことを大切にしたいということに気がつきました。自分のやりたいこと、なりたい自分をイメージしてこれから過ごしていきたいと思いました。先輩職員からも色々な話を聞くことができ、とても参考になりました。自分の人生において大切なことを見失わないよう、仕事もプライベートも自分らしく頑張りたいと思いました。

・キャリアを考える時一番大切なのは“自分の幸せ”という事を聞き、納得しました。仕事＝キャリアとと思っていましたが、人生を計画的に全体を見据えて考えていくことの大切さが分かりました。4年目、まだまだ仕事への自信は低いですが、計画的に頑張っていけたらと思います。

・自分のことを振り返るという時間が、日々の仕事や生活で精一杯でできない中で、とても良い機会でした。これからの人生の中で、様々なライフイベントが起こり、壁にあたることもあるかもしれないという不安が、今日の研修で前向きになれたように思います。先輩をはじめ班の方と色々な話をできたことも、とても良い経験でした。

・普段、現在の自分、未来の自分について考える機会がなく、大変良い機会でした。また、自分の良い所なんて…と思っていたが、小さなことでも、他の方から褒められると嬉しいし、小さなことでも自分を褒めることが大切だと感じました。ロールモデルである先輩職員から話を聞くことで少し未来が明るくなった気がします。貴重なお時間ありがとうございました。

・自分のライフバランスを振り返ることができた。仕事が全体を大きく占めていることがわかった。先輩職員からのお話は、とてもためになるものだった。自分の置かれている状況が変わったとき、(結婚・出産)また聞きたい。

・自分のこれからの人生について、あまり考えたことがなかったので、考える事ができて良かったです。仕事でも、私生活でも自分自身を自分で幸せに出来るように、どうすればよいのかを、家に帰ってもう一度よく考えてみたいと思います。また、自分が出来ることを振り返る機会があまり今までなかったので、自分に出来ることを見つけて、どんどん増やしていくことができるように頑張りたいと思います。

・私は入区3年目で日々の仕事中心の生活で先の人生など考えていなかったで、(考えるのをさけてきたので)今回考える良い機会になりました。また先輩職員の方のお話がとても勉強になり、いろんな考え方があると気付くことができました。

・女性職員には今後、ライフイベントが多く悩む機会も増えてくると思います。こういった研修で自分を見つめ直したり相談できる場があれば、仕事に対する考え方も変わってくるのではないかと感じました。今回は同じような職種の方と班が組まれていましたが、違った職種の方とも話してみれば面白いと思います。

・本日はありがとうございました。近頃、自分自身のことについて深く考えることが多かったので、すごく良いタイミングでこの研修に参加することができて良かったです。参加した方々の話を聞いて、一人一人悩みながらも、日々一生懸命生きていることがわかり、とても励みになりました。今後は、自分のことも他人のことも大切にしながら、今を一生懸命過ごしていこうと思います。

・キャリアデザインを今までやった事がなかったので、実際に自分のことを書いてみることで改めて自分の今の状況を知ることができました。グループ内では同じ保育士の先輩方が居たので、話を聞くことができ、とても参考になりました。将来についてちゃんと考えたことがあまりなかったで、これからは仕事の事やプライベートの事について自分の事をしっかり考え、行動していきたいと思います。

・自分について考える時間を取る機会が最近なかったで、少し考える時間を得ることができて良かったです。また、先輩職員の方の経験談も聞くことができ、自分が今後体験する可能性があることをイメージしやすくなったと思います。

・本日、先輩方やグループのみんなの話を聞けてとても勉強になった。民間と公務員の出産・育児のフォローの差がかなりあると知り驚いた。結婚するしないにかかわらず、自分らしく自分のキャリアを築けていけたら良いなと思った。そしてもっと自分について見つめ直していきたいと感じた。

・主査の方にプライベートと仕事について両方を聞く機会が今までなかったで、大変勉強になりました。介護は身近になかったで、とても大変だと感じました。最近、自己肯定感を高めたいと思っていたところだったので、この研修を受けてよかったです。

・自分の良さを見つけて、文字に書き出してみる機会は今までなかったで新鮮でした。どうしても自分はここが良くないと普段から思っていたで、これからは自分はこんな良さがあると考えるようにしたいです。また、定期的にこれからしたいことを書き出して可視化してみようと思います。

・キャリアデザインについて、色々な方向から考えられて大変良い機会になりました。また、先輩職員の方から、お話を聞いて参考になりました。これから、仕事の参考にしていきたいです。

・日々の忙しい業務の中、自分の今後のキャリアプランについて考える時間もなかったので、とても良い時間になりました。自分の時間の使い方やワークライフバランスをワークで現状を確認できました。先輩のお話を聞き、今後の自分のキャリアについて考える機会になりました。

・楽しく受講できました。いろいろ迷っている時期であったので、沢山の方の話を聞いてよかったです。また、自分自身を見直すきっかけにもなりました。この時期にあっている研修であったと思います。もっとたくさんの人に受けて欲しいです。

・予想していた以上に楽しかったです。同年代、同じような立場の人と話すことがこんなに楽しいなんて正直、驚きでした。自分の棚おろしや自分について考える時間、分かっている中々してこれませんでした。今回の研修は忘れないでいきたいです。

・最近、全く人生がうまくいっていないように感じている。死ぬ瞬間から人生を逆算して「このままじゃダメだ」と焦っている。やりたいことがないわけじゃないが、お金が足りないし、一人でやるのが怖いとっていた。やればいいんじゃないかと思った。人生を楽しまないとなんにもないと思った。

・普段、自分のことは振り返らないので、良い機会になりました。すごく楽しかったです。来て良かったです。

・自分を見つめ直す良い機会になりました。まだまだ未熟で、へこむことが多くありますが、今回の研修の内容を活かして気持ちを強く持ちたいと思いました。ありがとうございました。

・先輩職員の方のリアルなお話を聞くことができ、とても参考になりました。

・自分のキャリアデザインについて考えたことがほとんどなく、なんとなく時の流れに身を任せるだけの生活でした。ですが、改めて自分はどうしたいんだろうと定期的に見直す時間を持つことで意識は変えられると思いました。ありがとうございました。

・講師の先生のお話はもちろんですが、同じ“保育園”の先輩のお話が非常に参考になりました。女性のライフプランについて深く考える機会になりました。また、やはり、何事にも“計画”ということが大切と改めて感じました。ありがとうございました。

・本日は、先輩職員の方とお話する機会などを設けていただきありがとうございました。

・資料もわかりやすかったです。

・人生の道しるべとして、仕事だけでなく考えるきっかけとなった研修になりました。

- ・とても参考になりました。
- ・今回の研修をうけることができて良かったです。ありがとうございました。
- ・自分を見つめ直す良い機会になりました。
- ・とても良い研修でした。
- ・大変良かったです！！
- ・楽しく受講できました。ありがとうございました。
- ・女性として今後、結婚・出産と仕事の両立ができるか不安だったので(私は独身なので)考える機会ができて良かったです。ありがとうございました。
- ・とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・自分について振り返ることができた。
- ・将来の自分のキャリア、自分自身について考えるきっかけとなりました。
- ・自分を見つめ直す機会となり良い経験となりました。
- ・楽しかったです。また受けたいです。
- ・自分を見つめ直す時間をたくさんとっていただけたので久しぶりに自分のことを考えることができよかったです。

## 2. 研修担当への意見・要望

- ・今回のような女性先輩職員の話聞く機会がほしいです。
- ・また受けたいです。ありがとうございました。
- ・またこのような機会を設けて頂きたいです。大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・定期的にキャリア研修があると嬉しいです。
- ・仕事に役立つ研修を行っていただきたいです。実務研修の基本やビジネス文書や資料作成、スピーチ(人前で話す・説明)など学習したいです。
- ・公務サポートの研修に限らず、このような研修もあればモチベーションにつながる場合もあると思います。
- ・今後も、女性向けの研修を開催していただきたいと思いました。
- ・またやって欲しい！みんなの続きが知りたいです。

令和2年3月2日

## Chapter 5

# シンポジウム/セミナー等

- 5-1 第6回女性未来研究所シンポジウム・戸山未来・あうねっと  
設立2周年記念シンポジウム  
「恐るべし！住民の底力でみんなの居場所づくり  
あなたが主役！わたしも主役！戸山ハイツで取り組む通所型住民主体サービス事業」  
[松岡洋子]
- 5-2 第7回女性未来研究所シンポジウム  
「男女共同参画で取り組む地域防災・減災～女性防災リーダーの育成プロジェクト～」  
[齋藤正子]
- 5-3 樋口恵子先生退任記念講演会  
「女性100年、過去から学び未来へ 正岡律(1870～1941)の生き方に学ぶ」  
[樋口恵子]
- 5-4 緑窓会協働（青森県支部懇親会・大分県支部懇親会）  
[並木有希]



第6回女性未来研究所シンポジウム・戸山未来・あうねっと  
設立2周年記念シンポジウム

恐るべし！

住民の底力でみんなの居場所づくり

あなたが主役！わたしも主役！戸山ハイツで取り組む  
通所型住民主体サービス事業

松岡 洋子／齋藤 正子／和田 涼子

2019年6月23日(日)

新宿・戸山生涯学習館にて行われた。

戸山未来・あうねっと 設立2周年記念講演&シンポジウム  
第6回東京家政大学女性未来研究所シンポジウム

**恐るべし！** 住民の底力で  
みんなの居場所づくり

あなたが主役！わたしも主役！戸山ハイツで取り組む通所型住民主体サービス事業

**6/23** 日 13:30~16:00 会場：戸山生涯学習館1階ホール (〒東京都戸山2-11-101)  
●参加費無料 ●定員100名(事前申込不要)

新宿区通所型住民主体サービス事業  
(カフェあうねっと)がスタートして1年！  
順調に参加者も定着してきました！同時に課題やさらなる夢も！  
地域ぐるみで一緒に考えてみませんか？

**記念講演** 人生100年時代の生き方上手・  
支え合い上手  
樋口恵子 所長  
東京家政大学女性未来研究所所長

少子高齢化、介護、女性の生き方にメッセージを発信、最  
近の著書に「その介護経験、おまちなさい」渾新書(2017)。

●地域ぐるみのシンポジウム  
「安心して暮らせることができる戸山ハイツを！」の  
気持ちでスタートした「戸山未来・あうねっと」。  
「カフェあうねっと」を通じて、いろいろなことが  
見えてきました。  
樋口恵子先生を囲み、地域包括支援  
センター、自治会の方々と一緒に  
話し合いました。

コーディネーター  
秋山正子さん  
「暮らしの保健室」室長

新居区で20年以上にわたり訪問看護事業を実施。2011年戸  
山ハイツに「暮らしの保健室」を開館。2015年9月「看護の境  
越多岐線ミモザの家」10thマーズ東京・荒川区にオープン。  
令和元年フロンテス・フイテンゲル記録を受賞。

共催：戸山未来あうねっと／東京家政大学女性未来研究所／暮らしの保健室／戸山生涯学習館  
後援：戸山ハイツ4自治会(南地区自治会、東地区自治会、北地区自治会、西地区自治会)

なんだか、土曜日が楽しみ！

ボランティア  
募集中！

お楽しみ  
プログラム  
ふまねっと運動、  
カフェタイム、  
参加自由の  
音楽・趣味・創作

参加費1回  
100円

**カフェ  
あうねっと**

会場  
戸山いつきの社(戸山ハイツ4号棟)  
毎週土曜日 10:30~12:00 (7月は6日、13日、20日、27日)  
「カフェあうねっと」のお問い合わせ：3553-5228(戸山いつきの社:石川)

ふまねっと運動とは？  
50cm四方のマシ目でできた大きな網を床に敷き、この網を踏まないようにゆっくり慎重に歩  
く運動です。いろいろなステップを「学習」しながら歩行のバランスをとりながら歩くので、  
介護予防、認知症予防の効果も期待されています(開発者：北海道教育大学の北澤一利先生)。

戸山ハイツ以外の方でシンポジウム参加ご希望者  
はメールでお申込みください。  
東京家政大学女性未来研究所(東京都板橋区加賀1-18-1)  
josei-mirai-project@tokyo-kasei.ac.jp  
[6月23日シンポジウム参加希望]と明記し、お名前・ご所属・ご住所・  
電話番号を書いてお申込みください。

共催：戸山未来・あうねっと／東京家政大学女性未来研究所／暮らしの保健室／戸山生涯学習館 後援：戸山ハイツ4自治会  
●東京家政大学 女性未来研究所：「東京家政大学女性未来研究所」は、建学の精神である「自由・自律」の道を歩み、生活圏である  
「実学・勤労・徳性」を實踐できる女性を育成するとともに、グローバル時代にあふれない女性の社会貢献を追求することを目的として、  
2014年4月より当大新橋キャンパスに設置されました。初代所長として樋口恵子名誉教授が就任いたしました。  
●暮らしの保健室：「暮らしの保健室」は、学校に保健室があるように町の名にも気軽に健康相談ができる保健室をという思いで、秋山正子氏を中心  
に2014年戸山ハイツ33号棟に誕生しました。秋山正子氏の想いは多くの共感を呼び、「暮らしの保健室」は全国各地に19カ所設立されています。

## 第7回女性未来研究所シンポジウム

男女共同参画で取り組む地域防災・減災  
～女性防災リーダーの育成プロジェクト～

齋藤 正子／谷岸 悦子／齋藤 麻子

2019年8月3日(土)


東京家政大学狭山キャンパスにて行われた。

第7回 東京家政大学女性未来研究所シンポジウム

**男女共同参画**で取り組む

# 地域防災・減災

～女性防災リーダーの育成プロジェクト～



2019年 **8月3日** (土) 13:30～16:30  
東京家政大学 狭山キャンパス (AV 教室)

参加費  
無料

災害時の避難所では、女性に関わる様々な問題が発生しており、女性の視点を取り入れる事が重要です。平時から災害時による影響が男女に差があることを理解し、女性が主体的にリーダーの役割を担える人材育成が必要となります。

本研究プロジェクトでは、2014～2016年度は、男女共同参画の視点を基に地域防災・減災の推進を目的として、地域のニーズや他大学でそのようなことが行われているかを調査してきました。その結果をもとに2017年度からは、次の段階として地域連携および大学間の連携を通して、本学の学生を対象とした、次世代を担う女性の防災リーダー育成に取り組んでいます。

このシンポジウムでは、東日本大震災で被災されながらも支援活動に取り組みられた宮城県の元消防士の佐藤誠悦氏、2016年から毎年、ボランティアの学生の受け入れをしてくださる南三陸病院の看護師の阿部美智枝氏、狭山市で女性防災リーダーの育成に取り組まれている高橋和子氏をお迎えしました。災害発生から現在までの復興の様子や女性防災リーダーについて、講話を頂く機会としました。また、卒業生や学生のボランティアにおける活動の学びや女性防災リーダーやメンバーシップについて、語り合う機会としました。

---

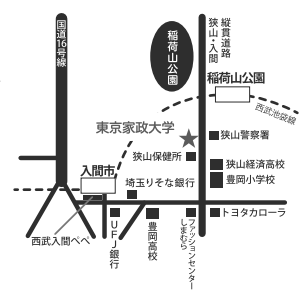
**講師**


- 佐藤 誠悦 氏 / 宮城県気仙沼市 元消防士
- 阿部 美智枝 氏 / 南三陸病院 りあす訪問看護ステーション 所長
- 高橋 和子 氏 / わが街さやまの防災ネットワーク 理事長
- 樋口 恵子 先生 / 東京家政大学 女性未来研究所 所長
- 学生および卒業生

司会：齋藤正子 / 東京家政大学 看護学科 講師

**交通アクセス**

西武池袋線 稲荷山公園駅下車 徒歩 3分





東京家政大学  
女性未来研究所  
The Institute for the Advancement of Women

問合せ 齋藤 正子  
☎ 04-3955-6920 ✉ Saito-ma@tokyo-kasei.ac.jp

企画・主催 東京家政大学 女性未来研究所  
〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1

Designed by Tokyo Kasei Hulp

# 樋口恵子先生退任記念講演会 「女性100年、過去から学び未来へ」

## 正岡 律(1870~1941)の生き方に学ぶ

樋口 恵子

みなさまこんにちは、樋口でございます。秋晴れの素晴らしいお天気でしたけど、夕方になってだいぶ冷え込んでまいりました。その中を、お時間をとって来ていただきまして、また学生さんも私の話を聞きに残ってくださいまして、本当にありがとうございました。一教員である私のために、退職記念のこのような会を開いてくださいまして、壇上にいらっしゃる御三方の先生方、本当にありがとうございます。左から、菅谷理事長、そして、木元元学長、川合前学長。なんだか私、上司の前で、御前講演ですね、これ。退職にあたりまして、特にこれから生きる女性に言いたいこと。私の老いはかなり差し迫って、平均寿命に近いところまで来ています。私、ただいま 87 歳でございます。手たたかなくていいんですよ（笑）。長く生きたからえらいつていうものじゃない。ですけど、私たちは今、時代も偶然、平成から令和へという変化の区切りを迎えておりますけれども、人間として、人類として、あるいは日本の国民として、あるいは地域の一人として、これから生きるという意味で、ものすごい変化の時期に、良くも悪くも立ち会っちゃったわけでございます。

今を生きる我々はいろんなことが選べます。特に戦後、政治体制が変わりまして、一人一人の個人の尊重ということ、個人の人權の尊重ということからみても、さまざまな選択が可能になりました。戦前の家制度のもと、戸主や父の許可がなければ、女子は 25 歳男子 30 歳になるまでは、自由に結婚もできなかつたんですけども。今は配偶者も選べますし、職業も入りたい学校も選べますし、どこに住むかもお金さえあれば自由に選べます。いろんなものが選べるのに、一つだけ選べないのが、いつどこに生まれるか、あるいは、男に生まれるか女に生まれるかはたまた別の性か、ということでございます。私たちは歴史の中のどこで生まれるかを選ぶことはできません。どこに生まれるかということは、私たちは歴史の中の存在として、しっかりと歴史の一員として、時代に流されるだけではなく、そこの時代において、歴史をつくる一人として、どうぞ自覚を持って生きていただき

たいと思います。

明治維新は日本の国のかたちを大きく変える大変革でしたが、その変革にかかわった人々の中に女性の姿はほとんどありません。維新後の新しい制度づくりにも、全くと言ってよいほどかかわっていないので、明治時代の女性の位置づけは、ほとんど維新前と同じ男尊女卑、性別分業、家父長的家制度などは、明治の時代にそっくり引き継がれた、といっても過言ではありません。家族のありようを決めた民法上の男女の地位は大きく差がありました。

しかし、明治維新がもたらした唯一つの、そしてとても大きな変革は、初等教育の男女平等の義務化でした。六才以上の子どもは「男女の別なく小学校に通う」ことになったのです。維新を担った先覚者の中には、中村正直のように維新前からイギリスに留学し、女子教育に着目した人もありました。国力を高めるのは、その国民の母たる女性の能力向上という、広い意味では「良妻賢母」教育ですが、女子教育の推進役を果たしました。

何しろその少し前の江戸末期には「名君」と呼ばれた人が、女子は愚かなほうがよい、と発言していたのですから。そもそも支配階級の武士だけでなく、「男女七才にして席を同じゅうせず」という儒教に裏付けられた行動様式が庶民にまで行きわたっていました。明治5年の学制発布は「邑ニ不学ノ戸ナク」「家ニ不学ノ子ナク」、「幼童ノ子女ハ六才ニシテ」席を同じゅうして学ばせようというのですから、まさに革命的变化でした。さらに、十才前後の士族の少女を5人ほどアメリカへ留学させました。そのうちの1人は長期にわたって滞在、帰国後、明治中期に到って女性の高等教育機関・津田英学塾（現在の津田塾大学）を創設、いっしょに留学した仲間たちもよく協力してその事業を助けたといえます。あの時代でも、女子への教育投資は有効に生きています。

四国の松山の士族の家庭に育った長男の正岡子規（1867～1902）はまさに、学制発布の4年前に生まれ、律はその三才才下。ともに学制発布の恩恵を受けていま

す。正岡家は学問の伝統を受けつぐ家系でしたが、父が早世したため、母親が針仕事で家計を補う、決して豊かな家庭ではありませんでした。世間一般も「女子に教育はいらない」という風潮が強かったので、義務教育就学率の男女格差はなかなか埋まらず、男女がほぼ同じ水準になったのは日清・日露の二大戦を経た明治30年代のことでした。そういえば、第二次世界大戦後の大改革というべき6・3制義務教育のもと、高校進学率が男女ほぼ同水準になるには、発足後20年ほどかかりました。現在は「高校（専門学校）以上の進学率は女子が男子を凌ぐほど。しかし4年制大学・大学院では、男子が上回っています。

とにかく、女性の一生に大きな影響を与えた教育。せっかくその門戸が制度的にはひらかれた。私は明治維新が女性に与えた変化は「これしか」なかったと思います。でもこの「これしか」が結構大きな変化の原動力となっています。

ところで、本日の主役、正岡律に戻りましょう。男女を問わず新しい道を拓くために時代がもたらした教育はまさに社会へのパスポートでした。

正岡子規は大学段階で持病の結核性脊椎カリエスのため退学しますが、とにかくできたばかりの小学校、県立松山中学に間に合って進学。言論や文筆の上で若くして将来を嘱望されます。豊かではなかったものの、子規は当然のように上京して大学予備門（のちに一高、今で言えば東大教養学部）に進学。生涯の親友・知己となる夏目漱石との親交が生まれます。旅行をしたり、外地まで行ったり、思う存分羽を拡げています。当時は不治の病・結核に侵され脊椎カリエスを病むことになったのはどう考えても不運で不幸なことでした。

それにしても、です。兄・子規と3才違いの妹・律との壮大な学歴格差は、いくら男尊女卑の時代だった、と言われても、ひどすぎませんか。小学校は最初義務年限は4年間だったそうで、律も4年しか行っていないようです。兄・子規は6年通ってあたりまえのように県立中学の入学試験を受けて合格。そのころは政治家志望でいろいろなところを演説して歩いています。律に関する書籍（注1）によると、律も女学校へ進学したかったけれど、結局、家計をおもってあきらめた、という叙述があります。律が小学4年までしか行っていないという事実はその後小学校も、6年制になっていますし、生涯のコンプレックスと現実的不利になったと思います。そもそも中等学校（男子は中学校、女子は高等女学校）の受験資格がなかったかもしれません。私自身の小学校生活を思い出しても、五年生になると歴史、地理、A理科などの新しい教科が増えてぐっとおとなになった気分でした。「そろそろ女学校の入試よォ」という、親や先生の激励

の声にも振るい立ちました。小学校4年では、読み書きそろばんや九九はできますが、漢字ばかりでルビのない新聞を兄・子規のためにすらすらと読み下すのはむずかしかったようです。

私は中学生のころ肺結核で1年半休学。子規の時代より格段に医学も進歩したというものの、まだ抗生物質、手術も普及せず、要するに安静と栄養の一年半でした。じれったい思いでしたが、かえって特効薬の副作用や手術の後遺症もなく無事全治できてよかったかもしれません。その間、文字どおり時間の無駄でしたが、何ごとも全くムダということはめったにありません。私はこの1年半に、生涯二度と巡り合わなかった「読書の時間」に恵まれました。私には終戦の時に15才で死んだ兄が1人いました。急性結核のあわただしい死でしたが、学徒動員など体を酷使したせいもあったと思います。早熟な文学少年だった兄、活動的で読書よりも人づき合いが好きな私。あまり趣味の合わない兄妹でしたが、絶対安静を条件にされては、寝ころがって本を読む以外にすることのない日々でした。漱石、鷗外、藤村という明治大正文学の入り口から始まって、兄が古本街を歩き回って集めたいくら読んでもわからないカント、デカルトに到るまで。天井まである本棚いっぱい、わかってもわからなくても文字面だけは読みまくりました。

正岡子規、ひいては妹の律ともそこで出会いました。私14～5才のころです。

子規の文学上の大事業だった俳句・短歌論、今もってあまり理解しがたいのですが、日誌風に記した子規の三大（本稿末の注参考）エッセイと呼ばれる作品は、平易明快、率直にして気品を失わず、折々の胸にしみ入るような俳句・短歌の名唱も書き込まれ、私は闘病生活のこわいもの見たさもあって、くり返し読みました。その中で出会った女性が妹の正岡律だったのです。

2人きょうだいで、性格も似ていました。早熟で秀才の兄、平凡でひたすら人づき合いがとりえの妹。年齢も学年はちょうど同じ三年違い。兄は勉強を教えてくださいどころか何かと言えば「ケイコはバカだ」。仕方がないと納得していたのです。

病床の読書で、私は間もなく正岡子規の妹・律への悪口雑言に出会うのです。

当時の正岡律の状況を簡単に述べると、律は母の和裁の内職の手伝いをしながら、当時の娘として当然のように親族などの世話で二度の結婚をしています。最初も、あとも、律のほうからなじもうとしなかったような形跡があります。律は実は兄・子規に純愛というべき愛を捧げていた、という説もあります。あれだけの介護を捧げ盡したのですから、恋愛感情があったかどうかはともかく、満身の敬意と親情を捧げていたことは事実でしよ

う。

日記にいわれもない自分への悪口雑言を書かれたら——日記を破り取ることで多く人はするかもしれません。激怒して修正を申し入れるのは、たいていの人がすることでしょう。ところが律は、どこにも怒りをぶつけた形跡がないのです。

悪口の一例をご紹介します。

「律ハ理窟ヅメノ女也。同感同情の無キ木石ノ如キ女ナリ」「人間ニ向ッテ冷淡ナリ」「彼（律のこと）ハ到底配偶者トシテ世ニ立ツニ能ハザルナリ……兄ノ看病人トナリ了レリ」

子規は本職の俳句の中でまで、律の悪口を言っているのです。病床から見える庭のさまざまな草木を写生した、子規の真骨頂ともいべき一連の句の中にまぎれ込んでいるのですが、

「おしろいは妹の花よ俗な花」

こんなところまで、おとしめなくていいではありませんか。おしろいは、私の家の庭にもたくさんあって、それも表のほうでなく、裏木戸や井戸端に近いところで単純明快に咲き乱れているところが好きだったのでよい腹が立ちました。

律の離婚のうち、少なくともあとの1件は子規が健康を害してからのことだったので、離婚理由は、兄の看病を理由に、実家に帰ってばかりいたから——という理由のようです。病気だから仕方がないとは言うものの、律が世の常の女子同様に「配偶者トシテ世ニ立ツ」ことを妨げたのは、他ならぬ子規自身の病いだったのではありませんか。それを謝ったり慰めたりするどころか、嘲笑の対象とするなんて！ この時はほんとうに腹が立ちました。

もちろん子規は律のことを認めてはいます。「最高の看護婦」とも言っています（注参照）しかし、その口の下から、ルビなしの新聞を読み下しきれない律にいら立ち、病人の心を汲み取らぬこと、感性の低さを学歴の低さだと理解していたようです。ですから末期のころの正岡子規の日記には、よい看病人をつくるために女子教育を振興すべし、という論が出てきます。少々ご都合主義ですね。

ですから私は「妹」という共通項を通じて正岡律に共感し心から同情しました。そして律は、当時の女の居場所だった「結婚」にも失敗して、兄をみとった後は細々と兄の印税でも暮らしを立てたのか、とと思ってきました。

律に私が再会したのは、司馬遼太郎著『ひとびとの跫音』（中央公論社 1981）の誌上でした。この本は正岡

子規の死後、正岡家を継いだ旧姓加藤忠三郎について書かれています、その中の一部に正岡律が出てきます。子規の死後、律は正岡家の生き残りとして、従弟にあたる忠三郎を養子に迎え、いわば立派に実家を再興するのです。この時代の人にとっては、消えかけた家を再興することは、一世一代の大事業でした。その正岡家の功労者として出てくる正岡律は、私がかつて見かけて同情したような兄の看病に一生を捧げた犠牲者でもなければ、漢字もロクに読めない無学な女でもありませんでした。今の代に肩書きを移し替えることができたなら有名女子大学教授、永年勤続表彰、特別技能保持者という解説がつくでしょうか。「あなた、ほんとにあのお律さん？」と質問したいくらいでした。

律の兄に対する看病は、司馬遼太郎さんも脱帽しています。律の人生は「…兄の看病のため終始し、そのことにすべてを捧げた。捧げたなどという極端な言い方は、この期間の正岡律にこそあてはまる。」

誰もがみとめる律の献身。体力的な問題だけでなく、子規を看病することの忍耐。しばしば屈辱。子規の母は家庭の事情で晩婚。子規は長男ですが、息子の子規が常時看病を必要としたとき、当時としては十分な老境にあったようです。律、26才から34才までの約7年間、一般には、女の人生まさに花盛りと言うべき時期を、人生まるごと兄に捧げ盡したのです。

それでは、その後の律の人生の足取りを追ってみましょう。明治35年（1902）9月18日、正岡子規没、37才。妹、律34才。

その後の律の人生の足取りをざっと見てみましょう。9月18日、律は高浜虚子ら大ぜいの弟子たちと共に兄・子規を見送ります。人手はあり余るほどだったとしても、遺族としての責任は律1人の肩にかかってきたでしょう。いやでも律は、母を助けて喪主の役割を果たさなければならなかったでしょう。今でも多くの方が言われます。家族が一人亡くなると、あとの一年は、記憶がないくらいに雑用が多くて夢中で過ぎてしまう」

ののしられながらも律は、いちばんつらいのは兄自身、と心に言いきかせ、介護の日々を重ねました。そして兄の死をみとったあとの律の人生を履歴書風に記してみます。

明治35年9月 律34才

正岡子規没 約7年の看病

明治36年4月 律34才

共立女子職業学校本科入学

（修業2か年）

明治39年（々）共立女子職業学校補修科卒

（修業1か年）

明治39年～大正4年 律37才～46才

共立女子職業学校に最初事務職員として、間もなく教員に転じ、勤続10周年の表彰に該当したが律はそれを辞退。1年間京都の志摩野裁縫塾という早縫いで有名な私塾に学校を一たん退職して私費留学。大正5～10年ごろ  
共立女子職業学校教員に復職

司馬によれば後期教員時代、律は幼い女学校生徒にはやさしく、技芸を身につけ自立しようとする学生にはきびしく指導、評判のよい教員だったといえます。

ごらんのとおり、律は兄の子規没後「社会人入学」で技能を身につけました。律はその後の20年余を堂々たる技能を誇る著名な女子専門学校教員として後半の人生を堂々と生き、老母を見送り、子規亡きあとの正岡家に親族の子を養子に迎えて再興しました。唯一残された家族の役割を果たしました。今の時代の方には理解がむずかしいですが、明治生まれの人にとっては「家を興す」「家を絶やさない」ことは家族にとって最大の使命であり、宿命でもありました。律はそれを、学び教える自立した生活によって、そのための準備をすすめたのでした。胸を張って律は兄の墓前に報告したと思います。そして長い間の教員生活の努力の中で、かつて兄にのしられた律の筆跡は、見違えるほどに上達していたのではないのでしょうか。

## 律の歩んだ「その後」

私は司馬遼太郎『ひとびとの躰音』を読んで、短い叙述ですが正岡律の「その後」を知り、仰天しました。

彼女は「兄ノ看病人トナリ終」りなどしていませんでした。人の死後は何かと後仕末が大へんで、子規のように門人が多く大仕事を達した人の場合はなお大騒動でしょう。その中を、律の行動のす早いこと。一ときの時間の無駄もなく、翌春4月の入学期に合わせて入学願書を提出しているのです。

子規庵のある根岸から、神田一ツ橋の共立女学校までは遠くありません。律はいつどうやって共立を志願しようと情報を集めたのでしょうか。家事・介護の毎日。お客と言えばあまり興味のない俳句・短歌・文学の話ばかりの中で、律はどうやって自分の進路に役立つ「情報」のルートを見つけたのでしょうか。今も昔も、自分を伸ばし能力を身につけるためには的確な情報が必要です。

律の場合、情報は毎朝兄子規が待ちかねて妹に読ませる新聞だったに違いありません。子規は陸羯南という言論人の知遇を得て、陸が経営する日本新聞社の社員として、俳句・短歌の選者、「墨汁一滴」などの日誌風エッセイなどの原稿を書き、月給を貰っていました。その月

給が当時の正岡家の主たる収入だったのです。

律は「無学だ」「教養がない」と子規に叱られながら新聞を読みつけ、だんだん能力を高めていきました。新聞には、女子教育の問題、女性に関するニュースも含まれています。戦前は、女性と新聞の間を隔てる1つの認識がありました。「電車の中で新聞を読む女は生意気で気に入らん」「若い嫁がお掃除の手を休めて新聞を読んでいて姑に見つかり大いに叱られた」などの話は、私も若いころ聞いています。新聞は男のもの、という考え方を日本社会は長く引きずっていました。

律は兄・子規の代読者として、いや応なく新聞の前に座りました。慣れるほどにすらすらと読みすすめられるようになり、紙面のあちこちに点在するニュースにも自分の関心で目を向けるようになったに違いありません。

律が兄に叱られながら新聞を読みつけた明治30年代は、女性史の上でもさまざまな動きがありました。日清戦争(1894-1895)から日露戦争(1904-1905)の勝利へと時勢は盛り上がり、前にお話したとおり、義務教育の男女格差はここでやっとなり解消します。

中等教育以上は男女別建てで、男性の最高学府・大学に比べると、女子の最高学府は男子の帝国大学より三年も短い専門学校レベルでした。同じ中等学校でも、男子の進学コースである中学校に比べて、高等女学校は、理数、外国語などの教科が少なく、代わって日本の婦徳要請の修身、家事担当者に求められる裁縫、調理などの科目が多く、学ぶ内容も大きく違いました。男女の中等教育が男女共学になり、教科内容が全く平等になったのは、1945年日本が第2次世界大戦に完敗。マッカーサー司令部の指示による大指令の1つとして「男女共学」が指示されて以来のことです。それでも、ごく一部ですが、男女の教育内容は男女で異なりました。中学の技術・家庭科では男子は技術、女子は家庭科が必修。高校では女子のみ家庭科(最初2単位やがて4単位)必修。これは1975年国連が提唱した「女子差別撤廃条約」第10条(注参照)にも反するものでした。本学の付属高校の先生方は、家庭科の男女共修に初期のころから熱心でしたし、「条約」が衆参両院万場一致で批准され、新しい基準で教科書が編集されることになり、私は中里喜子教授(当時)はじめ本学関係の有力な執筆者のご協力を得て、一橋出版社から男女共同参画社会型の新しい家庭科教科書を世に送り出すことができました。『新家庭一般—あしたを生きる・創造する』私が東京家政大学在籍中にできた意義ある仕事の1つとしてここにご報告したいと思います。

ところで律に話を戻しましょう。律が兄・子規の看病に追われているころから、急に日本女性の動きが社会的にひろがります。遅ればせながら、女性を中心に教育、

職業という角度から女性の姿が社会に「見える化」していきます。

律の子規への介護生活が始まったのは、明治30年後と思われませんが、この時期、日本の資本主義初期の興隆期の象徴のように、随所に働く女性＝職業婦人の興隆が見られます。

1時代前の「女工」の時代も続いていましたが、この時期になると、各地域でも「工女ストライキ」が頻発しました。工女たちも少しずつものを言う力をつけてきたところだったでしょう。明治18年には、初の女性医師・荻野吟子が誕生。くり返しになりますが、のちに正岡律が学ぶところになる共立女子職業学校は明治19年に開校しています。こうした動きをおそらく子規の勤務する日本新聞はキャッチし、どこかで紙面に載せていたでしょう。新しい女性への学びの場の開設に、老母を助けて長いこと仕立物の内職に身を投じてきた律は、もしかしたらこれらの記事に「私だって裁縫ならできるかもしれない」と生まれて初めて自分自身のための胸の高鳴りを経験したかもしれません。こうした女たちの日常的な胸の高鳴りが共鳴し合ってささやかながら女性の歩む道は少しずつ広がっていったと思います。思えば「読み方が下手だ」と兄が律に罵詈雑言を浴びせかける材料となった当時の新聞ですが、それが律の社会への目を広げ、認識を増幅し、考える力、行動する力を養ったことは疑いないことと思います。情報の力は今も昔も大きいものがあります。

それにしても、子規の死後僅か7か月で、律は共立女子職業学校（本科）に入学していました。おそらく小学校卒業資格で入学できる初級の技能課程でしょう。すでに中年の律は少女年齢の同級生にまざってどんな思いで、どんな表情で学びの場を生きたのでしょうか。当時は学制が整い切れなかった時代ですから、学校は同一年齢集団の塊ではなく、晩学の人も少なからずあり、既婚の女学生も珍しくなかったと言われますけれど。はじめて自分のために学ぶ三〇代半ばのころの律の心の弾みを私たちも共有したいと思います。

律が共立女子職業学校（本科・補修科）に学んだ明治30年代は、女子教育の興隆期、発展期でもありました。

女子専門教育の黎明期に、正岡律は長い兄の介護生活を終えました。ここから先は全くの私の想像ですが、私は律が兄の子規に叱られながらたどたどしく新聞を読むうちに、読書能力が向上し、世の中の動きを体得していたと思います。もちろん兄の介護から早く解放されたいと思ったわけではないでしょう。しかし一方で兄の死も確実な未来なのです。兄の死後の母と自分の身の振り方を含めてそれは母と自分の問題でした。これも全く私の勝手な想像ですが、根岸と「共立」のある神田とはそれ

ほど遠くありません。少し遠くまでお使いに行った日に足を伸ばし、「共立」の規則書を貰ったときの律の胸の震えを私は共有したいと願います。女が生まれて始めて自分が学ぶ道が開かれたというのに、家庭によって、男女によって大きな差別がありました。その典型的なモデルがきょうの主人公、あの俳句、短歌の世界に一大改革をもたらした、正岡子規、その妹律ではないかと思いません。作家としては正岡子規を尊敬し、人間としては医学の未熟な時代、脊椎カリエスという不治の病いに7年近くも耐えて、人間業とも思えぬ大事業を成し遂げ、多くの弟子を育て上げました。どの一部分を取っても、頭を下げて恐れ入るほかはないほど敬服しています。しかし、時代のなさせる業とはいうものの、この間の男女の置かれた壮大な格差、絶望的と思われる格差に中にも、決して自分の人生をあきらめきらなかった女性がいたことを喜び、讃え、時代が変わったとはいうものの、今に生かす道をお伝えしたい、と心から願っているのです。

女性が現状から脱する手がかり、足がかりは制度的にみても何より教育です。今、国際的にみても、途上国の若い女性たちが「何よりも女性に学校を」というのは当然のことです。学び、技を身につけ、知識をひろげ、収入を得る道を拓く。女性の地位確立に到る最初の道程です。

義務教育が女性に普及すると同時に男子への帝国大学という最高学府に至る道とは別に、教員養成の女子師範学校、明治32年の高等女学校令による中等教育の普及など、大きな変化が生まれました。

女子がもともと身につけていた衣生活に関する技能を生かし、裁縫を職業として女性の自立の道を拓こうとする有志が集い、学校を設立しました。衣食住と言いますが、当時の女性の多くは「家庭の主婦」として日本国民全体の衣生活のほとんどすべて支えていたのです。

明治が明けてまだ間もない1886年、鳩山春子先生、渡辺辰五郎先生を含む有志が集い、みんなの共同の意思だという意味を込めて「共立女子職業学校」設立しました。のちに渡辺先生は独立して、渡辺裁縫塾を創設、東京家政大学の学祖となります。明治が明けて間もない黎明期に、日本の女性がみずから技を磨き、聡明な女性としての自立をめざす。そのような歴史に、私たちの先輩が参画して下さったことはいつ思い出しても感謝と誇りでいっぱいです。はかま姿の女性たちが風呂敷包みを抱え、新しい技と知識を身につけるため都大路を歩いたかと思うとその姿に手を振りたくくなります。

## 明治32（1899）年 高等女学校令発布

すでに述べたように、男子とは大きな格差のあるも

のでしたが、女子が外国語を含む中学教育にすすむ比率はぐんと上がり、高等女学校進学は日本の中流階級のステータスシンボルとなり、専門学校は明治30年代に到って、女子英学塾（津田梅子）、東京女医学校（吉岡彌生）、日本女子大学校（成瀬仁蔵ら）、女子美術学校（横井玉子ら）と、各種の女子専門学校が男女有志の手によって設立されます。

女性の識字層の拡大は、女性特有の問題を論じ合う、女性を対象としたメディアをいっせいに生み出しました。大正5年（1916）「婦人公論」、大正6年「主婦之友」「婦人之友」。

その少し前の明治44年（1911）には、平塚らいてうら日本女子大学卒業生を中心に初の女性同人雑誌『青踏』が発刊され、5年にわたって女性が中心に女性の問題、社会の問題を論ずる場となりました。女性たちが自分の意志で出会った初めての女性結社。そこから女性たちは思い思いに政治運動や消費者運動を目指してゆきます。

たとえば平塚らいてうと市川房枝は出身地も卒業校も違いますが、2人は女性の政治的権利獲得に共鳴し、「新婦人協会」を大正9年（1920）設立しました。戦後女性が手にした参政権の獲得はここに始まっています。

思えば高等女学校の普及、既婚、未婚を問わず女性対象のメディアの発達、どこかで女性たちが身近な家制度を離れ、束の間の愛と自由の世界に遊ぶ時間を得ました。吉屋信子の一連の作品が、少女たちに愛と心の自由を呼びかけ、それに応える読者層が戦火に押しひしがれるまでは一定程度存在した。あれこれ思うと、私は明治期の女子教育の普及がもたらした効果に目を見はる思いです。

さて、律は明治39年、本科2年補修科1年を経て共立女子職業学校を卒業します。きっと成績優秀で性格も真面目、年ごろも落ちついた中年であることが評価されたのではないのでしょうか。卒業後、律は共立女子職業学校の学校事務員として採用され、間もなく教員となります。このとき律はすでに30代後半、当時の常識としては十分に中年過ぎのオバサンだったでしょうが、「共立」はあえて若い事務職員を雇おうとせず、中年の律を選びました。間もなく教職に異動したそうですが、おそらく律の本望はそのあたりにあったと思われます。

律の教員歴は前半の10年と、1年間の休職期間を置いて後半の10年弱に別れます。具体的なエピソードに乏しい律の生涯ですが、私はこの時期の律の行動に、勝手な想像をめぐらせて喜んでいきます。

律は共立女子職業学校に勤めること10年。ここで1つの転機を迎えます。何も詳しい事実を記した資料を発見したわけでもありません。ただ時期と一定の事実だけははっきりしているので、そこを土台に私が勝手にひろ

げる想像であり創造の部分もあります。

当時、共立女子職業学校には、10年勤続の教職員は永年勤続者として表彰する制度がありました。賞品は何かわかりませんが、おそらく表彰状と金一封、記念品と言ったところではないでしょうか。そのころようやく整備されてきた明治時代の諸機関が、永年勤続表彰などの制度を取り入れたところだったでしょう。

律はこの表彰を拒んだ、というか辞退したのです。くわしい事情は全くわかりませんが、『ひとびとの聲音』には、自分は表彰に値しない、と言って表彰を辞退したこと、一たん退職して、京都にある早縫を教えるので有名な志摩野裁縫塾に一年間自費留学した、とあります。このところ規模の大きい大学では何年かに一度、有給で自分の好きな場所とテーマで研究を認める制度（サバティカルリブ）がありますが、律の場合はそれを自己負担で行なったようなものです。

なぜ、律は一見謙虚で自己責任の見本のような態度をとったのでしょうか。兄・子規は「律ハ強情ナリ」と言い切り、親戚一同などでは「気の強い子」で通っていたようです。その時代の女の子への表現ですから、口げんかで弁が立つ、なんて域まで達しないでしょう。黙って我を通す。2度にわたる離別のいきさつを見ると、律にはそのような強さ、あえていえば自己主張の強さがあったことは十分に想像できます。

十年表彰で、律はなにか心を傷つけられたのではなかったか。明治も年丈けて、維新当初は女子が義務教育を受けるだけでも少数派であったのに、社会の安定と発展は、あつというまに女学校進学を中流のあたりまえに押し広げ、高等教育さえ手を伸ばせば届くところまで近づけていました。男尊女卑、性別役割分業、というのは社会の潮流には違いないけれど、女性の医師、弁護士、中等以上の教員などへの容認は日々強まっていました。

だれも何とも言わないにしても、当時中等以上の女子教育機関において、律の尋常小学校4年修了という基礎学歴は、目立つほど低いものではなかったでしょうか。

どの世界にも派閥と陰口はつきものです。何かのはずみに、律の地位や学歴への中傷めいた話があったかもしれません。

あつたとして、すべて仮定の話だとしても、なかったとしても、律は自前で休暇を取り、恐らくは志摩野裁縫塾への授業料も自前で払い、一年間の研鑽の結果、東京にも少ない早縫いの技能を身につけた得がたい教師として返り咲いたのです。

事実は多少違っているかもしれませんが、もしこの通りだとしたら、律はコンプレックスに押し潰されず、コンプレックスを利用して自分を大きく成長させました。コンプレックスは人によっては必ずしもマイナスではあ



りません。

私はこの正岡律の後半生を知って、快く裏切られた思いにしばらくひたっていました。なんとまあ見事に、完膚なきまでにお律さんは裏切ってくれたことでしょう。それは大好きだった兄を裏切るのではなく、兄の言に従いながら、堂々たる学徒に、堂々たる高級技能者に昇り、そしてキャリアウーマンにふさわしい収入と敬意を受けることでした。おそらく兄の子規にとっては、予想もつかぬ律の姿だったと思います。この間の行動を、律はだれかに相談した形跡はありません。老母や陸羯南、後見役のような有力の親戚・加藤拓川（外交官として成功）などに相談したり反対されたりした形跡もありません。7年にわたる、律の生涯半ばを棒に振りながら献身した、その末の律の選択に、だれも異論をはさめなかったに違いありません。少々の抵抗などはね返す力を、律は身につけていたでしょう。律さんありがとう。あなたの力強い挑戦は、21世紀を迎えた人生100年時代の現役女性を励ます力を持っています。

律がそうであったように、そして若い皆さんそれぞれがもう薄々感じ取っているように、人生は平坦ではありません。多少の運不運はありますが、人生は障害物競争だと思っていたほうがよいでしょう。どんなときにも周囲の人の命を大切に、それと同時に自分自身の人生を「あきらめない」ことだと思います。不幸は逃げれば避けられるものではないでしょう。それなら逃げずに耐えて、その間にもう一度立ち上がる力を養えばよい。昔から七転び八起きと言いますが、倒れた回数より一度だけ再び立ち上がる力があればよいのです。英語で言えば Resilience（回復力）です。

これまでにご紹介したような女性たちが生きた時代の女性の平均寿命は40代から50才そこそこ。今と比べものならぬほど、新生児・乳幼児の死亡率が高かったからです。「人生50年」ということばは、明治生まれの父母たちがよく使っていました。

それが最近の発表（2020年8月）によれば、日本人の女性平均寿命は87.45年。香港に次いで世界2位。男性も世界3位の81.45。オリンピックにもし「平均寿命」という種目があれば、男女ともども手をたずさえてメダル獲得です。世界にまだ「人生50年」に近い国が数多くあることを思うと、日本は大へん恵まれた国であり、その資源でもある寿命の長さ、あるいは教育水準の高さというものを生かして、国内のみならず世界の人たち、とくに女性の幸福、女性地位向上にどこかでつながる人生を歩んでいただきたい、と切に願います。

近ごろの国連機関の統計がくり返し報じられますが、世界経済フォーラムジェンダーギャップ指数2020によると日本女性の社会参画度は、政治分野スコア0.598

（115位）。ということは世界で153国121位という先進国中ほぼ最低レベルにあります。やはりその国の多様な人々の地位は、それぞれがどの程度にその国の、そしてそのグループに属する人々が方針決定に参画できるかどうかにかかっているのではないのでしょうか。

いろいろ問題がある世の中に私たちは生きていますが、課題がある、ということは、可能性がある、ということです。自分を信じ、人間を信じて、挑戦しようではありませんか。正岡律のように、今の世を生きる多くの仲間たちのように。

注記

注1)

## 正岡子規の「三大随筆」

正岡子規が脊椎カリエスの病床にありながら、強じんな創作意欲を失わず、日常雑記をはじめ専門の目的論などを日記風に克明に記した随筆集。俳句・短歌もリアルタイムで記されているし、本講演録の主人公である妹・正岡律に対する遠慮のない批判も記されている。

墨汁一滴（明治34年1月1日 連載開始）

同年7月2日 連載終了

仰臥漫録（明治34年9月1日～一時中断

35年9月2日再開 5月5日より 私的な色が強い

「病床六尺」へつづく

病床六尺（明治35年5月5日～9月17日）

9月19日未明没 最期の日記

以上の随筆は、当時の言論人、陸羯南（1857～1907）が社長である「日本新聞」などの紙上に掲載された。

子規は、自分の原稿が掲載されることを、日々の生きがいとして待ち望み、紙面の都合からであろうか掲載されない日があると大騒ぎになり、陸社長の鶴の一声で毎日掲載されることになった。

墨汁一滴、仰臥漫録、病床六尺の三書の中から、妹・律に関する描写をあらためて取り出してみよう。

律の悪口を随所で堂々と記しているような正岡子規であるが、当時の「戸主」の立場にある子規が、妹に弱味を見せられなかったのも事実であろう。

「墨汁一滴」の中で子規は律を「理窟ツメノ女也。同

感同情ノ無キ木石ノ如キ女也」「人間ニ向ツテ冷淡ナリ」  
「彼（妹）ハ到底配偶者トシテ世ニ立ツ能ハザルナリ…

彼ハ終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ」と述べている。本文の中にも記述しているが、いかに男尊女卑・家父長制の明治の世といえども、律の生涯を犠牲にして、あまりにも同情のない言い方ではあるまいか。子規の心身の苦痛が大きいとは言え、一定の他者に対する敬意が必要ではないか。「妹」である私は、律に代わって憤慨した。

ところが、その同じ「仰臥漫録」には後段以下のような文章が続くのである。

「若シ余ガ病後彼ナカリセバ余ハ今頃如何ニシテアルベキカ。看護婦ヲ長ク雇フ如キハ我能ク爲ス所ニ非ズ。ヨシ雇ヒ得タリトモ律ニ勝ル所ノ看護婦即チ律ガ爲スダケノ事ヲ爲シ得ル看護師アルベキニ非ズ 律ハ看護婦デアルト同時ニオ三ドンナリ オ三ドンデアルト同時ニ一家ノ整理役ナリ 一家ノ整理役デアルト同時ニ余ノ秘書ナリ 書籍ノ出納原稿ノ浄書モ不完全ナガラ爲シ居ルナリ 而シテ彼ハ看護婦ガ請求スルダケノ看護料ノ十分ノ一ダモ費サル也」。この一連の文章は、「若シ一日ニテモ彼ナクバ一家ノ車ハ基運転ヲトメルト同時ニ余ハ殆ンド生キテ居ラレザルナリ」

やはり正岡子規は冷静に事実を理解していた。医療保険まして介護保険ができるのは、それから100年以上あとのことである。家族の介護は家族が——とくに女性が犠牲になって担うのが当然とされるのが常識であった。

律はおそらくこうした兄の文章に目を通したことであろう。一字一句、削除も修正も破棄もしなかったことは見事と言ってよいほどで、文学史上の幸でもあろう。律はこのあたりの兄の叙述に慰められ、尊敬する兄に一定の能力を認められたことで、「介護のあと」の人生を生きる自信の根を育くむことができたのではないか。認められること、評価されるということが、個人の能力を伸ばす足場というか基盤になるということを、私自身教育機関に奉職した一人として感慨を新たにしたものである。

## 緑窓会協働

令和元年6月9日(日)「青森県支部懇親会」

令和2年1月20日(月)「大分県支部懇親会」

東京家政大学の一番の宝は、真面目で素直な学生達です。卒業してからも、日本の各地でそれぞれの仕事に誠実に励み、人生を満喫している先輩のみなさまから教え

をいただきたく、樋口所長の講演などの機会に、各地で集まりを開いていただいています。

令和元年6月9日(日)

青森県支部の皆様にお目にかかりました。青森県立郷土資料館にて初代学長畑井新喜司先生についての展示を見学した後、美味しいケーキをいただきながら、皆様の近況を伺いました。第二の人生を満喫されている様子に力をいただきました。

その後、令和元年7月12日(金)・13日(土)に開催された「高齢社会をよくする会 全国大会」に、秋田支部からご参加をいただきました。



令和元年6月9日 午後1:00~3:00

NHK青森教室講演

講師 樋口 恵子

演題 いよいよ本番人生百年あなたが主役

東京家政大学名誉教授

女性未来研究所所長 樋口恵子先生

副所長 並木有希先生

をお迎えして

2月24日、前支部長(青森地区)山本久子様からお電話があり、「舟山節子会員の電話で、新聞の折り込み紙に、NHK青森講座の講師に樋口恵子先生が掲載されています。支部会として何かした方がいいのではと話し合いました。」ということでした。その後、

5月16日 緑窓会の中里喜子会長からお電話を頂き、秋田支部の齋藤佳代子支部長にご案内を差し上げたところ

ろおいでくださるとのことで、皆で心待ちにしておりました。支部会員の方へ連絡(青森・八戸・弘前地区)、私の友人(高等学校家庭科教諭他)にも案内しました。

樋口恵子先生は以前、青森県高等学校教育研究会家庭部会の講師としてお見えになっていらっしゃいます。樋口先生のファンが多いことも事実です。

6月8日(土)夕方 8時半ごろ、樋口恵子先生から「今、青森のホテルに到着しました。空から見た青森空港の夕焼けのきれいなこと！本当にきれいで感動しました。青森の夕陽は本当に素晴らしいですね！！」お心づかいが嬉しく、ご一緒したかったと思いました。夕焼けに感謝しました。

翌日 6月9日(日)晴天、朝から汗ばむほどです。弘前から青森へ、神山ツセコ様と筒井は青森駅で舟山節子様の車で、早々とアートホテルに到着、池田友子様が到着、10時、樋口先生にご挨拶にお伺いしました。並木有希先生が到着されました。

10時20分 最初にお隣の青森県立郷土館をご案内させて頂きました。一行6名。郷土館は県内の小・中・高のうちに必ず1～2回は学校引率で見学を訪れます。3階に青森県の偉人コーナーがあり、東京家政大学の初代学長、青森県小湊出身の畑井新喜司先生の愛用品が展示されています。いつの日か、大学関係者の方をご案内したいと切望しておりました。その日が今、訪れようとしています！そして、係員が直接3階のコーナーにご案内してくれました。学芸員も見えました。

畑井学長の愛用品の「眼鏡、顕微鏡、懐中時計、万年筆、プレパラート、望遠鏡、畑井メダル、著書『みみず』」を前に学芸員が説明をしてくださいました。樋口先生、並木先生ともに大変興味関心を示されご自分でもお話しされ、皆でうなづく場面もありましたが、時間も限られており、ご再訪を希望致しました。

今回は畑井学長が開いた浅虫水族館をご案内したいと思います。こちらも小中高学校で引率見学があります。

畑井学長については、現在も新聞で取り上げられ、畑井学長の

“それは君 大変おもしろい

君ひとつ やって見たまへ”

は、今も私達を勇気づけ、励ましてくれています。

中里喜子緑窓会会長が「NO.15 緑窓会だより」に～時代に先駆けた畑井新喜司先生と東京家政大学～として詳細にお書きになっていらっしゃいます。今回、中里会長の色々なご配慮に感謝申し上げます。

一方、畑井学長が東京家政大学の初代学長だったことは県内ではあまり知られていない。県内では、みみずの博士として有名で以前、父も誇らしげに語っていました。

次は、お隣のアップルパレスホテル1F喫茶エビスへ車（舟山様・池田様）に分乗して5分ほどで着きました。風が強く、波も、うねっていました。八戸の赤坂 静様、秋田からの齋藤佳代子様、青森の山本久子様・能登谷様が笑顔で出迎えてくださいました。

お茶とケーキ、笑顔を前に、筒井の簡単な挨拶後、樋口恵子先生から丁寧なご挨拶を頂戴し、恐縮いたしました。その後、自己紹介～歓談で親睦を深め、秋田の齋藤様もごく自然に打ち解けられて、嬉しかったです。思わず皆で声を出して笑う瞬間もあり、楽しく和やかなひとときもあつという間に過ぎました。

その後、講演会場となるアートホテルに帰り、2Fの和食処で、ご一緒に食事をおいしく頂きました。

樋口恵子先生のご講演のお申し込みの方々が3Fの会場にお集まりです。整然と待っていらっしゃいます。いよいよご講演が始まりました。(PM 1:00～3:00)

樋口先生はご挨拶の冒頭で、「各県の防災委員の中に女

性の防災士を入れることになったのでお知らせします。」とおっしゃいました。避難女性はどんなに助かるかと思いました。そして今は普通に受け入れられている介護保険制度の創設にも大きく携わってこられたことを思い出しました。介護保険は来年20周年を迎えます。

本論に入り、現在80才歳代女性の父親は、人生50年だった。昨年100歳以上の方は7万人越し、近々100万人越す…？日本だけの問題でなく、先進国の問題である。一方1年間で40万人の人口減である。「長生きしても安心」なモデルをつくることである。超高齢化社会の主役は女性、先進国は少子高齢化に突入している。どうすれば、日本人の平均寿命、健康寿命を延ばせるか、平成の60歳代の方が、90歳までの長生きスタイルのモデルがまだない、構築されていない。

延びる寿命は、人類が夢みていたことである。

日本は、昭和20年、200万人死亡、1945年国政調査昭和20年平均寿命は 男23.9歳、女37.5歳である。

国勢調査昭和15年では、男46歳、女49歳である。今、男81歳、女87歳、他国より、極端に発達した高齢化である。長生きしても安心なモデルをつくることである。

超高齢化社会の主役は女性である。2015年70歳以上単身者2015年 男130万人、女340万人（女の80歳以上が256万人で男の約2倍である。）で、80歳代女性が生き生きと2020～30年代を過ごせるかである。医療保険・介護保険は女性が多く利用する。どうすれば日本人の平均寿命、健康寿命を延ばせるか、高齢女性・高齢男性の生き方の課題がある。

少子化の影響で、伝統的家族制度の実質的な崩壊が予想される。大シングル時代、ファミレス時代の到来、三親等内の親族がいない（甥・姪 まで）高齢者激増時代が予想される。日本は、他の国より極端に発達した高齢化である。

#### ① 女性の視点から始まる地域共同社会の創造

- 1、血縁でなくても支え合う文化の創造・・・地域の一人として働く労働のシステム化ができないのか O.G. O.B. の町内会の活動の活性化
- 2、女性参画の進出
- 3、生涯現役の仕事とシステムの創造
- 4、地球環境保護

#### ② 三ショックのハッピーコミュニティの創造

これから高齢者の三大要素は、食・職・触 である。他者とのつながりの中で、社会参加する。

#### ③ 高等学校家庭科男女必修4単位（平成6年度～）

の教科書の監修者としてはもちろん、大きくご指導されていらっしゃいました。しかし、現在、2単位

に改編されている状況です。

- ④ 人生 100 年の計画を自覚し生きるモデルの提示が必要とされる。
- ⑤ 日本は自立をすすめ、結婚をすすめるのに消極的だったのではなかったか。
- ⑥ 家族でなくても助け合う社会をつくろうではありませんか。

できるだけ、「おだやかに生きよう」と思いました。

ご講演が終わっても、すぐ動けずにいると、友人たちも興奮ぎみに駆け寄ってきて「よかったね、すごかったね。ありがとう！」と声をかけてくれました。

青森地区の方々には車を出して駅まで送ってくれました。樋口恵子先生はお疲れも見せられず、並木有希先生も笑顔でお帰りになられ嬉しく思いました。

何よりも、支部全体で協力できたことが安心感を与え

てくれたことに感謝したいと思います。

最後になりますが、樋口先生をお迎えするにあたり、色々ご指導くださった前緑窓会長 中里様、また、詳細なご連絡を頂いた女性未来研究所の연구원の方々、深く感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

令和2年5月7日(木) 13:00 徹子の部屋

樋口恵子先生 ご出演

青森県支部の会員数名、数名の支部長様、友人にご連絡させて頂きました。弘前地区の会員からお返事を頂きましたのでご紹介申し上げます。…「徹子の部屋」拜見させて頂き、樋口先生のご容姿・お声・お顔にとても元気を頂きました。【食・触・職】私も少しでも世の中にかかわって、歩む事ができたらと思っております。県内外の多くの方々からも感動と感謝の声をいただきました。

東京家政大学 青森県支部長 筒井りゑ子

令和2年1月20日(月)

大分支部の皆様にお目にかかりました。樋口所長の新著「老一い、ドン」の話を盛り上がり、見事なハンドクラフトに驚きました。お時間の限られた中でしたが、内容の濃い会合が持たれました。

また皆さんにお目にかかれることを楽しみにしております！



## 樋口恵子先生の講演会に参加して

このたび「青い山脈会」主催の「大分はつらつフェスタ」が開催され、講師として評論家・樋口恵子先生が迎えられました。

東京家政大学 大分県支部会員も参加し久しぶりに同窓生の交流も出来ました。

この会は、健康寿命を延伸しようとシニア世代を元気にする会として2012年に発足。

人生にとって大切な「知・遊・健・美・夢」をわかすこのコンセプトに活動をしている。

今回樋口先生の演題は、人生100年のセカンドステージ「女と男の生き方探検」で内容は健康寿命と平均寿命の間10年を「ヨタヘロ期」といい、自身の心と体の変化を笑いを入れながらユーモラスに語られこれから始まる大介護時代に向け、人生後半は女性の自立と豊かな老いが両立するよう熱意ある指導がありました。私たちも今後の人生を考えさせられ前向きにハツラツとすごさなければ…と思う実りある講演会でした。

東京家政大学 大分県支部長 房前和子

Chapter 6

# 共通教育科目

## 「自立の探求(a) ジェンダー論に学ぶ」 授業報告

6-1 「ジェンダー論に学ぶ」授業報告  
[平野順子]

6

# 共通教育科目

## 「自立の探求(a) ジェンダー論に学ぶ」授業報告

平野 順子

### I 授業の到達目標

- ①女性・子ども・性的少数者といった社会的弱者の現状を理解することができる。
- ②これまで自分にとって自明であったことについて、疑って見る視点を持ち、受動的ではなく積極的態で社会を見ることが出来る。
- ③理解できた問題点について、自分が今学んでいることと関連付けて、どのように貢献できるか述べる事が出来る。
- ④考えたことや理解したことを言葉にして表現することができる

### II 授業概要

社会で不利益を被ることの多い社会的弱者の視点、そしてジェンダーの視点で、社会のさまざまな場面を考える。講義と資料によって現状・理論について把握し、各分野で活動している方からの講義を聞き、人権について考える。さらに、それぞれの問題について自分に引き寄せて考え、積極的に社会に貢献していけるような視点を持つことを目標に、授業を進めていく。

### III 授業内容

- 第1回 オリエンテーション&一回目の全体ワーク①
- 第2回 現在の家族の現状と私たちが出来ること 講義
- 第3回 育児の現状と親を支えるための地域活動 ワーク
- 第4回 育児の現状と親を支えるための地域活動 講演  
(ほっこりーの代表 内海千津子氏)
- 第5回 仕事とキャリア 講義・個人ワーク2
- 第6回 緑苑祭シンポジウムから女性と自分のキャリアを考える
- 第7回 ジェンダーとは？ グループワーク
- 第8回 樋口恵子先生講義
- 第9回 グローバル① 講演 (矢野デイビット氏)

- 第10回 グローバル② 講義
- 第11回 グローバル③ グループワーク
- 第12回 全体まとめの全体ワーク②
- 第13回 これまでの振り返り
- 第14回 まとめと解説

### IV 授業外学修

- ・配布資料は、各自が manaba からダウンロードしてプリントアウトをして持参してもらいます。授業時間までに manaba 上から、次回授業でのパワーポイント資料を各自ダウンロードして、持参すること (配布資料ダウンロード方法は、初回授業で説明します)
- ・授業前学修：manaba 上に掲載する、次回授業に向けての課題に取り組み、授業開始時間までに manaba を通して提出すること
- ・授業後学修：manaba 上に掲載する、授業についての振り返り課題に取り組み、期限までに manaba を通して提出すること
- ・週あたり 200 分程度の学修を要する

### V 評価方法

平常点および提出物 (30%) + テスト (70%) の総合評価

### VI その他

- ・東京家政大学女性未来研究所がコーディネーターとなり、並木と平野が中心となって授業を行う。学内外の講師をお呼びして講義を聞く機会も多いため、遅刻・欠席は厳禁である
- ・第1回目の授業時に、この授業についての重要事項の説明を行う。
- ・やむを得ない事情により初回授業を欠席した学生は、必ず manaba から配布資料をプリントアウトし、熟読

すること

- ・授業中に、出欠確認や意見の聴取、提出物等のために、スマートフォンを毎回利用する。充電を十分にを行い、忘れずに持参すること
- ・授業前課題を元に、授業中にディスカッションやグル

ープワークを行う。課題を必ず授業開始時間までに行い、授業中は積極的に授業に参加すること

注意：課題が多く、成績管理と評価が厳格な授業です。学習意欲のある学生のみ受講してください。

授業の前半では、自分のこの先のライフコースを考え、そこで起こり得る生活課題を具体的に想像することにより、女性のライフコースと家族から受ける影響、キャリアと社会について考えることを目的としました。初回授業では、「こうなりたいと思う自分」と題し、30歳と50歳の2時点を想像し、①どんな女性？、②こんな毎日を送っています！、③どんな仕事・働き方？、④どんな生き方をしたくて、そのためにどんなことをしている？、という4つのことをそれぞれ考えてもらいました。学生たちの反応を見ると、30歳はともかく50歳の自分を考えることは大変難しく、これは当然のことと思われまます。長期間のスパンでライフコースを考えることの難しさを感じました。

また、「あなたが希望するライフコースはどれですか？また、実際にはどうなると予想しますか？」という質問に対して、「①継続就業型：結婚し子どもを持って、ずっと働き続ける、②中断再就職型：結婚や出産等を期に退職し、子どもが大きくなった後などに再就職する、③離職型：結婚や出産等を期に退職し、その後は働かない、④DINKS型：結婚するが産せず、ずっと働き続ける、⑤非婚就業型：結せず、仕事をずっと続ける、⑥その他（具体的に→ ））」という選択肢から、それぞれ希望ライフコースと予想ライフコースを選択してもらうアンケートを行いました。結果は、希望・予想ライフコースともに、中断再就職型がトップ。特に希望ライフコースとして中断再就職型が選択されていることが目立ちます。主要な全国調査と比較しても、非常に中断再就職型の希望が大きいことが、家政大生の特徴として挙げられると思いました。従来型のジェンダー観・家族観にとらわれている学生が比較的多いのではないかと考えられます。

前半にはほかにも、地域の中で社会人としてどのように生きて行くか、社会的弱者のために、自分の専門性がどのように生かすことができるかということ、ゲストスピーカーをお呼びしたり（赤ちゃんもいらしてくださいました！）、グループワークを行ったりして考えました。

授業の後半は「世界の中で生きていく」と題して、自分たちが生きていく将来社会の姿と、そこでどのような仕事ができるか具体的なイメージを持ってもらうことを目的としました。導入で2つの共通理解をもたせました。

第一に、日本は人口減少と少子高齢化が急激に進展して人口構成が成長に対してマイナスに働くいわゆる「人口オオナス時代」に突入すること、それにつれて、生き方や働き方を根本的に考え直していかなければいけないということ。第二に、その状況を打開するためには、世界との関係の中で生きることが必須となるということです。日本で暮らし働く外国人の人数が増え、また、世界で働く日本人の人数も増えていくでしょう。その意味で、グローバルなキャリアは、選択ではなく、当たり前の生き方になっていくと言えます。「グローバル人材」という言葉が喧伝されていますが、ともすれば概念的なものに留まっています。社会的背景を踏まえることで、自分に引きつけて考えることができます。

その上で「ローカルコミュニケーション」に対する「グローバルコミュニケーション」の特徴を考えてもらいました。家族や親しい友人とのコミュニケーションのように顕著な言外の意味に頼ったものと、文化を共有していないことを前提としたコミュニケーションの違いについて考えさせました。

コミュニケーションの取り方だけでなく、視点においても相対的・俯瞰的になることの重要性を強調しました。講義全体では、人は誰でも、状況や機会において弱者になりうることを理解し、しかし、その中でも弱者になりやすい社会的属性、ジェンダーだけでなく年齢・障害の有無・社会的立場などがあるということを伝えていきます。学生の視点を広げ、世界で起きている問題について知識を持つことでグローバルな文脈で自分のキャリア構築していく上で指針となるように、後半では、弱い立場に置かれた人達ための仕事を国際的な文脈で展開されているゲストスピーカーの講演への導入としました。





## 終わりに

学生でいる間、世の中は色々あるけれど基本的には平等、などと思っていました。大人になって目の前にひらけた、不平等と不公平が跋扈する世界には狼狽しました。なんと浅薄で軽薄だったこと、と思います。同世代の女性研究者が集まると話に上がるのは、女性のキャリア形成の難しさです。学位取得・専任職・結婚出産という男性なら当たり前のパスを辿ると、それが「三冠王」とも揶揄されるほどの、女性研究者のワークライフバランスの成立の難しさ。若く、職もなく、研究に必死だった最中に、妊娠して「しまい」（悲しい言い方ですが）、ロールモデルもおらず、途方にくれた自分。あの時の自分を助けてあげたい。あの時自分が苛まれた孤独感と焦りを、これから来る人は感じなくてもすむようにしたいと思ったのです。そこから、女性のエンパワメントに他人事ではない興味を持つようになりました。

キャリアを中断し大きく変更しながら、たくさんの妥協と諦めを持ちながらも、なんとか、細々としぶとく辞めずに今日ある自分には、与えられた仕事があると思いました。第一に、キャリア作りとライフイベントに関する理解の重要性を教える教育プログラムを作ること、第二に、社会の中でのジェンダーロールとワークライフバランスに関しての意識を変えていくように、広い意味でのメンター制度を、世代をまたいで作っていくことです。

ご縁があり東京家政大学で働かせていただくことになり、有能で誠実な卒業生の皆様とお話しする機会をいただいたのが何よりの財産でした。樋口恵子先生の情熱に触れ、女性たちが取り組んできた取り組みの多岐を知ることで、自分の個人的な経験を文脈・構造化することができるようになりました。卒業生のみなさまと樋口恵子先生に、私は、他のどこでも出会えなかったロールモデルを見つけることができました。生涯の目標と見上げるべき先輩に出会えたことで、常に自分の経験を振り返り、狭くなっていく自分の世界を広げる意識を持ち続けることで、学生に語る言葉にも、少しでも説得力が生まれると思います。現実的に達成したことはまだ少なく、道半ばで中断することへの後悔や慚愧もございます。しかし、今後とも誠心誠意仕事に当たっていく所存でございます。

3年間お世話になりました先生方とスタッフの皆様に、心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

並木 有希

---

## 令和元(平成31)年度 東京家政大学 女性未来研究所 活動報告書

2020年3月31日 発行

発行 東京家政大学 女性未来研究所

企画・編集 東京家政大学 女性未来研究所

表紙協力 東京家政大学 ヒューマンライフ支援センター

印刷・製本 上毛印刷株式会社

---

